黒き刃〜リリカルっぽいもの〜

元樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒き刃～リリカルっぽいもの～

【Ｎコード】
Ｎ９５２０Ｎ

【作者名】
元樹

【あらすじ】
青年は死んでしまったものの神（自称）に拾われ、もう一度生をリリカルなのはに限りなく似た世界で与えられる。そこで彼は何をするのだろうか。
原作崩壊、独自設定諸々満載で駄目文の妄想部分も満載ですがもしよければ楽しんでいってください。
原作と異なるものが多く出てきますが、そこは似ている世界ですからかならずしも原作と同じになることはありません。
一話一話の文字数がそれなりに長くなっております

プロローグ（前書き）

駄目文章で読みづらいかも知れませんがこれから努力を続けていきたいと思います。

プロローグ

「え……？」

俺はただ交通ルールを守って横断歩道を守っていただけだった。

それなのに信号無視をしてトラックが突っ込んでくるということが誰が想像できただろう……

間抜けな声を上げて一瞬固まってしまうのも俺としては仕方ないとおもうわけです。

その一瞬が命取りでトラックと鈍い音を立てて地面にバウンドして何回も叩きつけられた。

そんな最中も未練がそうない俺はあぁ死ぬんだなと客観的に思いつつ、突然ぷっつんと意識が途切れた。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――

「ん……」

次に俺が目が覚めたときはなぜか白い天井が広がっていた。

身体を起こして周りを見てみるとただそこには先の見えないほど広がった白い空間が存在している。

「気が付いたか？小僧」

ふと後ろから老人の声が聞こえたのでなぜ後ろにいるのかと疑問に思いつつも後ろを振り向くとそこには
ただ服も髪も真っ白な少年が無表情な顔を浮かべていた。

「お前……誰だよ」

少年らしきものを睨みつけたが少年らしきものはただほぉほぉと笑うだけでなおさらわけが分からなくなったが、一通り笑ったのか、笑うのをやめていきなり真面目な顔に変えた。

「小僧たちが言うところの神に分類される者だ。ちなみに此処はワシの創りし世界」

「……わけが分からないが、まあ俺の知る中ではこんな光景は地球上ではないから此処のことについては納得するしかないか」

俺の返事がなにか奇妙だったのか、神（自称）は目を丸くさせていたのだが、すぐにやりという悪い笑みを浮かべた。

「よく混乱せずに、いられるものだな。まあワシとしてもそっちのほうが楽なんだがな。」

「なにが目的かは知らないが、記憶に残った最後の感覚的にもう致命傷っぽいからな。仕方ないからやれることはするよ」

その言葉ににやりと笑っていた神（自称）は笑みが深くなり、かなり悪どい笑みを浮かべたものだから、さっきの言葉をかなり撤回したくはなるのだが、言ってしまったものはもう取り返しがつかないため、内心ため息をつくことしかできなかった。

「とりあえず小僧に何をやらしたいかも含めて小僧の現状となぜここにいるのかもまとめて説明してやろう」

神（自称）の説明によると神様達はとても暇をしており、なにかしようかなと思っていたところ、ちょうどたまたま俺が死んだのだが、一人（目の前の神っぽいもの）の神が俺の人生になにか知らないが興味惹かれたため、ほかの神にこいつをほかの世界に放り出して楽しんで見ないかと提案したらしい。

「っというか……俺の意思は無視か、つまらない人生だったからチャンスを与えてもらえるのはいいことか」

「ほぉ？そう考えるか。まあ転生というよりも肉体を作って放り出すだけなんだがな」

「それでその特典はあるのか？」

そう聞くと神さんは目を細めて楽しそうな笑みを浮かべており、嫌な予感もしたが、聞かないことには始まらないので、大人しく聞くことにした。

「特典は、望みを三つ叶えてやる。だが世界はこちらで決めるぞ？」

「ならばまんが、アニメ、ゲームのｎ「それはむりじゃ」なぜだ？」

「いくら神でも、なんでもできるわけではない。小僧が望んだ能力は与えることはできん」

神さんは万能ではないということに驚いたが、聞くことあったことを思い出し、それについてきいてみることにした。

「神さん、行く世界はどこだ？」

「なのはの世界だな。小僧がよく読んでいた小説の種類みたいだったからな。しかし注意として、アニメの世界ではない。限りなく似ているだけの世界だ。」

似ているだけの世界か……こりゃあ小説だけ読んで大体の流れを知っていると安心はできそうじゃないな……下手したら死ぬことになるか……

「ということは、原作とか小説みたいに順序よく進むことはできな

いこともあると？」

「そうじゃ。また似てるだけで性格や考え方も異なる場合もある、そもそも小僧が入った時点で同じになるわけもないがな」

ははは、ある意味原作などを盲目的に信じることもできないか、まあその方がもしもの事態では、冷静に考えることができそうだな。

「はぁようするに、前情報を信じすぎるなということか。」

俺は自分が生き残るためになにを願うべきか、よく考えるため、深く思考の海の中に沈むことにした。

それからどれくらいのときがたっただろう。なんとかまとめることができたので、神さんにいうことにした。

「1つ目は努力で行き着く領域の上限の無くしてほしい。2つ目は体の回復スピードを速くしてほしい。3つ目努力で習得するあらゆるものの習得スピードを速めてほしい。」

「分かった三つとも叶えよう。だがしかし人より体の回復が早くて、あらゆるものの習得するスピードが速いだけで、体の能力とかスペックは追いつくとは限らないがいいのか？あの世界では必要なデバイスも要求しなかったがかまわないのか？」

神さんの問いは、俺自身も考えなかったわけでもないが……

「まあそこはすべて努力でなんとかするよ。デバイスは……まだ戦う理由がないからな」

「わかった。それではそうやって作り変えて送ってやる。最後じゃが、送り出すものとして気になるからな、リンカーコアくらいはつけてやる。」

一瞬神さんが苦笑いをうかべ、目は優しげで、俺を見守るような目をしたがすぐに真面目な顔に戻り、腕上に上げると俺の身体は段々と透け始めていた。

「ありがとさん、それではまた会うことはないことを願うよ」

青年が感謝の言葉をあげてから、すぐしたら、白い光に包まれて消えていった

「すまない……槙……、騙してしまったワシを許してくれとは言わないが、願わくは君の先に幸があらんことを」

神さんとよばれていた少年は青年が消えてすぐにそう呟くと後悔と無念の意志を顔ににじませて、ただ、青年が消えていった所を見つめていた。

プロローグ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
次回はとうとう舞台になる海鳴市に飛ばされたわけですが……

1話　出会い（前書き）

かなり長期的に放置して申し訳ありません。今後もこんな感じに不安定更新ですがよろしくお願いします。

1話　出会い

ｓｉｄｅ？？？

「フェイトなにもこんなに遠回りしなくても良かったんじゃないかい？」

「なんとなくそうしたくなっただけ」

私は本当ならジュエルシードを探すための拠点へ今すぐにもいかないといけないのにアルフに質問されたとおりに今遠回りをしてしまっている。

アルフごめんね…ただ町の中を歩いてみたかっただけなんだ…

「ん？あれは子供かい？」

アルフがそういって公園の方を見つめているので私もそちらを見ると黒髪の男の子がうつぶせになって倒れている。

私は急いで駆け寄るとその子はだいたい私と同じくらいの年齢の子だった。

なんだろう…とても気になる子だな

アルフも私の後から男の子の方に駆け寄って怪我の確認をして

「どうやらぱっと見では大きな怪我はしてなさそうだね」

怪我がないことに少し安堵していた。

本当に怪我なくてよかった…やっぱり怪我をしているのをみるのは心苦しいし…

「ねぇアルフこの男の子私たちの拠点まで運んじゃ駄目？」

「なんでだい？病院に連れて行くのもまだしもこの坊主を拠点に運んでもなんの得にもならないよ？」

「なにか分からないけどほっとけないから」

「分かったよ。まあなにか妙なことしたらそのときになんとかすればいいからね」

そういうとアルフはその子を持ち上げると肩に乗せてそのまま私たちは拠点の方に向かった。

アルフありがとう…私の我が儘聞いてくれて…

なんとなくこのお礼の言葉が言えずに心の中だけでも感謝の言葉をいうくらいしかできなかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「知らない天井？」

柔らかい感触に包まれながら目を開けるとそこには知らない天井が広がっていた。

「使い古された物語のワンフレーズだよな……っと馬鹿なこと言っ

てないで状況確認だな」

身体を起こして周りを見渡すとそこはどこかの建物の一室のようだった。

そして予想はしていたが…やっぱり小学生くらいの年齢になっているっぽいな…まあいいか…

「起きたかい？」

周りの確認をしていると俺が顔を向けている逆方向から女性の声がしたのでそのほうをみると、若い女性がいつの間にか入ってきて壁にもたれかかりながら立っていた。

「え～っと、色々聞きたいことがありますがまず名前とここはどこか聞いても良いですか？」

「あぁあたしはアルフ、そしてここは海鳴市ってところだね。ちなみに今坊主がいる理由として倒れていたところをこのマンションの一室まで運んできたというわけだよ」

「教えていただけてありがとうございます。そして助けていただいてあ「礼はフェイトにいいな」フェイトさん？」

どこか見覚えがあると思えば、フェイトの使い魔か…マンション住まいということは、無印のころの可能性が高いな。だがフェイトが助けてくれたとは意外だな

「フェイトってのはあたしと一緒に住んでいる同居人だよ」

「はぁそうですか、そのフェイトさんはどちらにいらっしゃるんですか？」

「今リビングに、あら来たみたいだね」

俺はその言葉を聞いてドアの方を見るとちょうど金髪の少女…フェイトが入ってきているところだった。

入ってきたフェイトはベットの横まで来るとただじっと俺の顔を見つめている。

しばらく見つめ合って沈黙の時間が流れていき、そしてフェイトがその沈黙を破った。

「体は大丈夫？」

「はい、今のところは大丈夫みたいです。アルフさんに聞いたのですが、貴女に助けていただいたみたいですね。ありがとうございました」

「気にしなくていい。それで貴方の名前は？」

「僕の名前は真夜、結城真夜です、失礼だと思いますが貴女の名前はなんですか？」

「私はフェイト・テスタロッサ、結城質問いい？」

「はい、もちろんです。あの…フェイトさんとお呼びしても良いでしょうか？」

「いいよ、それで結城はなんで倒れていたの？」

さてはてどのようにいえばいいのやら、神様に転生させて貰って、意識を取り戻したらここにいましたって言ってもどう考えても頭のおかしい人だよな。

俺はどのように答えようか少し考え込んでしまったのが、気になったのか

「どうしたの？」

と首を少し傾げられて聞かれてしまった。見た目は可愛いので結構破壊力があってちょっとだけ顔が赤くなってしまったかも知れない。

「あぁ…少しだけ思い出そうとしただけですよ。なぜ倒れていたかは記憶にないのですよね。アルフさんにお聞きしたのですが、この町の名前に覚えがなく、どこなのさえ分かっていない状況ですし」

「ほぅそれは怪しいね…」

それまで沈黙を保って俺とフェイトの会話を見守っていたアルフがここで口を挟んできた。

「確かに僕自身も今の発言は怪しくはあるとは思うのですが、本当のことなのでなんともいえないですよ」

「まあそれはいいのだけどね。それでフェイトこの坊主は起きたが、どうするのだい？」

「どうするって？」

「坊主、今の話しを信じたとして行き場所あるかい？」

「……残念ながら先ほども言ったとおり、分からないのでないです」

「っというわけであたしとしてはこの怪しい坊主をこのままここに置いておくって言うのはやめておいた方が良いと思うのだけど、フェイトはどうしたい？」

「私は…このまま放っておくことできないから」

あぁフェイトは人が良いのか…いつか騙されるぞ…まあ俺には関係ないが…

「はぁ…やっぱりか…それで坊主どうするのだい？」

「行き場所がないので、良ければ置いていただけるとうれしいです」

まあここは…素直に好意を受け取っておくのが吉だしな…

「よろしくね」

「ありがとうございます。よろしくお願いしますね」

そういって握手をフェイトに求めるように手を出すとフェイトはその手をぎこちなくだが取ってくれて、少しだけ微笑んでくれた。

少しだけアルフの方に視線を移して、アルフと目が合うとフェイトが言ったんだから仕方ないねっと言いたげに顔をして頷いて、そのままドアから出て行った。

視線をフェイトに戻すと一瞬だけ少し不思議そうな顔を浮かべていたが、すぐに手を離し、ベット横から離れていく。

ドアの前までくると、俺の方を振り向いて、少しだけ会釈をして部屋から出ていた。

はぁ…なんだろう…この不思議な気持ちは…

少しの間だけ手を握った暖かい温度を思い出しつつ、窓から見えるどこまでも青い空を眺めた。

1話　出会い（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「は～いかなり遅れましたが一応続き出せました」

真「どうみても更新遅すぎだろ」

元「仕方ないでしょ。なかなかＰＣ自体開ける時間なかったんだから。まあ卒業論文にも追われていましたし」

真「まあこの駄目作者をかなり蔑んだ目で見つつ馬鹿にしてやってください」

元「うん…それはさすがに凹みますよ。まあそもそも私の物語待っている人などいないでしょうからきっとそういう目で見られることはないです」

真「なんかそれはそれで言っていて悲しくないか？」

元「もちろん悲しいに決まっているじゃないか！」

真「はぁ…先が思いやられる」

元「とりあえず今回読んでいただきありがとうございました」

真「今後も更新遅かったり、色々誤字脱字諸々ありえるかもしれな

いが、よろしくお願いします」

2話　外出をしよう（前書き）

はい更新が遅いですが、なんとか作ることができました。
駄作ですがよければ楽しんでいってください。

2話　外出をしよう

「えっと…このカップラーメン達はなんでしょうか？…」

「坊主、飯以外のなににみえるんだい？」

アルフの向かい側の席に座っているフェイトがそれに同意したように頷いている。

どうしてこんな現状になっているかは少し前まで遡らないといけない…

俺は、しばらく窓から見える外の景色を眺めて、ふと部屋の中にある時計の方を見ると昼時であることに気づき、昼からさすがに寝ている趣味いるのはどうかと思い、ベットから降りて、部屋から出た訳だが

次に目に入ったのはカップラーメンを啜っている二人とテーブルの上に置かれた袋の中一杯に入っているカップラーメン達であったわけだ。

これで状況説明終わりだ…うん短い説明だな…

「それ以外には見ませんけど…食事は作らないのですか？」

そう聞くと、フェイトはこちら見ていた目をあからさまにそらして、アルフは苦笑いを浮かべている。

ふたりの反応から…嫌な予感しかしないのはなぜだろう…

「作らないんじゃない。作れないのさ」

「私達、料理ができない。作っても変なのしかできないから」

「そうでしたか…。そういうわけでこのカップラーメン達なわけですね」

「そういうことになるね」

そういえば…もし原作に当てはまるならば、料理なんて覚える時間なんて二人になかった気がするな…

「フェイトそろそろいくかい？」

「そうだね。いこう」

カップラーメンを食べ終わるとそういって二人は椅子から立ち上がり、外に出る準備をし出した。

なんとなくは想像できるが…聞かないと確証は得られないだろうな…

「どこかに行かれるのですか？」

そう声をかけるとアルフは、準備していた手を止め、体ごとこちらの方を振り向いた。

「あぁ用事があってね。まあ坊主には関係ないことだがね」

俺にとってはどうでも良いことだしな、まあこちらはこちらの用を

すまさせてもらうさ

「あの…ついて行くつもりはないですが、良ければ私も出かけたいのですが駄目でしょうか？」

「はぁ？そんなの駄目に決まっている」

「アルフ…」

俺とアルフの会話に割って入ってきた声がする方を見ると準備を終えた様子のフェイトが、こちらの方にやってきている所だった。

そのままアルフの横に立ち、アルフの方を見つめている。

「フェイトなんだい？」

「…結城にアルフが持っている貸してあげて欲しい…」

「いいのかい？。怪しすぎるやつだよ？」

「アルフ…」

「はぁ…フェイトはなんでこんなやつに優しくするのかね…」

アルフはため息を吐いて、ポケットに入っていた何かをハイという言葉と同時にこちらの方に投げてきた。

俺はキャッチすることでき、それが何かと見てみれば、なにもアクセサリー付いていない鍵だった。

俺はそれをじっと眺めていたが、ついでにこれもっという声で前を向くとなにかがこちらの方に迫ってきており、それを鍵を持っていない手でぎりぎり掴むことができた。

それは黒い財布のようだった。

「これは坊主の唯一もってたものでね。身元分かると思ったんだが、お金以外なにも入ってなかったからついでに返すよ」

「あ、ありがとうございます」

「じゃああたしら行くよ」

そういうと手を止めていた準備を素早くすませて、外へと続くドアの方へ行ってしまった。

アルフを追いかけるように行こうとしたフェイトにいってらっしゃいというと、一瞬固まって、戸惑い気味にいってきますっと返してくれた。

そして二人はどこかへ出かけていくのを見送ると俺は、財布らしきものの中身を確認することにした。

札でいくらかはいっているだけで、身分証明類は何一つなく、なぜ持っていたかは分からなかったが、ありがたく頂く。

はぁそれにしても恩くらいは返さないといけないな…用ついでにこのお金でも使うか…

でもなんか気になるんだよな…この財布…なにかはわからんけどな

とりあえず財布をじっと眺めてみたが結局それが何なのか分からず、諦めて財布と鍵をズボンのポケットに突っ込み、外へと出かけることにした。

しばらくふらふらと外をぶらつくと、ふっと目に入った神社が気になり石段を登って鳥居を抜けたが、そこには誰もいなかった。

それにしても誰もいないか…だがまあちょうど良いし今の状態確認でもするか。

俺は少しの間思いつくままの運動をしてみたのだが…

「うん…普通だな。やはり鍛えるしかないか、だがなぜ大体一時間くらいの運動だけで最初より体が動くのか不思議だ」

俺の体は、どうやら自分自身が思い描いてたものより上がるのが早いことが判明する。

まあそもそもまだ低い段階だから当然なのかもしれないが、この事実は少しだけ先が楽しくなる結果で自然とほほが緩むのが自分自身でも分かる。

（ねぇそこの人、聞こえている？）

「はい？」

俺が神社にある木にもたれかかって、座って休んでいるとどこからか声が聞こえてきた

周りを見渡してみるがやはり誰もいない。

「ん？気のせいか？」

少し疲れて、幻聴でも聞こえているのか…それならば早めに休まないとなっと思い、立ち上がるが

（気のせいとは違う、違う）

やはり聞こえてきて、それもさっきよりもはっきりと俺の頭の中に話しかけてくるように聞こえた。

「あぁもうはっきり聞こえてきやがった。どこにいるんだ？」

もう一度周りを見渡してみるが誰もいる気配がしない。

（奥だよ奥。本堂の近くに細いけど脇道見えない？）

その声でその方面を見てみると、言われたとおり確かに、分かりにくいが道はある様子みたいだ。

「あぁ確認はできたが、それでどうしろと？」

（その道に入ってきてほしいんだ）

本来ならこの怪しい状況で導かれるのは遠慮したいとは思っていたが、行った方がいいと思う自分もおり、今回をその勘を信じることにした。

「あぁその道に入れば良いんだな？」

（うん、頼むね。）

俺はその道に入って奥の方へ向かっていくと、小さいが木で作られた祠らしき物が見えて思わず立ち止まってしまった。

「これは…なんだ…」

（あはは、びっくりして立ち止まってなくて、こちらのほうに来てほしいな）

「あぁ分かった。すまないな」

（いいのいいの。気にしないでね）

立ち止まった足をまた動かすと、そのまま祠の前まできた。

（さて閉じている扉を開いてくださいな）

その言葉に頷き、閉じられている扉を開くと…台の上に置かれたペンダントらしき物があり、胸のあたりに当たるところに銀っぽい石が嵌められており、紐の所は鎖のようだった。

「これは…デバイス？」

（おぉ知っていたんだね。でも僕たちはデバイスではなく心石っていう名前でいわれていたんだけどね）

「心石？どういうものなんだ？」

（いやいやデバイスと違う名前だけで、同じような物のはずだよ）

「まあそれはどうでもいいか…なぜこんなところあるんだ？」

（持ち主選ぶデバイスっといえばいいかな？かなり変わっているからね。その時がくるまで置かれていた感じだよ）

陽気に会話をしているそのデバイスは、言葉を紡ぐ度光っており少しだけ眩しかったと思っていたことは微妙に秘密だ。

「っということは俺は持ち主として選ばれたのか？」

（そうだね～。まあただ波長が合うだけだから、魔力とかそのものの強さは関係ないけどね）

「まあ一応もっておくだけいいか…これからよろしくな」

そういってそのデバイスを持ち上げて光っている石と目を合わせるようにした。

（うん見つめ合う感じだね。さて…）

陽気な雰囲気を変え真剣な声が聞こえ来たので、俺も真剣の目でデバイスの石の部分を見つめた。

（契約を行いたいです。我がラインブレイクは汝を導く矛となり、共に歩んでいくことを誓おう。汝はなにを誓う？）

「…俺は、何をしたいかも分からん、だが結城真夜はどちらかが滅びるまで逃げないことを誓おう」

俺はしたいことも分からなかったが自然とこの言葉だけは出てきた。

（これにて契約を終わる…疲れました…）

「いいのかこれで。まあいいか、改めてよろしくな」

俺は真剣な雰囲気から普通に戻ったと言うことで、ネックレス式のデバイスを首に付け、そのまま隠すように服の中に入れた。

（お互いに破ることない誓いを立てるだけの事ですからね～。まあそもそも選ばれた時点で契約の９割終わってますし）

「おぃ、というか契約終了したら敬語になるのか」

（まあマイマスターになったわけですし、こうしないといけませんよ。よろしくお願いしますね）

「あぁよろしくな。これから何をしていくかゆっくりと考えることにする」

（はいはい、私はマスターの意志に従いますよ。意見やつっこみはしますが）

「はぁこんなんで大丈夫なのか…」

俺は来た道を引き返していき、神社を出るとスーパーに寄って、家へ帰っていったが、俺達二人はその間、何も話しをせず沈黙をし続けるのであった。

2話　外出をしよう（後書き）

戯言タイム

注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「やりましたよ。一ヶ月以内に出せました」

真「前は半年以上立ってからだったしな。まあ駄目すぎるのは変わりないが」

元「うぅ主人公が私を虐めます…優しくしてくれてもいいじゃないか」

真「はぁ…この作者嫌になる。まあ少しずつ読みやすい物を作ってくれ」

元「できるかぎり頑張りますよ！。さて今回はやっとデバイスと遭遇ですね」

真「まあな…だが今の状態じゃ誰にも勝つことできないな」

元「いつか勝てれば良いんですよ。まあ人より成長しやすいんだし」

真「そうだな…ぼちぼち頑張るわ。まあ目標もなにもないけどな」

元「ゆっくり見つけていけばいいさ」

真「さてそろそろ締めの時間だわ」

元「なにも面白いこと言っていないのに時間だと…」

真「はいはいそれはまた次回もお会いできたら幸いです」

元「それは私のセリフ！？」

真「それでは読んでいただきありがとうございました」

元「あぁ…ありがとうございました。ｏｒｚ」

3話　語らい（前書き）

はい今回も一ヶ月以内に投稿できました！
まあ少し長くなってしまいましたがよければ楽しんで読んでいただけたら幸いです

3話　語らい

俺が家に帰った時にはまだ誰も居ず、買ってきたものをキッチンにある冷蔵庫に入れるため開けたのだが…

「カップラーメンを大量に買った時点でなんとなく予想はしていたけど…やっぱりなにもないのかよ。冷蔵庫の意味がほとんどないと思うんだが」

（マスター…なに真面目な顔してぶつぶつ呟いているんですか。不審者にしかみえないですよ？）

冷蔵庫の中身のあまりにもの状態でおもわず開いたまま色々コメントしてしまったが、私のデバイスもどきからの突っ込みが入り、現実世界に帰還できた。

まあなんというか冷蔵庫の中身が寂しいだろうなとは思っていたが、中身がまったくないとは思わなかった…

とりあえず買ってきた物を入れていき、俺は冷蔵庫を閉めることにした。

「聞きたいことあるんだがいいか？」

（ん？それはもちろんいいですが？っというより私が頭の中に話しかけているのに、マスターが口でしゃべっていますと傍目から見るとかなり頭のおかしい人ですね）

「それは言わないでくれ…まあとりあえずここじゃゆっくり話せそ

うじゃないから部屋に入ってから頼む」

（はぁ…了解しました）

俺が寝かされていた部屋に入り、ベットに腰掛けていざ聞こうとしたのだが…

（マスター、念話で話ししましょう）

っとラインブレイクに遮られてしまった。

このままでは聞かれてしまう危険性があるからいっそ念話で話そうというラインブレイクの主張にも正論があり、念話のやり方を教えて貰ったのだが…

頭の中で話しかければできるっという教えて貰ったとは言い難い内容で教えられた。

まあできてしまった俺も俺だが

（マスター聞きたいこととは何ですか？）

（「あぁラインブレイクの事を聞きたいと思ってな。それと呼びにくいからこれからラインと呼んで良いか？」）

（私のことですか？例えばなんですか？っというより呼びにくいで短縮されるのも悲しいですね。まあラインと呼ぶのは良いのですけどね）

（「あぁありがとう。まずなぜあの祠に置かれていたんだ？」）

（……それは…）

聞いてすぐに解答を貰えると思ったのだが、予想に反してラインブレイクは黙り込んでしまった。

沈黙に耐えきれずに、窓の方をみると、そこには雲一つない青空が未だに広がっており、その風景をぼんやりと眺めながらラインが話し出すのもひたすら待った。

あの…っとラインの念話の声が聞こえたので、俺は窓からの風景からラインの方へと意識を移した。

（詳しくいうことはできないのですが、それでもよいでしょうか？）

（「あぁ気になったから聞いただけだから無理に話をしなくても良いぞ？」）

（どちらにしても使用していただく際のために言わないといけないこともありますから。

詳しくは言えないのですが、私は昔ある者のデバイスでした。

その時は、ラインブレイクという名前ではなく別の名前でしたが、ある事情であの祠に置かれるときに一つのデバイスから三つのデバイスに分けられて、あそこに置かれました）

（「俺としては、ラインをあまり使う気はないんだけどな」）

（それは私の存在的に悲しくなりますから…今他に分かることとしては他の二つのデバイスの名前とデバイスとしての使用目的です）

はぁ…俺としてはなぜそんなにも言語が流暢なのか知りたいのだが…いまそれを聞ける流れじゃないしな…いつか聞くことにするか

後回している感はあるが、今聞けることをいろいろ聞いていくことにした。

（「その二つのデバイスの名前と使用目的は？」）

（ガーディアンと銀智の書です。使用目的は、ガーディアンは名前そのままですが、防御分野です。銀智の書は、情報収集および補助関係です。私の知っていることとしたらそれ程度です。）

（「分かった…まあ見つけられたらいいな程度かな」）

（マスター、私も含める三つのデバイスはそれぞれ得意分野が違うと思われるデバイスです。

ですがその分苦手分野が存在する可能性があります。

少なくとも私は防御魔法関係に難があります。なので戦闘する方向に進む際は、他二つを確保しておくことを推奨します）

（「そうはなりたくはないが、肝には銘じておく」）

（それとマスター、私は普通のデバイスと違って、付加スキルっていうのが存在します。そして私のスキルは反転で、これは使い勝手

が悪いですし、今のマスターじゃそもそも使えません）

聞いた話を頭の中でまとめようとした思考がラインからの言葉で一瞬固まってしまった。

（「え？付加スキルっていうのがあるのか？」）

はいそうですよ～っと何故か嬉しそうに返事するラインに色々突っ込みたかったが、状況整理を優先して詳しく聞いてみることにした。

（さきほども言ったように私には付加スキル反転があります。

これは反射の要素も含まれますが、代償も伴います。

まあ魔力がその代償ですが、行う事柄によって代償の大きさに違いがあります。

そしてマスターはリンカーコアもそれほど大きくもなく、魔力も低いのでほとんどの場合の代償が払えません）

（「やはり低いのか…まあ高すぎて目立つよりはよほどましか」）

（ある程度なら私の方で偽装できますからあげておいた方がいいですよ）

（「分かった…まあなんとかしていくことにする」）

はぁ…今の俺のひ弱さにため息ばかりしか出てこない…

途中で終わった情報整理を再開してこれから先を考えるため、思考を巡らせようとしたが、ねぇマスターっというラインからの念話でまた途中で終わることになった。

（「なんだ？」）

（なにか投げやりで怖いですよ。ただマスターの話しを聞きたいので）

（「投げやりなのは気にするな。それにしても俺の話か？なんでだ？」）

（ただの気になっただけですよ。お嫌でしたらいいのですけどね）

（「いやどうせ長い付き合いになるからな」）

そして俺は、転生の事について、その時の出来事、この世界のこと、この世界に来てから今までのことを一つ一つ自分自身で確認するように話しをしていった。

それをしているうちに、転生前の記憶がなのはの原作とそれの二次小説以外は漠然としか思い出せず、それ以上思い出そうとしても出てこないことに気づいた。

漠然としか思い出せないのは怖いが…どうせ覚えていても仕方ない生活しかしてなかったしな、まあいいか

マスターっという声に気づいたのは、話し終わってしばらくたって記憶に関して自分なりに納得できた頃だった。

（マスターは、これからどうするんですか？。この作り物の世界と似たところで）

（「ラインは、その作り物っというのはなにも思わないのか？」）

（私なりにそれは消化もし、考えもできましたからいいんですよ。それで関わるんですか？）

（「どうするもなにも、深く関わる気はない。どうせた……」）

（マスター！？どうしたんですか？）

（「いやなにもない」）

他人だからっと言い捨てようとしたとき、脳裏にフェイトが俺のいってらっしゃいを戸惑いながらも少し嬉しそうにいってきますっと返してくれたときの…その時の顔が一瞬浮かんで、少しだけ胸が痛くなった。

他人だろ…恩を返したらもう関わる必要ない…どうせ俺が関わらなくてもうまくいくはずなんだ…無駄なことしなくてもいいだろ…

そうやって何度も何度も自己暗示のように言い聞かせたが、胸の痛みがなかなか消えてくれない。

ばれないようにちゃんと返事をしたつもりだが、ばれているかも知れない…

マスター！マスター！っと念話で呼ぶ声に気づいたのは胸の痛みが

少しだけ引いたときだった。

（「あぁすまない。すこしぼんやりしていたよ」）

（心配にはなりますが、隠したそうなので聞かないことにします）

（「すまない…それでライン何で呼んでいたんだ？」）

（いきなり黙りましたから心配になりまして、それと明確にどうするか聞いてませんので）

（「あぁそうだな。もう少し体力あげてからになるが、剣術の達人が近場にいる可能性があるからいれば身を守る方法としてお願いして習おうと思っている」）

（そうですか…まあ身を守る方法としては良い方法でもありますね）

ガチャ…ドアが開く音がしたのが、ちょうど話しが一区切りした頃だった

（「ラインすまないが、隠して置いておくぞ？」）

（わかりました。それではお待ちしております）

俺はラインを急いで部屋の中に隠し、フェイト達を出迎えるため部屋から出ることにした。

出迎えに行くと二人とも少し疲れた顔をしており、おかえりなさいというと、それぞれ反応が違い、アルフは投げやりに、フェイトは出た頃よりも戸惑いなく、そして嬉しそうに返事を返してくれた。

「フェイトさん、アルフさん材料を買ってきたので今から料理して食べようと思うのですが、お二人の文も作るのでよければ一緒に食べませんか？」

「坊主、料理できるのかい？」

アルフは疑る目で見ているが、漠然とした記憶ではあったが、確かに料理をしていることは日常的にあった記憶はあるので大丈夫のはずだ。買ったときも自然と献立も考えることもできたため、染みついてもいる。

「そんなに手を込んでいるのはできませんけどね。お二人がお帰りになる時間が分からなく、今から作り始めるため、時間がかかってしまいますがどうでしょうか？」

「フェイトどうするかい？」

「結城が作る料理食べてみたい」

「仕方ないね…坊主待っててやるからなるべく早く作りなよ」

「はいわかりました」

俺は冷蔵庫を開けて、材料出し料理に取りかかった。

なるべく急いだもののやはりそんなに早くできず、アルフに睨まれることになったが。

そして料理ができ、並べ終えると、フェイト達が来た。

「ちゃんとまともなのができるな」

「一緒に食べますからね。ちゃんと作りますよ。それでは席に座りましょう」

そういうと意外にもアルフは頷いて席に座り、フェイトも自分の席へ座った。

俺も席に座り、手を合わせると二人も同じように手を合わせ、俺がいただきますっというと、二人は食べ始めた。

「悪くはないね。いやはや久しぶりにまともな食事を食べた気がするかね」

「うんうんおいしいよ」

「…ありがとうございます」

フェイトがとても嬉しそうにそしておいしそうに食べている姿をみて、少しの嬉しさと同時になぜかまた胸がちくっと痛んだ。

まあでもいまはこの嬉しさを噛みしめながら食べよう…そしてまた作ってみるのも良いかもしれないなっと思いつつ食べる手を進めていった。

3話　語らい（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「さて今回も…一ヶ月以内に出せましたよ！！」

真「あぁテンションが高いなぉぃ」

元「いやはや高くでもしないと、がんばれないかなって」

真「そうかそうか。まあどうでもいいがな」

元「なにか冷たいよ？優しさをください」

真「作者に与える優しさはない」

元「うぅまた苛められた…まあそもそも楽しんでくれる人がいるか不明な小説だから気長にやりますけどね」

真「一人だがお気に入り登録してもらっているぞ？」

元「え…マジで？」

真「本当だぞ？あ…作者がフリーズした。まあそれでも復帰は早いだろうか放置しておきますか。さすがに叩いちゃ駄目だろうしね」

元「…は、なんか嬉しい夢を見た気がするよ」

真「たぶんそれは夢じゃないから」

元「そうなのか～まあこんなんでももしかして楽しみにしてくれる人がいたら嬉しいとは思うね」

真「とりあえず締めるか」

元「それは読んでいただきありがとうございました」

真「駄作ではありますが、気長にお付き合いしていただけたら嬉しいです」

元・真「「それではまた次回に会いましょう！」」

4話　鍛錬　（修正（前書き）

はい一週間以内に投稿するつもりでしたが…遅れてしまいました。
駄作なので見直しなど繰り返して修正とか加えていますが気長にお付き合いくださると幸いです。
それではどうぞお楽しみください

4話　鍛錬　（修正

フェイト達に料理を振る舞ってから朝昼晩っと三食を毎日作らされるようになった。

まあ…最初はめんどくさいとは思ったが、案外嫌な気分にならないし、何日か経つと段々と慣れてくるからいまじゃなにも思わんしな。

ちなみにお金は、アルフが定期的に渡してくれるため材料買う分では困らない。

料理のための買い物という大義名分もできたので、毎回フェイト達が出かける時の空き時間はそのまま貸し付けられた鍵を使って出かけて、体作りの一環である程度の距離を走ったり、ラインとあった神社で今できるトレーニングを行い、時間になれば買い物して帰るという生活リズムを二週間くらい続けていた。

その結果体も良い感じに鍛えられたから…そろそろ目的な所に行こうと思う。

「なぁライン？前に話していた剣術の達人に会いに行くっていうの今日実行しようとおもうんだが」

『目的のですか？。あぁ前に行っていた話しですね』

俺達はいつものようにフェイト達が出かけた後外に出かける準備しながらそんな会話をしていた。

まあ…準備と言っても財布と鍵をポケットに入れるだけだが

「そうだ…翠屋っという店にいる高町士郎さんに会いにな」

『それでマスター？場所は把握しているんですか？』

「わからんがまあ人に尋ねれば辿りつくだろう…あれ？ライン念話以外しゃべれたのか？」

『あははなに馬鹿なことといっているんですか。当たり前ですよ』

「いやいやここ二週間念話以外でお前がしゃべったことないのだが？」

『それは…なんとなくですよ』

「もういいや…とりあえず行くぞ」

段々面倒くさい気分になってくるのでさっさと家からでて目的地の翠屋へ向かうことにした。

そこから…一時間後…

俺達はまだ目的の場所にたどり着けていなかった…というか完璧に道を迷っている…

（マスターまだ着かないのですか？）

（「もうここがどこなのか訳がわからん…」）

これ以上歩き回ってもなんかたどり着かない気がしてラインに聞か

れたとき道端の塀にもたれ掛かって立ち止まることにした。

（ねぇマスター質問があるのですがよろしいですか？）

（「言ってみろ…」）

（マスターが先ほど曲がった道の時もう一つの道の方見ましたか？）

思い出そうとしてみるが…真っ直ぐだった以外記憶にない…

（「あぁ真っ直ぐ行く道か…多分焦ってたから記憶にはないな」）

（その真っ直ぐ行く道の方に翠屋っと書いてある看板が見えていたのですが？）

（「……え？…なぜその時言わなかった？」）

（マスターさっさと曲がってしまったので違うのかと…？）

（「俺のせいか…ラインありがとな、そしてすまない」）

（いえいえ。私もすぐ言い出さず申し訳ございません）

（「お互い悪いでいいだろ…さて行くか」）

先ほど曲がった道へ戻るため、足早に来た道を戻っていくことにした。

そして戻ってもう一つの道を見るとラインの言うように翠屋の看板が少し先に見えている。

はぁ…すこしだけ憂鬱な気分になるが…ここまで来たんだしいかないとな…ここ一時間の奮闘無駄にしたくないし

少しだけため息が出ながらも翠屋へと向かうことにした。

店の方にはいると、内装が明るめでまた清潔感が漂う店内だった。

さすがに…有名なケーキ店であって、良いにおいもするし…明るめではあるが、落ち着いた雰囲気もするな

まあ俺自身ケーキあまり食べないし一緒に食べに行く相手も居ないから縁はなさそうだがな

そんなことを考えながら入り口近くで立っていると若いお姉さんらしき人がこちらを不思議そうに眺めているのに気が付く。

「えっと…どうなさいましたでしょうか？」

「君くらいの男の子がこんな時間にいるからね、気になっちゃったからね」

「はぁ…あの…ただ今高町士郎さんはいますか？」

「あら、うちの夫になにか用事でもあるの？」

っということは…この人が高町桃子さんか…おぃどうみても２０代前半しかみえないぞ…なんという不老…

生命の神秘の不思議に疑問を持ったもののこのまま考えても先に進

まないし、さっきから桃子さんがこちらを不思議そうに首を傾げているため、さっさと用件をすませることにした

「今からお会いしたいのですが、駄目でしょうか？」

「今はお客さんも少ないし、余裕はあるから大丈夫ね」

そして桃子さんが、士郎さんを呼びに行き、それから数分後桃子さんは士郎さんらしき男の人を一緒にこちらにやって来た。

「さて、君だね？私に用があるという子は」

「はい…単刀直入にいいます。小太刀二刀御神流を教えて欲しいです」

そういった瞬間士郎さんの目は鋭くなり、俺を観察するように見つめている。

「今はまだそう客が増えることもない。裏の道場で話を聞こうか」

「はい…分かりました」

「それじゃあ桃子あとは任せたよ」

「いってらしゃいね」

道場に向かう士郎さんのあとを追いかけて一緒に行ったが、やはりその道中は会話が一切なく沈黙だけが支配する時間が道場に着くまで続いた。

道場に入ると、士郎さんは道場の中央あたりで正座したので、向かい合うため少し離れて正面に腰掛けることにした。

「君のような年齢の子がなぜ知っているのかは問わないでおこう」

「ありがとうございます」

「さて小太刀二刀御神流がどういった物だというのは理解しているかな？」

「はい…どういった物かは正しく理解しています」

「…そうか、だが理解していようがいまいが教えるわけにはいかない」

「なぜとお聞きしてよろしいでしょうか？」

「おいそれ教えられるものでもない、また私は君を教えるに値すると思えないからな」

「…それは力量的な物ですか？」

「いいや心の意味合いだ、今の君をみてもそうとしか判断ができない」

「そうですか…」

「……少しだけ時間をくれないか？」

「はい？それはかまいませんが…」

士郎さんは道場から出ていき、それから道場の中でラインと話をしつつ待つこと十数分。

そしてやっと士郎さんが戻ってきたのだが、その服装は道着だった。

「さあこちらにきて一つ取りに来ると良い」

「はぁ…わかりました」

士郎さんが呼んでいる方にいくと、木製の数種類の武器達が箱に入っている。

選べといっているのだからこの中から選ばんといけないのか…ん？なにか分からないがなにか手に馴染むな…

そう思って取り出してみるとそれは一つの一般的な木刀だった

士郎さんも同じような木刀を持つと、道場の中央まで連れていかれた。

「さあ構えるんだ」

「えっとこれはどういうことでしょうか？」

「いいから構え、そして少しだけ私と模擬戦するんだ」

勝てるわけがない…無理だと言い出しても良かったのだが、士郎さんは真剣な目で俺を見つめているためそれをいう気が失せてしまった。

とりあえず構えてみるか…あれ？なんだろう？構えようと思ったら自然にできた…

士郎さんも構えながらその光景を見て、目を細めるだけだったが、とても面白げに見ている。

でもそうしていたのも一瞬で、すぐに襲いかかってきた。

ん…ぎりぎり見えるっということは手加減されているのか…さすがに力量の差が大きいからな

瞬時に肩を狙う振り下ろしを手の持っている獲物で何とか防いだが、流れるように腹への攻撃に移されてしまい、咄嗟に反応できずそのまま吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

くっ…マジ痛いわ…さすがに手加減されていようが痛い物は痛いな…だがここで倒れるのは癪だ

木刀を支えにして何とか立ち上がってみるが、やはり足がふらつく。

その様子を士郎さんは下段に構えつつじっと見つめているのが見える。

「ほぅそれで倒れないか」

「このまま倒れてしまうのは少し悔しいですからね」

「ふむ…一応合格だな」

「合格っていったいなんでしょうか？」

「たしかに小太刀二刀御神流は教えないけど、基本レベルの剣術なら大丈夫だからね」

「ようするに…今の模擬戦は試験だったんですか…」

「まあそういう事だね」

「ですが…私なにも示すことできず無様に吹き飛ばされただけですよ？」

「構えは様になっていたし、一番最初の振り下ろしを受け止めたから一応は合格ラインだ」

「なにか悔しさが残りますけど」

「あはは負けず嫌いなのは良いことだ、さて合格したと言うことだから君の名前を教えてほしい」

あはは…やはり子供扱いか…まあ事実子供だが

「結城真夜です。これからよろしくお願いします」

「それでは真夜君と呼ぶことにしようか。今からまだ時間があるから少しずつ鍛えてるから」

「お手柔らかにお願いします…」

そこから一時間ばかり士郎さんのスパルタ剣術講座を受けることに

なったが、厳しくもあったが得るものは一時間ながら多くあった。

「ありがとうございました」

「お疲れ様。また明日来ると良いよ」

「はいまた明日来ますね」

もう一度士郎さんに頭を下げて道場から出ていき、帰るためには店内も通るので、桃子さんにも頭を下げて挨拶をしたら少しだけ苦笑いされ、名前も聞かれたので自己紹介し、桃子さんもお返しに自己紹介をしてくれた。

いつも通りスーパーで今日の晩飯の材料買って、少しだけ気分が軽くなって家に帰る道を進むことができた。

そしてフェイトのいつも通りのおいしそうに食べる姿が見られる食事が終わり、食器の片付けなど諸々していつも通りの時間に床に入ったのだが…

（「た、すけて、誰かこの声が聞こえるなら」）

念話らしき物が突然聞こえて一瞬驚いたが原作の始まりの合図であることに気づき、無視することにした。

それにしても…これで原作が始まりか…まあどうせ俺には関係ないことだ

4話　鍛錬　（修正（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「はい戯れ言コーナーがやってきました！！」

真「すぐ打ち切りになってもだれも困らないし誰も悲しまないコーナーだがな」

元「ひど！？まあ…そうかもしれないですが…」

真「はぁ自分で認めてどうする…そういえば作者から報告あるんじゃなかったのか？」

元「うぅぅ…は！こうしている場合じゃない！！」

真「しっかりしろよ…」

元「あはは申し訳ない。それでは報告ですが…ＰＶ１０００突破したことをここでご報告させて貰います」

真「それとお気に入り登録の数も増えたな～」

元「本当にありがたい限りですよ。こんな駄作でも目を通してくれる方がいらしゃって感謝しきれないですよ…」

真「まあ今回の戦闘描写ボロボロだったがな」

元「それをいわないで！！今の私の実力じゃあれが精一杯なの…」

真「ここ最近決めた一週間以内に投稿っていうのももろ破っているしな」

元「私の…精神力はもう０に近いです…」

真「まあこれ以上いじめるのはよそうか」

元「そうしてください…まあどんなに時間かかろうが絶対に途中でやめずに完結させますけどね」

真「ほぅそれは嘘じゃないのか？」

元「少なくとも…書き始めた時からの誓いですから破るつもりはないよ？」

真「まあそれを信じようかね」

元「それを証明するには頑張るしかないですね」

真「さてそろそろ時間だからしめるぞ」

元「はいはいわかりましたよ～」

真「最後まで読んでいただきありがとうございました」

元「みなさんがいるおかげで今頑張ってやれています」

真「また次回もお会いできることを願います」

元・真「それではここまでお付き合いしていただきありがとうございました」

5話　迷いの中（前書き）

更新が遅れてしまいすいませんでした。
今回も楽しんでいただけたら幸いです
それでは本編スタート

5話　迷いの中

原作が始まってからもう1週間過ぎている。

フェイト達はその1週間は、今以上に慌ただしく動いているが…二人とも家に帰ってくると疲れて落ち込んだ顔をして帰ってくる。

まあそりゃあ主人公のなのはが立て続けてにジュエルシードを封印して遅れを取っている状態だから仕方ないと言えばそうなのかもな

そして俺はというと士郎さんに剣術を教えてもらえるようになってから毎日通って模擬戦を行っている。

幸運にもまだなのはには遭遇しないままでいるが、いつ出逢うのか冷や冷やものでもある…。

そして今日も道着を借りて士郎さんと稽古という名の模擬戦をしているが…

正直勝てる気もしないし力量差が目に見えて分かって仕方ない。

っく…手加減してもこのレベルかよ…この人は…

流れる動きで肩や胴を狙ってくるのに、合わせて防御をしているが…正直段々と痺れてくる…

う…今度は頭ねらいかよ…この人は俺を殺す気か…

なんとか前のめりになって避けて、腹に打ち込んだが結局木刀を弾

かれてまた勝つことができなかった…

「はいこれで今日の稽古は終わりだ」

「ぜぇぜぇありがとうございました」

士郎さんが道着を着替えに行くため道場から出るみたいだが、俺は稽古が終わった瞬間座り込んでしまい、まだ立ち上がることができないでいる。

士郎ｓｉｄｅ

汗で少しだけ重くなっている道着が思ったより体力を使った稽古であったことを物語っている。

少年と初めてあった時は小太刀二刀御神流の名をどこかで聞き…興味本位で来たと最初は思っていた

しかし道場で向かいあった時から見た目の年齢よりも落ち着いている雰囲気を醸し出すのを見てその考えは消えた

剣術の稽古をつけてもいいのではないかという考えに変わったのは少年からなにか惹かれるものがあったからだ

思ったよりも構えが自然で最初の一撃を防御されたことで、その考えはつけてみたいというのに変わっていた

そしてそこから一週間…少年は異常なスピードで成長をしていく…

手加減はしていたが今日に至っては３０分近く模擬戦を行うまでに

なっている

私も手加減の比率を低くしていき、剣速や一撃の強さを高めているが食いついてくる…

成長率と同列に目に見張るものは戦っている最中冷静に対処していることがいえる

普通あれくらいの年齢の子がそうそうできるものでもない

ふと廊下から音が聞こえて、ドアの方をみるとちょうど着替えに真夜君も来た様子だ

…願わくばあの少年の張り付いた笑顔を溶かし迷いに満ちた目を晴らしてくれる人が現れることを願いたい

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

しばらく道場で休憩してから着替えに行ったんだが…士郎さんが一瞬だけなんともいえないような目で俺を見ていたことがとても気になるが…まあ気にしても仕方ないか

道着からいつも着ている服に着替えていくが、この１週間で慣れた物でそう時間がかかる物でもなかった。

いつも通り士郎さんと桃子さんに挨拶をしていき、店から通り抜けて出て行った。

さて…いつも通りスーパーの方へいくか…

スーパーへ向かって歩き出してどれくらいたったころだろうか…。
道端の溝で引っかかってる車いすに乗った少女らしき人が困っているような様子が後ろ姿だけでも分かる。
どこかで見覚えあるような後ろ姿だが、俺には関係ないことで無視して通り過ぎようとしたのだが…。
横を通り過ぎるときちらっとみたらちょうど同じタイミングでこちらを見た少女と目が合ってしまったため、無視することもできなかった。
…仕方ない、声をかけるしかないか
「えっと…お困りでしたら手を貸しましょうか？」
「あ、良かったら頼めるやろか？」
「この車いす押せばいいのですね？」
「そうや、ありがとな」
よく見てみれば…八神はやてか…なんでこう原作キャラに会ってしまうんだろうな…
力を入れて車いすを後ろから押すとすんなりと溝から出ることができた。
俺はこれ以上関わりを持たないようにそそくさと立ち去ろうとしたのだが…。

「それじゃあ私はこれで」

「待って！」

「はい？もう用事ないはずですが？」

「あのな…お礼したいのや…」

「えっと…車いす押しただけなので貰うような事してないと思うのですが…」

「そうやけど…駄目やろか？」

う…上目使いに少し潤んだ目で見られると断りづれぇ

はぁなんでこういう展開になるんだよ…初めて会った他人だぞ？

数十秒間そんな目で見られた俺は断るという選択肢をもう選ぶことができなかった。

そういうわけであえなくはやてからのお礼を受けることになった。

そしてはやてのいう礼というのは後日なにか品などを渡すことだと思っていた俺は、「付いてきてほしいのや」というはやてからの言葉で少し驚くことになった。

まあどこかおいしい店とか連れててくれて奢ってくれるのかとすぐ思い直したが…

はやての横に並んでしばらく歩いたもののどんどん住宅地の奥地に行くばかりで、店がありそうな場所には行く気配がない。

「えっとどこにいくのでしょうか？」

「それは秘密や」

うん…とても良い笑顔でそういわれてしまったらなんとなく聞くのが憚られるのはなぜだろう…

はぁ…なんでかここしばらく笑顔関係には俺弱いな～

苦笑いしかでてこないのも悲しいな

このまま考えていても仕方ないのは分かって入るんだがな…どうもな～

「あのな！聞きたいことがあってな…」

「あ、え？なんでしょう？」

やばいやばい、考え事してたらいつのまにかはやてがこちらを見ていたことに気が付かなかった…

「どうしたん？」

「なんでもないですよ？」

「ならええけど」

ふぅ…一応誤魔化せたかな？

まあ誤魔化せた気もしないけどな！

「それで聞きたいこととは何ですか？」

「えっとな…名前教えて欲しいのや」

「え…あぁ名前ですか」

「そうや名前や」

ん～教えておいた方が良いのかな？…まあどうせこれが終われば縁がないと思うからいつか忘れるだろうしいいか

「私は…結城真夜っていう名前ですよ」

「ゆうきしんやくん？」

「そうですよ」

「私の名前は八神はやてや」

「はい八神さんですね」

「なんで苗字なのや」

「会ってそう経たないですしね」

普通は女性の下の名前をいきなり呼ばないだろ…まあ呼ぶ必要もな

いしな

なんで若干不満げ顔してるんだよ…そんな顔しても呼ばないからな？

「うぅ…まあええや、私は真夜くんと呼ぶのやから」

いきなり男の下の名前呼ぶとは勇気あるな…まあ本人は意識してないかも知れないがな

そしてなぜそんなにも得意げなのか聞きたいが、気にしたら負けか…

いつの間にかはやては前の方を向いていたのでこちらから話す話題もないので黙ってまたしばらく歩くことにした。

「さてそろそろや」

「そろそろですか？」

「ここや」

「…ここなのですか…」

そして目的地についたのだがどうみても一軒家にみえる…

途轍もなく嫌な予感する…まさかはやての家ではないだろうな？

「八神さんここは？」

「私の家や」

「そうですか…ここで待っていればいいのですか？」

「ううん家の中に入って欲しいのや」

うんまさかの大当たりですか、あぁ当たって欲しくなかった

なんでどこの馬の骨なのか知らない男を家まで連れてきたんだよ！？同居人達にどう説明するつもりだ…

確かに同年齢だろうが色々と問題ありすぎだろ…あれ今は無印の時だから…一人暮らしなのか？

「えっとご家族の方々になんと説明するんですか？」

「私な…両親もういなくてな…今一人暮らしなんや」

「…それはすいません」

「気にしなくてええのや」

あぁやはり一人暮らしだったか…それにしても確認のためだとしても悪いこと聞いたかも知れないな…

もう…なんでこう縁を作るつもりないのに気になるんだよ…気にしちゃ駄目だろ、俺

「さあ入ってな」

「分かりました、それではお邪魔させていただきます」

ここまで来たら大人しく入るしかないか…何を考えているやら

はやてがドアを開けて待っているため言われるまま家の中に入るとすぐに居間へ案内された。

だがすぐにはやては「ちょっとまっててな」という言葉を残してキッチンの方へと行ってしまった。

まあ一応キッチンの様子が見ているからなんとなく何かしているのは分かるが…

居間にあったソファに座ってみると意外と座り心地よくて変にリラックスできそうで怖い…。

しばらくソファに座ったままソファの感触に身を委ねつつぼんやりしていたらなにかを焼いている音と共に良い匂いが漂ってくる。

キッチンの方を見るとはやてが料理をしているのが見える。

「料理ですか…」

「そうや、私には今のところお礼できるのこれしかなかったのや」

思わず呟いた声が聞こえていたのか、はやては言葉の内容と異なり、楽しげな声で返事が返してきた。

料理している最中での返事だから顔が見えてないがな…でも楽しそうだな…

今だけは少しだけ深く考えることをやめてこの空気をただ純粋に楽

しむか…

料理が出来上がるその時まで楽しんで料理をしているはやてを寛ぎながら眺めていた。

「できたやからテーブルの方へ来てほしいのやけど」

「はい分かりました」

はやてに言われるままキッチン横にあるテーブルの方へ行くことにした。

テーブルの席に着くとやっぱり楽しげな顔をして料理を次々と並べていくはやて…。

あぁ…散々いろんな小説に言われているとおり…凄く旨そうだな、まあ見た目だけの可能性もあるのだが

「そんなに料理を見つめてどうしたんや？」

「いや何もないですよ？」

あまりにも料理を凝視してしまったからはやてに不思議がられてしまった…うんこれからは気をつけよう

まあすぐに並び終わってはやてはテーブル越しで向かい側になるように車いすを固定した。

「それじゃあ食べてくれるやろか？」

「…いただきます」

う…やばいな真面目においしいよ、これ…

一口食べてからそこから手が止まらないって本当に起こるものだったんだな…今初めて実感したよ

「どうやろうか？」

「おいしいですよ」

手を止めてはやてからの質問をそう返すととても嬉しそうな顔に変わるはやて

「よかったわ…人に作るの初めてやから」

「…そうなのですか？」

「人に作る機会なかったのや」

俺何やってるんだ…そんなの両親が居ないだけで予想できる物だろ…あぁ今日の俺嫌になるわ

「お礼やからどんどん食べてや」

「ありがとうございます」

「…なんで敬語なんや？」

「まだ会ったばかりですから」

「そうやけど…なんか残念やな」

悲しそうな顔されたらとても罪悪感がでてくるな…気にする必要なんてまったくないのに…

あはは胸が痛いな…ただただ嫌な気分になるだけだ

また料理を食べ始めたが、さっきと違ってなにかが足りない気がして仕方ない味になっていた。

ただはやてはこちらの方を少しだけ苦笑いをして眺めているのが見えた。

それが食事を食べ終わるまで沈黙の中で続いた。

「ごちそうさまです」

「お粗末様」

「本当においしかったですよ」

「…ありがとうな」

「あの…料理教えて貰っても良いですか？」

「え？…いいで」

ちょっとだけ悲しそうか顔が胸に引っかかって思わず言ったお願いをはやては戸惑いながらも嬉しそうな顔をして受けてくれた。

本当におもわずなのに快諾されてしまったので引っ込みが付かず本当に教えて貰うことになった。

そこからいくつかの料理のレシピやアドバイスを貰いつつ、実際に二人でキッチンに立って料理したりなどもした。

「どうでしたか？」

「真夜くん筋は悪くないで」

作った料理も食べ終わってテーブルにお互い向かい合ってさっきまでアドバイスを聞いていたのではやてに感想を聞いてみると得意げにそう答えた。

少しだけ悔しい気はするが事実はやての方が何十倍もおいしい物がつくれるからなにもいえん…

「本当ですか？」

「ほんとや」

「八神さんは私に気にしてそう言ってくれている気がしてなりません」

「むっ信じてないのやないか」

「そういうわけではないのですが…私が正直に話してほしいといったら正直に話してくれます？」

って俺…流れでなにいっているんだよ…関わるつもりなかったんじゃねぇのかよ

しくったな…はやてのその後が一瞬だけちらついて口が滑ってしまった

どう聞いても会ってそう経たない人がいうセリフでもないし、早くていせ「いいで」え？

「いいで、本当に正直に話したる。まあ本当に筋が良いと思ったのはほんとやけどな」

「…その時はお願いしますね」

はやてにいい笑顔で答えられてしまったら訂正できんじゃないか…本当に失態だらけだな

あぁまあ今言ったことをいうことはないだろう…きっとそうだ…気の迷いもあったしな

こういうときはそそくさと退散するに限るな

「八神さん私はもう行きますね」

「残念やな…また会おうな」

「えぇまたどこかで」

胸が痛い…その笑顔を向けられるのがとても痛い…会う気ないのにそう答えてしまう自分が一番嫌気がさす。

はやてｓｉｄｅ

あぁいってしもうた…

元々私がお礼を理由に引き留めてしもうのやから言ってしまうのは当たり前のことやけど

それでも男の子と話すのは本当に久しぶりでもしかして異性の友達になれるやろうかと思って思わず引き留めてしもうた

もっと話しをしたかったのやけど…どうも張り付いた笑顔となにかに濁った目をみるとなかなか話しをすることができなかったな…

それでも人に料理を作ってあげるのは楽しかったな…なかなか下の名前呼んでくれなかったり最後まで敬語だったのは少しだけ寂しいやけど

食べ終わったら料理教えて欲しいっていわれてちょっとだけ近づけたかなっと思ったやけどそうでもなかったやな…

でも「私が正直に話してほしいといったら正直に話してくれます？」と言われたときは驚いたやけど、それまで張り付いた笑顔がその時だけ真剣な顔になって、そして目も透き通った目をしていたのや

その時の目と顔が真夜くんの素の部分に思えて信じられたから私はすぐに頷いたのや…

いつか本当の真夜の笑顔を私に向けてくれて友達になれたら嬉しいな…

なんやろ…少しだけ胸が温かいな

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

はぁ…本当俺なにやってるんだよ…

逃げるようにはやての家から出てたもののスーパーへ行く道をしばらく行ってもさきほどのはやての家での失態ばかりが浮かんでくる。

（マスターため息をついても仕方ないと思いますよ）

（「そういってもな…自分が嫌になるわ」）

ラインからの諌めがなおさら自分が嫌になって仕方ない

まあいつまでもうじうじしていっても仕方ないか…気分を切り替えよう、うん

（「まあ気持ちだけは切り替えるか」）

（それが一番かと）

自分に気にしないようにと言い聞かせたが嫌な気分と胸の痛みがしばらく残り続けた。

5話　迷いの中（後書き）

言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「戯れ言タイムがやってきました！」

真「うっさい、落ち着け」

元「う、叩かれた頭が痛い…」

真「自業自得だ、さて作者よ…なぜ更新が遅れた？」

元「あはは…就職活動と風邪を引いたが原因かと」

真「そうかそうか…管理不足と未だに就職先が見つからないお前の責任じゃないか」

元「それをいわれると胸に突き刺さる…まあ私の責任であるのは確かですね」

真「もしかして楽しみにしてくれた人がいた人がいたかもしれんのだぞ？」

元「…本当にすいませんでした、更新が遅れてしまう事態がまた起きるかも知れないですが暖かい目で見てくれると幸いです」

真「若干不吉なこと言っているかまあいいだろう」

元「あははありがとうございます」

真「そういえば今回はやてに会ったわけだが？」

元「そうですね…まあ主人公は少しずつ変わろうとしています、それが伝わっているかは分からないですけどね」

真「まあ伝わらないのなら作者の技術不足だ」

元「…そうですね、でも書きたい物がありましたからそれを書ききるまで恥知らずながら書かせて貰いますよ」

真「自由にするがいい、一応親みたいなものだからなにもいえん」

元「私も命を吹き込んだ身として最後まで導きますよ」

真「頼むな～」

元「さて作品は気長にお付き合いしていただけると嬉しいです」

真「ちなみに一応主人公設定はある場面が発生したら第一回始める」

元「それがいつなのかはまだ言えないですが遠くないいつかです」

真「台本通りにいったが…自分を主人公言うのは少々恥ずかしいのだが」

元「それは諦めてください」

真「はぁ…それではいつも通り締めさせて貰います」

元「まあいつも言っている言葉は若干違いますがね」

真「さっさといくぞ」

元「へいへい」

真「まだまだ技術不足なもののここまでお読み頂きありがとうございます」

元「いつもアクセスやお気に入りが増える度作者はニヤニヤが止まりません」

真「誤字脱字や他になにかありましたら気軽に感想板をご利用ください」

元「それでは…」

元・真「今回もここまで読んでいただきありがとうございました」

作「また次回お会いできることを楽しみにしています」

6話　同居人（前書き）

更新させていただきました。
駄作でありますが楽しんでいただけたら幸いです。

さて小説には関係ありませんが、この度発生した東日本大震災で犠牲となった方々の冥福と今必死に生き抜いている被災者の方々のこれからの人生に幸あらんことをこの場で祈らせていただきます。
作者自身は地震の影響は受けていませんが…地震が発生したとき仙台へ旅行に行っていた友人達がいまして勝手ながらお言葉を述べさせていただきました。

6話　同居人

あれからスーパーに寄り、居候している家へ帰るとフェイト達が既に帰ってきて、居間のソファでくつろいでいた。

まあいつもより遅い時間帯に帰ってきたのだからフェイト達が先に帰ってきている可能性は充分あったが…

「結城お帰りなさい…」

「おかえり、坊主今日は遅かったね」

「すいません…」

凄く意外だな…フェイトはともかくアルフにおかえり言われるとは…

まあ二週間くらい一緒に暮らしているからな、一応信用はしたのか？

そんなことを考えているといつの間にかフェイトが俺の方まで来ており、じっと俺の顔を見ている。

「結城大丈夫？」

「え？大丈夫とはどういうことですか？」

「今日帰ってきても珍しく結城いなかったから何かあったのかと心配してた」

なんだろう…嬉しいような申し訳ないようなこの気分は

心底心配そうな顔されると罪悪感がにじみ出てくる…ってなに思って居るんだ俺

恩返して落ち着いたら出て行くつもりなんだぞ俺…はぁ、そういえば今まで心配されたことい…ちども…

ん！！あ…たまが痛い…

急の頭の痛みと共に冷めた目をした大人達から見下されるように見られる光景が一瞬だけ浮かんだ

今のはいったいなんなんだよ…っていつの間にかうずくまっているのか、俺

すぐに立ち上がったが、先ほどよりもなおさら心配そうな顔を浮かべているフェイトがいる…。

「何もないので大丈夫ですよ？」

「本当？」

はぁ…今日は本当に失態だらけだな…

おもわず頭が掻きたくなるがそんなことよりもこの現状をなんとかしないといけない。

他に安心させる方法も知らないからやってみるか…

俺は未だに心配そうな顔をしているフェイトの頭を撫でつつ安心さ

せるように語りかける。

「今日遅くなったのは寄り道をしていただけですよ？」

「ん…そうならいい…でも今のは？」

ん…カクンと小首を傾げる姿はさすがに効くものがあるな…

「…知らない土地ですからね、知らず知らずに疲れがたまっていたのかも知れませんね」

「そうなの？」

「そうだとおもいますよ、今日はいつもよりゆっくり休むことにします」

「ん…そうしてほしい」

あぁやっと納得してくれたか…まあ心配そうな感じは変わらんが安心はしてくれたな…

って俺はなにをやっているんだ…関係ないと切り捨てればよかったのに…

なにをやっているのやら…それにしても髪のさわり心地はいいな…俺いつまで撫でてるんだ！

撫でるのをやめて手を戻すと一瞬だけ残念そうな顔するフェイトが

見えたがきっと気のせいだ

恥ずかしくなりフェイトから少しだけ視線を外すと、ソファからこちらの方を微笑みながら眺めているアルフが見えた。

くいくいと服を軽く引っ張られたのでフェイトに視線を戻すとぼそっと何かを呟かれたが聞き逃した。

「ただいまは？」

今度は俺が聞こえるようにはっきりした声で言い直された。

あぁそういえばただいまを言ってなかったな…

「ただいまです」

「ん…お帰りなさい、そしてただいま」

「お帰りなさい…」

ただおかえりとただいまを言い合っただけなのに、フェイトは何が嬉しいのか分からないがとても嬉しそうな顔をしていた。

俺はその後買ってきた材料で早速料理を始め、しばらくしてからできた料理をいつものようにフェイト達と一緒に食べ、後片付けしてから先ほどフェイトへの言い訳のためこのまま起きているわけにもいかず、フェイト達に早めに寝ることを伝えていつもより早めに床についた。

そしていつものように翌日、朝と昼にそれぞれ食事の準備をする。

フェイト達は部屋にこもってなにかしているから食事の準備する以外この時間は居間のソファで外の景色を眺める以外することがない。

昼食を食べ終わり、いつものようにいってらしゃいっと言って送り出す…

ここまでいつもの一日を過ごすことができた。

ここまでもしかして昨日いきなりの頭痛が起こったから今日何か体の不調が出ると思ったがその兆しもない。

でもまあ…今日は士郎さんと関わりがあるサッカーチームの試合があるため、稽古ができないんだよな…

応援行くから休みと言われてもな…稽古することが決まるまでやってたトレーニングするかね

自主練習するにも獲物ないしな、それしかできないか…

ってサッカーということは町でジュエルシードの大規模な事件が起こる日じゃねぇか…

はぁ…何時に起こるかも分からないし、今日はおとなしく家にいるしかないみたいだな

それでも体が鈍りそうで怖いから貸して貰ってる部屋で今室内でできる運動をフェイトを見送ってからしたが。

でもやはりストレッチに近いことしかできないのは悲しくなるな…

あれ、いつの間にか鍛錬馬鹿になっていないか俺…

まあそれしかやることないから仕方ないと言えば仕方ないか…

居間のソファで休憩していると首にかけているラインから念話で話しかけられた。

（マスター少しよろしいですか？）

（「かまわんがどうした？」）

（報告しておきたいことありまして）

（「報告？」）

ラインはなるべく持ち歩いているから俺が知らないことをラインが知っているって事はあまりない気するんだが…

（えぇ報告です、マスター…リンカーコアが大きくなって魔力量もなぜか増えています）

（「…リンカーコアが大きくなったり魔力量を増えるような要因が思いつかないのだが？」）

（マスターが体を鍛え始めたことでの要因しか思いつきませんが…）

（「だが体を鍛えただけでそう簡単に増えるものではない気するのだが」）

デバイスを一切使わず魔法も使ってないのになぜ鍛えられるんだよ…

（ですがそれしか思いつきません、とりあえず間違いなく増えていますので）

（「…わかった、すこし不思議だがまあ気にしても仕方ないか」）

（私の方で隠しきれますから問題はありませんけどね）

（「ならいい」）

まあ隠せるのならばあって困る物でもないし、前向きに考えることにするか…

それからラインと久しぶりに色々と話しをした。

まあ主に今日の晩飯の献立についてだがな…

だいぶ話し込んで、フェイト達がいつも帰ってくる時間になるが帰ってくる気配がない。

晩飯を作っても冷ましてしまったらもったいないので帰ってくるまで待つがいつまで待っても帰ってこない。

時間もいつもの時間よりだいぶ過ぎている。

今日はフェイト達の方が寄り道しているのか？まあ俺のは寄り道というのかは不明だが…

それでこんなにも時間かかる物なのか？…いやいつ帰ってきても俺が気にすることでも…いやただいつ食事を作ればいいのか気になっ

ているだけのはずだ…

そんな堂々巡りをしながら待っているとようやく玄関からドアを開く音がして出迎えにいった。

「おかえりなさい」

「……ただいま」

「……」

なにか様子がおかしい…アルフは苦々しい顔をして黙っているしフェイトはただいまと返事してくれたものの浮かべた笑顔が痛々しいなにがあったんだよ…

「なにかあったんですか？」

「なにもないしなにかあっても坊主にいう必要性はないね」

「…本当になにもない」

やはりなにかあったみたいだな、反応が若干不自然が漂うし、フェイトがさっきからしていることがどうみてもなにかあるしか思えないからな

「フェイトさん…さっきからなぜ腕を押さえているのですか？」

「…なにもない」

このままじゃ埒があかない…

先ほどからフェイトが抑えている腕を強引に取ったがすぐに外されてしまった。

しかしちらっとどこかに打ち付けたのか紫に変色してたりいくつか擦り傷をしている部分が見えた。

「その怪我はなんですか！」

「……」

「坊主そこまでにしておき」

「…すいませんでした」

俺なに取り乱してるんだよ…フェイトに怒鳴っても仕方ないしそもそも気にするつもりなかったんだろ俺…

あぁもうなにしてるんだよ俺

自分自身に苛立ちを覚えるが、怪我をしている腕を胸の方へ引き寄せて俯いているフェイトを放置することもできない。

「もう何も聞きませんから怪我の治療だけさせていただけませんか？」

「…うん」

アルフに怪我の治療していいのか確認を取ると軽く頷いてくれた。

俺はフェイトをいつも食事を取るテーブルの席へ座らせると、自分の稽古やトレーニングで負った怪我を治療するために用意していた救急箱を借りている部屋から出してきてフェイトの横の席に座る。

今度は強引ではなく丁寧に怪我をしていた腕を取って治療を始めることにした。

「すこし染みますが我慢してくださいね」

「うん……っ」

「本当に念のために包帯巻かせていただきますね」

「…ん」

他に痛みが走るところがないかと聞くと素直に足ともう一方の腕が痛いことを教えてくれたため、確認してみるとそこにもいくつかの擦り傷をしていたので先ほどと同じ要領で消毒して包帯を巻いた。

ふぅ…言われた部分はこれでいいかな…それにしてもどうしてかねまあ聞かないといった手前聞くわけにはいかないが

ふと先ほどからフェイトの後ろに立っていたアルフの方を見たが、帰ってきたときと同様に苦々しい顔を浮かべてフェイトをみている。

なにか事情があるとは思うが、これ以上踏み込むのは元々の方針に支障が出るからな…

しかしなぜか気になる俺もあるわけで…自分はどうしたいのか訳が分からん…はぁ…

時間も時間だったのでそそくさと救急箱を部屋に戻し、冷蔵庫にいれてある材料で料理に取りかかることにした。

だが先ほどのフェイト達の様子が気になり、料理に集中しきることできず包丁で手を傷つけるという失態を犯してしまった。

まあこの痛みでなんとか集中し直すことができたからよしとするか…

怪我してすぐにバンドエイドを横から差し出してきたフェイトの素早さはビックリしたがな

6話　同居人（後書き）

戯言タイム

注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「はい今回はすこしだけ早めに投稿だ！」

真「意外だな…変な物食べたか？」

元「なんで少しだけ早く出したら叩かれなっちゃいけないんだ！」

真「あはは仕方ないさ～作者だし」

元「なにそれひどい…まあいろいろ思うことがありましてね」

真「思うこと？」

元「まあぶっちゃけ逃避ですから」

真「深くは聞かないでおこう」

元「それが賢明ですよ」

真「話しは変えるが、いつまで原作戦闘に介入しないでいるつもりだ？」

元「え？まあもう少し後になるまで戦闘には介入できないですね」

真「なんでだ？」

元「まあそれはご想像にお任せすると言うことで」

真「…にげたな？」

元「ソンナコトナイヨ…まあ真面目に第一回の主人公設定を公開するときにわかりますよ」

真「それを信じよう」

元「それ終わりの時間がやってきたので締めますか」

真「あぁわかった」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「読者の皆様がいることで頑張ることができています」

元「作者はアクセスやお気に入り登録が増える度嬉しすぎていつもニヤニヤしております」

真「なにかありましたら感想板へお書きいただけるとうれしいです」

元「それでは…」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしております！」

7話　馬鹿な二人（前書き）

駄作を手に取っていただきありがとうございます。
作者はこの話しはいろんな意味でとても悩みまして…でも書きたかったので書かせていただきました。
批評等はいくらでも受け入れます。
願わくば楽しんでいただけたら嬉しいです。

7話　馬鹿な二人

フェイトの傷の手当してからもう一週間経つがあれから俺だけだが気まずい…

この先自分は何をしたいのか、分からなくなってきた…

一週間前みたいな誤差はあるが、きっと原作通りにも進むだろう…

…これ以上深く関わらず時期を見て去ればいいのに、頭のどこかで引っかかる……

だが迷っている事を解決させるために、最近続けている稽古をやめる気も起こらず一週間いつも通りに士郎さんの所に通っていたが…

「真夜君ここ何日間稽古に集中しきれてないようだがどうしたのかい？」

「……」

「はぁ…今日の稽古はここまでだ、いいね？」

「はい…わざわざ稽古していただいているのにすいませんでした」

「いやいいよ、私がすると決めたのだからね」

「ありがとうございます」

「早めに解決するように」

「分かりました」

散々な有様でいつもは防げたはずの攻撃を悉く食らって一回一回の模擬戦がいつもより長く持たず、先ほどのような流れでいつもより遙かに短い時間で稽古を終了するということが一週間続いていた。

なんかどんどん負のスパイラルにはまっている気がしてならない…

道着から日常着に着替えて、今日も早めに翠屋から出て行く。

さてスーパーで買い物して家にかえ「真夜くん？一週間ぶりやな」

あぁ…何でまたはやてと会ってしまうんだよ

「真夜君どうしたんや？」

はぁ…後ろからだから気づかないふりしてこのまま無視していきたいが料理教えてくれたからな、無視はできんな

そんな訳で無視するわけにも行かず振り向くと、意外にも真後ろまで近づいており、楽しそうな笑みを浮かべている。

「八神さんまたお会いしましたね」

「…なにかスルーしようとした気するやけど、まあ気にしないでおくな」

む…若干ばれているがまあ気にしないでおいてくれるのはありがたい

「それでなにか用ですか？」

「用があるってわけやないけど……いや少し付き合って欲しいところあるのやけど駄目やろうか？」

気のせいか、俺の顔を見てた時一瞬だけはやてが真剣な顔になったような…いや理由がないしやっぱり気のせいだな

これ以上関わりたくないし断らないとな

「今からい……私でよければお付き合いしますよ」

はぁ……上目使いでそんなにじっと見られたら断れないじゃないか、あれ似たようなことあったような…

まあそもそも時間的にいつも以上に余裕があるし、付き合えば少しの時間くらい気を紛らわせられるだろうからいいか…

なんか言い訳じみているが気にしない

「ありがとな～」

「……付き合って欲しいところとはどこですか？」

「図書館や」

そしてはやてに連れられて図書館に来たわけだが…

「真夜君そこの取ってほしいんや」

「はいこれですね」

「ありがとな」

なんで俺ははやての付き人しているんだ…

図書館に着くとはやてに連れ回されてはやての手が届かない位置にある本を取る等の手伝いをさせられている。

まあ時間つぶしになるからいいが、良い小間使いにされてないか？

「なぁ真夜君」

「なんですか？」

「真夜君って本読まないんやろか？」

そういえば本読もうという気にならなかったな…別に嫌いではないのに

「…そういう訳ではないですが機会がありませんでしたね」

「そんなら私が借りるついでに借りてみるのはどうや？」

ニコニコして膝載せてある本を掲げてそう聞かれた。

確かに良い機会ではあるが…これ以上はやてと縁を作るのもな…

「いややめておきますよ」

「そっか…」

「…八神さんは本が好きなのですか？」

「そうや、本は夢をみせてくれるからな」

「そうですか…」

夢かもう見られなくなってしまったな…もし今の悩みを本見て解決できるならば夢を見られそうな気するがな

今の悩みをまた思い出してしまい、はやてにばれないよう、小さくため息を吐く

「…聞きたかったことあるんやけどええやろか？」

「なんですか？」

「まず図書館内じゃ迷惑かけるやろから借りる物を借りてからな」

「わかりました」

そして借りる物を借りて俺達は図書館を後にしたが、歩き出して十数分くらいは沈黙だった。

あぁ…もうなんでまた気まずい気分を味わわないといけないんだよ…

そしていきなりはやてが公園の方を指を指して入ろうと言ってきたので断る理由もなく一緒に入った。

「…ここでええやろ」

公園内の大きい木があるところにはやては立ち止まったので不審にも思ったが、木にもたれ掛かって立ち止まることにした。

はやては、車いすを操作し体ごと後ろを向き、近くまで車いすを進めてきた。

それにしてもなんで毎度ちょうど上目使いになる位置まで来るんだ…

「失礼やろとは思ったやけど…なにか悩んでいるん？」

真剣な目で俺を見つめるはやてに思わずため息を吐く。

他人の悩みをそんなに気にしなくてもいいだろ？…他人事だろ…

そんなに真剣な目で見られたら…っく、嘘つきづらいじゃないか、馬鹿だろこいつ…

……だがこれ以上関係を深める気もないからな…

「……なにもないですよ」

「そっか……お願いがあるんやけど」

「なんですか？」

「大事な事に対しては嘘だけはいけないやから正直になってほしいんや」

「……」

拒否したのになんでそこで引かないんだよ！…もう勝手にしろっていって去ればいいのに…

「私もできてないんやけどな…でもな、そうしてほしいんや」

「…なぜですか？」

「私な…本当の笑顔の真夜を見てみたいんや」

本当の笑顔？…嘘の笑顔だったことばれていたのか…あぁ自分があほらしい…

「そうですか…」

「そうや、あのな真夜くん悩み事解決したらな…友達になってほしいんや」

友達…？…あぁ本当に馬鹿だろ…だがなぜ悪い気しないんだろうな…分からない…分からない…

「…考えておきます」

「ありがとな」

中途半端な答えだったはずなのに嬉しそうな顔をしているはやて。

あぁその純粋な笑顔がとても胸に突き刺さる…

だが……こんなに真っ直ぐで馬鹿みたいに心配されたのきっと初めてのはず……今度は真剣に自分と向き合っていろいろと考えてみよう…

そうしなければ…いけない、そんな気がしてならない…

その後はやてと別れたが、はやてと公園で会話した内容がしばらくの間頭から離れることはなかった。

ｓｉｄｅ　はやて

とうとう言ってしもうた…もう友達になれんかもしれん…図書館に誘ったのは真夜君の気分転換してもらうはずやったのに…

私は真夜君が公園から去っていく後ろ姿が見えなくなるまでその場で見送っていた。

でもその後ろ姿が見えなくなって、一人になったらどんどん後悔の念がにじみ出てきた。

……今日会ったときに見た真夜君の目は前よりも濁りが濃くなっていて…連れ回せばなにか変わるとおもったんやけどなにも変わらなかった…

それでも見て見ぬふりできんかったからどうにかしたかったんや…言い訳なのやもしれんけどな

このままじゃ真夜君が潰れてしまいそうに思えたんや…でもやっぱり悩み話してくれんかったな…

私上手く笑えていったんかな…もう叶わないかもしれんけど考えておくと言ってくれた真夜くんの言葉に望みをかけてみたいな…

いやなれんでも真夜君の悩みが解決してくれたらうれしいな…

side　ont

7話　馬鹿な二人（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「できた！！！」

真「…なんじゃこれは」

元「てへ、いつの間にかキャラが動いてた」

真「……ぉいそれでいいのか」

元「あははいいんですよ～まあ作者的にははやてをこの章でプッシュするつもりなかったですが」

真「それがいつの間にかプッシュされていたと？」

元「イエス！」

真「もういいや…」

元「まあもうそろそろ主人公が悩みから抜け出せます」

真「そうなのか～」

元「そうですよって貴方のことでしょ！」

真「いやそれはしらんし、ここは別世界だし関係ない」

元「……とりあえず締めますか…」

真「なにか釈然としないがまあいいか」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「アクセスやお気に入りが増える度作者はにやにやしてきもい状況になってます」

元「きもいいうな…なにかありましたら感想板へとお書きください」

真「それでは…」

元・真「また次の話しでお会いできることを楽しみにしています」

8話　気づく日常（前書き）

駄作をお手に取っていただきありがとうございます。
誤字脱字ありましたら申し訳ありません。
それでは最後にこの作品が一人でも楽しんでいただけるものであることを願いつつ、本編を始めたいと思います。

8話　気づく日常

あの後スーパーに行く気も起こらずそのまま家に帰るとまだフェイト達が帰ってくる時間ではなかったため誰も居ない。

だが気分的にもなにかしてないと落ち着かないので早めに料理の準備に取りかかることにした。

あらかた準備が終わると玄関からドアが開く音がする。

うんとても気持ち的には気まずいが…このままじゃいけないしな…自分と真剣に向き合うには落ち着いた心といつも通りの環境だからな…

ふとそこで気が付く、いつの間にかフェイト達との生活が日常に感じられていることに。

どうしちまったんだよ俺…いや今は気にしても仕方ないか…

火を止め、玄関へと出迎えに行く。

玄関までいくと、フェイト達の様子がいつもと違っていることに気が付く。

ん？いつもは疲れて落ち込んだ顔しているのに今日は少しだけ嬉しそうだな……

…そういえば時期的に今日はフェイト達がジュエルシード一つ目を

手に入れた時か、だからか…

「ん？結城ただいま…」

「…フェイトさんアルフさんおかえりなさい」

迎えに行ってすぐに考え込んでいたからフェイトに不思議そうな顔されたが、気づかないふりをして出迎える。

まあ考えた内容……聞かれても言えないしな

「坊主、ただいま」

「食事がもうできていますが今から食べますか？」

「ほう…珍しいね、どうしたんかい？」

「シチューでしたので時間もかかるため早めに準備に取りかかっていたからですよ」

まあ嘘は言ってない…シチューは時間かかるしな、時期的になんとかまだ大丈夫だろう…

「そうかい、フェイトどうするかい？」

「うん…食べるよ」

「フェイトがそういうならあたしも今から食べることにするよ」

「はい、いまからよそってきますね」

「結城…」

料理を出すためキッチンへ行こうとするとフェイトに呼び止められた。

ボロは出してないはず……だよな…

「どうしましたか？」

「いつも通りにもどった？」

…はぁ、ばれていたのか……最近の俺本当に駄目すぎるな…

だが……事情はいいたくないしな…

「…最近体調が悪かったみたいで。ですが今日薬を貰ったのでもう大丈夫ですよ」

「……それならいい」

これで誤魔化されてくれるといいんだがな…いやはやての件もあるし不安だな…

フェイトの会話が終わり、キッチンへ行き料理をよそってテーブルに運ぶときにはもうフェイト達は席についていた。

並び終えて、席に座りいつも通りみんなで手を合わせていただきますの合図で食べ出した。

…あぁそういえばこの一週間まともにフェイトの顔見てなかったかな…本当においしそうに食べるよな

うん…我ながら少しは出来が良いな…

前にはやてに料理を教えて貰ったのが効いたのか、食べてみると意外とおいしかった。

それと同じくらいにこの一週間はそれが分からなかったくらい余裕がなかったことに気づいた。

「フェイトさんおいしいですか？」

「うん…おいしいよ？」

「それならばよかったです」

フェイトは幸せそうな笑みを向けてくれる。

それで複雑な気分な気分になるが、やはり嫌な気分にはならない。

あぁ…悩み事とは関係ないが、人に料理作って喜ばれるのは本当に悪くないな…

その後食べ終わった食器を片付け、フェイト達が入り終わったお風呂に入り少しだけ落ち着いた気分で床につくことができた。

あのシチューを作った日から4、5日すぎた頃だった。

あの日の翌日も士郎さん所に通っていたが、少し模擬戦すると士郎さんに元に戻ったなと言ってもらえた。

確かに平常時と同じように集中をして望むことができているので戻っているといわれたら戻っていると言えるがなにか逃げているような気がしてならない。

さて…そんな事より…数週間通っているのに未だに士郎さんに一撃も与えられないのは正直悔しいな…

まあ、まだまだひよっこだから一撃食らわせられないのは仕方ないがもうそろそろかすっても良いとは思うんだがな…

士郎さんの上から斜めに振り下ろした攻撃を、片足を半歩後ろに下げることで回避し、胴体狙いの横からの攻撃へ移行させたが、士郎さんが後ろに下がったため空振りとなった。

そしてその空振りの隙を突かれて腹に一撃を食らってそのまま道場の壁にぶつかった。

っく…やっぱり勝てない、強すぎるだろ…はぁいつになったら勝てるやら

俺はいつまでも立ち上がることができなかったため、稽古は終了した。

だがいつもと違い、士郎さんは着替えに行かずそのまま床へ座った。

「士郎さんどうなさったんですか？」

「いや真夜君に伝えることがあってね…明日からの連休で家族旅行することになってから暫く稽古できそうじゃないんだ」

「…そうですか、気をつけて行ってきてください」

「あぁそうするよ」

伝えたいことは伝え終わったのか道場から出て行く士郎さん。

高町家で旅行か…なにか引っかかる気はするがまあ俺には関係ないか…それよりどうしたものか

俺も士郎さんの後に続こうと思ったものの体が壁にぶつけた衝撃なのか思うように動かない。

結局もう少しだけ休憩することとなった。

ｓｉｄｅ　士郎

なんとか誤魔化せることができたとおもうが…それより恐ろしいな

道着を脱ぐとやはり汗で少しだけ重くなっている。

いつの間にかこんなにも汗をかかされているのは意外でもなく分かっていたことだった。

それもそのはず先ほど彼との模擬戦が終わると疲労で座り込んでしまった自分自身がいたからだ。

思わず道場で座ってしまったのはきっと衰えもあるだろうが、それよりも彼の成長が凄まじいものであることも雄弁に語っている。

稽古の回を重ねる事に段々と一回の模擬戦時間が伸びていき、今じゃ剣術を教えた子供達との一回の模擬戦時間よりもそれよりも遙かに幼い彼の方が長く模擬戦を行っている。

確かに手加減をしているのもあるが、それでも長時間戦い続けられる彼は異常であるのは変わりない。

私も衰えたのか…一時期は不調だったようだが、今じゃ元通りか…

まだまだ荒いのだが…日を重ねる事に無駄な動きが無くなっていく様子は末恐ろしいな…

彼はまだ数週間しか通っていないのに、それだけでここまで腕が上がっている。

最初の一週間でそれは大体感じ取れていたが、改めて今日実感することができた。

稽古が終わったら早めに店へと戻らないといけないがまずは剣士としての高ぶった自分を沈めるまで店へ戻ることができなかった。

だが…やはりまだ悩みが解消されていないか…それだけが惜しまれるな…

それが無くなれば…あるいは本当に御神流を教えることに……

ふとそこで思考が止まる。

そしてそこまで考えていた自分に対して少しだけ苦笑いが浮かぶ。
そう、暗殺術とも言える術を血筋以外に教える危険性が分かっているのに、そう考えてしまう自分に対して。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

立てるようになった俺は早々と道着から私服に着替えて翠屋を後にしてスーパーに寄り、家に帰ると珍しくフェイト達がいる。

「結城お帰りなさい…」

「坊主おかえり」

「はぁ…ただいまです」

まあ居ると言ってもドアを開けたら声が聞こえてきただけだが。
それにしても…いつもの時間に帰ってきたはずなのにもう居るなんてなにがあったんだ？
居間にはいるとフェイト達は忙しく動いており、居間に置いてあるボストンカバンに色々と詰めていた。

「坊主も準備しな」

「準備とはなんですか？」

「あぁそういえば言ってなかったね、明日から旅館に行くからその

準備だよ」

「…はい？」

あれ…原作にフェイト達が旅行に出ることあ…いや一つだけあったか…もうそんな時期なのかよ

よく考えてみれば…士郎さんも家族旅行するって言ったんだからその可能性大だな…

情報整理するためぼんやりしていたので、気づくとフェイトは先ほどまで忙しく動いていたのを止めて不思議そうな顔をしてこちらをじっと見つめている。

はぁ…もうなんでフェイトはよくこちらを気にするんだ？別に気にする必要ないだろ

「フェイトさんどうなさいましたか？」

「…結城は行きたくない？」

いやだからなぜ悲しそうな顔して小首を傾げる…あぁもう、確かに暇だが…

一緒に行く必要性無いのではっと言いづらいじゃないか…まあ温泉入って色々考えてみるのも良いか

「いえそういうわけではないですよ」

「よかった…」

悲しそうな顔から一転、嬉しそうに笑顔を浮かべるフェイト見るともうこちらは何も文句も言えない。

はぁ…でも着いていくってことは、色々な関係者に顔知られる可能性があるからな…

正直勘弁したかったんだがな…

しかしもうフェイトは俺が着いていくと思っているみたいなので、フェイト達にばれないように小さくため息を吐き、冷蔵庫に買ってきた食材を入れて明日の準備をすることにした。

8話　気づく日常（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「…てへ」

真「褒められると駄目になるやつ初めて見た」

元「あはは…自分のやりたいようにやっちゃったら色々とあれな方向に…」

真「笑って誤魔化すな！」

元「褒められると駄目になる自分の腕が妬ましい…パルパルパル」

真「うんそれはなのはと関係ないネタだからな、って羨ましくないだろ」

元「あ、ばれた。まあお気に入りが増えて感想も書いていただいたため調子乗っちゃったかも知れないですね」

真「今後はそれをバネに頑張るがいい」

元「そうしますね…遅れましたが、けーくん様、ｆａｔｕ様、感想を書いていただきありがとうございました」

真「作者はマジで悶え苦しむように喜んでいたぞ」

元「いや！それ公開しないで！」

真「あはは諦めろ」

元「うぅ……まあいいや」

真「いいのか？」

元「とても嬉しかったのは本当ですしね」

真「良い評価でも悪い評価でもちゃんと目を通して貰ったって事だしな」

元「うんそうですよ、まあこの作品で一人でも何かしら楽しんでいただけたら嬉しいですしそれが一番だからね」

真「まあ誰もお前の作品が人気になるとは思わんしな」

元「悲しいながら自分でも思うよ。だから一人でもいいからこんな自分勝手に爆走している作品で楽しいんで頂ける人がいればそれでいいかなっとおもうよ」

真「……応援だけはしてやる」

元「ありがとうございますね～」

真「まあ俺の生みの親みたいな物だしな。俺くらいは味方にな」

元「真夜がデレた！これで私は…」

真「デレじゃねぇ！ん？これで？」

元「あれだ、男にデレられても嬉しくないことに気が付いた」

真「あのな？殴って良いか？」

元「いや…殴らないでごめんなさい」

真「まあいいか…許してやる」

元「ありがとう、さて締めにいきますか」

真「おう分かった」

元「あ…その前に報告がひとつあります」

真「…どうした？」

元「ユニーク数が１０００超えたよパトラッシュ」

真「それはおめでとうな」

元「突っ込み無いのは非常にわびしいんですが…」

真「まあ諦めろ」

元「うぅ……気を取り直して改めて締めをします」

真「はいはいわかった」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はいつもアクセス数やお気に入り増える度ニヤニヤしており、うれしがっています」

元「なにかありましたら感想板へとお書きください」

真「それでは…」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしております」

9話　旅館へ行こう（前書き）

さてはて駄作もこれでプロローグあわせて１０話目…
少しでも楽しんでいただける作品であることを願いつつ本編へ移りたいと思います。

9話　旅館へ行こう

翌日電車を乗り継いでからしばらく歩いてやっと目的の地がみえてきたわけだが…。

ここまで来る道中の間フェイトは楽しそうな雰囲気を滲み出していた。

目的地が見えた今もはしゃぐまではいかないが、それでも目を輝かせているみたいだ。

はぁ…確かここに来たのってジュエルシード探すためじゃないのか？…そこまで楽しそうにする理由無いだろ…

「結城！温泉だよ」

「はいそうですね……」

前を歩くフェイトが振り返り、俺の方に満面の笑みで話しかけてくる。

いつもの雰囲気と違って年相応の反応を見せているから悪いことでもないが…反応に非常に困るな…

ふと横を見るとその様子を優しげな目で見守っているアルフがいる。

なんだろうな…まあアルフがフェイト第一主義なのは知っているか

らこの反応も頷けるが

まあ俺があれこれ気にすることでもないか…

考え事してしまったためか、いつの間にか俺は立ち止まっていたみたいで、気づくとフェイト達も立ち止まってこちらを不思議そうな顔して見ている。

あぁどうにも考え事すると集中してしまう癖が直らんな…どうにもいかんな

フェイト達に見えないように小さく苦笑いを浮かべると、小走りしてフェイト達の元へ行った。

フェイト達の元に着くと、揃って俺達は歩き出したが、先ほどの雰囲気はそのまま旅館に着くまで続くことになる。

旅館に着いて旅館の人に案内された部屋は、フェイト達と同じ部屋だった。

そのことでビックリして思わずフェイトの方を見て、凝視したがフェイトは不思議そうに首を傾げるだけで、アルフの方を見ると苦笑いを返してくるだけという始末だった。

「あの…何故私とフェイトさん達が同じ部屋なんでしょうか？」

そんな反応じゃさすがに納得できないため、問うとフェイトはやはり不思議そうな顔をするだけのフェイト。

「結城…一緒はいや？…」

「嫌と言いますか…道徳的にも微妙にずれているような気するんですが…」

「…いやかな？」

「まあ坊主、子供一人を別の部屋に入れるわけにもいかないからね」

「確かにそうですが……」

あぁもう悲しそうな顔してこちらを見ないでくれよ…なんで若干涙目なんだよ…

見た目は子供だが一応男なんだぞ……まあ確かに正論だが…

はぁ…もういいや…着替えとかし出したら部屋から出ればいいしな…

「いえ確かに子供ですしね…仕方ないことですからね」

「……よかった」

うん…毎度ながら本当に嬉しそうな顔されるとな…何もいえないな…

段々毒されてきている気もしなくはないが、純粋な笑顔はどうも俺を黙らせる効果がある様子で、これ以上のつっこみもする気が起きなくなった。

「まあ着替えとかする場合は一旦出て貰うけどね」

「それはもちろんですよ」

当たり前の道徳だしな…普通に早々と出てきますよ…

それから俺達は荷物を部屋の脇に置いて、部屋の机の上に置いてあるポットからお茶葉が入っている急須にお湯を入れ、机のまわりに座って湯飲みでお茶を啜りながら、ゆったりとした時間を過ごしていたのだが、突然横に座っていたフェイトに服を摘まれて、くいくいと軽く引っ張られた。

できることならば…このままゆったりとしていたのにな…

それに気づいてフェイトを見ると、俺の顔をじっと見るばかりで一向に話し始めない。

…このまま見つめ合ってもな……仕方ないしな…

「どうなさいましたか？」

「結城の話し聞きたいけど駄目？」

「私の？それは私自身の話しですか？」

そう聞くとフェイトは軽く首を縦に振る。
俺の話をしても面白くも何ともない気がするんだが…

「…何故ですか？」

「今までゆっくりと聞いたこと無かったから、聞いてみたい」

「……」

はぁ…そんなに期待をした眼差しされても一つも面白い話しできないし、過去の記憶も曖昧なんだから…
今までの話しするとしても話しのレパートリーがそうないんだけどな……

「面白くないと思うんですがそれでも良いですか？」

「うん私が聞きたいから」

そんな真っ直ぐな目で即答されたら、なんとしても話さないといけない気になるじゃないか…
はぁ…俺もかなり馬鹿だよな…まあ今までの行動整理くらいにはなるか…

俺は自分自身の話として今までフェイト達が居ない時間何をしていたのかの話しをすることにした。

はやてのこととデバイスについては伏せて話したので主に俺がしてた鍛錬の話しだ。

「坊主なんでそんなことしてたんだい？」

「時間を潰すに最適ですし、私の体は貧相ですから、鍛えたかったんですよ」

「ふ～んそうかい」

話し終えるとアルフが若干訝しげだったが、元からあまり信頼されてないのだからそれは仕方ない。

それにしても話している最中ずっとフェイトがなぜか興味津々で聞いていたのが意外だな…

「…その剣術教えてくれる人って強いの？」

「はい、強いですね…私が弱いのもありますが掠らせることすらできませんしね」

「そうなんだ…」

…間違いなく俺ひよっこだからな…あぁいつになったら掠らせられるんだ…

思わずため息が漏れて、苦笑いしているであろう自分の顔を隠すため俯いたのだが、次の瞬間なぜか知らないが頭を撫でられていることに気づく。

顔を上げると撫でているのはフェイトだった。

まあ…位置関係上正面にいるのはフェイトだけだからな…分かっていたことだが…

あぁなんか胸が痛い……知らないと思うが俺はお前との縁をそのうち切ろうとしてるんだぞ？

そんなに心配そうな顔で見るな…縁を切ろうって言う相手に優しくされるなんて俺はもうほっ……いや相手は原作キャラだ、どうせ勝手に救われるし解決する…

はやてとの最後の会話が頭に浮かぶが、それを頭の中から振り払う。

はぁ…真剣に向き合うんじゃなかったのか俺…まったく俺駄目だな…

フェイトに対してありがとうございますと返すことしかできなかった。

そこから俺自身が話す気分でも無くなったので会話が終了して元のゆったりとした時間を夕食が運ばれてくる時間まで堪能した。

夕食を食べ終わるとフェイト達は、予約していた家族風呂に入りに

行ったが、さすがに俺は男ではあるため一般の露天風呂に入りに行くこととなった。

まあ…なんかフェイトが少し寂しそうな顔していたがきっと気のせいだよな…うん

やはり二人きりで行かせた方がいいと思い、フェイト達を見送ってから時間をずらして向かうことにした。

男湯と書いてあるのれんをくぐり、服を脱いでから中に入ると、どうやら他にも客がいるみたいだ。

湯気ではっきりと顔が分からないが、浴槽に入っている二人組の片方はどこかで聞き覚えのある声な気がする。

まあ入れば分かるだろ…その前に体を洗わんとな

体と頭を隅々と洗ってから湯船に入り、話している二人組が見えるところまで行くと士郎さんと若い男の人だった。

「真夜君なんで君がここに？」

「私も家族と旅行しに来たのですが、たまたま士郎さんと同じ所だったみたいですね」

「そうなのか」

「父さんこいつは？」

「あぁ恭也前に言ったと思うが最近私に剣術を習いに来ている子だ」

「そういえば話しに聞いていたな」

恭也？…なのはの兄か……御神流の使い手の一人か…

シスコンだったっけ？…いやなのはと出逢ったこともないし影響はないか…それにしても士郎さん俺のことを何て話したのだろうか…

恭也さんは俺のことを面白そうな物を見ているような感じで見ている。

本当のところはわからないが、俺からはそう感じられた。

「初めまして、結城真夜と言います」

「名前は聞いていたと思うが、俺は高町恭也だ。よろしく頼むな」

自己紹介すると、恭也さんは先ほどの雰囲気をやめ、微笑んで返してくれた。

うん…なのはが絡まんと普通の人だよな…絡まったらどうなるかは知りたくもないが

そこから何故剣術を習いに来たとか、家族のことを聞かれたりしたがとりあえず嘘を織り交ぜつつ、誤魔化しながら質問に答えたり、お二人の話を聞いたり等といったことをして時間を過ごした。

「そろそろ茹で上がってしまいそうなのでお先に失礼しますね」

まあこれは本当に茹で上がりそうだしな…かなり長い時間はいっていたしな～

「あぁ長々とすまないね」

自覚もあったのか、士郎さんは苦笑いを浮かべる。

「結城、通い続けていればいつか又会うと思うがその時はよろしくな」

「はいこちらこそその時はよろしくお願いします」

風呂から出ると脱衣場で用意されていた浴衣に着替えて、着ていた衣服は持ってきた袋の中に入れた。

暖簾をくぐると、アルフの声が聞こえた気がしたのでそちらの方を向くと、少し先の方でアニメの原作にも出ていたアルフが念話で挑発しているところが見えた。

あぁ…これは一応原作通りなのか…そうなって貰わんと困るがな…

その様子をじっと見つめていると、白いヘヤバンドをしている女の子が突然振り向いたので目が合ってしまった。

あれは…すずかか…なんでいきなり振り向いたんだよ！？って関わるとやばいから早々と立ち去らないとな

そう判断してその場を逃げるように立ち去って、部屋の方へと小走りで向かった。

部屋に入るとフェイトだけが部屋におり、俺が入ってきたことに気づくと、笑顔を向けて迎えてくれた。

「結城おかえりなさい」

平常心、平常心…今まで焦っていたのを気づかれないように…

「……ただいまです」

「温泉どうだった？」

「気持ちよかったですよ」

「そうなんだ」

それにしてもすずからしき人以外ばれてないよな…早々に逃げたし顔なんて覚えられてないだろう

いつまでも入り口から動かない俺を不思議に思ったのか、フェイトは顔をカクンと少し横に傾けて不思議げに見ている。

結局平常心になりきれず、入ってから一歩も動いてなかった自分に対してここの中で苦笑いをしつつ、フェイトが座っている所まで行き、座布団を近くから引っ張り出して座った。

「フェイトさんはどうでしたか？」

「ん？気持ちよかったよ」

うん…今日のフェイトは若干無邪気だな…やっぱり笑っている顔は可愛いか…

俺の質問を純粋な笑顔で答えるフェイトをみてただただ可愛いと思えてしまう自分にやはり苦笑いが浮かびそうになる。

はぁ…前と違った意味で会話をする気が起きないな…するのがもったいない気がしてならないな…

……考えても無駄そうだから甘んじて受け入れるか…

お互いにそう思ったのか、フェイトも会話をし出すことなく、お互いお茶を啜りながらまたゆったりとして時間を過ごすことにした。

しばらく経つと、ドアが開く音がしたので振り向くとアルフだった。

「アルフさんおかえりなさい」

「あぁいたのかい坊主、まだおかえりじゃないね」

…ジュエルシードの件についてか？まあ俺にはあまり関係ない話しだな…

「それはどういうことですか？」

「用があるってことだよ。フェイトそろそろ行こうか」

「うん…」

「坊主一旦廊下に出てくれるかい？」

「はい…それでは出ていますね」

服を着替えるか…これで確実にジュエルシード関係なのは決定かな…

それにしてもやはり別の部屋の方が良かった気がするんだが…もうこの時点で言っても無駄だろうけどな

暫く廊下で待つとフェイト達が部屋から出てきた。

「結城いってきます…」

「それじゃあ坊主あたし達ちょっと出るよ」

「はい、いってらしゃい」

それにしても……なんか気になるな…いや別に気にしなくても良いことか

アルフは足を止めずに行ったが、フェイトは少しだけ嬉しそうな顔して小さく手を振ってから出て行った。

一人で部屋にいてもお茶を啜るだけなので、露天風呂に入り直すことにした。

暖簾をくぐり、脱衣所で浴衣を脱いでから引き戸を開けると露天風呂に誰か入っていた。

ん？まだ誰か居るのか？まあ知り合いなら湯船に入れば分かるか…

かけ湯をしてから湯船の中にはいると、ようやく誰かが分かった。

「恭也さんですか？」

「あぁ結城か、こんな時間にどうした？」

「…また入りたくなりまして」

「俺と同じか…」

やっぱりそれなりに落ち着いた人だよな……俺の知識合っているか不安になってくるな…

暫く会話が無く沈黙が流れていった。

湯船に浸かりながら考え事でもしようとおもったんだがな…失敗だったかな…

こんな時間に知り合いがいるとは思わなかったからな…いや恭也さんとは関わることあまりなさそうだからな…聞いてみる相手としていいか…

自分が何を考えているのかよく分からんけど…形になっている部分くらいいいか…

「…恭也さんお聞きしたいことがあるんですがいいですか？」

「あぁかまわん」

「何もしなければ大切な人が結果的に幸せになると分かっているもののその人が途中怪我や辛いこと経験するならばどうしますか？」

って全然質問にもなってないじゃないか…あぁこれじゃあ笑いと「どうにかしようとする」え？

「俺はがむしゃらに行動しようとして家族に迷惑をかけた。今じゃ後悔しているがそれでも俺はそれ以外の方法知らん」

「……」

士郎さんの大けがの際の事か…いやそれはどうでもいいか…真剣に答えてくれるんだしな

「大切な者が結果的に幸せになるにしても、俺ができる範囲で不幸や怪我を防ぎたいと思うことは間違ってないと信じてる。あぁだこうだと考えても上手くいくときといかないときがあるからな…」

先ほどまで空の方見ていた恭也さんが言葉を句切ると俺の方を見て真剣な眼差しでじっと俺の目を見つめてた。

「だから未来のことを考えてやらんで後悔するより後先考えずにやって後悔するのを俺は選ぶぞ」

「……」

……やって後悔か…俺逃げているのかね…わからんな

「他人にとって間違っているかは分からんが、俺はこれも間違ってないと信じている」

「……聞いたのは私ですが、なぜそこまで真剣に？」

分からない…はやてや恭也さん……そしてフェイトに関しても俺に対して真剣になる理由が分からない…

「さぁな、だがなんとなく真剣に答えてやらないといけない気になった」

苦笑いを浮かべる恭也さんはどこか照れくさそうにしているように感じられた。

なんとなく後ろめたさを感じた俺は恭也に先に出ることを伝えて湯船から出て脱衣所で浴衣を着直し露天風呂を後にした。

恭也ｓｉｄｅ

「ふぅ～」

空を見ると、田舎であることも相まって星がよく見える。

先ほどまでもう一人途中から一緒に入っていた知り合いが居たのだが少し前に突然足早に出て行ったため、周りは人の音もしなく静かだった。

我ながら柄でもないことをあの結城っていう子供に言った気がする。

だが…なんだろう…どことなく昔の自分を見ているように思えた。

そう…父さんの大怪我で自分の殻に閉じこもっていたあの頃の自分に。

ぱっと見れば似ている所なんて無い、だが先ほどの追いつめられているような張りつめた様子はやはり似ている。

そう思ったら、真剣に答えてやらないと思えた。

あぁ父さんの言うとおり、夜で見えにくくはあったが確かに目が深く濁っているな…

どうやら俺みたいに馬鹿ながむしゃらはやらなさそうだが、なにか難しいこと考えて雁字搦めになっているようだ。

なのはと同じくらいの筈だが、どうやら年相応に似合わないくらい頭が固いのだろう。

「いい月が見えるな」

…結城という子供がどういう答えを出すのかはわからんが、手遅れだけにはなってほしくないものだ

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

部屋に戻ってきたがどうやらまだフェイト達は帰ってきていないようだ。

……フェイト達が来る前に気持ち落ち着かせないとな

湯飲みにお茶を入れて啜ったのだが、急須から入れたお茶はもう冷たくなっている。

新しい茶葉に変えて急須にお湯を入れ直したが、一人でお茶を飲むのはおいしく感じられない。

何なんだよ…フェイト達と飲んだときはとてもおいしくて心落ち着けられたのな…

だが、他に暇を潰す方法を知らず、いつ帰ってくるか知れない状態で念話使ってラインと話しするのは危険のため、フェイト達が帰ってくるまでお茶を啜っていた。

どれくらい経ったか分からないが、ドアが静かに空くと、フェイトが不安そうな顔をしながら入ってきていた。

俺に遠慮しながら開けなくても良いだろうに…

俺が起きていることに気づくと不安そうな顔から嬉しそうな顔に変わった。

「結城ただいま…」

「フェイトさんアルフさんおかえりなさい」

「坊主まだ起きていたのかい」

「どうもお二人より先に寝る気も起きませんでしたので」

「そうかい」

はぁ…なんでまたアルフ訝しげなんだよ…そして対照的にニコニコしているフェイトはなんだ…

とりあえず、時間も時間なので机をどかし、三人分の布団を引いて、俺用に部屋の端に引いた布団に入った。

女性と男という訳でだいぶ二人のふとんと離して引いたのだが、なぜ中央の布団に陣取ったフェイトがこちらの方へ自分の布団を引っ張ってきている。

さあ…なんというわけわからん状況なんだ…いくら子供でも駄目だろこれは

アルフに何とかして貰おうと思ってアルフの方を見たのだがもう自分の布団に入って寝ている様子。

「さすがに隣り合わせて寝るのはまずいとおもいますよ？」

「…駄目？」

さすがに不味いことを知っているのか申し訳なさそう顔をして聞くフェイト。

はぁ…まあどうせこんな事になるの今日くらいだしな…

「……いいですよ」

「ありがとう…」

あれだ…嬉しそうな笑顔を見せられたらな…もう気にしないでおこう…

電気を消して布団に入って横になり目をつぶると、フェイトに後ろから浴衣を小さく摘まれたが、なんとなく指摘する気も起きずにそのまま就寝した。

9話　旅館へ行こう（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想を書いていただきありがとうございます」

真「悶え苦しむように喜びを表していてすこしきもかったぞ」

元「うるさい！」

真「それにしても…」

元「なに？」

真「恭也さんかなり真面目な人だったな～」

元「もちろんですよ。まあ年相応の風格はあるものですよ」

真「そうだよな～それぞれのキャラはそれぞれの人生歩んできたんだしな」

元「まあ…私の脳内を通してで書かれているので残念ながら…」

真「ぶっちゃっけ、設定すべてを一致させられないと？」

元「崩壊してしまうかもしれないですがアレンジの域でしょうね…」

真「だがギャグとか笑えるの書くの苦手だったよな？」

元「一応自分なりにやっていますが、やってもあくまで日常的な風景レベルの可能性が高いのでそれを期待してたら諦めていただくしか…」

真「まあ……期待している人に需要ある作品だとは思わんがな」

元「う…」

真「ぶっちゃっけ人選ぶ作品だし…」

元「そうですよね～」

真「自分で認めてどうする…」

元「まあついつい描写を少しだけ付け加えてしまうのは昔少し恋愛小説書いていた性ですね」

真「……馬鹿みたいに一時期書いていたしな」

元「そんな話しは置いておくとして」

真「うん？」

元「締めの時間にしたいと思います」

真「あぁわかった」

元「ごほん…ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「アクセス数やお気に入りが増える度喜びでニヤニヤと作者はしています」

元「感想書いていただいたときも嬉しくて一瞬放心状態になりましたし」

真「まあなにかあれば感想板へお気軽にお書きください」

元「それでは…」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしています」

１０話　逃げていた自分（修正（前書き）

駄作を手に取っていただきありがとうございます。
私の力量不足で多少読みにくい回となっています。
目汚しになりかねないと思いますが、本編に移りたいと思います。

１０話　逃げていた自分（修正

翌日の朝になっていつもの時間に目が覚めたので体を起こそうとするが浴衣の腕の方が引っ張られてどうにも体が起こすことができない。

引っ張られている元の方を見ると、寝る直前の感覚としては浴衣を摘んでいるだけはずのフェイトがいつの間にか浴衣を握りしめていた。

ん！強く握り締めすぎで外せん！こりゃあ…フェイトを起こさんと体を起こせそうじゃないな…

…だが、安心しきってる寝顔を見せられると起こしにくい…ぉぃ男の横でそんな顔で寝るなよ…

結局フェイトが起床するまでその状態が改善することがなかった。

「結城ごめんなさい…」

はぁ…素直に謝られるとな…まあ突っ込まなかった俺が悪いからな

「いや気にしなくていいんですよ…」

フェイト起きたときに思わず苦笑いでフェイトを見てしまったため、

フェイトはなんとなく状況理解して申し訳なさそうに謝ってくる。
気にしなくていいって言ってるだからもう流せよ…なんで未だに申し訳なさそうな雰囲気出してるんだよ…
しょぼんとしているフェイトに対して段々見てられなくなってきた俺はフェイトが昨日してくれたように励ますため、とりあえず頭を撫でると少しずつだが笑顔になっていくフェイト。

「本当に気にしなくていいですよ？」

「うん、ありがとう…」

あぁやっぱりフェイトには笑顔がい…って俺何考えてるんだ、たかが物語のキャラだろ…
撫でるのをやめると、一瞬だけ寂しそうな顔したが気にしないことにした。
……なんだろうな、この嫌な気分は…いやきっと気のせいだ…
その後部屋に運ばれてきた朝食を食べ、チェックアウトの時間よりも早めに旅館を後にした。
フェイトのいつもより無邪気な姿は家へ向かう帰路に就いたときにはなりを潜めていた。

家に着いてからはいつも日常に戻り、温泉に行ってから数日が過ぎた。

今となれば幾分か落ち着いてはいるが未だに明確になにをしたいのか分からないそんな悩みが解決できないでいる。

その数日間も士郎さんの所に通っている。

はやてと話しをしてから悩みを考えないように稽古をしていたら数日経つと頭を真っ白にして模擬戦に望めるようになっていた。

今は逃げているような気がするが、この時間だけが本当の意味で悩みを感じられないで済む時間となっている。

内容として模擬戦時間をただ伸ばすことしかできず、どうにも手応えが感じられないものだが。

「っく…ありがとうございました」

今日は上段からの攻撃を綺麗に弾かれて、その勢いで木刀を放してしまい、模擬戦が終了となった。

手首あたりがひりひりするが、なんか悔しくてそれをなんとか誤魔化そうとしたもののどうやら士郎さんは気づかないふりをしてくれたことに気づき、男としてなんかくやしいものがあった。

はぁ…やっぱり握力が足りないな…どんなに握りしめてもこの様じゃ駄目すぎる…

「最初の頃から随分強くなったね」

「……全然弱いですよ。未だに当てられないですし」

「数週間そこらの人に当てられる鍛え方はしてなかったからね」

士郎さんは苦笑いしているが、目には確かな自信がみなぎっていた。

まあ…そんな当てられるとは思っていないが悔しいものは悔しいな…

まだまだひよっこであることはたしかか…

いつものように道場から出て、更衣室で道着から私服に着替えて、翠屋を後にする。

手首も傷むしな…家に帰った方が…ってそういえば冷蔵庫にもう食材があまりなかったよな

ふとそこで自分が主夫になりかかっている事実に対して思わず苦笑いがこぼれてくる。

家に向かう道からスーパーに向かう道へと方向を変えることにした。

その後スーパーに着いたのだが、今日の献立を決めるのに時間がかかってしまい、スーパーを後にしたときにはすっかり日が暮れてい

た。

なに馬鹿やってるんだろうな…適当でいいのにこんなに買い込んで…

主夫になりかかっていることに自覚したためか、馬鹿みたいに悩んでしまい、色々と買い込んでしまった自分が本当に馬鹿らしく思えて思わず笑ってしまった。

そういえば…本当の意味で笑ったのいつぶりだろうか…いやそんなことはどうでもいいか

足早に家への帰路に就いたのだが、しばらく歩くとなにやら違和感が襲ってくる。

なんだろうな…この感じ…一違和感というかなにか感じるような…

はぁ…一応違和感がする元へと行ってみるか…

自分の感覚を信じて、辿ってみると違和感元へ近づく度なにやら音が聞こえてきている。

もう少し近づくと誰かの声が聞こえてくる

「……トのじゃ……せないよ」

周りを見渡してみても空き地がいくつかあるだけで、誰もいる様子がない。

これは…アルフか？…勘違いか？

「……間は、自己……きなかったけど、わた……は、高町……立聖……校3年…」

「ジェ……ドはあき……って、言っ……ず」

ん？今度はフェイトらしき声の人が誰かと話している？…気のせいではないのか？」

また周りを見渡してみると人の気配はない。

ふと空を眺めると、金髪の少女、フェイトらしき少女が、栗茶系髪をした少女と対峙している。

まじか…ってことは、もしかして…フェイトとなのはの空中戦か…面倒事に誘われたものだ…この場に居られんな…さっさとこの場を去るしかないな…

この場を去るべく、来た道を戻ろうとしたのだが、「また逃げるのか？」という男にも女にも取れない声に足が止まってしまった。

周りを見渡してみてもやはり誰も居ない。

なんださっきの声は…気味がわりぃ…

なにか引っかかる物を感じたがそれを振り払って行こうとしたのだが、同じ声がまた聞こえてくる。

再度周りを見渡しても人っ子一人も居ない。

一体なんだって言うんだよ…確かに俺は逃げようとしているが、またって何だ？…

そういえば、フェイトが今回の件で傷つくことになるのか…って傷つくだと！……ん！

フェイトが原作では怪我をするっということに気が付いて動揺してしまった瞬間、前に襲った頭痛と同じような痛みがまた襲ってきた。

前に見えた光景より鮮明に見てくるようだった。

目を合わせようともしない同年代の子供達、大人らしき者達には見下されているような冷めた目で見られる光景、そしてそれを受けて心が凍り付いてしまう少年の心が手に取るように分かる。

何なんだあれは…あの少年は俺か？……

そう、本能的にあれが自分であるということを分かってしまった。

痛みで落としてしまって中身が地面に散乱しているビニール袋が見えたがそんなことはどうでもいい。

先ほど見えた光景でなんとなくだが悩んでいたものはっきりとした形が理解ができた。

あれが…俺の転生する前の記憶なら……そうか、そうだったのか俺…怖かったのか……あんなにも笑顔を向けられたことがなかったから……

そう気が付いたときに、一瞬だけ髪の長い綺麗な女性が微笑みを浮かべて消えていくのが微かに見たものの、今はそんなことを気にする余裕はなかった。

あぁ……我ながら笑えるな…出て行くつもりだったのにな……

いつの間にか、傷つく事に動揺するくらいに大事に思っていたのか俺は……早く気づけよ俺…

いや気づいていたからこそ原作キャラだと言い訳したのか……あぁ神様にここは現実と同じだと教えられたはずなのにな…なにしてるんだろうな俺

はやてから大事な事に対しては嘘つかず、正直になれって言われた筈なのにな……はやてすまない……結局さきほどの記憶を思い出して、悩みの形分かるまで嘘ついて逃げてた……

もう逃げないから許してくれ……恭也さん俺も一度馬鹿みたいにがむしゃらに行動してみますね

（「ライン……頼みたいことがある」）

（マスター久しぶりに声をかけてくれましたね）

（「あぁすまない、それで頼みたいことはフェイトを助けたいから力を貸してくれ」）

（……マスター良いのですか？関わることを嫌っていたではないですか）

本当は命令で聞かせばきっと今すぐにも動き出せるかも知れない。だが……ラインは……誓ったからな……正直な思いを言って説得しないとな……

（「まあな……誠に情けながら、人と関わるのが怖かったんだ。未だに怖いが、こんな俺を信頼して笑顔を向けてくれて、そして心配してくれるフェイトを見捨てて逃げることがもうできないからな……」）

（…話しによりますと物語なのでしょうからフェイトという方はこの後救われるんじゃないんですか？）

（「そうだな……だが、一度だけ先を考えずにがむしゃらにやりたくなった」）

（最後に一つ……ここで関わるときっと最後まで逃げられませんよ？）

（「……きっと逃げられないよな……でもある子に大事な事に嘘つくなといわれちゃったからな……遅いかも知れないが例え逃げられなくても救いたいという気持ちに嘘はもうつけないな」）

（マスターは馬鹿になりましたよね？）

ラインには顔は無いが、呆れ顔が想像できるくらいに声に呆れが入っている。

馬鹿になったと言われると、なんとなく否定できねぇ……

（「……嫌か？」）

（いえ、私は暗くなって悩み苦しんでいるマスターより今の馬鹿なマスターの方が好きですよ？）

（「バカバカ言わないでくれ……散々今までの自分に対してそう思ったからな」）

（…私は最後までマスターの矛であり続けると誓いましたから、なにがあろうがついていきますよ）

（「すまないありがとうな…」）

突然強い衝撃波を感じ、空を見るといつの間にかフェイトが持っているデバイスがボロボロになっていた。

っく……もうそろそろ終盤じゃないか…

（「ライン頼めるか？」）

（分かりました。まあもう契約をしていますから一言くらいで展開できますけどね）

（「……それはなんだ？」）

（ラインブレイクセット・アップっていうんですよ。ちなみに展開したときに魔力隠蔽とれますからね）

ここは普通のデバイスと同じか……教えてもらった以外にも違う点あるとおもったんだがな…

（「あぁもう隠す必要ないからな……ラインブレイクセット・アップ」）

（ラインブレイクセット・アップ）

その直後体全体は光に包まれた。

フェイトｓｉｄｅ

「はぁはぁ…」

相手のデバイスが先ほどの衝撃で破損したが、バルディッシュも同じように破損してしまった。

それよりも暴走してしまったジュエルシードをバルディッシュが破損してしまったためどうしようもできない。

嫌……お母さんの所へ…もっていかないと！

他に方法も思いつかず、バルディッシュをしまい、咄嗟に暴走状態のジェエルシードを両手で掴むと、両腕全体に激痛が走る。

ん……お母さんの所に……

痛さのあまり、思わず意識が飛びそうになる。

その痛みを必死に耐えるためいつの間にか目を瞑っていた。

何度か意識を飛びそうな中で、閉じた目に浮かぶのはアルフのことでもお母さんのことでもなく、家に居候している少年のことだった。

……今日も無事に帰れたら、おかえりって迎えてくれるかな……それとも怪我したことで怒られるかな？…

最初はただ興味惹かれただけだった。

鍵を貸したのも、外に出るとき困ると思ったから。

ただそれだけだったのに、出かけるときにいってらしゃいっと結城から言われたとき、戸惑ったけどそれよりも本当に久しぶりだったから嬉しかった。

その日家に帰ると、お帰りを言ってもらえた。

ただそれだけなのかもしれない、でも心が温かくなる感覚が感じられた。

アルフとは一緒に行動するから言ってもらうこともなかった。

お母さんには昔は言ってもらえたけど今は言ってもらえることがない。

その後晩ご飯は本当に久しぶりにカップやインスタントじゃない料理を食べたけど、普通においしいだけのはずなのに、食べていて幸せな気分になれた。

笑顔には感情のこもっていないものだったり、なにか抱え込んでいるような目をしていたけど、そんなことどうでもよかった。

ただいってらっしゃいと見送ってくれて、おかえりと迎えてもらえて暖かくて幸せになれる料理を食べられるだけで私はそれだけで幸せになれた。

一度だけ結城が私たちより後に帰ってきたことあった。

その時どうしたのだろうって心配になったけど、それよりもいつものおかえりっと迎えてくれる結城が居ないことに何故か不安になった。

でも結城が頭を撫でてくれた時に不思議と不安な気持ちが無くなって、幸せな気持ちになって心満たされる感じになれて、撫でるのを

止められると寂しい気持ちになったけど、それでも心暖かくなる感じは消えなかった。

いつまでもジュエルシード回収できなかったからお母さんに叱られて擦り傷をしてしまってなんか後ろめたい気持ちになって傷を隠したけど結城に気づかれて心配してくれたとき申し訳なさもあったけど嬉しかった。

一時期結城が私の目を見てくれなくて寂しい以上に不安だった

そこで気づく、こんなにも結城を気にしている自分に

なんで気にしているのか分からないけど、嫌じゃなかった。

旅館に行くときもジュエルシードの件で行くのに、結城が一緒に来てくれるって考えただけでなぜか温泉に行くのが楽しみになった。

ふと結城のことを何も知らないことに気づいた時はなぜか知りたくなった。

結城が話してくれたその話しは、知らなかった部分の結城を知ることができるものばかりで、嬉しく感じられたけど剣術を教えてくれる人の話を聞くと、話し終えた結城は寂しそうに苦笑いを浮かべて、とても胸がぎゅっとなる気持ちになって、思わず前に私の不安を取り除いてくれた頭撫でをしたのだけど、あのとき結城の寂しそうな苦笑いを癒せたかな。

結城が居てくれるだけでも安心ができたから寝るとき結城が離れた隅の方で布団を引いていたのに気づいて、結城の所まで自分の布団を持ってきた。

離れて欲しくなくて結城の浴衣を摘んだら幸せな気分になれて安心できた。

結城に撫でられると、本当に暖かくて、辛いことや不安に思ったことが忘れられる…結城が家で待ってくれるって考えるだけで何でも頑張れる……いつの日からか結城が自分の帰る場所や傍にいてくれないと安心できない自分が居ることに気づいたけど不思議と嫌じゃない…

できるなら…結城に嫌われたくない…けど…

そんなことを思っていると背中に暖かい温度を感じ、肩に重みを感じたが、それと同時に痛みがいきなりすっと感じられなくなった。

ゆっくりと目を開けると大きい剣と驚いている高町なのはという子の顔が見えた。

剣が伸びている元を辿ると誰かの腕が私の肩に乗っていて大きい剣が握られてる。

そして剣は真っ直ぐに前に向けられて肩の高さくらいを維持している。

ふとそこで気づく。

後ろにいる誰かのもう一つの腕が腰に回されて後ろから抱きしめられていることに。

その時聞き覚えがある声が聞こえてくる

「フェイト…大丈夫か？」

「うん…」

ビックリして声をした方を向くと先ほどまで思い浮かべていた彼の横顔があった。

でもいつもと違ってこちらをちらっと見た彼の目はいつものような隠しているようなものが感じられず、微笑んでいる顔は純粋な笑顔を浮かべていると分かるものだった。

いつもの結城の口調じゃないけど…大丈夫か分からないけど…そんなことどうでもいい…

…結城知らないかもしれないけど……私、結城が傍にいてくれるだけで安心できて、頑張れるんだよ…

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

１０話　逃げていた自分（修正（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想を書いていただきありがとうございました」

真「こうやって書いてくれることはうれしいことだよな」

元「そうですね……」

真「どうした？」

元「皆様すいませんでした！」

真「いきなりどうした…？」

元「いやはや私の貧相な頭で考えたプロットのひとつなわけですが」

真「……それがどうした？」

元「いろんな意味で自己満足だったかな～って」

真「いまさらだろ？」

元「う…はぁやっぱりそうですか…」

真「これで俺は原作に関わることになるわけか」

元「怖い？」

真「まあ怖くないわけがないな。決めたからな」

元「頑張るがいいよ」

真「そうだな。頑張ることにするか」

元「私も自分なりに頑張ってみることにする」

真「そうか。さて締めの時間か」

元「そうですね。では…」

真「ここまで読んでいただきありがとうございました」

元「お気に入りやアクセス数が増える度ニヤニヤして喜んでいます」

真「なにかあれば感想に書いてくれると嬉しい」

元「それでは…」

元・真「次回お会いできることを楽しみにしています」

１１話　騙す者、騙される者（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
熱を出してしまったため更新が遅れてしまいすいませんでした。
私にとってはここまでが序章です。
それでは一人でも多くの人が楽しんでいただけることを祈りつつ、
本編に移りたいと思います。

11話　騙す者、騙される者

はぁ…なんで後ろから抱きしめないといけないんだろうな……あぁ驚いた顔してるなのはが見える…

なぜか意識が飛びそうなくらい全身に痛みが走るのだが……それにしても一瞬一応笑顔で答えてくれたけどフェイトが心配だわ……

デバイス展開させたものの使うのが初めてのため、今の俺じゃ使いこなせないことに気づいたのは展開後だった。

ラインにどういう手を使えばいいかとフェイトが今陥っているであろう状況も説明して聞いてみると、魔法行使等と救う方法をまかせてほしいと言ってもらえたので全面的にまかせることにしたのだが。

…飛行を使ってもらってフェイトの元まで行ったがいきなり後ろから抱きしめろとか…

肩を借りてデバイスをジュエルシードの真上まで振り下ろして静止しろとか…

なかなかきついお願いするものだ…片腕がきついし、女性をこの姿勢で抱きしめるのはまずい気が…

（「ラインなぜ全身に痛み走っているかは分かるか？」）

（……マスターそれは私のせいです。この少女に襲っている痛みをマスターに肩代わりさせています）

そうならそうだと言ってくれれば……いやラインに今回はまかせたんだ。泣き言はいえん

（「……そうか、ならいい。後で説明してくれな」）

（もちろんです。その少女に掴んでいるものを離してくれるように頼んでいただけますか？）

（「……わかった」）

肩代わりっていうことは今も傷ついているってことだしな…

「フェイト、今にぎ「あなた誰なの？」…今は答えられません」

動揺から復活したなのはに誰なのか聞かれても答えることはできなかった。

まあ今はそれどころじゃないしな…

焦りの声が混じっていることに気が付いたのか、なのははかなり不満そうではあるが、それ以上聞こうとはしなかった。

「フェイト…今握っているのを離してくれるか？」

「……わかった」

とても不思議げな目でこちらを見ていたが、フェイトの目を真剣に見返して数十秒たったら納得してくれた。

それにしても…自分でいっときながらなんだが普通なんでとか聞くものだろ…ふぅ痛みが腕だけになったか…

フェイトは言われたとおり握っているジュエルシードを離すと、ジュエルシードから魔力の粒子が絶え間なく逆っている。

（「ラインどうすればいいんだ？」）

（今回は私が調節しますから軽く暴走してるジュエルシードから飛び散っているエネルギーを跳ね返るイメージをしながら反射発動と口頭で唱えてください）

（「わかった…」）

跳ね返るイメージっと……うんなんとなくだがイメージはできた

「……反射発動」

「え？…」

小さく呟いたものの顔が真横にあるフェイトには聞こえたらしく不思議そうにこちらを見ているのが目端で見える。

だが、見えたのも一瞬で、次の瞬間ジュエルシードの周りを何か薄い膜らしきものが囲い、ジュエルシードから出てくるエネルギーを全て一気に跳ね返しジュエルシードの暴走を止めてしまった。

それと同時に多少の脱力感に襲われる。

なんだっていうんだよ……もしかして前に聞かされた反転の力か？……それでこれの脱力感が代償か？…

（マスター今です封印してください！）

（「あぁわかったが、どうやって封印するんだよ！？」）

（口頭でジュエルシード封印といってください！細かいのはこっちでなんとかします）

（「わかった……まかせた」）

魔導師として初心者レベルのため、情けながら一々教えて貰わない自分に少しだけ腹が立ったがそれも今更と思い直し、言われたとおりに実行する。

「ジュエルシード封印！」

暴走を止めても、まだ少しだけ粒子と飛び散らせていたジュエルシードがようやく沈黙し、ラインというデバイスに収納されていた。

これで…やっとか……あ（マスターお聞きしたいことがあります）

…この状況でなんだ？…

（「なんだ？」）

（……マスターが抱きしめている少女はさきほどジュエルシードを握りしめていたため傷だらけですが…）

（「あぁそうだな…はやく家に帰って治療しないとな」）

（……今は体に流れている痛みをマスターに移行させていますが今のマスターじゃ抱きしめている状態をやめると強制的に移行させている状態が解けます）

どういうことだ……いやそれも含めて後でか……

（「……今の状況でそれを報告するってことはなにか手があるんだな」）

（あります。あると言っても反転の一つのある能力の完全発動を寸前でとめているだけの状態ですから）

一つ？…ということは幾つも別れているのか、いやそんなことよりも…

（「…発動させるとどうなる？」）

（今の条件ですと、マスターにその少女の負った傷が移り、その少女の傷がなくなります）

（「……ようするに肩代わりか？はぁ…そこまで自己犠牲心ないのにな～」）

だが……できるのにしないのは後味悪いからな……まあどうせ自己満足だがな…

（やめておきますか？）

（「いややるよ。まあ早くしないと目の前のもう一人の少女が見逃してくれなさそうだしな」）

目の前に見える少女がじっとこちらを見ており、ジュエルシードも回収したため警戒してみている。

（そうですね…近くで行われていた戦闘も終了したみたいですし、状況反転発動と口頭で唱えるのが発動のスイッチです）

「状況反転発動…」

そう唱えると、腕の方に痛みが走り、こちらから見える傷だらけのフェイトの腕から傷が消えていく。

まあそのかわり俺が傷だらけになったが……フェイトの傷が治るよりはよほど早いだろうからな…

それよりもどうするべきかね…っくユーノがもどってきやがった、それにしてもイタチのままで戦闘してたのかよ…

先ほど戦闘が終わったのは本当らしくユーノが戻ってきてなのはの肩に乗る。

状況は悪化したがどうするかな……フェイトもそんなに警戒心丸出しであちらさんを睨んじゃ駄目だって…

状況悪化に思わず空笑いが出そうになるが、フェイトに気づかれるわけにもいかず、何とか押さえる。

「坊主かい？なんでデバイスをもってそこにいるんだい？」

突然後ろから声をかけられて一瞬心臓止まる思いになるが、冷静に考えれば当たり前のことのため落ち着く。

まあ普通に考えればアルフもいることはわかっていたはずなのにな

…なんでビックリしてるんだよ俺

「すいませんアルフさん後で説明するので一旦引きませんか？」

「……それがいいみたいだね、フェイト、坊主逃げるよ」

俺が振り向くと少し訝しげな顔をして俺を見ているのが分かるが、最終的に俺の提案に乗ってくれた。

そもそも……話す時間なんて無いしね…いまの状態なら

「それじゃあフェイト離すよ？」

「……分かった」

少しだけ残念そうな顔をされたが、大剣を肩に担ぎ、腰に回していた腕を戻すと俺から少しだけ離れてくれた。

本当頭撫でるときもしかりこうして抱きしめるのをやめるときもしかりなんで寂しそうな顔をするんだか……いやそんなこといまは気にしている場合じゃないか

「…逃がすと思っているのかい？」

「分かっているとは思いますが、無傷の私と戦うと？」

まあ本当を無傷じゃないが……バリアジャケットは大きめのコートだしな、分からないだろう…

「っく、見逃すしかないのか…」

「ユーノ君…」

いつの間にかフェイトの横にアルフが来ており、フェイトを心配しつつなのはとユーノの二人を睨んでいる。

一応は……面倒事は残っているが、逃げられそうだな

「それじゃあ引かせて貰うよ、おチビちゃん」

それに頷き、フェイトが先行して引くと、アルフがそれに着いていく。

（「ライン帰りも頼む……」）

（分かりました。お任せあれ）

フェイトの傷移したおかげで痛みが走るが……なんとか家に帰れそ

うだな…

「本当に貴方は何者なの？」

声に振り向くと、なのはは先ほどの警戒心丸出しの眼ではなく不思議そうな顔でこちらをみている。

ユーノは未だに警戒心丸出しで見ているように感じられる。

何者か……少しは思い出したが未だに曖昧な部分があるからな…いや事実上敵であることは確かか

「残念ながら答えられませんね。それでは」

前を向き直し、先に行ったアルフ達に追いつくため、まだ見える二人の背中を追う。

追いついたものの家に着くまで沈黙が流れ続けた。

……まあアルフが今回の件でなおさら不信感を抱いてたのに止め差しちゃったしな…

家に着くと二人はリビングのソファに座り、アルフに俺も座るように言われた。

はぁ…完璧に疑っているよな……いや逃げていたツケか

「坊主説明してくれるかい？フェイトに怪我がないことも含めて」

きっとフェイトとアルフだけの時に怪我を確認しようとして怪我がないおかしさに気づいたのだろう。

フェイトの横に座っているアルフは俺を睨みつけている。

「はい。ですがまず謝らせてください。今まで隠していてすいませんでした」

謝る、それが今まで言い訳して逃げた俺がまずしなければならないことだと思った。

「……教えて、今まで隠していて何でばらしたの？」

やはりアルフは警戒した眼から変わらないがフェイトは不思議そうに俺を見つめている。

……やっぱりそれは一つしかないよな

「……自己満足ですが助けたかったんです」

フェイトの顔を見てられなくなり思わず俯いてしまう。

「そうなんだ……アルフ、聞くの止めよう」

え？普通色々きくもんだろ！？

俯いた顔を上げるとなぜか幸せそうに笑って俺をみている。

「なんでだい！？坊主はあたし達を騙していたんだよ？聞かないと

「アルフ…」…なんでそこまで…」

戸惑いながらフェイトを見るアルフと対照的にアルフを真剣な目で見返すフェイト。

「アルフ…私ね、どんな思惑があっても助けてくれたのは嬉しい。だからあえて聞かない」

なんだよそれ……改めて罪悪感が沸いて来るじゃないか…

アルフに向けていた顔を俺の方に戻し、俺に対して向けた顔は嬉しそうに笑うものだった。

「結城から話してくれることだけ聞くよ……それが助けてくれたお礼」

はぁ…やばいな、フェイトに敵わない気がしてきた…

「フェイトさん…「呼び捨てにして欲しい」わかりまし「救ってくれた時みたいにため口がいい」はぁ…わかったよ」

本当に敵わない……そしてなおさら助けてあげたいと思ってしまう自分がなおさら笑えてくるよ…

「あたしはそこまでなんで坊主を信じるか分からないけどね…坊主あたしもため口にしな、実際敬語使われると気持ち悪い」

警戒するのを止めてくれたものの不満げな顔している。

気持ち悪いとはひどいな……いや張り付いた笑顔と敬語って考えれば気持ち悪いかもな

「アルフさん分かったよ」

「一応言っておくけどこれ以上フェイトを裏切ったら……」

あぁなんかアルフから殺気がにじみ出ているな……まあ今まで騙していたような物だからな…

決意を込めるように頷くと、アルフは一応いつもの雰囲気にもどってくれた。

「食事はどうしますか？」

「……食べるよ」

「でもまあできるまで一旦部屋に困ることにするさ」

フェイト達は自分たちの部屋の方へ引っ込み、一人になったときにそのまま買い物袋を置きっぱなしのことに気づく

あ…そういえば買ったもの放置したままだった…まあ一食ぐらいは何とかなるだろう…

冷蔵庫を開くとなんとか今日の晩飯くらいは作れる量があった。

その時ふと気が付く。

いつの間にか怪我したはずなのに痛みが無くなっていることに。

服をめくると、もう塞がりかけている。

おぃおぃ…こんなに治るのが早いのかよ……予想以上だな

まあ困ることはないが……

そしていつものように料理に取りかかった。

作り終えて、食卓に並べてフェイト達と食事をし出したのだが、今日はいつもよりフェイトと目が合う。

気にしなくてもいいのだが、いつもと違って嬉しそうに俺の顔を見ているので気恥ずかしい気分になる。

食事をし終わって、食器の片付けをしているときもそれがとても印象に残っていた。

だが、ラインに聞くこともあり、一旦それを考えないようにして洗い終わった食器類を漬けて自分の部屋に戻った。

（「ライン…説明して貰っていいか？」）

部屋に入って一人になったためやっと帰ったときから沈黙を貫いているラインに聞く状況になることができたが聞いても一向に返事を返さない。

（……はい大丈夫です）

少しの沈黙の後やっと返事を返してくれた。

なんか…不安だが、今分かっていることを聞くしかないな

（「なぁライン反転って結局いくつのスキルに別れているんだ？」）

（マスターが使えるものならば大きく分けて三つです）

何か引っかかる言い方だな……今はそれを突っ込むことではないか

（「それはなんだ？」）

（肉体等の状態を反転させる状態反転、位置関係や物を反転させる物理反転、あらゆる物をそのまま跳ね返す反射です。他にもあるといえばありますがマスターは今現在使用できません）

（「使用できない？……」）

（技能や魔力量等が桁違いに足りないので他は無理です。まあそもそも大きく分けた三つも今の状態では限定条件があります）

取りあえずベットに座るものの予想以上のスキルで多少驚きで落ち着けない。

限定条件？……なんだよそれ

（限定条件とはなんだ？なぜその三つのうち二つはできた？」）

（…マスターにあの少女を抱きしめて貰った理由は状態反転をする上でマスターの技能不足や魔力不足を補うため距離をかなり近い位置にすることでなんとかしました。反射は…今回はぎりぎりなんとかできました。説明としては以上です）

さてこれで反転についての疑問は解決したが…あぁそういえばデバイス使うに関して聞かないといけないことあるな…

（「……分かった、もう一つ聞きたいことがある」）

（なんでしょうか？）

（今後デバイスを使っていくとして、今の俺はなにができるとおもうか？）

（今のマスターでは近距離戦しかできませんが、戦闘技能的に体を張った盾しかできないと思いますよ？）

…戦力としては駄目駄目なのかよ俺、まあ予想通りではあるが

（「やっぱり、素人状態か…」）

（そもそも飛行を覚えないとなにもできないとおもいますけどね）

う……今回はラインにやって貰ったが、あれは戦闘しないからできたことだしな…

（「頑張るとする。まあなんとなく掴めたが」）

（ならすぐにできそうですね。期待していますよ）

（「ありがとな。まあ他の話しはまた明日聞くとする。正直今は眠いからな」）

段々とまぶたが重くなってきており、そろそろ起きていることが限界だった。

正直眠すぎて……これ以上聞いても頭が働いてないから入らないしな…

（はい、その方が良いと思います。お疲れだと思いますし）

ならやることは明日するとして寝るか…

ラインに言われたとおり疲れているため、大人しくベットに横になって就寝した。

11話　騙す者、騙される者（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想書いていただきありがとうございます」

真「感謝している。それにしても馬鹿は風邪を引かないって嘘だったんだな…」

元「…それはどういう意味ですか？」

真「いやそのままの意味だ」

元「ひど！？まあ熱を出して更新が遅れたのは謝罪するしかないけど」

真「まあこの作品をそもそも待っている人はいるのだろうか…」

元「いやいやお気に入り登録もしていただいていますしごく少数としてもいますよ」

真「なら今後頑張れよ」

元「分かっているって、それは真夜も同じだけどね」

真「う……まあこれまでの恩を返していきたいしな」

元「今後成長幅あるし、お互い頑張ろう」

真「そうだな…」

元「それじゃあいつも通り締めるとしよう」

真「はいはい」

元「ここまでお読み頂きありがとうございます」

真「作者はお気に入りやアクセスが増える度悶え苦しむように喜んでいます」

元「なにかありましたら感想板にお書きください」

真「それでは…」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしております」

１２話　悪役にも勇者でもなく馬鹿な俺（前書き）

駄作を手に取っていただきありがとうございます。
悩みに悩んだため更新が大変遅れてしまい申し訳ありませんでした。
それでは一人でも多くの人に楽しんでいただけることを願いつつ本編に移りたいと思います。

１２話　悪役にも勇者でもなく馬鹿な俺

朝目を覚めると、怠さを感じた。

体を起こすと、少しだけ体が重い。

なんだよこれ？……ん～なんか休んだ気がしないのだが

頭も起きたばかりで回らないのでベットの横にある机に置いてあるラインに問いかけてしまう。

（「……ライン、体がなにやら少し重いんだが？」）

（それは、間違いなく昨日の影響ですね）

あぁそういえば初めてデバイス使ったからな……あれ？…反動でかくないか？

（「デバイスを初めて使う時はこうなるものなのか？」）

（普通はなりませんが昨日はだいぶ体を酷使しましたからそれが理由です）

（「ん？どういうことだ？」）

（本当に頭回ってないんですね……。昨日の付加スキルと飛行は魔力量がギリギリ足りていただけでほとんど使いましたし、条件反転であの少女が負う傷諸々受けましたから打撲関係も含めて……。それで酷使してないわけがないでしょう）

あぁそういうことか、本当に頭回ってなかったな。いくら回復が早いって言っても酷使すればこうなるか

……聞かされてないような気するがまあいいか

ベットから降りて、確認がてら体を捻ってみたり等して動かしてみるが、若干違和感ある程度で概ねなんとかなりそうだった。

（「とりあえず大丈夫みたいだな。それと後で飛行のやり方を教えてくれ」）

飛行覚えないと、なにも手伝えないしな…

（分かりました。まあマスターならすぐ覚えられますよ）

ラインを首にかけて、朝食を作りに部屋を出た。

朝食を作り終えて、テーブルに並べた頃にフェイト達が起きて席に着いていた。

全員が食べ終わった頃に介入した時から決めていたことを提案することにした。

「フェイト、アルフさん頼みがあるんだが」

「坊主なんだい？」

アルフは立とうとしていたのをまた席に座り直し、フェイトはこちらをカクっと首を傾げてこちらを見ている。

「……ジュエルシード集めを手伝わせてください」

「……そもそも信用はできないしどうして知っているか聞きたいね」

なぜがため口を許されたはずなのに自然と敬語にしてお願いしてしまった。

あぁ……やっぱりもの凄く睨まれているな

それにしても信用できないか……まあ当たり前だよな

「なぜ知っているかは、少し前から大きな力を持つものがあるのは感じ取っていました」

ここまできて、こうして真っ正面から何かを伝えることが記憶は未だに曖昧だがかなり久しぶりで緊張して敬語になってしまったことに気づく。

その緊張のためか、段々と声が震えてきたので、区切って息を整える。

「そして昨日のことで大きな力を持つ物がジュエルシードで、それを二人が集めていることがわかりました。信用されないのは百も承知ですが、どうか手伝わせてください」

想いを込め、テーブルに手を付けて頭を下げる。

何故だろう、怖いな……あぁ男として情けねぇ

「結城、今日からよろしくね」

「フェイト！？なにいってるんだい！信用できない坊主を連れて行くのは危険すぎるよ」

今まで黙って聞いていたフェイトが、手伝うのを認める発言をしたことで、アルフが動揺する声が聞こえる。

自分自身もビックリして思わず下げていた顔を上げると、ニコと笑ってこちらを見ているフェイトと、驚いた顔でフェイトを見ているアルフという構図が見える。

「アルフが心配するのも分かるけど、真剣な顔でそう言ってくれた結城を信じたいから」

……自分で言っておいてなんだが、フェイトなんでそう簡単に信じようとしてくれるんだよ

まあ信じてくれようとしてくれるフェイトを少し疑ってしまう自分は情けないけどな…

「信じる信じないの前にまず足手まといになる可能性もあるんだよ？」

そもそも足手まといになると言う可能性を今更ながら言われて気が付いて情けなくなり二人から顔をそらす。

俺大馬鹿だろ……なんで言われるまで気が付かなかったんだよ

いつまでも会話が始まらないのでそらしていた顔を戻すと、アルフ

の顔をじっと真面目な顔して見返してるフェイトがいるのが見える。
俺……何やってるんだ、なぜフェイトに説得させてるんだ！！ちゃんと自分でやらなちゃいけないことだろ

「アルフさん、実力が無く足手まといになる可能性は充分ありますがどうか手伝わせてください……二人に恩を返したいんです」

今度は想いを言葉に込めて、アルフの顔をじっと見つめる。
数分間フェイトと俺に見つめられたアルフはフェイトの「アルフ……」っという言葉でとうとう折れた。

「はぁ……あたしは信用したわけじゃないけど、フェイトに免じて手伝わせてあげるよ」

「ありがとうございます」

「それと坊主の敬語は虫酸が走るからやめな」

とても嫌そうな顔でこちらを見るアルフに心の中で少しだけ苦笑いをしてしまう。

その後フェイト達が自分たちの部屋に戻ったので、足りなくなってしまった食材を求めてスーパーへと出かけた。

昨日買った食材もったいなかったな……まあどうせ傷んでいる可能性もあるし諦めるしかねぇか

ん？あれは！？やば

スーパーで買い物を済ませた帰りにふと見覚えがある髪の色とツインテールが見えて咄嗟に、道をそれて電信柱の陰に隠れた。
はぁ……こんなところでエンカウントするとは……高町なのはなんて今の時点じゃ会いたくもないぞ
そのままなのはが通り過ぎていくまで隠れ続けた。
ふぅバレずに見送ることがで「なになさっているんですか」……
声をする方へと振り向くと、白いヘヤバンドをしている少女すずかがこちらを笑顔で見ていており、少しだけ目が笑ってなかった。
……あれ俺話すの初めてだよな、怒らせることしたかな？
「えっとなにとはなんですか？」
「……わたしの友達を電信柱に隠れながら見ていたのはなんですか？」
あぁそりゃあ友人の子を変な人が観察してたら不審者以外の何者でもないか……
「少しだけ会いづらいことをしまして、それで隠れてしまったんですよ」
「会いづらいことですか？謝ったほうがいいとおもいますよ？」
根が純粋なのか、少し嘘を交えたもっともらしい事をいうとすぐに

信じてくれて、なぜかアドバイスをくれた。
今は……なのは達とじっくり話しをする時じゃないからな……
「そうですね。時間を見て自分から行くことにします」
「そうですか……なのはちゃんは謝れば許してくれますから早めに行ってくださいね」
「……はい」
はぁ……なんでこう純粋な子が多いんだか
「それではこ「あれ？真夜くんやないか」お久しぶりです八神さん」
声がした方に顔を向けると、笑顔を浮かべたはやてがこちらの方へと車いすを進めながらやって来た。
「あのときぶりやな」
まだ……色々と落ち着いてないからあまり会いたくなかったのにな……
片付けないといけない事をなんとかしないとはやてと向き合えそうもないしな
「あのときの返事はもう少しだけ待っていただけますか？」
「いやええで、今の様子だと悩みが解決したみたいやからな」

はやては俺の傍までやって来て顔をじっとみるととても幸せそうな顔を浮かべた。

……本当馬鹿なやつだな、俺なんて心配しなくてもいいのに

「あの……その子は誰ですか？」

「この子は八神はやてさんと言いまして、私の知り合いですよ」

「……真夜くんの紹介受けた八神はやてや、そちらの名前も教えてほしいのや」

「わたしは、月村すずかです。できれば貴方の名前も教えて欲しいです」

あれ？俺そこまで興味引かれるようなことしたっけ？

微笑みを先ほどから浮かべたままのすずかに対して心の中で若干ため息をついてしまう。

「なぜ私の名前を知りたいと？」

「いやですか？」

不安げな顔でこちらを見ているすずかと不満げな顔を浮かべているはやてが見える。

……不安げな顔なんてされたらここで言わないって選択肢なくなるじゃないか

まあ……言ってもそんなに悪いこともないか

「いやそんなことはないですよ。私は結城真夜といいます」

「よろしくお願いしますね。結城君」

よろしくすることないとおもうんだが……嬉しそうだしまあいいか

その後少しだけ話して俺は先を急ぐため二人と別れたが、はやての件もジュエルシード事件が解決後考えないといけないことを再認識し、少しだけ憂鬱になる。

家に着いたら買ってきた食材を使わない物は冷蔵庫に入れ、今回の昼食で使う食材で調理を始め、出来たらテーブルに並べてフェイト達を呼びに行った。

呼びに行くとすぐに出てきて、食卓について俺達三人は手を合わせて合掌をする。

「坊主手伝わせるにあたって二つ条件がある」

食事が終わった後、アルフにそのまま座っているように言われて腰を上げていたのを座り直した。

アルフはフェイトに少しだけ席を外してくれるように頼み、フェイトが部屋に戻るとそう切り出された。

条件か？……そういえばジュエルシード一つ俺が持っていたな……でももう一つはなんだ？

「なんだ？」

「一つ目は今持っているジュエルシードを渡すこと、二つ目は足手まといになったら早々と見捨てるから死んでもあたしたちのことは漏らすことをしないこと。いいね？」

……二つめの条件軽すぎないか？まあ当然ジュエルシードは渡すが

「一つ目はもちろんそうするが二つ目はもし漏らし、いや絶対しない」

うん……やはりアルフはフェイト至上主義か……まあ当然か

漏らしたらどうすると途中まで言いかけたが、アルフの殺気の満ちた目で睨まれたため聞かなくとも大体察することが出来た。

「胡散臭いがまあ今までの様子でフェイトからの信用を裏切らないだろうとは思うけど、もしそんなことがあれば覚悟しておき」

覚悟と言っているが……ありゃあもしがあれば殺す気満々だな……まあアルフからみればどうみても胡散臭いしな

「その時は遠慮なくやっていいから」

「ふん、その覚悟に免じてほんの少しだけ信用してあげるさ」

即答したことでアルフはさっきまで殺気を満ちた目を止めてくれて、少しだけ苦笑いを浮かべてフェイトが戻っていた部屋へと自分も戻っていった。

そして少し経った後フェイト達が部屋からでてきて、食器の片付けを終わらせてリビングのソファで座っていた俺の元へとやって来た。

「結城いくよ」

「ほら坊主手伝うんだから来るんだよ」

「あいそれではお供させてもらうよ」

フェイトは少し笑顔で、アルフは苦笑いで出かける誘いをしてきたので、とりあえず笑顔で返してソファから立ち上がった。

玄関までいくと急にフェイトが振り向いて、なぜか見送るときのあいさつを求めてきた。

……なぜする必要があるのかと思うが、すがるように見られたら断ることに罪悪感が……

結局数十秒も持たず、観念して見送りの挨拶を互いに言い合って外へ出た。

外に出てからジュエルシードの魔力をフェイト達が探り、魔導師としての経験不足の俺は、魔力を追うという作業を捨てひたすら周りの警戒へと神経を傾けながら捜索を続けた

ちょうど夕方くらいになる頃に、やっとジュエルシードの反応が見つけられ、周りに人がいないことを確認してデバイスを起動させ、広域探索を発動して正確な場所を判明した。

そしてその場所へ急いで行くため飛行で向かうこととなったわけだ

が。

（「ライン飛行のやり方を教えてくれないか？」）

（はいわかりました。まあでも前も言ったとおり飛ぶイメージでなんとでもなりますよ）

（「若干不安が残るんだが……」）

（あはは大丈夫ですよ）

飛行をまだちゃんと自身で出来ていない俺はデバイス起動してからラインにやり方を聞いたのだが、このようにイメージで頑張れと言われるだけだった。

イメージで出来たら苦労しないと思うんだが……とりあえずイメージと

フェイト達は既に飛行で上空にいるため、一応言われたとおり自分は飛べると何回も言い聞かせていると不安定ながらもなんとかフェイト達が居る位置まで行くことが出来た。

「坊主遅いよ」

「それじゃあ急ごう」

一応待っていてくれた二人は片方がジト目で片方は疲れた雰囲気の微笑みで出迎えた。

やはり……広域探索は体力使うのかな？、まあ範囲が広いみたいだ

し仕方ないか……

「うん行こうか」

「それと今のうちに封印したジュエルシードだしな」

「それじゃあフェイトに渡しておくよ」

デバイスからジュエルシードを出し、フェイトに手渡すとフェイトは自分のデバイスの中へと回収していった。

「結城ありがとう」

「いや……アルフさんとの約束だから」

「それでもありがとう」

嬉しそうに笑うフェイトに若干の罪悪感が沸くが悪くない気持ちになれた。

そして二人は目的地へと移動を始めたので後ろから付く感じでそれに続いた。

やはり経験の差もあり、少し離されてしまったが突然二人が立ち止まっていたので、その位置まで行くと向かい合った所になのは達がいた。

「またあの二人が居るのか……」

まあ当然か……同じ物追って居るんだし

フェイト達に追いついて、少し離れた距離で向かい合っているなのはと目が合うと構えていたデバイスを握り直してこちらを見つめている。

「そろそろあのおちびちゃん達にはあきらめてほしいのだけどね」

「それは無理なの」

「あなた達とそのような危ない物を渡すわけにはいかない」

「私達も渡すわけにはいかない……行くよバルディッシュ」

『イエッサー』

そのフェイトの言葉を合図に四人は戦いを始めた。

未熟な俺は、ろくに戦うこともままならないので、四人から少しだけ離れた位置へ後退する。

なのはがだいぶ力をつけたのか、ジュエルシード近くで行われているフェイトとなのはの戦いは拮抗している。

さすがに主人公だな……成長するのがチートだぞまったく……まあ俺も成長だけならチートか

思わず苦笑いが漏れてくる。

「そこの魔術師、戦闘行為やめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ」

「え？」

「……！？」

その声と共に少し大きい男の子がジュエルシードの近く出現した。

っく……原作通り管理局が出現したか、フェイトの位置は……遠くはないな

クロノ執務官がこちらのほうに注意を払っていないため、慎重にフェイトの近づいていく。

緊張で肩に担いで持っているデバイスを強く握りしめてしまっていたみたいで少しだけ爪が指に食い込んでしまって痛みが走った。

「逃がすわけがない、バインド」

フェイトがクロノ執行官と睨み合って数十秒間睨み合って、隙を見て逃げようとするがひも状のバインドと呼ばれる物に拘束されてしまう。

いきなりの状況になのは達サイドは、動きが止まっている。

「フェイトになにしやがる」

キレたアルフが勢いよくクロノ執務官に突っ込んでいったがそれを読んでいたらしいクロノ執行官に魔弾でのカウンターを食らう。

それでも何とかフェイトまでたどり着いたアルフがフェイトを抱え

て移動しようとするがクロノ執行官がそれを止めようと魔弾を撃とうとしている。

やば！これじゃあおもいきり直撃するじゃねぇか……

飛び始めたときましになった飛行で慎重に飛んでいたのをやめ、今自分が出来る最速でフェイトの元へ向かう。

「無駄な抵抗はやめなさい」

そう言って先ほどアルフに撃ったものより強力な魔弾を撃った。

「だめぇぇぇ」

なのはと思われる声がするがそんなこと気にする暇はなく、出せる速度のぎりぎりで急いだらなんとか間に合って魔力弾とフェイト達との間に突っ込んで、デバイスである大剣を盾にして魔弾を防ぐ。

ラインが咄嗟に防御魔法を発動してくれたが、やはり矛であるラインの防御魔法は強度がなく、なんとか止められたが、防御魔法として張った魔法の盾にはヒビは入っており、ギリギリだった。

あぶねぇ……やっぱり防御魔法が苦手と言ったのは本当みたいだな

『マスターギリギリになってしまい、すいません』

「いや気にするな。止められたんだしな」

「貴様邪魔するなら同罪だ」

「いや危なかったので止めないわけにもいきませんよ」
クロノ執務官が睨みつけていたり、なのはがほっとした顔をしてこちらを見ているが、そんなことよりフェイト達になんとか直撃を防ぐことが出来たことに安堵が漏れそうになる。
「結城ありがとう……」
「今回は坊主に救われたよ」
「お礼はこの状況乗り切ってからにしよう」
「……結城の言うとおりまずこの戦域から離脱しないと」
状況的には防いだだけで好転したわけじゃなく、クロノ執行官はこちらの方へ構えて、今にも魔弾を撃ちそうな感じだった。
あはは……もうまだまだ魔導師としての実力がないやつが執行官と対峙するとは……まあ予想していたことでもあるか
両手でデバイスを持ち、正面に構えて前に立ちはだかる敵に威嚇するように睨む。
（「フェイトのバインドは外れている？」）
（「うん……さっき魔弾を撃たれたときにそれと同時に外れたよ」）
（「ならば俺にここは任せて離脱してほしい」）
（「坊主馬鹿か？坊主は見たところまだ経験不足だ、そんな坊主が

足止めできると？」）

自分でも出来るとは思っていないが、このまま好転するとは思えないしな……

まるで正義の味方気取りだな俺……まあ俺がこんなことしなくても逃げられるかもしれんが役立たずの俺でも少しは安全な後退くらいはさせられるだろうしな

自分の馬鹿さ加減に苦笑いが漏れそうになるが、構えているクロノ執行官が見えるため、漏れそうになるのを我慢してデバイスを握り直す。

（「必ず追いつくから……」）

（「約束だよ？」）

（「うん約束するよ」）

（「……アルフいこ」）

（「フェイト！？」）

（「結城は約束破らないと思うし、結城を信じたいから」）

あはは……これじゃあ絶対にフェイト達の元へと帰らないといけないな

（「はぁ……それじゃあまかせたよ」）

フェイト達は俺を信じて退却をし始める。

「逃げることはさせない」

「こちらも攻撃させるわけにはいかないです」

「っく、貴様邪魔だ」

フェイト達が逃げるのを止めようと魔弾を撃つが、フェイト達と魔力弾の間に入って先ほどと同じようにデバイスを盾にして止める。

咄嗟だったのか先ほどよりも威力が落ちているため、先ほどより楽に防ぐことが出来た。

さてどうするかな……さすがに隙があっても俺の実力じゃ近づく前に撃ち落とされるしな……

近距離での戦闘しか覚えてないため、どう考えてもやられる構図しかみえなかった。

（「ライン……クロノ執務官の攻撃を反射することが出来るか？」）

（マスターの魔力量と技量的に意識してやれば一発二発なら可能ですが……）

（「相手の技量と俺の技量差的にこれが通じるのは一回だけか……」）

（はい一発勝負だとおもいますよ？まあ私もマスターを信じていますから）

勇者気質でもないんだけどな……まあ考える時間もないか

なのは達がこちらをただただ見ている様子が目端で確認できるが、クロノ執行官がまた魔弾を撃とうとしているため、なのは達まで相手にする余裕がないので、なにもしてこないことを願うばかり。

デバイスを斜めに構えて、クロノ執務官へと突っ込むと魔弾がこちらに飛んできた。

カウンター気味でくる魔弾を狙っていた俺は、ギリギリまで引きつけて反射をするタイミングを図った。

「反射！！」

今回の反射はそのまま返すことだけ意識すればいいため、すぐにスキルが発動され魔弾を跳ね返すことに成功した。

「っく……」

それなりの近さで発動し、そのまま攻撃が反射するとは思っていなかったのだろう、クロノ執行官が防御魔法を張るのがワンテンポ遅れたためそのまま反射した魔弾が直撃した。

反射をしたことで疲労感をかなり感じたが、今はそんなことよりクロノ執行官が立て直す前までの隙を利用して出来る最大限のスピードでこの戦域を離脱することに専念した。

なんとかそのまま離脱することができ、フェイト達と住んでいるマンションの屋上に降り立ったがデバイスをスタンバイモードにする

と疲労で少しだけ体がふらついた。

『マスター！』

「ライン大丈夫だ。お前は分かっていたことだろ」

『それでもならないことには越したこと無いですから……心配にはなりますよ』

はぁ……なんだかんだと心配性だなこいつは……

その様子に苦笑いを浮かべていると、また体がふらついて倒れそうになるが、倒れそうになった体を誰かが支えてくれた。

支えてくれた人を確認するとフェイトだった。

フェイトは心配そうにこちらを見ているのでそれ見てまた苦笑いを浮かべてしまう。

「おかえりなさい結城」

「ただいまフェイト。待っていたのかい？」

「うん……一応追っ手が来てもいいように隠れてはいたよ？」

「そっか、ありがとうな」

未だに心配そうに見ているフェイトがいるため、頭を撫でつつ大丈夫だよっと言い聞かせると、嬉しそうに笑いながら頷いた。

ｓｉｄｅ　クロノ

三人には逃げられ、なんとか二人を確保することが出来て事情を聞くため事情聴取に移ったものの母さんがその二人を利用しようとしているのがなんとなくは感じ取れ、その時は口には出さなかったが納得は出来なかった。

僕一人でも充分だとは思っていたが、エイミィに見せられたあの場にいた五人のデータをみて多少納得も出来た。

「クロノ君これ見てほしいんだけど、さっきのなのはちゃんって子と黒い服の女の子の子両方ともＡＡＡランクみたい」

エイミィに見せられた画面には、魔導師として高い水準を維持している二人の少女のパラメーターが表示されている。

「……才能があるみたいだな。技量としてはまだまだだけどさすがにこの二人と互いにパートナーがあるみたいだから両方相手にするのは悪手か……」

「そうだね、この年でこのランクは異常であり、才能の固まりみたいだね」

エイミィも僕の意見に同意してくれたがそこで一人の少年のことが気になってくる。

「僕が最後に対峙していた黒髪で灰色コート状のバリアジャケットしていた少年の情報も見せてくれるかい？」

「はいはいわかったよ。ん～この子はＢランクになんとか届いてい

るくらいの子だね。クロノ君にとって簡単に捕まえられる子じゃない？」

「いやランクが低くても油断は出来ない」

ランクが低くても積み重ねた経験や技量次第では油断はできない。

それは分かってはいるのだがさきほど対峙した少年に対してはどうにも当てはまらない。

対峙しても感じ取れたのが技量は僕より劣り、今見せてもらったパラメーターでも僕よりだいぶ低い少年を一対一なら捕まえる筈なのに、隙を突かれて逃がしてしまった。

……まだなにかありそうな気するんだが、まあいい捕まえれば分かるか

執務官としての誇りもある、これ以上好き勝手にやらせるわけにも行かない。

今度こそ必ず捕まえてみせる……たとえ僕一人で立ち向かうことになろうが……

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

12話　悪役にも勇者でもなく馬鹿な俺（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想書いていただきありがとうございます！」

真「今回も更新もの凄く遅かったなぉぃ」

元「……あはは、どうも悩んでしまってね。結局ありふれたものしかできなかった自分の才能が憎い」

真「元々才能がないのは今に始まったことじゃないだろ」

元「うぅ確かにそうかも知れないね……それにしても戦闘描写はやはり書くのが難しい……やっぱり俺にはまだましなのが恋愛描写しかないのか……」

真「……俺がそれに発展することはないだろうな」

元「ふふふ今はないね。だがしかし今後次第では多少のハーレムができるかもしれないよ」

真「考えたくない未来だな」

元「まあ今後に期待というわけで」

真「そろそろ締めの時間だろ」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はお気に入りやアクセスが増える度に悶え苦しむように喜んでおり、感想が書かれるときもいくらいに目をランランと輝かせます」

元「感想誤字等々あれば感想版にお書きください」

真「それでは……」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしています」

１３話　初めての魔法（前書き）

はい駄作のこの作品を手にとって頂きありがとうございます。
今回登場する二つの歩法は独自設定も混じっていますので、悪しからずです。
それでは一人でも多くの方に楽しんでいただけることを祈りつつ本編へ移ります。

13話　初めての魔法

「痛いよ……」

「黙れ無能。何でこんな事すら出来ないんだ。できるまで飯は喰わさん」

痛い……やり方を間違う度おもいきり――――に木刀で殴られる……痛い……

……足の運び方、やり方すべて分かっているのに……なぜか体だけがついていかない

憎い……憎い……――――が憎い、目の前にいる――――が憎い、何より木刀の軌道が完璧に見えているのに体がついていかず、避けることさえも出来ない僕自身が憎い

「なんだ？その目は？お前なんて生かして貰ってるだけでありがたいと思え、――――と違って本当生きる価値さえねぇのにな」

「っぐふ……」

木刀に何回も殴られて、体全体が痛い……頭を掴まれて――――と視点が合う……

僕と視点が合った瞬間、汚い物を見るような目をして、そのまま床に叩きつけられる。

もう……い……や……だ……

そこで僕の意識がぷつっと途切れる。

「は……！なんなんだよあれは……」

あの後フェイトがなぜか付き添いながら家に帰ってることになり、少し休憩するつもりでソファで休憩したものの食事の準備をすることなく、座ったまま寝てしまったらしい。

目が覚めたときには朝になっており、ご丁寧にわざわざタオルケットまで掛けられているがさっきの夢の影響かグチャグチャで皺だらけになっている。

……あの夢は分からん……いや考えてはいけない気がする、うん

いつの間にか大量にかいていた汗を拭って、大きく深呼吸をして気持ちを切り替える。

それにしても……お願いされている食事用意しないなんてなっていうか駄目だな俺

頭を抱えてため息をついていると、誰かの足音が聞こえる。

「坊主起きたのかい？それじゃあ朝食の用意頼むよ」

「分かりましたが、昨日は作らずそのまま寝ちゃってすいません」

足音の主はアルフで、そのまま向かい側のソファに座って、くつろ

ぎ始める。

謝ったものの、アルフは苦笑いを浮かべるばかりで怒った様子はない。

「それはいいよ。坊主の有り難み実感しちまったし、フェイトに言われて起こさなかったこちらも悪いしね」

……あぁフェイトに心配させちゃったか、まあふらついちゃったし当然か

あれ？なぜ作らないことで有り難みが実感できるんだ？

「有り難み？」

「そう、有り難みだよ。坊主を寝かせることに決めちゃって、カップラーメンを久しぶりに食べてたら坊主の食事になれていたのか不味く感じちゃってね。あたしとしては複雑だけどね」

「複雑って？胡散臭いからですか？」

そう聞くと苦笑い浮かべていた顔が優しげな笑顔に変えたアルフ。

「もちろん胡散臭いからもあるけどそれよりもフェイトが素直に感情を表してくれるようになったの坊主が来てからだし、今回の食事の件でなおさらあたし達の生活で必要になっているのが分かって悔しい限りだよ」

……そりゃあ胡散臭くて怪しいやつが切り捨てづらい者になってたら複雑だが、悲しめばいいのか喜べばいいのかの分からん俺の方も

複雑なんだが

悔しいならなんでそんなに優しい顔で笑っているんだよ、あぁアルフまでこうだと調子狂うな

「なぜ俺にその話を？子供に話しても正しく理解できないかもしれないと思うんだが」

「……それを言っている時点で理解していると思うんだけどね、それとフェイトに感謝しな、そのタオルケットをかけたのもフェイトだからね」

本当……フェイト優しいよな、それに比べて俺は……うん申し訳なくなってくるな

とりあえず……自分の出来ることをしないとな

「フェイトが来たらお礼言うことにする。それでは食事作ってくるよ」

「おいしいの頼むよ」

そう言ってタオルケットを畳みソファに置いて立ち上がるとアルフはさきほどしていた苦笑いに戻り、片手をあげて見送られる。

そして俺は朝食を作るため、キッチンの方へ向かった。

キッチンで朝食の準備をし出すがいつもより遅い時間に起きたため、ご飯、わかめと豆腐の味噌汁、目玉焼きとサラダといった簡単の物しか用意することしかできずにまた申し訳ない気分になる。

食器を出し、器によそってテーブルに並べた頃にはフェイトが起きているみたいで、アルフ共々食事をするいつもの席に座っている。

並び終えたら、俺もいつもの席に座り、アルフ達と一緒に合掌してごはんを食べ始める。

タオルケットの件のお礼を言いたいもののタイミングが図れず、味噌汁を啜りながらフェイトを少し見ていたら、お椀を置き、不思議そうに小首をカクっと首を傾げられたから思わず顔をそらしてしまう。

そのままタイミングが図れず、食事が終わってしまう。

このままじゃまずいよな……ってなんで俺変に初心な反応してるんだよ

「フェイトタオルケットありがとね」

「え？……うん結城が風邪を引くの嫌なだけだからいいよ？」

「それでもありがとう」

……食器を重ねているフェイトに突然いうの強引だったかね、若干

戸惑ってるし……

突然声をかけたため、少しだけガチャっと鳴っただけで大事になることはなかった。

いきなりの声で少しだけ食器が危なかった事に気づいているアルフには呆れた顔をされたが。

「……結城はおいしいご飯作ってくれたり、私達のお手伝いしてくれるから私の方こそありがとう。結城にお礼言われるやっぱり嬉しい」

本当に嬉しそうに笑ってそうフェイトが言うものだから強引でも言って良かったと思える気持ちがいっぱいになるが少しだけ恥ずかしさも出てくる。

そのままフェイト達が重ねた食器達をキッチンで洗い、片付けていったが、話しがあるらしく片付けが終わったら食事をしていたテーブルの席に座る。

フェイト達の顔見たところ……そんなにやばい話しじゃないと思うんだがなにかね？

フェイトは真剣顔をしてこちらを見ており、アルフは渋い顔をしてはいるが切羽詰まったものではなく、少しだけ苦々しい顔している感じだった。

「坊主、今日は手伝いをしなくていい」

「なんで……だ？」

やっぱり……たまに敬語出そうになるな、まあ相手年上っぽいしな

さて、俺を外さないといけない理由は……あぁ考えられるの一つだけあるな

だがそれだと苦々しい理由が分からんな

「昨日はふらついていたから、心配だから今日は休んで欲しい……」

「それでも迷惑はか「坊主、それにあたし達は今日行く場所があってね。そこには坊主連れて行けないんだよ」行く場所？」

苦々しい顔をしながら軽く頷いてみせるアルフに少しだけ違和感を感じるものの今は気にしないことにした。

「行く場所？どこなんだ？」

「それは言えない。まあフェイトが言ったとおり今日は休みな、昨日の帰ってきた様子見ると坊主がポカやる可能性が考えられる。たたでさえ弱いのに足手まといになりたいかい？」

はぁ……足手まといになるかもしれないのは本当のことだしな……

フェイトは複雑な顔をしているが、目は心配げにこちらを見ている。

こりゃあ大人しく引くしかないか……

「……分かった。今日は休みます」

「物わかりがいい子は好きだね。まあ明日は連れ回すからゆっくり休みな」

アルフはこれで話しは終わりっと言いたげに、部屋に戻っていき、フェイトは数十秒程度こちらを見つめていってから、「ちゃんと休んでね」と釘を刺して部屋に戻っていった。

リビングのソファに座り、休憩しようと思ったものの、今着ていた服が若干くさいため、自分の部屋に行って服を着替えることにして、着替えた後、数日くらい貯まっていた自分の服達を洗濯機に突っ込んで、洗濯機を回してからようやくソファに座り、休憩し今日は何をするか昼食準備する時間まで考え続けた。

昼食を準備する時間になるとキッチンに行き、冷蔵庫をあけて少ないレパートリーの中から何品かを引き出し、昼食を準備し続けた。

こんなものかね……そろそろレパートリー増やさないといけないかね……

昼になったころになると、料理も完成し、器によそって料理を並べ終わった頃にフェイト達がきて席に座って合掌して食事を始めた。

「結城……」

「フェイトなんだ？」

暫く食事をしていると、いつも食事の時は話しをかけてこないが珍しく茶碗と箸を置き、真剣な顔をして声をかけてきた。

ん？……珍しいこともあるな、なにか重大なことか？

「いつもより味噌汁おいしい……」

「ん？少しだけ隠し味をな」

「そっか……」

あれ？……そんなことか？、こういうの聞くのって真剣な顔して聞くものなのか？

「結城……」

「なにかな？」

今度こそ真剣な話しか！？

今度は茶碗を置き、身構えで次の言葉を待つ。

「……いやなにもない」

「そうか……」

はぁ……結局なにがいいたかったんだよ。でもなにかを言いかけるってよほど言いにくいことなのか？

なら聞かない方が得策かな？……

結局この後会話が無くなってしまい、フェイトはなにを言いたかったのか分からずじまいだった。

フェイト達は一旦部屋に戻り、外に行く準備をして、玄関へ向かっていく。

それを見送るっという少し前の風景をもう一度繰り返すこととなった。

「フェイト、アルフさんいってらしゃい」

「坊主いってくる」

「結城……いってきます。ちゃんと休んでね？」

……そんなに心配なのか？フェイト

アルフはこちらを見ずに、手と言葉だけ返してくれてそのまま玄関へ行く。

フェイトは顔を見て返してくれたが、その場に止まり、心配そうにじーっとこちらを見ている。

「フェイトは気をつけて行くこと、そして俺はちゃんと無理せず休むからな？」

「うんわかった……それじゃあいってきます」

フェイトは嬉しそうな顔をして、返事してくれてそのままアルフを追いかけるために駆け足で行ってしまった。

さて……どうするか［屋上へいけ］、な？……

（マスターどうしましたか？）

（「……屋上に行くぞ」）

（はぁ？いきなり何を言っているんですか？）

突然の発言でラインが色々聞きたそうにしているが無視をする。

どうするか考えた瞬間、なぜか屋上へ行けという声が聞こえた気がする。

どうしても行かないといけない気がするため、靴を履き、マンションの屋上へと急いだ。

屋上のドアを開いて、周りを見渡してみるが誰も居なかった。

なんだったんだいったい……

（マスターいきなり屋上なんてなんできたんですか？）

（「いや呼ばれた気がしたんだよ」）

（はぁ……そうですか）

ラインは疑っているようだが……本当にそんな声が聞こえたはずなんだけどな……

［目……を……閉じろ］

！？……今度ははっきりと聞こえたぞ

（「ライン聞こえたか？」）

（？なにがですか）

要するに俺しか聞こえないってことか……さてどうするかね

普通はそんな不思議な現象を信じる気にもならないものの、信じた方がいいと本能的に感じる自分があり、それを信じることにした。

「ん！！！！！！！！！！！！！」

『マスター！マスター！どうしたんですか！』

目を閉じた瞬間、いきなり頭に入ってくる情報で頭に尋常じゃない痛みが走る。

痛い痛い痛いいたいいたいいたいイタイイタイイタイ……

もう声が出せないほどの痛みで悶え苦しみそうになった瞬間ピタッと痛みが治まった。

「はぁはぁ大丈夫だ。いきなり頭がい…たく…なって……」

『どうなさいましたか？』

「瞬動……縮地……」

なんだこれは……名前と伴って瞬動と縮地のやり方が……浮かんでくる？

そう、浮かんでくる、先ほどまで知らなかった武術の歩法二つが……。

でもこれ……夢の中の俺が練習してたものそのままじゃないか……

また夢のことを考えそうになって一瞬冷や汗がでそうになるが、深呼吸をして心を落ち着かせる。

『大丈夫ですか？先ほど意味不明なことをつぶやいていましたし』

「あぁ頭が痛くなったのが収まったら、瞬動と縮地という二つの歩法のやり方がなぜか分かっている状態になっていてな。正直意味が分からん」

声の主が原因だと考えられるが……わざわざそんなことをする意味が分からんしな、今回はありがたく使わせて貰うとするか

『それではできるようになったわけですね』

「いやできん」

『はぁ？要するに分かっただけで習得したわけではないと？』

正直この瞬動と縮地やり方教えられただけですぐにできるようになったら化け物だと思うしな……

「残念ながらそういうことだ。まあ習得は必死にすることとしてその前にやりたいことがある」

『なんですか？』

本当は休むつもりだったのだがな……どうやらこの歩法を頭に叩き込んだやつはまだ休むなと言いたいらしいしな

「瞬動と縮地の修行する前に魔導師として一応中距離か遠距離の攻撃魔法くらい覚えないとな……そんなことしたらばれるしな」

どう考えてもユーノというイタチもどきような結界を張る技術を持ってないと無理だしな……

『あぁそれは大丈夫だと思います。マスターは出せる出力も低いと思いますし、ここ結界張られていますので』

……要するに弱いからあちらさんがそんなもの気にするわけがないってこ……結界？

「……結界が張られているのか？」

『マスターと一緒に住んでいる少女達がやったのでしょう……設置型ではありますがここを中心にある程度の範囲で張られていますね』

「だから今まで追われたことがないわけか……あれ？結界内を視認・結界内に進入する魔法を持つ者には意味無かったよな？」

ユーノあたりとかにばれそうな気もするんだが……

『なぜそこまで知っているのかは知りませんが……私はある程度の魔法を任意で行使できますから今探知魔法関係で調べたのですが範囲はそんなに広いものではないですし設置型なのでまったく移動で

きませんし張られている期間も限定的ですね……その分こと認識妨害ではもの凄く組まれています』

「どれくらいにだ？」

『許可された者以外屋上からの侵入がよほど高度な魔導師以外不可能なレベルです』

うん……あれだ、やっぱり原作とかとずれた世界のようだな……俺はこんなのがあるとは知らないぞ

「そうか……フェイト達は高度な技術があるんだな……」

『そうでもないみたいですね。調節はあの少女達できるみたいですが、構成している魔力は違う人です』

多分フェイトの母親か……まあこれで魔法が練習できるからいいのか？

「色々と気になる点もあるし色々突っ込みたいがとりあえず……ラインブレイクセット・アップ」

『ラインブレイクセット・アップ……それはあきらめてくださいな』

まあ今回も聞かなくてもいいか……いつかは話してくれるようだし

「……ライン、何が出来るんだろうな？」

『そういえばマスターって魔法関係の師いないですからね』

……誰にも習えないしな……クロノ執行官は敵みたいなものだし、なのははもってのほかだし、フェイトには……頼っちゃいけない気するしな

「あはは、これじゃあなにもできんな」

勢いで始めたものの最初から躓いており、最初から分かってもおかしくないことをここまでくるまで気づかなかった自分が情けなくなって、ため息ばかりが出てくる。

『はぁ……仕方ないですね。元々は魔法とは違いますが魔法応用もできるものがありますからやってませんか？』

「あるのか？」

『とりあえず私を信じてみませんか？』

今まで信じて上手くいったんだしな……よし信じてみるか

「おう頼むな」

『はいはい、それでは剣を横で構えてください』

言われたとおり両手で持ち、横にして構える。

さすがに大剣のため、重さがそれなりにあるが今までの士郎さんと行っていた稽古のおかげかなんとか水平にしたまま維持することができた。

『マスターは何回かスキルで魔力使っていますが、その魔力の流れ

を剣に行き渡らせるように流してください』

未熟者にはなかなか難しいこと言ってくれるな……でもなんとか……きついな

眼を瞑り、集中して魔力の流れをなんとかコントロールしながら剣に流していく。

吸い取られていく感じにも取れるため、短くも長くも感じてしまう。

『マスター今です！剣をそのまま横斬りしてください』

その声で眼を見開き、今できる最大の剣速で振ると、灰色の大型の三日月形が前に飛んでいき、かなり離れてから徐々に小さくなって消えていた。

『マスター今のは私の知識を元にマスターの魔力で作った物です。まあこうやって一々時間かけて作るのもいいですがキーコードとなる技名をつければ自動的に今の工程しますからつけてみたらどうですか？』

「あぁ……若干驚いたがありがとな……」

『いえいえまあ早くつけちゃってくださいよ』

……やっぱりこいつ色々と他のデバイスと違うよな？、さて名前か……

先ほどの風景を思い出しながら思考を巡らせていると一つの名前が浮かんだ

「斬波かね？まあ俺のボチャブラリーが少ないからありきたりの物しか思いつかん」

なんかどこかの赤髪の女剣士さんのある技ともの凄く似ているが……気にしないでおこう

『斬波で登録いたしました。まあそんなの少ないの知っていますよ』

こいつ……はぁラインに関してはもう諦めるしかねぇな

その後技名を唱えてからの斬波も試したが、先ほどよりもかなり出が早くなり初めての攻撃魔法もどきを習得することが出来ものの二発撃つだけでだいぶ魔力が取られたため、デバイスをスタンバイモードに移行し、そのまま長距離移動用の縮地の修行を晩飯の準備時間まで続けた。

準備時間になったら、屋上からマンションの一室の家に戻り、シャワーを浴びてから料理の準備をし始めた。

料理が完成し、フェイト達を待つばかりだが、いつも帰ってくる時間になっても帰ってくる気配さえない。

そのうち料理がすっかり冷えてしまうが、未だに帰ってこない。

フェイト達どうしたんだ？……そういえばこんなこと前に一度……もしかして今日母親へ報告しにいったのか！？

そう、記憶に残っている限りこんな風に帰ってくるのが遅れたことは大量の傷を抱えて戻ってきたあのとき以外になかった。

そんなことを考えていると、玄関のドアが開く音がし、急いで玄関へ出迎えに行くと苦虫をすりつぶしたような顔をしているアルフと、痛々しく笑うフェイトだった。

「フェイト、アルフさんおかえりなさい」

「あぁ坊主帰ったよ……」

「結城ただいま、帰ってくるの遅れてごめん」

やはりあのときと同じでフェイトは腕を必死に隠そうとしている。

……やっぱりこんな風に誤魔化すのってフェイトの母親関係しかないよな……

「フェイト、腕を見せてくれるかな？」

「……わかった」

フェイトと少しだけ見つめ合うと、観念したのか怖がりながら腕を差し出してくる。

やはり腕には擦り傷などがあるが、前となにかが違っていて若干の違和感を覚える。

そうやってフェイトの腕を見せて貰っていると、アルフが突然壁を殴りつけた。

「……あのクソババア、フェイトにこんなことして……」

「アルフ……お母さんの悪口言っちゃ駄目……」

アルフは俯き、腕をだらんとさせているが、手は爪が食い込むくらい強く握られている。

「なんで……フェイトあのクソババアのこと庇うんだい……坊主すまないね、少しだけ部屋にこもってるよ」

「アルフ！」

フェイトの声にも振り向かず、そのままアルフは俺の横を通り過ぎ、部屋へと入っていった。

……フェイトの声にも振り向かないくらい、怒りを覚えていたのか……目の前で傷つけられたら俺だって悔しいからな……いや分かった気になってはいけないな

「フェイト……治療するからリビングに行こう」

「うん……わかった」

フェイトは俯いているが持ったままの手で引っ張るとそのまますんなりと着いてくる。

フェイトをリビングのソファに座らせ、部屋から救急箱を持ってきて治療を始めた。

そして治療を初めてやっと違和感の正体が判明する。

……前と同じで両腕両足に傷はあるが、前よりも……浅いし少ない？……ってことは前よりも手加減されているのか？

いや気のせいかも知れない、でもなにかあるのかもな

傷のいくつかも治りかけのため、消毒だけして治療を終わらせた。

「フェイト終わったよ」

「結城ありがとう……」

俺もフェイトの横に座り、そのまま少しだけの沈黙が流れた。

「結城聞かないの？」

フェイトが不思議げにこちらを見て、カクッと小首を傾げて聞いてくる。

……毎回こういう風にされると思うが、やっぱり破壊力はあるな、うん

「そうだな……フェイトが俺について深く聞かなかったから俺もフェイトが言ってくれるまで聞かない」

「ん……ありがとう」

頭を撫でながらそういうと、フェイトは先ほどの痛々しい笑顔ではなく、本当に嬉しそうに笑ってくれた。

本当は深く聞いた方がいいんだが……フェイトの言いたくないこと

を言わせたくないしな……

あまりにも純粋に笑ってくれるフェイトの破壊力も高いため、ついつい数分くらいなで続けていた俺がいたわけだが。

「それじゃあ食事を温めてくるから、アルフに声かけて席に座っていてくれる？」

「うんわかった」

あはは……本当に俺なにやってるんだろうな……うん元々の目的を果たしに行くか

なでる手を止め、食事を温め直すためソファから立ち上がり、キッチンへ行き、準備に取りかかった。

温め直し、テーブルに並べた頃には気持ちが落ち着いたアルフも席に着いており、フェイト達と合掌して今日の晩ご飯を食べ出した。

13話　初めての魔法（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想お書きいただいてありがとうございます！」

真「なぁ？作者よ。なぜこんなグダグダ展開を書いた？」

元「う……すいません、自分的に高速展開したかったんですが……実力不足でこのようなものが……」

真「まあいいや。元々実力不足だしな」

元「あはは、悲しいけどこれ現実なんだよね」

真「……そういえば今回登場した瞬動と縮地の説明してないんじゃないか？」

元「それは次回に分かるはずです」

真「色々詰め込みすぎたな。ばかめ」

元「うぅぅ馬鹿でいいんだい」

真「とりあえず締めに入ろうか」

元「ごっほん。ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度ニヤニヤしており、感想なんて書かれたときには悶え苦しむように喜んでいます」

元「なにか感想、誤字脱字等々あれば感想板などでお書き頂けるとうれしいです」

真「それでは」

真・元「また次回お会いできることを楽しみにしています」

１４話　海での戦い（修正版（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
今回は急展開のため作者の実力不足で表現しきれず、読みにくい点があることを先に謝罪させていただきます。
それでは一人でも多くの人に楽しんでいただけることを願いつつ、本編に移ります。

１４話　海での戦い（修正版

黄色い魔弾が次々とこちらに打ち込まれてくる。

なんとかそれをギリギリ避けて、隙を突き、一気に相手への接近を図る。

「フォトンランサー・フルオートファイア！！」

微笑みを浮かべた夜にもよく分かる金色の髪を靡かせた少女の連続発射した槍状の魔力弾で迎撃されることになるが。

っく……まったく歯がたたねぇ…

これまたギリギリのところで避けるものの体のすれすれを通り過ぎていっているため本当に避けているかと聞かれたら悩みどころだが。

体を独楽のように回転させ、フェイトの動きを一瞬でも止めるべく一撃をかます。

「斬波（ざんは）！！」

出来た当初よりも速度も威力も上がってはいたがまだまだフェイトに撃たれた槍ほど早くないので、回避されるが撃つの一瞬だけ止めることは成功する。

まだまだ中距離遠距離戦苦手なんだけどな……まだ手加減されているかましだがな

回避されてすぐに、フォトンスフィアを生成して魔弾を撃たれまくるが、後退して必死に回避をする。

そもそも防御魔法の強度があまりないこちらとしては防御して耐えるという手が使えない。

手加減して貰ってなんとか渡り合えているがきついな……

撃ち終わりの一瞬を狙い、一気に再度接近をして、反射で何発か跳ね返し、フェイトが咄嗟にシールドを張った隙を突いて、近接戦闘できる距離までこぎ着ける。

フェイトは瞬時にデバイスをサイズフォームに切り替えて、近接戦闘へと移行させる。

フェイトが得意な機動力を生かした攻撃を、今までの士郎さんとの積み重ねた稽古のおかげか、死角からの攻撃も含めて防ぎきり、一瞬動きが止まったのを好機と見て近距離で斬波を放つ。

さすがに避けきることが不可能と判断したのかシールドを張ったので、斬波がシールドに当たった時の爆発に乗じて、大剣が確実に当たる間合いまで詰め、ブリッツアクションもどきで死角を突き、斜め上に振り上げて一撃を放とうとするが、首に魔力刃の鎌をかけられたため動けずそのまま動きが止まる。

「……フェイト降参するよ」

「あぶなかった……結城少し強くなったね」

降参して片手で剣を肩に担ぐと、フェイトも首にかけていた鎌を首

から離してくれる。

俺が少し強くなったことを自分のことのように嬉しそうに笑うフェイトに悔しさはあるが嫌な気分になることはなかった。

なぜフェイトと戦っているかというのを説明するには、話しを七日前戻さないといけない。

魔法が初めてできるようになった翌日から屋上で朝から昼準備の間は、縮地を習得するため、修行を昼準備する時間まで続け、晩飯を食べ終わった後にラインを使った自分なりの自主鍛錬していたわけだが、フェイトにその日のうちにばれて、自主鍛錬を切り上げて家に戻るとフェイトが待っていたわけです。

そこでフェイトに魔導師としての模擬戦といくつかの魔法を指導すると提案され、断ろうとしたものの嫌がっていると思われて不安げで悲しそうな目されたら断り切れなかったという経緯だ。

そこから朝から昼の準備の間は縮地鍛錬半分魔導師としての魔法講座、晩ご飯を食べ終わってからの何十分間は模擬戦になり、却下すると思っていたアルフもこれを認めたため実行されることになった。

そこから7日からずっとそのスケジュールでやっているため、だいぶ飛行戦闘もましなレベルくらいにはなった。

大剣モード（？）はどうやら杖という側面があまりなく、剣という側面が大半のため魔弾がまったく作り出せないので、軽い補助関連や飛行においての高速移動等を習うだけだが。

「そういえば明日は海の方にジュエルシードがある可能性が高いか

らそちらの方面出向くのだっけ？」

模擬戦が終わり、屋上に降り立ったため、明日の話しをフェイトに振ってみることにした。

「そうだよ……結城も手伝ってくれるからなんとかジュエルシードを二つほど手に入れられてもうここのジュエルシード反応がしなくなったから……」

……なのは達にも三つほど奪われているが……管理局相手にこれ以上望める物でないか

「俺はまったく役に立ってないけどな。
戦闘はフェイト達まかせだし、ただ俺は反射を使ってジュエルシードを黙らせて封印しているだけ。
俺としては広域探知で無理しているフェイトが心配だ、本当に俺なんての修行に付き合わず休んで欲しいんだがな」

そう……最近焦っているのか、いつもはぎりぎりまでしない広域探知を連発して必死に探し出そうとしている。

それなのに押し切られて手伝わせている自分が正直情けない……結局戦闘がフェイト達任せなのがもっと情けない

「私が結城の鍛錬手伝うって押し切ったんだから気にしなくていいそれに結城の反射っていう能力には助けられているから、一々封印をするために大量の魔力使わなくてもいいっていうだけで」

最近反射が使い慣れてきたから一応は的確に即発動してくれるが……やっぱり使うと魔力量がまだまだ少ない身としてはだいぶ持ってかれてきついな……

それにしてもやっぱり……無理していることは否定しないのか……

悔しさで思わず強く手を握りしまったのか、手に痛みが走るがフェイトに気にされないように手を隠す。

「それでも無理はあまりするなよ？まあ俺に何ができるか分からんがなにかできるとはおもうしな」

「私は結城がいるだけで今は充分だからいい

それに明日で、もしかしてあちらの白い魔導師と私達が持っているジュエルシード以外のジュエルシードをまとめて回収できるかも知れないから」

そう言い終わると少しだけ複雑で悲しそうな顔をしているフェイトがいた。

……悲しむような要素があることってあったっけ？……まあいいか、どうせ明日がくれば状況は動く

先が分かるため、この後の無印で起こる可能性があるイベントを思い浮かべるが、良くも悪くも状況が急激に動くイベントばかり。

「明日のことと関係ないけど……一つだけ聞いていい？」

明日の話が終わるとお互いにデバイスをスタンバイモードにして家に戻るため、屋上の出口に向かうがフェイトに呼び止められたから振り向くと先ほどと違って少しだけ笑顔浮かべてこちらのほうをじっとみている。

「フェイト何だ？」

「結城の修行に付き合うようになってから気になっていたんだけど……結城は縮地と瞬動のやり方分かったから覚えようとねっと教えてくれたんだけど、なんでやるのは縮地だけ？」

フェイトは不思議げに首を傾げ、こちらを見る。

そういえば……説明してなかったな……

「縮地は二歩一撃と呼ばれる1、2のタイミングではなく1のタイミングで2歩駆ける歩法なんだけど、瞬動は目指してる物が違って自分の認識できる速度で短時間動くっていうものだからね……まだ短期間でなんとか物にできそうなのは縮地だからな」

本当は……もしかしたら俺の勘違いじゃないって可能性あるから縮地を早く覚えたいんだけどな……

まあほぼ物にできているが……不安は残るな……

「そっか……少し分かりづらかったけどなんとなく分かった」

フェイトは追い越していき、フェイトを追いかける形で家へと向かった。

（マスターお話があります……）

（「これから寝ようとしているのになんだ？」）

フェイトと別れ、自分の部屋に戻ってベットに入ったときにラインから念話が入る。

だがこいつが話しがあるって言うときは大抵重要なことも多かったしな……

（デバイスフォームのロックが解除されたことだけお伝えしようかと）

（「……解除？今までロックされていたのか……どうして今更解除された？」）

（あの少女（「いい加減名前で呼んであげろ」）はっ、フェイトさんとの模擬戦などでロック解除の水準まで達したので使用できるようになりました）

はぁ……いまさら解除されても扱える自信ないしな、今回の流れでは使えなさそうだな

（「わかった、一応ロック理由とフォームの種類聞いていいか？」）

（ロック理由は、お分かりだと思いますが実力が水準以下ですと危険でしたので、種類はツーソードモード・シューティングモード・ソードバスターモードですね）

ツーソードとシューティングまではわかるが……ソードバスターっ

てなんだ……まあ無印終了時に試してみればいいか

（「わかった……また後で色々と聞くからな」）

（はいわかりました。それではおやすみなさいませ）

話しが終わったら疲れもあったのだろう、早々に眠りの世界に旅立った。

翌日は予定通り昼ご飯を食べ終わった後、人目のないところでデバイスを起動し海へと向う。

目的地に着くと早速フェイトが広域探知を発動し、探ってみると予想通り海の底にジュエルシードが沈んでいる様子だ。

「フェイトどうするかい？これじゃあ取りに行けないよ」

アルフが誰も取りに行けないため、慌てたようにフェイトに聞く。

っく……攻撃ないと反射もできんしな……状態反転も物体反転もまだまだ使いこなせないしな……

「……アルフ、結城。私に任せてほしい」

おもむろにフェイトはバルディッシュ掲げ、目を瞑り小さく深呼吸をしてなにかに集中しようとしている。

「アルカス・クルタス・エイギアス　煌きたる天神よ　今導きのもと降りきたれ」

そして落ち着いた声で儀式魔法であるサンダーフォールの詠唱を開始した。

まさか……あれを撃つのか、疲労も取れきれてないし若干不安になるな……ってこれよく思い出してみたらジュエルシード同時発動するじゃねぇか

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル　撃つは雷　響くは轟雷　アルカス・クルタス・エイギアス
……ハァ！」

だが気づいたときにはもう遅く、詠唱が終了し、大量の魔力が空に浮かんだ魔法陣に注がれ、そこから黄色い大きい球体状の物体がいくつか浮かび上がって球体と球体の間を雷が走った瞬間強い光と伴って、大量の魔力が含んだ魔力の雷が海に落とされ、すぐに轟音と共に竜巻が六つ生まれた。

っく、最悪の事態じゃねぇか……なにもできない自分に腹が立つ

フェイト達を見ると、アルフは呆然としており、フェイトはここまでの事態になるとは思わなかったらしく動揺の色を隠せない様子だ。

俺まで動揺してどうする……よし

深呼吸し気持ちを落ち着かせて、まずしたことはフェイトの傍まで行き、頭を撫でることだった。

動揺で俺の姿に視点を合わせられていなかったフェイトがようやくそれで俺が正面に立って頭を撫でていることに気づく。

「大丈夫だとは言えない状況だが、まあ落ち着け。望むなら落ち着くまでこのまましているが？」

慣れない励ましと、できるだけ自然な笑顔を浮かべようとするがちゃんと出来ているか心配になる。

まあこれ以外にフェイトを落ち着かせる方法は知らないしな……なんか人として駄目な方向いっている気がしてならない

「え？……ん、わかった。それよりも結城顔引きずってる……」

「あぁやっぱりそうなのか……それでいけるか？」

「ん、もう大丈夫。結城が撫でてくれると落ち着くけど今はこれをなんとかする。アルフ行こ」

うん……フェイトがぎこちないけど笑顔を作れているな……よし頑張るか

なんとかフェイトを落ち着かせることが出来て、竜巻があるほうを見直すもののやはりジュエルシードが同時暴走しているため、勢いが凄まじい。

「結城行こう」

「坊主置いていくよ」

いつの間にか俺を追い越していたふたりがこちらを振り返って待っている。

アルフはフェイトに声をかけられてようやく冷静になれたのか苦笑いを浮かべ、フェイトは笑顔で声をかけてくる。

そして二人はすぐ前を向き、竜巻が荒れ狂う中へと突入していき、俺も剣を担ぎ直し、後を追おうとするがその前に確認することがありラインに問いかける。

（「ライン……俺の力で今回なんとかできるとおもうか？」）

（かなり難しいと思います。マスターの跳ね返せる許容量余裕で超えています。万が一触れられたらあるいはって感じですね……）

自分でも分かる……それは無謀だと言うことを……

それでも……色々と恩を貰ったフェイトに対してこれくらいで退くなんてできないしな……

目の前で果敢に竜巻を止めようとしている二人の後を追い、俺も竜巻が荒れ狂う中に突撃をする。

ｓｉｄｅ　なのは

突然艦橋でアラームが鳴り出し、エイミィさんが驚きながらアラーム理由を確認している様子が見える。

「艦長、捜索域の海上にて、大型の魔力反応を検知」

「……エイミィ、その場所を検索して画面に出して」

「はい……出します、こ、これは」

フェイトちゃん達が作り出した雷みたいな物がちょうど海に撃たれた映像が映り出され、次の瞬間轟音と共に、海に6個の竜巻が発生した。

「えぇ！！六個です。ジュエルシード反応が一気に六個のジュエルシード反応が同時に出現」

「え……？」

一体……この竜巻はなんなの？……なんでフェイトちゃん達が……

「馬鹿な無茶をする子達だわ」

リンディさんが頭を少し抱えて顔をしかめて映り出される映像を見ている。

そこに映り出されるのはフェイトちゃん達がボロボロになりながら、必死に竜巻をなんとかしようとしてジュエルシードを封印しようとしている姿。

「わたしが出ます。たす「駄目だ」え？」

なんで！あのままじゃ死んじゃうの

ただなんでと思う心で咄嗟に言葉を遮った声の元を見ると、ただ冷たい目で画面を眺めているクロノ君の姿があった。

「このままあの三人の自滅を待つのが一番こちらとしては被害が無い方法です……」

最後の方にほんの一瞬だけ、とても悔しそうのと悲しそうなのがごちゃ混ぜにした顔を浮かべたのは……気のせいかな……

「それが妥当なところかしら」

リンディさんもクロノ君の意見に同意するように頷く。

……なんでなの……助けたいと思うなのはがまちがっているの？

思わず俯いてしまう。

脳裏に浮かぶのは、何回も対峙してきてどこか気になる雰囲気があるフェイトちゃん、なによりわたしよりも大きい剣を持っている灰色コートの黒髪の男の子のことだった。

フェイトちゃんを見る目がとても暖かい目をした男の子……初めて会った時は怖かったでも、フェイトちゃんと向けている目に気づいたらあの男の子がとても悪い人に見えなくなった、その男の子にそうみられているフェイトちゃんがなおさら悪い子にみえない……助けたいの、そしてちゃんと話したい

「リンディさんわたしはフェイトちゃん達を助けたいの」

「命令に背くという事かしら？」

わたしの言葉に振り向いたリンディさんと正面から見つめ合った。

絶対助けるの……それを決めたの

「なのは、行って」

後ろから今まで何でも危機から救ってくれた声が聞こえる。

「なのは、僕がゲート開くからあの子の元へ行って」

「ユーノ君ありがとう……」

振り向いて小さい声でお礼を言うと、ユーノ君小さく頷いてくれる。

途中から人間の男の子って気づいて驚いたけど、今までと変わらず救ってくれる男の子。

ユーノ君……本当にありがとうなの

「誰か命令違反しようとしている子達を止めて！」

「なのは、早く！」

頷いて、フェイトちゃんを助けるためにユーノ君の開いたゲートに飛び込んだ。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

「さてはてどうするべきかな……なんとか威力の高い魔法で止めること出来ればいいんだけど」

「はぁはぁそうだね……」

「……魔力足りない、もしあっても私達だけじゃ威力不足で止めきれない」

見事にまあ……俺達ボロボロだな……無理矢理止めようと足掻いた結果か……

一回体勢を立て直すために退いたものの、フェイトのバリアジャケットは無数の切れ目が入っており、アルフも同様の状態だった。

俺も灰色のコートには無数の切れ目、中の黒いシャツまで無数の切れ目は広がっており、一旦肩に担ぎながら持っている剣も心なしか重く感じ、段々となんともできない絶望感が襲われてくる。

……そういえば戦闘はフェイトとの模擬戦のみだしな……初めてここまでボロボロになったな

「フェイトもう無理だよ」

「まだ諦めない」

引き留めているアルフも、心配はしているが諦めている様子もなく、フェイトはなんとかたぐり寄せようと必死に考えている様子だった。

それに比べて悪い考えしか浮かばない自分に対して、思わず苦笑いを漏れだしてしまう。

アルフはこちらを見ていたのだろう、俺と同じように苦笑いを浮か

べる。
さてフェイト達の目はまだ死んではいないが、時間の問題でもあるな……
「あ、あれは……」
今まで対峙をしてきた白い魔導師……なのはが突然上から出現し、俺達の前へ立ちはだかる。
咄嗟にフェイト達は構えるが、この場面には見覚えがあり、俺は構えずただなのはという少女を見つめた。
「わたしは争いに来た訳じゃないの」
デバイスを握りしめてはいるもののこちらに向けず、杖を上に向けて片手で握りしめている。
……そういっても信じてもらえる可能性皆無だと思うんだけどな……
「そんなこと信じられるかい！？」
飛び出そうとするアルフの前に剣を突き出し、アルフを引き留める。
「アルフさん待って」
「坊主なにをいうんだい！？」
「話しを聞いてからでも遅くない」

さあ頼むぞ……せめてこの場はなんとかしたいんだからな

俺の意見に同意してくれたのか、今にも飛び出そうとするのを止めて、話しを聞く気になってくれた。

フェイトはただ前に立ちはだかるようにいるなのはを構えながら睨むばかり。

「それでなんですか？」

「フェイトちゃん、手伝って、ジュエルシード止めよう！！」

フェイトは驚いた顔を浮かべて、なぜかこちらの方を振り向いたのでフェイトの自由にしろっという意味合いを込めて小さく頷くと、フェイトはなのはへ向き直った。

なのははその様子をみて、こちらに笑顔を向けてきたのが少しだけ意外だった。

……怖がられているとおもったんだけどな……思い違いだったか？

突然フェイトのバルディッシュは桃色の光に包まれ、フェイトが動揺している。

光が静まると、なのはは笑顔を浮かべてフェイトを見ている。

「……これでフェイトちゃんの魔力も回復したと思うの、二人で半分ずつ同じ魔力！！」

一息ついて、笑顔を浮かべながらも真剣であり、そしてまっすぐと

した目でフェイトを捉えている。

いまだにフェイトの動揺は抜けず、迷った目でなのはを見ているようだ。

「アルフさんと男の子にお願いして竜巻を止めて貰って、一緒に封印しよ！！」

やっぱり主人公だな……いろんな意味でオーラが違うわ……ん？

そう言ってなのはは俺達から距離を取るため、離れようとするがふとこちらを振り向いて俺は見つめている。

「今まで聞けなかったけど名前教えて欲しいの」

「そういえばいってなかったですね。結城真夜です。フェイトをよろしくお願いします」

こういうのはなにか間違ってはいるが、自然と口に出た言葉だった。

なのはは苦笑いを浮かべて、ぺこりと頭をさげてから笑顔を浮かべる。

敵対してた俺に頭下げなくてもいいのにな……

「わたしは高町なのはなの。それじゃあわたしは準備するの」

そして今度こそ飛び立っていくなのはを見送る俺達。

「さてフェイトどうする？」

「……どうしようもないから協力してくる。アルフ達あそこで食い止めて」

指で俺とアルフが付く位置を指示して、真っ直ぐとなのはが飛んでいった先をしばらく見てからフェイトは、なのはの元へ向かった。

……まあ言い方があれだが、これでなんとかできそうかね

「アルフさんそれじゃあ頑張ろう」

「フェイトが決めたんなら仕方ないね」

アルフは苦笑いを浮かべながら真剣な目でただ竜巻のある方を見つめていた。

（「ライン……俺の力は役立つと思うか？」）

（マスターは半人前とも言えますし、なかなかきついと思いますよ……

いや、ソードバスターがロック解除されたから自動的にビックソードモードもデメリットも大きいがあのシステムが可能か……）

（「ビックソードモード？もしかしてこれのことか」）

ビックソードと呼ばれて思いつくのは今肩に担いでいる大剣のみだ。

でも……あのシステムってどういうことだよ……

（はい、使わないと思ってい「何ぼさっとしてるんだい、早くいく

よ」説明する時間ないのでぶっつけ本番行きます。これを止めたら戦闘なんてすぐにやらないですよね！？）

竜巻が間近まで迫っており、アルフが怒鳴ってそのまま行ってしまったために追いかけながらラインからの念話に応答する。

（「しないが、どうしてだ？」）

（説明は後です。所定位置まで行ったら私が言ったのを口頭で唱えてください）

……ものすごく嫌な予感するが、止められるならいいか……

そしてアルフが止まり、少し離れた位置で横並びするように位置に着く。

「それじゃあ坊主いくよ！！」

「了解、意地でも止める」

瞬時に担当分けをし、アルフは自分が担当する竜巻達の方へ飛び俺も自分が担当することになった竜巻達に突入する。

さてラインに、言うとおりにするかね……

両手で剣を持ち、正眼へ構え何が来てもいいように構えるしか、嫌な予感を拭いきれるものがなかった。

「ライン頼むぞ」

（あいあいさー。ビックソードフルロック解除、マジック・アトラクション移行）

「ビックソードフルロック解除、マジック・アトラクション移行！！」

『ビックソードフルロック解除承認、マジック・アトラクション機構解除承認』

デバイスからそのような声が聞こえると、大剣は鍔となる部分の両端が空き、空気からなにか光り輝く物が吸引され、吸い込みが終わると開いたところが閉じられた。

なんじゃこれは……あれ？何の意味があるんだ？

『マスター今です、斬波を撃ってください』

「あぁわかった。斬波！！！ってはぁ？」

いつものように剣を水平にし、魔力を乗せた横切り、そして放たれる大型の三日月、そこまではいつもと同じ。

だが、二つ分の竜巻を貫通し、三つめの竜巻にぶつかると爆発して竜巻を押し出した。

貫通された竜巻は一瞬ではあるが大きな穴が空き、動きを止めた。

「サンダーーーー」

「ディバイーンーーー」

少女達が魔法を唱える声が聞こえてきたので、竜巻から少し離れた位置に退却をした。

（ライン一つ聞く……あれはなんだ？）

（マジック・アトラクション、魔力吸収です。まあ今回は空気中にある魔力粒子を吸収し、圧縮してマスターが放つ魔法の威力を増幅させました。ビックソードで行う機構じゃないため、デメリットとして攻撃魔法一定時間使用不可、補助魔法と防御魔法がある程度のランクを超える物は一定時間使用不可）

もう……こいつにまかせるのやめようかな……まあ戦闘ないしいいか……

「レイジ！！」

「バスター！！」

そして放たれる桃色の魔砲と雷撃の嵐を受けたジュエルシード達六個は暴走をやめ、沈黙した。

フェイトとなのは達が居るところまで近づくと、なのはとフェイトが向き合っているのがみえる。

なのはの後ろの方から近づき、少しだけ遠いため、なんとかフェイトの真剣顔してなのはを見ているのしか見えず、なのはの顔が見えることはない。

「フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

顔がしっかりと見える位置まで近づくと、なのはのそんな言葉でフ

ェイトの顔が驚きで染まっていく姿が見える。

そこでふと原作の光景が脳裏に過ぎる。

……ってこのあとフェイトのお母さんからの雷撃が起こるタイミングじゃねぇか

今できる最大限のスピードでフェイトに近づく最中に、轟音と共に海に雷が落ちていっているのが横目で見えるが、そんなことよりもフェイトを守ることを優先する。

フェイトに触れられる位置まで近づいたら、正面からゆっくりと抱き寄せてから、俺は、剣を天に掲げて警戒しつつ空を見た。

「母さん……」

耳元でそう呟かれた言葉は動揺と絶望が混じった心の底から出た声のようだった。

っく……今はなにも声をかけることが出来ん……

片手で抱きしめている手をフェイトの頭に置き、優しく撫でることしかできなかった。

何も言わず、ただただされるがままだが、少しだけ力が入っていた肩に力が抜けていくのが見えて、少しはマシになったことを感じ取る。

そして何本かの雷がフェイトに向かって落ちてくるため、防げるか分からないが自分の今できる最大限のシールドを張る。

フェイトに落ちてくる雷をシールドで凌ぎきることが出来たが、そこで一つの違和感が出てくる。

なぜ……少しはマシになったものの強度の薄い俺のシールドで防ぐことが出来たのかと。

雷の嵐が終わり、フェイトを抱きしめたことを解いて、一旦離れようとするが後ろを向いた瞬間コートの後ろをフェイトに掴まれ、離れることも出来ない。

なのはの居る方をみると、なのはがこちらを見て真っ赤な顔しながら空笑いをしている。

そりゃあ抱き合っているの見てしまえば、正常な反応だよな……

ある意味フェイトが正常じゃないってわけでもないが……っん！？

突然黒髪黒服の人が転移してきて、海の方へと高速で飛んでいった。

突然転移してきて乱入してきたのはクロノ執務官で、海の方をみると先ほどの攻撃でジュエルシード六個が全て海から浮かび上がっており、ジュエルシードが浮かんでいる位置から近くにいたアルフが全力でジュエルシードがある方へと飛んでいく。

「邪魔をするな！！」

「それはこっちのセリフだね」

魔弾を飛ばし合いながらも、半分の三つのジュエルシードを確保し

て戻ってきたアルフを確認すると早々にこの場を離脱することを決めた。

「フェイト、坊主。三つしか確保できなかったのは残念だけど退くよ」

「うん……」

「それでは退くとしますか」

それにしても……なぜ俺でも防げる雷撃しか撃たなかったんだ

並んで移動しようとしているため、フェイトの顔をちらっとみると、まだ顔色が悪いが目は死んでいなくしっかりと前を向いていた。

「ま、いやまたね、フェイトちゃん」

はぁ引き留めようとしたのが丸わかりだぞ……

フェイトはなのはの声に一瞬だけ動揺するが、振り向かずそのまま離脱するために前を向き、移動を続けた。

家のマンションの屋上に着くまで、コートの後ろを掴まれたままだったが。

屋上に着くとそのまま、フェイト達はある人に報告と用事を済ませてくると言ってからなにかのコードなのだろう、小さい声で数字と英語を混じったのを呟いて空中に出現した黒い穴の中に飛び込んだ。

本当はその後の展開を知っているため、止めたかった。

だが、フェイトに聞かないと言った手前、何も知らない振りをしなければならない。

ただただ見送るだけしか出来ず、フェイト達が行った後気づかぬうちに強く握りしめて爪まで食い込んだんだろう、手が血だらけになっている。

穴にはいるときにふとこちらを振り向いて、寂しそうに微笑んだフェイトの姿が頭にこびりついて離れない。

その後一人きりの家に帰り、晩ご飯の準備するものの、その日フェイト達が帰ってくることはなかった。

ふと目が覚めると、まだ薄暗い。

タオルケットにくるまりながらフェイト達を待っている間に寝てしまったらしく必死に目で時計をさがして確認してみると午前四時。

しかしまだ人の気配が自分しかいないため、まだ帰ってきてないことに気づきため息を吐く。

無理矢理でも……引き留めていれば……もう言っても詮無いことか

自然と苦笑いが漏れてくる。

そんなとき玄関のドアが開く音がし、駆け足で玄関まで行くと疲れた様子でいてとても辛そうな顔して立っているフェイトの姿があった。

「おか「アルフが！！」……」

おかえりっと言おうとした俺にいきなり飛びついてきてその勢いで後ろに倒れていまい、地面に頭を打ったが、胸に顔を押しつけて服を掴みながらただアルフがっと壊れたレコードのように同じ言葉を繰り返すのみのフェイトに何一つ文句の言葉もでてこず、しばらくはされるがままだった。

「落ち着いたか？」

「ん……ごめんね」

しばらく経つとようやく再起動したのか、俺の上に跨って申し訳なさげに俯いている。

……まずフェイトさん？謝る前に馬乗りしている現状気づいて欲しいんだが……少し天然混じってるフェイトにそれを求めるのは酷か

「まずは俺の上から降りてくれないか？」

「え？……わかった」

ようやく俺の上から降りたので、体を起こし立ち上がる。

やっぱり申し訳なさそうに俯いているフェイトに手を差し出すと不思議そうにこちらを見ている。

「フェイトまず食事を食べてないだろ。だから話しは食事食べてからな」

「あ……うん、わかった」

ようやく意味が分かったのか、すこしだけぎこちないが笑みを浮かべてくれて、差し出した手を掴んだためそのままテーブルまで引っ張って連れていく。

十数分かけて晩ご飯を温め直し、フェイトと自分の分を並べていき、フェイトの正面に座る。

「「いただきます」」

そして合掌して食事を食べ始めた。

食事中は本当にいつものように静かな雰囲気で食べていくので会話がほとんど発生がしない。

十数分後にはお互い食べ終わったが、お互い箸を置いたもののフェイトは俯いて、俺はどう切り出した物かと考えてなかなか会話が始まらない。

……とりあえず、このままじゃいけないよな

「フェイト、リビングで話し聞かせてくれるかい？」

「ん……」

フェイトは小さく頷いて、何度も大事な話をしてきたリビングの方へ向かった。

リビング行くと先にソファへ座ったフェイトに隣に座ってくれるよ

うに、上目遣いで頼まれ、フェイトの精神状態も考慮を入れて承諾した。

……けっして、上目遣いで頼まれたから断れなかったわけではないはずだ……。

隣に座ると、腕の方の服を掴まれて、フェイトの方をみるとどうやら無意識のようで驚いた様子ですぐに離した。

「フェイト腕を見せて貰っていい？」

「あ……うん」

一応腕を見せて貰ったものの新たな傷はあったが全て傷を治されている。

こりゃあ……フェイトのお母さんはフェイトに特別な感情を抱いているのは確実か……それが親としてなのかまた別の感情かは定かじゃないが……

わざわざ傷を負わせながらも治療している時点で……プレシアさん貴方は貫くつもりですか……

ふぅ……いまだに直接関わりがない俺が悩んでも仕方ないな

「ありがとう。もういいよ」

「ん…」

フェイトの腕から手を離すと、自分の腕を胸元まで持って行き、大

事そうにもう一つの腕で抱えた。
そこから何度か深呼吸してから決意を決めたような顔になったため、体を捻って俺もフェイトを正面から見据える。
「……アルフは母さんの話だと戦いが嫌になって逃げたらしいんだ……」
あのアルフがフェイトを置いたままそんな理由で逃げるわけがない……
フェイトもそれに関しては信じてないらしく、複雑な顔を浮かべている。
「ジュエルシードの報告の他にも結城に会わせて言われて思わず断ってそれで……それで……母さんを……怒らせて……私気絶してて分からなかったけどかすかだけど床に血が付いてて……」
段々と俯いていき、血が付いていたという所から口を閉ざしてしまったがその先が容易に想像が出来る。
……やっぱりなんとなくだが、アルフに何かしたと思っているのか……
アルフのことだ……今日のフェイトへの攻撃に関して、そして報告しに行ったフェイトに対しての仕打ちで逆上したってところかね……なんだかんだとフェイト至上主義だしな
「アルフさんはフェイトを置いて死なないからきっとどこかにいるよ」

……当たり障りのない希望論しかいえない、そんな自分がなさけない……もっと上手い言葉が言えたらどんなにいいだろう

結局人との関わりがまだまだ経験不足の自分には安心してもらえるように頭を撫でながら傍にいることしかできない。

「ん……アルフとの使い魔契約まだ切れてないからどこかにきっと……それでもいなくなって……辛い」

俯いたままそう言って、そのままフェイトは何も口に出さず、ただただ撫でられているだけだった。

はぁ……結城真夜よ……見送った時点でこうなることは分かっていたことだろ……なぜ前もって慰める方法考えておかない……いや考えたくなかったのかもな

フェイトに悟られないように小さく苦笑いを浮かべると、いきなりフェイトは自分を撫でていた手を両手で掴み、自分の頬の方に持っていった。

「暖かい……」

フェイトが顔をあげると、寂しそうに微笑みを浮かべて一筋だけ目から涙を零した。

どうやらフェイトは涙が出ていたことも気が付いていないみたいで涙をふかず、ジッとこちらを真っ直ぐとした目で見ている。

フェイトが……気づいてないならこれはきっと今は突っ込むことで

はないだろう……

暫くして両手で頬に持って行っていた手を離したため、手を膝の方まで戻す。

「結城……今日だけ……一緒に寝て欲しい……」

「っぷ、フェイト何を言い出……さすがにフェイト達の部屋や俺の部屋で一緒に寝るのは駄目だからな。ここでっという条件ならいいぞ」

一瞬断ろうと思ったが……今日の精神状態、そして今にも捨てられてしまうんじゃないかと不安に揺れる目に気づいちゃったらな……譲歩をしても断りきれん。

とても嬉しそうに笑うフェイトを見ていたら、やっぱり断らなくて良かったと思えてくる。

まあ……まだ子供だからな……今日くらいはアルフの代わりになろうじゃないか

フェイトを迎えに行くときに放り投げたタオルケットがまだ近くにあり、こちらの方に引き寄せてフェイトに被せた。

「ほらよ」

「結城も……一緒に」

タオルケットの片方を差し出してくるフェイトと数十秒くらいそのまま見つめ合ったが、結局押し負けて片方を掴み、自分にもかけて

二人でタオルケットに丸まっている状態になった。

うん……甘ったるい恋愛物でしかお目にかかれない状況だなまったく……そんな気持ちにまったくならんがな

フェイトは俺の方に寄りかかってきて、肩に頭を乗せてくる。

「手を……握らせてほしい」

「はいはい、この際手ぐらいはおやすいご用」

やけくそ気味に言い放ち、顔を少しそらす。

……まあ寂しいんだろうしな、フェイトの心を壊さないためならこれくらいな……

フェイトは小さく頷くと、両手で俺の片手を握りしめ、やっと安心したのか寝息が聞こえてきた。

やれやれ……俺も寝直すか

暖かい体温を感じながら寝るのは、若干寝にくいものの目を瞑ると意外にもすんなりと寝ることが出来た。

１４話　海での戦い（修正版（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます」

真「それにしてもフェイトが心配だ」

元「そういえば……フェイトに甘甘だね」

真「子供だからな……まあ真っ直ぐな目でお願いされると正直無理」

元「あはは、それはまた駄目駄目だな」

真「考えてみろよ。フェイトにすがるような目でお願いされるんだぞ？」

元「すいません。私も無理そうです」

真「よろしい。まあなるべくならフェイトの心を救えたらいいんだがな」

元「まあそれはもう一人の原作主人公と共にやっていくべきですよ。ほら真夜は立ち位置違うし」

真「まあ分かっていてもな。色々と思うところあるわけだ」

元「真夜、応援だけはしてやるが後悔だけしないようにね」

真「今まで散々後悔したからな。間違わないようにするだけだ」

元「それならいいですよ」

真「さて締めの時間だ」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「お気に入りやアクセス数増える度に作者はニヤニヤしており、感想なんて書かれた日には悶え苦しむように喜んでいます」

元「お気に入りやアクセス数は元気になっており、感想は書かれる度に心の支えや活力にさせて貰っています」

真「みなさまのおかげでＰＶが合計一万超えて嬉しさが満ちあふれている作者です」

元「よろしかったらお手数かも知れないですが感想を書いていただけるとうれしいです」

真「作者よ露骨な催促お疲れ～」

元「うぅぅ感想を会話形式で返すの楽しいんだもん……それでは」

真・元「次回お会いできることを楽しみにしております」

１５話　嵐の前の決意（修正（前書き）

今回は……いつも以上に端折った部分が数多いです。
そして戦闘描写はいつも通り皆無です。
駄作ではありますが手にとって頂きありがとうございます。
それでは本編へ移っていきます。

15話　嵐の前の決意（修正

「んん……朝か？」

目が覚めてふと気づく、横で感じていた重みと温もりが無いことに。

横を向いて確認してみるがやはりフェイトが居ない。

辺りを見渡してみるが、フェイトは居ず、部屋にかけられていた時計は昼の十二時過ぎを示している。

「フェイト！」

大きな声で呼んでみるが返事が返ってこない。

……っく、どこに行ったんだよまったく

かけていたタオルケットを無造作に丸めてソファに置き、フェイト達の寝室のドアをノックして呼びかけてみるものの返事がない。

「もし居たらすまないが、あけるぞ？」

そう呼びかけて、ドアを開けてみるが質素な部屋には誰もいない。

念のため、トイレと脱衣室のドアを叩くがやはり人の気配がせず、シャワーや浴槽の中に入っている音もしない。

ジュエルシード関係と俺の修行関係では、ほとんど外を出ないフェイトが居ないという事実は俺に少しだけ焦りを生じさせる。

本当にどこにいったんだ？……もしかして……いや一応確認してみるか

どこに行ったと考えて瞬間、何となくだが一カ所だけ思いつく場所があり、鍵も閉めず、家を飛び出して目的地へ走り出す。

階段をかけあがり、目的地であるマンションの屋上へ続くドアを開くと、屋上でただただ空を眺めているフェイトだと思われる後ろ姿が見える。

「なんだ……フェイトここにいたのか……」

ちゃんと探し出せたという安堵で思わず声が出て、その声に振り向いたフェイトは少しだけ首を傾げる。

その姿に、焦って探していた自分に対して少しだけ苦笑いが漏れてくる。

「いや、フェイトが珍しく家の中にいなかったから少し探しちゃってね」

アルフが居ない。いまは……アルフの代わりに……いやただ心配になっただけか

ここまで……気にすることになるとはな

「ごめんなさい……少しだけ屋上で空を見たくなったから」

フェイトは申し訳なさそうに俯く。

「勝手に探していただけだから気にするな」

フェイトまでゆっくりと近づいていき、正面まで移動してからフェイトの頭を少しだけ撫でると、俺が寝ている間にお風呂に入ったのだろう少しだけ湿っており、シャンプーのいい香りがする。

そして俺はフェイトが先ほどまで居たであろう空をおもむろに見上げた。

そこには、どこまでも澄み渡る青空が広がっている。

「吸い込まれそうなくらい青いよな」

「ん……本当に」

フェイトの声に少しだけ寂しげなものが混じっていたのは気のせいかもしれないが、俺にはそう感じられた。

「結城戻ろ？」

「あぁわかった」

見上げるのを止め、顔を下げると、笑顔を浮かべながら俺の顔を見ているフェイトの姿があった。

そして俺達は家へ戻っていったが、途中でドアの鍵を閉めてなかったのを思い出し、フェイトの手を掴み、急ぎ家に向かう。

家に着いてから一応なにも盗まれてないか確認したが何も取られて

ないのが分かり、安堵のため息をついた。

「いまから食事の準備するから待っててな」

「うん……」

確認最中にいつのまにか食事をするときの席に座っていたフェイトに声をかけると、すぐに小さく頷ぎを返してくれて、それを視界の端で確認してキッチンに行き、今日の昼ご飯を作り始めた。

暫く経って食事を作り終えた頃に、なんとなく作り終えたことを分かったのかテーブルに並べるのを手伝ってくれてそのまま二人だけで食事を食べることになったが、やはり食事中は会話が無くただ食事の始まりと終わりに合掌していただきますとごちそうさまがあるだけだった。

昼ご飯を食べ終わったことで、することもなくなったわけだが。

「結城……屋上で魔法の講義と結城の技の練習しにいこ？」

「え？あぁわかった」

突然のフェイトの提案だったものの、この時間をどうするべきかと考えていた俺は渡りに船で、今度はちゃんと鍵を閉めてフェイトと一緒に屋上への道を行く。

「フェイト、一つ聞きたいんだけどいいかな？」

「なに？」

屋上へ行く道の途中で、少し先を歩いていたフェイトに声をかけると、フェイトは立ち止まりこちらを振り向いた。

首を少しだけ傾げ、こちらをただ見つめている。

……さて、疑問なんだよな……

「なぜここまで俺にしてくれるんだ？手伝うひ「ただそうしたいっと思っただけでは駄目？」……いや駄目じゃない」

本当になにやってるんだろう……聞かなければ良かった

フェイトは先ほどと変わらない表情をしているが、目には確かに不安で揺れていた。

「駄目じゃないから今日もよろしくな」

「うん、わかった」

不安な色が消え、嬉しそうに頷くフェイトを見て、また申し訳なさがにじみ出てくる。

そしてまた屋上へ行く道を歩き出した俺達は屋上へ着いたらいつもように魔法講座と縮地鍛錬を、開始した。

その後晩飯の準備する時間まで行い、晩飯終了後は模擬戦をいつものように行った。

風呂へ入ってから自分の部屋に行き、寝るという、ジュエルシード捜索をしなかったこととアルフがいない以外は変わらない一日を過

ごした。

ｓｉｄｅ　アルフ

「アルフさん全て話してくれますね」

傷だらけでここの家に昨日拾われたあたしの前には白い魔導師であるおちびちゃんとイタチもどきっという、今まで敵対してきた二人が居る。

だけど……いま頼れるのはこのおちびちゃん達と管理局とは皮肉だね

傷の影響で人間形態を維持できないあたしはイタチもどきに問われた問いを狼の姿で小さく頷く。

「ありがとうございます」

「だけど約束して欲しいんだけど、フェイトは助けて欲しいんだよ。あの子は悪くない」

「分かった。約束する」

おちびちゃんが真剣な顔で頷くのと同時に空中に浮かび上がってる画面に映っている執行官がそう言って頷く姿を確認して、真相を聞かせるために話しを始める。

「すべてはフェイトの母親と言えるプレシア・テスタロッサが始まりだよ」

そこからあたしが知り得る情報のすべてを渡す、それがフェイトを救える唯一の方法だと信じて。

「これであたしが知り得るすべてだよ」

「……話ししていただき、ありがとうございます」

画面に映る執行官は真剣でどこか悲しそうな顔を浮かべており、おちびちゃんは少しだけ考え込むような顔をしている。

「なのはって言ったかい。散々敵対して傷つけてきたあたしが頼める義理ではないが、あの子をプレシアという呪縛から救い出して助けて欲しい」

「……わたしはフェイトちゃんを助けたい。フェイトちゃんが悲しい顔しているって考えるだけでわたしまで悲しくなるから助けたい。それにまだ友達になってほしいっていう返事返して貰ってないから」

そう、決意を満ちあふれた顔で頷く姿に、フェイトが呪縛から解き放たれてフェイトがフェイトらしく生きてくれることを期待することにする。

……坊主、あたしは坊主のことを未だに胡散臭いって思っているよ……

でも今まで坊主を見てきて、今のフェイトをまかせること出来るのは坊主だけとも思っているんだよ……期待を裏切るんじゃないよ

そうおもいつつも、そんなことにはならないだろうっと少しだけ思ってしまう自分も居るのがおかしくてたまらない。

ただ今は、フェイトの無事を祈るばかりだった。

side　ont

次の日は、前日と変わった点と言えば縮地鍛錬と魔法講座がいつものように午前に行われた点と昼ご飯終了後から晩ご飯の準備し始める時間の間、お互いに会話が無くただリビングのソファで二人並んで冷蔵庫にあったウーロン茶を飲みつつゆったりとした時間を送っていたことくらいだ。

「結城……」

「ん？なんだ？」

晩飯後の模擬戦が終わり、屋上に降りてデバイスもスタンバイモードにして戻ろうとドアに足を向けようとしたらフェイトに声をかけられて振り向く。

少しだけ薄暗いため、フェイトの顔が見えにくくどんな顔しているか分からない。

「この二日間言い出しづらかったんだけど……」

フェイトは一歩ずつ噛みしめるようにこちらへ夜にもはっきりと見

える金髪の髪を揺らしながら近づいてくる。

俺は動かず、ただフェイトが近づいてくるのを待ち続けた。

離れていた距離もそんなに無く、すぐに手が普通に届く所まで近づいてきて立ち止まる。

顔もよく見える距離でもあるため、はっきりと分かるが寂しげな笑顔を浮かべている。

……この寂しげな笑顔は……そういえば何度も浮かべていたな……

「私あの白い魔導師とジュエルシード賭けて明日戦うつもり」

なぜっと言いかけるが、今まで一度も見せたことがない決意に溢れた目でなにかを伝えようとしているのが分かり、口を閉ざす。

「きっと勝っても負けても結城とお別れ」

そりゃあ普通に考えれば……負けたら捕まり、そのまま牢獄、勝ってももうこの町に留まる意味はない……

「私は母さんが一番大事

だから早くジュエルシード集めないといけない……

なのに！！

いつの間にか結城といる時間が一番安心できて結城に頭撫でられる

と胸がぽかぽかして温かくて、管理局に奪われたくないから必死にジュエルシードを集まったのに、終わりが見えてくると段々と寂しくなってきて……」

いつもはあまり話さないフェイトが、必死に伝えようと言葉を紡いでいく。

途中からフェイトの目から一筋の涙が出てくると、ボロボロと次から次へと涙が零れている。

だから……最近寂しそうな顔を浮かべていたのか……

「もう集めるジュエルシードがなくなったら、母さんのために白い魔導師と戦ってジュエルシードを奪わないといけないのに、それでもこの二日間本当に楽しかったから勇気が出せなかった……」

自分が泣いていることに気づいてないのか、涙を拭かず泣きながら必死に笑顔を浮かべる。

……はぁ、何度も思うが俺何やっているんだろうな……こんなフェイトに気が付かず、なにが心を守りたいだ、何が恩返すためだ。何もできてないじゃないか

一瞬自分を殴り飛ばしたくなる衝動を抑え、深呼吸をする。

「それでも私はやらないけどいけない。だけど勝っても負けても結城と離れないといけないからここでお別れしてに「フェイト」え？」

たく……ここまで言っておいて、逃げろなんて

この先はなんて続くかは、俺でもそれは手に取るように分かる。
だからこそ泣きながら必死に笑顔を作って言葉を紡ぐフェイトの言葉を遮る。
「フェイト、何も言わずその決闘を最後まで見守らせてくれ。俺が勝手に行きたいからな？」
「……結城、一緒に来たら管理局追われるか捕まるかのどちらかになる……」
「それでも最後まで手伝わせてくれ」
それが……今まで何度も何度も思い違いと後悔を繰り返してきた馬鹿なりの答え……悲しい決意を決めたフェイトに対して俺が唯一できること
俺の言葉にフェイトは涙を流しながら少しだけキョトンとした表情を浮かべるが、すぐに申し訳なさと嬉しいのを半々にしたような笑みを浮かべてくれた。
あぁ……よかった
「結城……ごめんなさい……そしてありがとう」
「ありがとうともごめんなさいも言われるようなことしてないんだがな。とりあえず涙が出ているから拭いとき」
そういってちょうどポケットに入っていたハンカチを差し出すと、

ようやく涙が出ていることに気が付いて恥ずかしさであろうか、うっすらと顔が赤くなった。

それでもハンカチは受け取り、流れていた涙を拭き取るとまだぎこちないが笑顔を浮かべてくれた。

「それじゃあ戻るか」

「うん……」

そして俺達は明日に備えて家に帰って風呂に入り、それぞれの部屋で床につく。

翌日の早朝、俺達はデバイスを起動して、フェイトが手に入れた情報を元にアースラに向かう通り道途中の海の見える公園でなのは達を待ち伏せする。

「フェイトちゃんそこにいるんだよね？」

なのはの言葉に、フェイトが飛び出していくのでそれに続く。

そこにはなのはの他にユーノとアルフがいた。

「……結城君も一緒だったんだね」

「私はフェイトの付き添いですよ」

さすがに俺まで居るとは思わなかったらしく、なのはは驚いた顔で

見られており、アルフにはおもいきり睨まれている。

フェイトは一瞬アルフの姿を見て、驚くがすぐに真剣な顔をしてなのはを見据える。

まあ……一応なのは以外の乱入者きてもいいようにデバイス起動はしたが……

「ジュエルシードを賭けて勝負」

「フェイト、もうあんな女のために戦うのは止めよう。あの女のためにたたか「それでも私はあの人の娘だから」フェイト……坊主、なぜ止めなかったんだい！！」

祈るような声でフェイトへの説得をするが、案の定フェイトは首を振り、アルフの言葉を遮る。

フェイトがデバイスを構えてその矛先をなのはに向け、アルフは殺気にも似た眼光で俺を睨みつけてくる。

……まあそりゃあそうだよな。教えられてないって言ってもいいわけにしかならないしな……アルフについて説明されていないとおかしい状況だしな

「アルフさん俺はフェイトの意志を尊重する」

アルフさんと数十秒睨み合うが、アルフさんは悔しげな顔をして俯いた。

フェイトとなのははお互いを真剣な目で数十秒見つめ合っていたが、

なのはが決意を決めるように頷き、デバイスを起動して矛先をフェイトに向ける。

「……きっとジュエルシードを捨てたり、このまま逃げたらフェイトちゃんと向き合うこと出来ないんだよね。だからその勝負受けるよ」

そのまま二人は、飛行である程度の高さまで上昇していき、向かい合ったまま停止する。

お互いのデバイスから射出されるジュエルシード達は、空中に浮いている。

「フェイトちゃん。勝負に勝ったらジュエルシードとは別にちゃんとお話したんだけどいいかな？」

「もし勝てたら……考えてもいい。でも私が勝つ」

結構の高さまで浮上しているため、聞こえづらいはずなのに二人の少女の声は俺の耳まで聞こえてくる。

……なぜだろうな、本当に言霊ってあるのかね

「ありがとう。わたしはフェイトちゃんと笑い合って過ごせる時間ができると信じて――――」

「母さんのためにも――――」

「「勝負！！」」

その言葉を合図に二人の少女のジュエルシードと己の意志を賭けた戦いが開幕した。

15話　嵐の前の決意（修正（後書き）

戯言タイム

注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます。そしてこんな作品も見捨てず読み続けてくれる読者様達に感謝を」

真「……やはりアルフはフェイトを救うためにあっちについたか……」

元「元々なんとなく分かっていたことですしね」

真「結局フェイトになにもしてやれなかったな」

元「真夜。そう考えるのは傲慢ですよ」

真「そうかもな……まあただ今は力不足だから見守るのみだな」

元「そうだね。それだけでも充分力になるとおもうがな」

真「それでは締めの時間に入りたいと思います」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度ニヤニヤし、感想書かれたときは喜びを全身で表現しています」

元「感想誤字脱字や突っ込みがあればぜひぜひ書いていただけると嬉しいです」

真「それでは……」

元・真「また次回お会いできることを願いつつまた次回へ」

１６話　海での決戦（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
一人でも多くの人に楽しんでいただける小説であることを願いつつ、
本編に移っていきます。

16話　海での決戦

二人は、ジュエルシードをお互いに持っていることを、確認させるように出したジュエルシードを再度収納する。

フェイトが急に距離を取ると　発射体（フォトンスフィア）　を五個作り出して撃つ体勢になったため、なのはもそれに対抗して　発射体（フォトンスフィア）　を同じ数作り出す。

そしてお互い向き合って最初の一撃となるものを撃ち出す

「フォトンランサー」

「ディバインシューター」

「ファイア（シュート）」

黄色と桃色の魔力弾がそれを合図に敵を目指して飛び交っていく。

フェイトは持ち前の機動力を生かして避けようとするが、追尾してくるためシールドを張って防御することしか出来ず、なのはは、フェイトよりは遅いが的確な動きで避けていく。

避けたことで防御をしているフェイトよりワンテンポ早く行動できるなのはは、発射体を作り、魔力弾をフェイトに向けて発射していく。

フェイトも最初の魔力弾達を防御しきってからすぐに　発射体（フォトンスフィア）　を作り、ギリギリのところで魔力弾同士をぶつけ撃ち落とす。

そして第一戦目が終わったのか、お互いにデバイスを構えながら向き合ってから少しだけ静かな時間が流れる。

少しばかりの均衡を破ったのはフェイト。

発射体（フォトンスフィア）を五個作りだし、魔力弾発射するがなのはも瞬時に合わせるように発射体を作り出し、魔力弾を撃ち出し、最初の焼き回しのような始まりになる。

だが、フェイトは撃ってすぐにデバイスを鎌に切り替え、なのはの撃った魔力弾を切り捨てながらなのはに迫る。

なのははフェイトの撃った魔力弾を避けつつ、フェイトから距離をとるため後退をしようとするが、突然目の前に出現した槍状の魔力弾に阻まれて足を止めてしまう。

その間に追いついたフェイトに斜め上から鎌で斬りかかられて咄嗟にシールドを張るなのは。

なのはに斜め上からの一撃を防がれたため、フェイトはそこから間髪入れずに、流れるような動きで上下右左と攻撃方向を変えていく持ち前の機動をいかした連続攻撃へと移行する。

なのははその攻撃をまるで攻撃される方向が分かっているように的確に避けていく。

そして攻撃の一瞬の隙を突き、発射体（フォトンスフィア）を五個作り、向かってくるフェイトに向かって全弾撃ちこんだため、フェイトの足を一瞬止めるが、フェイトは向かってくる魔力弾を鎌で切り捨ててから発射

体を四個作り、カウンター気味に魔力弾撃ち込む。
なのはもタイミング的に避けきれず、シールドで防御する。
そしてなのはなんとか防御しきったものの少しだけ肩で息をしている様子が、ここからでも分かる。
なのはに追い打ちをかけるようになのはの周りに黄色の魔法陣が浮かび上がり、その瞬間四肢にバインドをかけられ、固定されたなのはは動くことが出来ない。
「まずい、フェイトが本気だよ！！」
それの様子をみて慌てるユーノが今にも飛び出しそうな雰囲気だ。
「今すぐに、なのはのサポートしに「それはやめて欲しいです」君は敵だからそんなの聞けない！！」
ユーノのこちらを睨みつけているが、いまここでいかせるわけにはいかない。
「フェイトの決意を踏みにじらないでください……。勝負を受けたなのはさんの意志を尊重してください……。もし二人の決意と意志を踏みにじるなら……」
あえて言葉を続けず、肩に担いでいるデバイスを強く握りしめる。
……もし踏みにじるなら、相手が誰であろうが立ちふさがる
続く言葉を理解したのか歯がゆそうにこちらを見つめているユー

ノと、こちらの様子を見向きもせず、今にも血がにじみ出そうなくらい拳を握りしめて、ただ戦いの様子を見ているアルフ。

そして俺も今戦っている空へと視線を戻す。

「アルカス、クルタス、エイギアス――――」

あぁここで決めに入るか、フェイト……

フェイトが詠唱を始めると、フェイトの周りにどんどんと浮かび上がる黄色の発射体（フォトンスフィア）達。

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。
バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

ここから見ているだけでも、どれほどの魔力が込められているか感じ取ることが出来る。

今はただこの戦いに、フェイトが幸せになれる未来が待っていることを祈ることだけしかできない。

「フォトンランサー、ファランクスシフト
打ち砕け、ファイア！！」

そして詠唱を終えて、３８基の発射体からの一斉射撃がバインドをかけられたなのはを襲う。

まさに機関銃如く発射される魔力弾達は、あまりにも高速発射されるためなのはの姿を覆い隠している。

とどめの一撃を放つために、魔力弾を凝縮して姿を現したら狙い撃とうと構えるフェイト。

ｓｉｄｅ　フェイト

だいぶ魔力を使ったけど……これで……もう倒したはず……

それでも嫌な予感がして、まだ戦えるようならその瞬間とどめを刺せるように魔力を凝縮した魔力弾を作り、ひたすら煙が張れる瞬間を待つ。

最初は……私より圧倒的に未熟で弱かった。

なのに、対峙する回数を増すほど、どんどん強くなって今ここで私と渡り合っている。

その分、自分が惨めにもなってくる。

なんでもっと上手くできなかったと、自分自身を責め立てるような自分の声が聞こえる。

結城がいてくれたから、立ち止まらず進めたけど、それでも悔しい……

だから……ここで貴女を絶対倒す

お母さんのためでもあるけど、危険覚悟で付いてきてくれた結城のためにも……

煙が晴れて、段々と相手の姿が見えてくると、驚きで思考が止まりそうになる。

「――――え？……うそ」

そこにはほぼ無傷で、こちらへとデバイスを向けて構えている白い魔導師がいる。

「ディバイーン、バスター！！」

魔力が大量に込められた砲撃が発射され、咄嗟に凝縮した魔力弾を放つが、ぶつかった瞬間消滅した。

……やばい、私の魔力弾じゃ歯がたたない

距離的にも逃げることも出来ず、シールドを張るしか選択肢がなかった。

シールドと砲撃がぶつかる瞬間、体全体に痛みが走る。

シールド……張ってるのに、バリアジャケットが維持できない……

最初は手袋、次はマント、バリアジャケットが次々と破れていく。

なんとか凌ぎきったものの、もうバリアジャケットは全身ボロボロになった。

「う……」

凌ぎきってすぐに、今度は私がバインドに縛られる。

白い魔導師がなにかを撃とうとしているが、段々と込められていく魔力量の多さに血の気が引きそうになる。

必死に抜け出そうとするが、まったく身動きが取れない。

私は……負けるわけには……

「受けてみて。これがわたしの全力全開
スターライト――――」

……母さん、ごめんなさい……

「――――ブレイカー！！」

私へと放たれる桃色の砲撃、込められた魔力的に確実に倒されるのが分かる。

……悔しい、母さんからのお願いされたことをできなかった……

しかし、それは相手に対してというより、ただただ負けてしまった自分に対しての悔しさだった。

桃色の砲撃級の魔力砲が直撃して、一瞬意識が飛び、その影響で飛行が解除され、気づいたときにはもう遅く、海へと真っ逆さまに落ちてしまう。

……母さん、そして結城、ごめんなさい。負けちゃった……

でも恐怖はなく、最後に思うことは母さんと結城への謝罪しかなか

った。

「フェイト大丈夫か？……よく頑張ったな」

突然落ちている感覚がなくなり、誰かに抱きかかえられたようだ。

恐る恐る目を開けると、心配げにこちらを見ている結城の顔が見える。

……結城……また助けてくれてありがとう……

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

なのはの極太魔法砲スターライトブレイカーにフェイトが撃たれた瞬間、デバイスをバリアジャケット着たままスタンバイモードにしてから、急ぎ飛行で落ちていくフェイトの元へ行き、なんとか受け止めることに成功する。

「うん……大丈夫」

疲れた様子で大丈夫と頷くものの、やはりだいぶ魔力を消費していて元気がない。

まあ……魔法砲レベルのものをもろにうけているからな……だいぶ傷だらけだな……

フェイトを抱えたまま、公園へ向かい、地上へと降り立つ。

「フェイトちゃん大丈夫？」

後ろからの声に振り向くと、心配げな顔をしている同じように公園に降り立ったなのはの姿があった。

そのままフェイトの元まで近づいてくると、やはり先ほどと変わらずフェイトの顔を心配げに見ている。

……まあ食らった瞬間墜落するなんて思っても見なかったんだろうな……

なのはは分かっててはやらない、そんな風に思える少女だった。

なのはの言葉に、フェイトは少しだけ頷くが疲労感が隠し切れてない。

「わたしの勝ちだよね？……」

なのはは、少しだけ複雑な顔を浮かべていて、どうみても勝者の様子には見えない。

フェイトはジーッとなのはの顔を見つめている。

「うん……約束通りジュエルシード渡すよ……」

自分に言い聞かせるように小さく頷き、そしてバルディッシュからジュエルシードがはきだされた。

さて……今まで通りならここで……

フェイトとなのはの会話が一段落したので、空を見上げると怪しく光る空が広がっている。

やっぱりか……っということは一撃来るな……

「フェイト、立ってからも肩を貸して支えるから、立ってくれるか？」

「うんわかった」

まだ戦闘の影響が残っているフェイトを立たせるのは申し訳ないものの、フェイトに肩を貸しながら降ろし、肩を貸したまま立たせる。

そして来るであろう攻撃に備えて、スタンバイモードから基本モードであるビックソードモードへと移行する。

その瞬間雷鳴が響き渡る。

たぶん他のメンバーには連絡きたのであろう、デバイスを起動させたりして次に来る一撃に備えるため全員がシールドやバリアを張ろうとしている。

……だが、フェイトに張れるような余力無いだろうしな……いやもう一人危なそうなのがいるか……

「なのはさん！！こちらに来ていただけますか？」

「え？……わかったの」

かなり近い位置にいたなのはを呼び寄せた時は一瞬戸惑い気味に見られたが、真剣な顔で言われたのを気づいたのか、来てくれた。

俺の……予想が正しかったら大丈夫の筈……

「フェイトま「私は信じる」わかった」

「なのはさんは先の戦闘でだいぶ消費していますから空からの攻撃まかせていただけますか？」

「……うん、分かったの」

「申し訳ないですが、背中に張り付いてくれますか？」

「え？……う、うん」

フェイトは疲れた様子ではあるが笑顔で答えてくれて、なのはも戸惑いながら頷いて、恥ずかしそうにして背中に密着した。

さすがに……消費が激しい状態でなにもしないのは、一度助けられた身としてはな

でも……やっぱりなんとかするためとはいえ、もう少し言い方考えれば良かったかな

そして雷撃と呼べる魔法攻撃の掃射が行われ、空からの攻撃から盾にするように剣をかかげ、フェイトとなのはも範囲に入るようにシールドを張る。

「ジュエルシードが！！」

雷撃の掃射最中に、ユーノの声がしたため、空をよく見ると、先ほどバルディッシュからはきだされたジュエルシード九個が空へと運

ばれていく様子が見え、その数秒後雷撃が途絶える。

やっぱりか……まあ今回は人的被害無いしな……そして予想通りか

雷撃終了するまで俺は二人を守りながら耐えきることができたが、それは自分の力というより。前の時と同じで威力がフェイトに向かう雷だけ弱められているため、フェイトにも当たる軌道にあったなのはへの攻撃も威力が押さえられていた理由が大きい。

「さて……君たち二人にはアースラまで同行して貰う」

空からの雷撃掃射終了後、大剣を肩に担ぎ直すと同時になのはが恥ずかしそうに背中から離れてアルフ達の所に行ったが、それと入れ替わるように黒髪の執務官、クロノ執行官が渋い顔をしながらこちらに来た。

そりゃあ見逃してはくれないよな……

「逮捕ですか？」

「今のところは同行だな。断るとためにはならないけどな」

口調はそういっているものの、断っても無理矢理連れていくと顔に書いてあるような様子だった

「フェイトどうす「結城に付いていく」はぁ……それでは喜んで同行させて貰います」

肩を貸しているフェイトに聞くものの、そう言って真剣な顔をして即答するものだから不本意ながら俺に判断を委ねられた。

フェイトの傷も気になるしな……ここは素直に付いていくしかないしな……

少し皮肉を混じりな解答をしたので、クロノ執務官に一瞬苦笑いをされたが、真剣な顔に戻ったクロノ執行官は付いてこいっと言ってそのままこちらに背中を向けて歩き出したので、フェイトを支えながらクロノ執行官に付いて行った。

１６話　海での決戦（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます」

真「それにしても……結局フェイトは負けてしまったか……」

元「あぁ……負けてしまったね。まあ実は脳内設定上、原作より若干強くはなっているけどな」

真「そうなのか？」

元「真夜がいることで原作よりは精神状態が良い方だからね。そう考えれば気持ちが少しだけ落ち着いているね」

真「それでも負けてしまったな……」

元「なのはさんのスペックが高いです……」

真「あはは……」

元「まあ原作主人公ですから当たり前と言えば当たり前ですね」

真「さて、締めの時間だな」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増えていく度喜んでおり、感想なんか書かれた日には悶え苦しんでいる」

元「誤字脱字小説への突っ込み、感想あれば、どしどし書いてくださると嬉しいです」

真「それでは……」

元・真「また次回お会いできることを楽しみにしております」

17話　親子は似るもの

ｓｉｄｅ　プレシア

次元魔法で攻撃し隙を突いて、半分近くのジュエルシードを回収できたが、フェイトが防御魔法が張れないほど弱っていたのは予想外で、威力はフェイトに当たる軌道だけは限りなく押さえたものの当たれば怪我をするかも知れないと思い、なんてことをしてしまったんだと発動した後に後悔もした。

……フェイトに当たらなくてよかった……それにしてもあの結城真夜っていう子供には感謝しないといけないわね

そう、前も管理局を牽制し、私が黒幕と認識させるため、次元魔法を行ったときもフェイトを守っていてくれた。

まあなんとかその子供をここに連れてくるかもしくはくわしく聞こうと思ったのだけど……

海での事件後報告で来たフェイトにそのことを言ったときの様子が今にも目を瞑ったら思い出される。

「母さん、そのことはお答えできません。
　そしてどうしてもここに連れてくるようなことはしたくありません」

彼のことを聞くと片膝をつけて頭を下げていたフェイトがいきなり、頭を上げ、真っ直ぐとした目でこちらを見つめてきてから、いつもは反抗をしないフェイトがその時だけは意志の強い目で言ってくる

のだ。

あのときは怒り狂った振りをして、見た目は派手だが、気絶されるレベルの威力しかない魔法を撃ったものの、内心驚きもあったが、喜びを感じていた。

フェイトのことで怒り、私を襲ったアルフを瀕死寸言状態まで傷つけたが、ぎりぎりで転移するのが分かり、タイミングをずらし、転移する時間を与えてさせた。

それは、今までフェイトを守ってくれたことを心から感謝をしているからでもあった。

そこでふと思う、いつからフェイトというアリシアの劣化クローンを、クローンではなく一人のフェイトという娘と思えるようになったのは。

だが、悩むこともなく、すんなりと答えが出てくる。

海鳴市に送るまで、ただの駒であり、アリシアに似ているのは声と見た目だけの劣化コピーと思っていたはずだった。

海鳴市に向かわせてからの最初の経過報告しに来たときは少しだけ違和感を覚えるだけだった。

でも次に来たときは、今まで見たこと無いくらい目に力があり、そして私を母さんと呼んで、浮かべた笑顔は今までの捨てて欲しくないと媚びる物でも、怯えを含んだ物でも、ただ笑うだけでもない、純粋に幸せがにじみ出た笑顔を浮かべていた。

その時からなぜかフェイトという一人の娘しか見られなくなって、しつけと称してぶつけている魔法の威力を自然といつもより弱めていた。

今でもアリシアを生き返らせたい、それは変わらない。

でもそれと同じくらい、フェイトを大事に思えてきたが、しかし気づくのが余りにも遅すぎた。

フェイト達が2回目の報告が終わってからもう今までしてきた仕打ちは変わらない、ならいっそ成功しまいが失敗しまいが、このまま黒幕であり、フェイトをゴミのように扱ったプレシア・テスタロッサとして死のうと決めた。

そうすればきっと、フェイトの罪が多少は軽くなるはずと。

……私はもう道を間違えてしまい、取り返しのつかない所まで来てしまった……それに……

「ん！！……はぁはぁ」

手で押さえたものの咳とともに口から吐き出される血は指と指の隙間から垂れてくる。

ただでさえ蝕んでた体を最近酷使したおかげで、もう私の体は長くは持たない……

さきほどのジュエルシードを転移と次元魔法を使った事でこの位置がばれたのだろう。多数の足音がこちらへと向かってくる音が鳴り響く。

「……最後まで演じないと、はぁはぁ、これ以上フェイトに、はぁはぁ」

先ほど口を抑えたことで手のひらに付いた血を払い、腕で血が残っていた口元を拭って迎える身だしなみを整える。

母さんと呼んでくれるようなことを何一つフェイトにしてこないで、最悪なことばかりしかしなかった……

それでも自己満足でもいい……私なりにフェイトにできることをする……例え自分勝手でも、フェイトに心への傷を深くつける可能性が高くても、それ以外思いつかなかった

目の端にアリシアが入ったポットが見え、それを正面で見据えて目に刻みつける。

……アリシアも怒るかも知れないけどね、お母さんそれでももう一人の娘のフェイトの未来は少しでも綺麗な物にしたいから、お母さん最悪なことしてくるね

「管理局だ！！大人しく投降しろ。プレシア・テスタロッサ」

願わくは、フェイトとアリシアと一緒に過ごせる生活を今更ながら思い描きたかった……

そして私は、最後の仕上げをするべく、フェイトをゴミのように扱い、狂いに狂ったプレシア・テスタロッサを演じる役者となった。

side　ont

フェイトを支えながら、クロノ執行官に付いていくと、どうやらユーノの転移魔法で移動する様子で、ユーノ達と合流し、少しユーノと話すためにクロノ執行官は離れていく。

「フェイト大丈夫かい？こんなにも傷だらけに……」

アルフはフェイトに近づき、心配げであり、悔しげにフェイトの怪我の様子を見ていた。

……まあ怪我の方は、軽い怪我ばかりなのは確認済みだがな

（「坊主感謝だけはするよ……。ひとつ坊主に聞くが、前に何度かフェイトが怪我をしていた原因は分かっているかい？」）

フェイトに聞かせたくないのか、アルフはフェイトの怪我の様子を見つつ、俺に念話で話しかけてくる。

（「……フェイトのアルフさんが居なくなった話しと今までの様子を統合してだいたいは予想が付いています」）

……本当は原作の知識少しはあるからってのもあるが、神様が言ったとおりかぎりなく似たような世界って事だからな。本当かはわからんしな

（「そうかい……。まあ一言でいえば、あのクソババアはフェイトをこき使って、ストレス解消するようにフェイトを魔法で痛みつけていたんだよ」）

見終わって、傷が軽傷であることが分かって安堵した顔にはなるが、こちらを見たときの顔は怒りに満ちた目をして、そして必死に怒りを抑えようともしている。

「さてこちらの準備ができたからな。アースラまで来て貰うぞ」

「はいわかりました」

クロノ執行官がこちらに渋い顔しながらやって来て、来るように言われたため、フェイトは小さく頷き、俺の素直に従う。

そして俺達は、アースラへとユーノの転移で乗り込もうとするが、その前にデバイスをスタンバイモードに移行するように言われて、スタンバイモードにしてから再度乗り込んだ。

転移された先は、どうやら艦橋であり、目の前のでかい画面にはなにかが映り出されている。

ちらっとフェイトの様子を確認すると、もう支えなくとも立てそうな様子だった。

「フェイト、もう一人でも立てそうだから離すぞ」

「……うん」

離れるとき、フェイトが残念そうな顔を浮かべていたのは、きっと気にしない方がいいとおもい、気にしない方向にする。

フェイトと俺以外の全員は固唾を呑んで、画面を眺めている。

「クロノ執務官、これは？」

「……先ほどの雷撃での次元魔法を逆算して、プレシア・テスタロッサのアジトを割り出し、武装局員を突入させた」

「そうですか……」

クロノ執行官は画面をみていてこちらを見てはいないが、意外にも素直に教えてくれたので、状況を飲み込むことが出来た。

っということは……いや、今はただ画面を見ることしかできないか俺も突入した局員から流されてくる画面をただただ見ていることしかできなかった。

そして暫く経つと最深部までたどり着いた局員からプレシアと思われる女性の姿と、フェイトと瓜二つの少女がポットの中に入れられている映像が、映り出された。

「うそ……私？」

呆然と、それでいて怯えているようなフェイトはうわごとのようにそう呟く。

そりゃあ、自分と同じ姿、顔、髪色している人が、いきなり現れたらな……

「私のアリシアに触らないで！！」

プレシアと思われる女性はそう叫んで、魔法を放つと何人かの局員

が吹き飛んでいく様が見える。
すぐに通信で撤退命令を出すリンディの声が響いている。
それによって、続々と局員達は撤退をしていくが、その様子をただおかしそうに見つめているプレシア。
「もう駄目ね。時間が無いのに、たった9個のロストロギアでは、アルハザードにはたどり着けないかも知れない」
ただこちらに狂気に満ちたような、笑みを浮かべて語りかけてくるだけだが、どこか違和感を覚える。

「でももういい。
アリシアを亡くしてからの絶望のような時間を
この子の身代わり人形を、娘扱いするのも、すべて終わりにするわ」
なぜ……プレシアさんは……
狂気に満ちてはいるが、目は正気があり、苦しんでいる。
「聞いている？あなたの事よフェイト。
せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは外見だけで

役立たずでちっとも使えない
私のお人形」

言っていることとは全然真逆にも思えるほど本当に悲しげな目をしているんだ……

「最初の事故の時にね、プレシアは、最愛の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしている

彼女が最後におこなっていた研究は、使い魔とは異なり、
人造生命の生成、そして、死者蘇生の秘術

フェイトって名前は、当時、彼女の研究に付けられた開発コード
……プロジェクト『F・A・T・E』」

リンディさんの声は、冷淡であり、それでいて必死に感情を抑えようと必死な感じが伝わる。

リンディさんの説明に、対してプレシアさんは、本当に一瞬だけだが少しだけ悲しげに笑ったが、本当に一瞬でほとんどの人は分からなかったであろう。

「よく調べたわね。そうよ、その通り

だけど、駄目だったわ
ちっとも上手くいかない、
作り物の命はしょせん作り物
失った者の代わりにはならないの
アリシアはもっと優しく笑ってくれた
アリシアは時々反抗するけれど、よく言うことを聞いてくれた」
必死に自分を奮い立たせるように、言葉を紡いでいくプレシアさん。
それは、どこかフェイトに重なる物がある。
「やめて……」
なのはの悲痛な声が静かに響くが、プレシアはなにかに追い立てられるように歩みを止めない。
なにかに怒り狂うような雰囲気ではあったが、そう、ただの形だけにしか思えないものだった。
「アリシアは、いつでも私に優しかった
フェイト、やっぱりあなたは、アリシアの偽物よ

私がアリシアを復活させる間の代用品
だから、あなたはもういらないわ」

本当にフェイトとよく似ている……なにを決意したのは知らないが、どこまでも悲しい決意なんだろう……

プレシアさんは、また狂気に満ちた笑みを浮かべるが、必死にそう演じようと、する姿に見えて仕方ない。

「いいことを教えてあげるわ
あなたを造りだしてからずっとね
私はあなたが
……大嫌いだったのよ」

大嫌いという言葉を、多分必死の思いで紡いだのだろう、唇が震えており、声も必死さが良く伝わる。

本当に分かりづらいが、フェイトの似た感情の隠し方であり、感じ取れてしまう。

俺には狂気に満ちた笑みが泣き叫んでいるようにしか見えない。

大嫌いという言葉を合図に、フェイトが隣で崩れ落ちる音がし、映像がぷつんと切れてブラックアウトして沈黙に包まれる。

その後崩れ落ちたフェイトをアルフがアースラ内の医務室まで連れていき、他のメンバーはプレシアを止めるべく動き出し、作戦会議を始める。

「君は本当に一緒に来ないのか？」

「はい、私はフェイトが心配ですから」

「……真夜君フェイトちゃんをお願いするの」

その会議の中、自分は突入メンバーに入らず、待機することを選んだ。

今は、緊急事態のため、隔離されないので、プレシアさんのアジト突入に加わる事も出来るが、あえて待機側になった。

……例え行くとしても、その時はフェイトと一緒だ

そして突入メンバーは転移ポートへと入り、プレシアさんのアジトへと転移していった。

さて俺がやるべきことするか……

アースラ内を彷徨い歩いていると、ようやく目的の医務室を発見することができ、入ると、医務室の奥のベットでフェイトはベットの上で膝を抱えてそのまま俯いていており、その様子を悔しげな顔をして見ているアルフの姿があった。

「坊主かい？どうしたんだい？」

誰かが医務室に入ってきたことに気づいたアルフが、睨みつめてこちらを見たが、俺だと気づき、すぐに疲れた様子で苦笑いを浮かべて近づいてきた。

「フェイトと二人きりで話しをしてもいい？」

そういうと、食い入るようにこちらを数十秒間見つめて、真剣な顔で俺の目を見据える。

「あたしは、坊主のことは未だに胡散臭いと思ってる」

……あはは。まあ突然転がり込んできて、名前以外教えてない子供はどうみても胡散臭いよな

言葉を一旦区切るってから急に真剣な顔を崩し、苦笑い気味に笑顔を浮かべた。

「でも、今までフェイトの傍に裏切らず居続けてくれた坊主は信用に値するからね。
フェイトを頼むよ」

アルフは俺の横を通り過ぎ、すれ違い様に肩を軽く叩き、そのまま医務室から退出をしていった。

……アルフさんこんな俺を信用してくれてありがとうございます

膝を抱えているフェイトのそばまで来るが、気づく様子もない。

ベットの上に座っているフェイトの横に座って、初めて俺に気づいたらしく、顔を上げ、目に力が無くいつもの目の輝きがないフェイトが無表情で俺の顔をただただ見つめていた。

「フェイト……俺な、実は二人の少女と出会えたから今ここに居るんだ」

フェイトの様子に変わりがなくただ見つめるのみだがそれでも話し続ける。

「もう一人は今は置いておくとして、片方はお前だよ。フェイト」

フェイトは一瞬びくっと震える様子を目端で見えたが、今はただ前だけ向いて語り続ける。

なるべくなら秘めていたかったが……自分は人の背中を押すのは苦手から、人がどうとかよりもまずは自分の気持ちをいうだけだな

「俺にとっては、アリシアという少女の代わりの人形ではない

フェイト・テスタロッサという少女に出会えたからここにいる

そして俺が手伝いと望んだのはフェイト・テスタロッサという少女に対してだ」

俺は横にいたフェイトを正面から見据えて想いを伝える。

フェイトの目からは少しだが光が戻ってきており、少しだけ喜びを感じる。

「誰がなんと言おうが、プレシアさんの娘であり、そして俺が助けたいと望んだ相手だ

これから先も、フェイトという少女として向き合い、迎え入れる

だからフェイトはフェイト・テスタロッサとしての人生を歩んで欲しい

少なくとも俺はその歩むことを手伝ってやる

そして他にもフェイト・テスタロッサとして認識し、手伝ってくれる者が居る

俺やその人たちを頼れ、フェイト、けっしてお前は一人じゃない

少なくとも俺は助けるしアルフさんも助けてくれるからな」

あえて、プレシアさんに不器用ながらの愛情があることを伝えない。

きっとそれは、俺が本当のことを言ってはいけないような悲しい決意の表れと思えたから。

「でも……私はいら「少なくとも俺は必要だ！！」……」

……なんだかんだとフェイトと過ごした日々は嫌ではなく、心地よ

いものだった……

戸惑い気味に見るフェイトの頭をゆっくり撫でながらいつもは捻くれていて話すこともない思いを語りかける。

「俺の考えは関係ないと思うが俺にとっては必要だぞ？

上手そうに食事を食べてくれるからどんなに作り甲斐があって楽しかったか

胡散臭くて捻くれた俺を見捨てずに家に住まわせてくれて、信じようとしてくれたことがどんなに嬉しかったか

まだまだいっぱいあるが知らないだろ？それほどのものくれたんだぞ

アリシアという少女の形をした人形ではなく、フェイト・テスタロッサという少女がな」

笑いかけて語りかけていた話を終えると、フェイトはいきなり俺の胸の中に飛び込んできて、そのまま顔を押しつけるように、胸の中で静かに泣き出した。

ｓｉｄｅ　フェイト

母さんに真実を聞かされて、そして捨てられた人形であることが分かって、何も考えられなくなっていたのに……

最初は結城の話しはただ鬱陶しいと思えていたが、私が結城の役に立てていたと聞かされて驚きで体が一瞬跳ねてしまう。

こんな劣化品の人形の私が、結城の役に立ってた？……

そこからどんどん耳に入ってきて、心の中に言葉が染み渡って来る。

結城が私をフェイト・テスタロッサとして見てくれると必死に言おうとした姿に、ふと思い起こされる。

こんなにも必死になにかを伝えようとしてくれている結城は初めて見たんじゃないかと。

もしかして自分は、一人のフェイト・テスタロッサとして歩んでいいのではないかと一瞬思ったが、必死にそれを否定し、自分は人形だと言い聞かせて、自分はいらない人形だと言おうとしたのに、言い切る前に結城に遮られた。

頭を撫でつつ、結城が語りかけてくる言葉は先ほど以上に胸に染み込んできて、先ほど必死に否定してた考えがまた頭の中をよぎる。

もう気持ちが抑えられなくなって、思わず結城の胸の中に飛び込むように抱き付いたら、なぜか次から次へと涙が出てきた。

結城は優しく頭を撫でてくれるから、止めようにも止められない。

「私自身のために歩んでいいのかな？……」

「あぁいいんだよ……」

母さんごめんなさい……母さんにとっては娘じゃなく人形かも知れないけど、それでもフェイトとしてこれから歩んでいきたい

敵である私と友達になりたいと言ってくれて、ジュエルシードを巡る決戦の時にも私と共にいる未来を望んでくれた白い魔導師……

なにより、こうして今もフェイト・テスタロッサとして人生を歩むことを望んでくれて、危険を冒してでも一緒に居てくれた結城……

この人達がいるならきっと私はフェイト・テスタロッサとして、歩み始めることが出来る気がする

胸の中に小さく頷くと結城は、頭を撫でるのを止め、優しく背中を撫でてくれた。

そうすると、涙が自然と止まっていく。

「フェイトが歩みたいと望むならば傍にいて手伝ってやる」

結城……いつも私の傍にいて助けてくれてありがとう……

結城の胸から離れると、結城が立ち上がり、正面から手を差し出してくる。

「フェイト、いくか？」

「うん、歩み始めるために」

結城の手を取り、立ち上がって、先に行ったみんなの元へ急いだ。

そう、母さんに自分の想いを伝えに行くために。

side　ont

17話　親子は似るもの（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊なっている可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます」

真「……なんかせつないな。本当に似ているのにな」

元「まさに親子だよ。ちなみにこの話の後半の内容は、原作的でも重要なイ　ベントですが、私の小説的にも重要な部分です」

真「なんで……念押しするようにいうんだ？」

元「……まあそれほど重要な部分ですよってことだよ」

真「そうか……。まあまずはこの騒動を終わらせないとな」

元「おう、頑張れよ」

真「他人事かよ……まあいいやそろそろ締めの時間だぞ？」

元「了解。ごっほん

ここまでお読み頂きありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度喜んでおり、
感想書かれた日には、悶え苦しむように喜びを表している」

元「誤字脱字作品へのつっこみ、作品の感想などなどありましたら
ぜひぜひ感想をお書きいただけると嬉しいです」

真「それでは……」

元・真「また次回会えることを楽しみにしています」

１８話　時の庭園（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
今回は無理矢理感が漂う話しとなっております。
一人でも多くの方々が楽しんでいただけることを願いつつ、本編にうつります。

18話　時の庭園

フェイトと一緒に医務室から出ると、アルフが心配げな顔でドアの前で待ちかまえていた。

フェイトの元に戻った姿を見て、ようやく安堵の顔を浮かべた。

俺は二人で少し話しさせるために、二人から少し離れた位置に移動する。

「フェイト……大丈夫なのかい？」

「うん大丈夫。アルフ……私達も時の庭園にいこ」

フェイトのその言葉に複雑そうな顔を浮かべてフェイトを見る。

「……なぜだい？フェイトはここでゆっくり待っていればいいだけじゃないかい？」

「アルフ、前に進むために行きたい」

フェイトは意志の強い目でそう訴えて、アルフを正面から見返す。

数秒間沈黙が流れたが、突然アルフは軽くため息を吐いて、苦笑いを浮かべた。

「……分かったよ」

「ありがとうアルフ」

フェイトが笑顔を浮かべてお礼を言うと、アルフはそれを嬉しそうに見返す。

やっぱり……アルフはフェイトの事を本当に大事に思っているんだよな……

その様子を離れた位置で眺めていたが、アルフがいきなりこちらの方を振り向いた。

（「坊主、フェイトを救ってくれて感謝しているよ。やっぱり坊主に託して正解だったみたいだ」）

アルフは嬉しそうに軽く頷き、でも答えを聞かないよっという風にまたフェイトの方を向いた。

……はぁ、なんだろうな、自分はただ必死だったから感謝される子としてないと思うんだが……なんとなく気恥ずかしくて嬉しいものだな

「結城、それじゃあいこ」

「坊主置いていくよ？」

フェイトとアルフはこちらの方を振り向いて、笑顔を浮かべながら俺が来るのを待っている。

すこしは……足手まといではなく仲間と思われているのなら嬉しいがな……

「そうだな。最後の戦いに出向くために行こうか」

そういって、フェイト達の所まで近づき、三人で転送ポートまでの道を急いだ。

ｓｉｄｅ　なのは

「なのは、もうこちらももたないよ」

何体かの機械兵さん達をバインドで押さえつけているユーノ君がもうバインドが持たないから焦っていて、この事実にわたしも次第に焦ってくる。

ディバインシューターで倒しても倒しても、まだまだ機械兵さん達が居て、追いつめられてくる。

「はぁはぁ」

ユーノくんに襲いかかる機械兵さん達に魔力弾をぶつけたら、その隙を突かれて機械兵さんに切られそうになって、それをなんとかぎりぎり避けて魔力弾撃ち込んだ。

それでも、また次の機械兵さんたちが襲ってくるから休む暇がなくて、どんどん疲れてくる。

クロノ君大丈夫かな？……

少し前に強行突破して、プレシアさんの元へ向かったけど、未だにたくさんいる機械兵さん達が見えるから、クロノ君のほうにもだいぶ行っているんじゃないかと不安になる。

「あ……え？」

クロノさんの事を考えていたら、いつの間にか後ろに近づいていた機械兵さんに気づくことが出来ず、気づいたときには斬りつけられる寸前だった。

もう……当たっちゃうかな……

でもわたしに当たる前に機械兵さんが、横からのいきなりの攻撃で吹き飛ばされる。

急いで攻撃をしてきた方を振り向くと、苦笑いを浮かべているアルフの姿があった

「急いできて正解みたいだったかい」

「アルフ……さん？」

え？……なんでここにアルフさんが？……フェイトちゃんと一緒にアースラに残っていたよね……

「アルフさんな「なのは！！もう限界だ」え？」

その声で急いで、ユーノ君の方を振り向くと、機械兵さん達を抑えていたバインドが千切れて、ユーノ君に襲いかかろうとしていた。

「ユーノ君！？」

魔力弾を撃ち込むけど、ユーノ君の襲いかかる機械兵さん達を完全

に減らすことが出来ない。

絶対ユーノ君を助けないと……

そう思いながらも、なにをしても間に合わないことは目に見えて分かっていたけど、どうにかしようとユーノ君の元へ急ぐ。

「サンダーレイジ！！」

機械兵さん達があと少しでユーノ君に襲いかかれる位置になろうとした時、響き渡る声が聞こえて、次の瞬間雷が降り注ぎ、ユーノ君に襲いかかる機械兵さん達を寸前で倒してくれた。

その聞こえた声と、雷撃に覚えがあって嬉しさで浮かれたのを突かれてしまった。

「なのは危ない！！」

「え？……」

雷撃で倒し切れていなかった機械兵さん達が、こちらへ襲いかかっていて、気づいたときには、だいぶ近くにいて、魔力弾を撃つものの、どうしても倒しきれない。

……もう駄目かな？……いやまだ諦めないの

それでも諦めきれず、デバイスを構えて必死に足掻こうとした瞬間、わたしと機械兵さん達の間に、灰色コートの黒髪の男の子が降り立った。

「すまんが、この子はやらせない」

……真夜君まで一緒に来てたんだ……

真夜君が、持っていた大剣を横にして脇に構えてると大剣が灰色に光り出した。

「これでも食らえ！！斬波」

そして水平に振った大剣からは、灰色の三日月のが出てきて、まとめて機械兵さん達を真っ二つにして倒した。

倒し終えたのを確認すると大剣を肩に担いで、こちらを振り向いてくる真夜君。

「なのはさん大丈夫ですか？」

そう、笑顔で聞いてくる真夜君を見て、なぜか安心感を感じた。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

なのはの様子を確認すると、疲れた様子だが怪我はなく、意志の強い目でこちらを見返している。

まあ結構危なかったが、なんとか間に合って良かった……

「二人とも大丈夫？」

「うん大丈夫なの」

「あぁ大丈夫だ」

フェイトが俺達の元へ降り立って、こちらを心配そうに見ており、心配げな声で聞いてくる。

それをなのはは笑顔を浮かべて答えて、俺は小さく頷いて答える。

さて……だがまだそこそこは残っているな

周りを見渡すと、フェイトの攻撃で先ほどよりはだいぶ減ったもののまだそれなりに残っている。

「フェイト、なのはさん。敵も残っていますし行きましょうか」

「「わかった（の）」」

……俺が仕切っていいのかは不明だが……まあいいか

先ほどの雷撃で、近くにいた機械兵達を一掃して、他の機械兵達も距離をとって様子を見ているため、余裕が少しだけあった。

「真夜君はどうやって戦うの？……あまり真夜君が戦っている姿見ないの」

まあそうだよな……なのは達の前でまともに戦ったの二回だけだしなのはのほうを振り向くと、ただただ不思議げにこちらを見ている。

「……私は、前衛ですからね。ではなのはさん、フェイト、行ってきますね」

「うん……」

「え？どういうことなの？」

言葉で説明しても仕方ないため、フェイトとなのはに一言言って、機械兵達がいる所まで向かい、そのまま一番前にいる機械兵に、大剣を斜め上から振り下ろして倒すと、一斉に襲いかかってくる機械兵達。

俺は……フェイトやなのはみたいに魔力弾を今の時点で作れんからな……ただ前で戦うのみ

正面からの攻撃をぎりぎりで避け、斜め下に構えた大剣で切り上げてから、今襲ってきた機械兵の後ろにいたもう一体を横切りで切り捨てた。

黄色と桃色の魔力弾の援護が飛んできて、俺に意識を向けていた機械兵達何体かがその攻撃を受けて、倒されていく。

そのことでなのはやフェイトを倒そうと、移動を始めようとした機械兵を、優先的に切り捨てていく。

必要ないかも知れないが……これくらいしかできんしな

なのはとフェイトの魔力弾との攻撃と、その攻撃を止めさせようと二人の元へ行こうとするのを阻止していく俺と、俺達三人が撃ち漏らしたのをユーノとアルフが拾っていく。

この方式で大半の機械兵達をテンポ良く倒すことが出来た。

大半の敵が倒し終えたときに、でかい破壊音が響き渡り、その音の元を見ると、壁に空いた大きな穴から先ほどの機械兵に比べものにならないくらい大きい機械兵が出てきている。

「……はぁこんなのまでいるのかよ」

「大型機械兵で、バリアが強かったはず」

「それでも倒さないといけないの」

なのはとフェイトが、大半倒し終えたことで、俺の元まで来て、並びながら同じようにあの機械兵を眺めている。

「さてどうする？」

「私達二人でならバリアを打ち破れるはず」

フェイトがちらっとなのはを見たことで、なのはもフェイトの言いたいことが伝わったらしく力強く頷く。

うん……やっぱりフェイトとなのはいいコンビだよな……

「フェイトちゃん一緒に頑張ろうね」

「うん……結城それまでの時間お願い」

「まかせておけ」

そして二人が、デバイスを構えて位置に着くと、大型機械兵はなに

をしてくるか気づいたのか背中の砲台のチャージし始め、大型機械兵と一緒に来た数体の機械兵達が四人に襲いかかるが、フェイトとなのはの二人はまったく気にする様子もない。

……二人とも、俺を信じすぎだ……だが悪い気はしないな

二人に襲いかかる機械兵達を寸前のところで切り捨てる。

「サンダー――――」

「ディバイーン――――」

チャージを終えてた大型機械兵は二人に向かって、撃ってくる。

っく……やばいな、かなりの威力だぞこれ

前にみたなのはのスターライトブレイカーにも劣らない威力を含んだ砲撃はなのはとフェイト達に迫るが、それをみても二人は慌てる様子もない。

ようするに……俺がなんとかしてくれると思っているってことか……なんとかしてみせようじゃないか

一回深呼吸をして、シールド発動させてタイミングを図る。

そしてシールドに当たる寸前に、反射を起動して砲撃の攻撃をひたすら受け続ける。

衝撃は凄く、今にも消し飛びそうになるが踏ん張りながら消費されていく魔力で少しだけ眼が霞みそうになる。

「「――バスター」」

二人が唱え終わると、高火力で強大な攻撃が大型機械兵を貫き、轟音ともに爆発して消滅したものの、まだ機械兵が数体残っており、撃ち終わりの一瞬の隙を突き二人に対して襲ってくる。

「これでもくらいやがれ。反射発動！！」

そして今まで受けて貯めていた砲撃を真っ直ぐこちらへ向かってくる機械兵達に向けて発動する。

そのまま先ほどの砲撃が、機械兵達に向かっていき、機械兵達が消し飛んだ。

「はぁはぁ二人大丈夫か？」

「結城が守ってくれると分かってたから大丈夫」

「やっぱりフェイトちゃんの言うとおりなの」

二人の方を振り向いて、聞いてみるもののそう言って笑顔を浮かべて答えてくる二人に対して若干の気恥ずかしさが出てくる。

……はぁ、嫌じゃないからなおさらたちが悪い

「なのはさん達はこれからどうするのですか？」

「わたし達は駆動炉を止めに行くの。フェイトちゃん達はどうするの？」

「私は今から母さんに会いに行く……」

意志を固めた眼で、なのはにそう言うと、なのはも小さい声で頑張ってほしいのっと笑顔で言ってきた。

そしてなのは達と別れた俺達はプレシアさんの元へと急いだ。

どうやら先ほどの攻防戦のときに時の庭園内の機械兵達全部が集まっていたらしく、遭遇することはないまま、長い廊下を飛んでいくばかり。

（「ライン一つだけ答えて欲しいことがある」）

フェイト達もこの先に待ち受けることに緊張しているのか沈黙だったので、少し前から考えていたあることをラインに聞いてみることにした。

（こんな時になんでしょうか？」

（「すまないな。一つ聞く……――――――は反転の能力で可能か？」）

ラインはこの質問に戸惑いながらも答えてくれて、それを行う際に必要な条件を事細かに説明してくれた。

（「そうか……一つあるか不明か疑問な物が必要だから難しいかね」）

（いえ……プレシア・テスタロッサとの通信のときに微かではあり

ますが検出されましたからあるいは）

（「そうかありがとな」）

そしてその会話が終わるとすぐに長い長い廊下を抜け、大きい広間に着き、その広間でプレシアさんとアリシアという娘が入ったポットと、プレシアさんから少し離れた位置で頭から血を流しているクロノ執務官が見えた。

それの状況はフェイト達も見て取れたらしく、緊張でフェイトの顔が強ばり、アルフは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

しかし、俺しか見えないのだろう、プレシアの真後ろにフェイトと同じ姿をした薄く透明な少女が浮いている。

そのままクロノ執務官の近くに降り立ったものの、フェイトは俺の横で緊張で強ばっているのは変わらない。

ちょっとだけ時間が経って、何を思ったのかいきなり俺の手を取り、握りしめてきたが、気にしないでいると少し深呼吸しているのが聞こえ、そこから手が離されてそのままプレシアの前に躍り出てくる。

「なんのようかしら？劣化品の人形」

フェイトを馬鹿にしたような顔で見ているプレシアさんだったが、やっぱり目は少しだけ悲しげで、その姿を薄く透けた少女が悲しそうに見下ろしていた。

フェイトはプレシアさんを言葉と馬鹿にしたような顔に怯まず、ただただ真っ直ぐとプレシアさんを見ている。

「あなたに言いたいことがあって来ました」
……これがフェイトが本当の意味でプレシアさんと向き合える機会だからな……頑張れよ
そしてフェイトすまない……フェイトの意志を穢すかもしれない
俺はおもむろにデバイスをスタンバイモードに移行させ、フェイトの本人の思いの丈をぶつける言葉を紡ぐ姿を見る。

「私は……
アリシア・テスタロッサではなく、
あなたにとっては、あなたが造った、ただの人形かも知れません
だけどそれでも、
フェイト・テスタロッサにとっては
あなたに生み出してもらって
あなたに育てて貰った、あなたの娘です
もしまだ私を娘と思ってくれるのなら
世界中の誰からも

どんな出来事からも
あなたを守ります
だって私にとってはただ一人の母さんだから
フェイト・テスタロッサとして、あなたの一人の娘として守ります」
その言葉に一瞬だけ目は動揺するが、顔は崩れず、ただただ馬鹿にしたような顔を浮かべているプレシアさん。
「……馬鹿らしいわ
人形風情が何を言うと思ったら、おもいあ「すまないフェイト」ぐふ……」
「母さん!!!」
プレシアさんがフェイトに意識を向いていた今のうちに、今までこのためだけに覚えてきた縮地で一瞬で近づき、プレシアさんが気づいてシールドを張る前に鳩尾を拳で抉るように叩きつけて、気絶させる。
悲しい決意をしたプレシアさんが……説得に応じるとは思わないからな……
そして俺の攻撃で、崩れ落ちるように膝から落ち、そのまま倒れそ

うになるのを正面から支える。

「クロノ執務官、この方を運んでいただけますか？」

「あぁわかった」

「どうして……？」

俺の言葉にクロノ執行官が頷き、近寄ってきて、そのまま俺から気絶したプレシアさんを受け取る。

振り向くと、フェイトがこちらを責めているような目で睨んでいる。

まあ……当然だよな……どうしても必要だったんだっと説明してもだめだしな

「……すまない、なにも言い訳をしないよ。フェイトの決意を踏みにじったんだしな」

「……一つ聞かせてほしい……医務室で言ってくれたこと「偽りない俺の意志だ」そう……」

なにがあろうが……どんな立場であろうがそれだけは嘘な訳ないだろ……

暫く俺を睨んでから、睨むのやめ、悲しげに微笑むフェイト。

「……私は……一瞬だけ結城のことを疑った私自身が嫌になる……」

「フェイト……？」

フェイトは怯えて怖がっているような顔を浮かべてから俯いた。

……こんな顔をさせているのは俺なのか……

「信じたいと思っていた……それでも私は一瞬だけ結城を疑った……騙したり、利用しないっていうの分かっているのに……

ごめんなさい……」

フェイトの元まで近づき、優しく頭を撫で始めると、フェイトは一瞬だけびくっと体が震えてた。

本当に……フェイトごめんな……どうしても実行したかった

「フェイトすまないな……まだ少しでも信じてくれるか？」

小さく頷いてくれたことに、申し訳なさと少しだけ嬉しさを感じた。

そして暫く撫で続けていると、俯いた顔が上がり、怖がっていた雰囲気が消え、無理はしているが笑顔を浮かべてくれたことで撫でることを止めた。

「それじゃあプレシアさんをクロノ執務官と一緒に運んでくれ。俺は少しだけ後で行く」

フェイトは素直に小さく頷き、アルフと一緒にプレシアさんを運ん

でいるクロノ執務官の元へと行った。

さて……やっぱり俺には見ているみたいだな

先ほどの会話と様子を傍観しているフェイトと同じ姿の子がただだただこちらを上から見下ろしている。

「君はアリシアさんですね？」

俺が自分のことを見えていることに驚きの顔をみせているアリシア。

まあ散々気づかれず、居たみたいだから当然と言えば当然か。

［あたしが見えているの？］

「透けてはいますがなぜかしっかりと見えていますよ？」

［それでなにかあるの？］

確実に見えている事を確認したのか、ニコニコした笑顔で首を傾げて聞いてくる。

なんだろう……まったく同じわけではないが、仕草がやっぱりフェイトと似ているな……

「はい、とりあえず私と共に来て貰いますよ？」

［君しか見えてないからいいよ］

もの凄く軽い感じで、承認してきたなぁぃ

終始ニコニコした笑顔を浮かべていたアリシアは、フェイトと似てはいるが、やっぱりフェイトとの違いが良く見て取れる。

（「結城……ジュエルシードが暴走で崩壊始まってきているから……だから私達はこのまま脱出するから結城も早く来て」）

（「すぐに追いつくよ」）

フェイトが遠くからこちらを見ており、俺の返事を聞いてから、この広間から出て行った。

さて……あとはこれだな

アリシアの肉体が入っているポットの前まで行き、色々と確認してみると排出と書かれているボタンを発見したため、ボタンを押すと、大きい音を立てて、ポットの中に入っていた水が排出される。

そして水が全て無くなると、ポットが開き、アリシアの肉体が取り出せるようになったので、バリアジャケットのコートを脱ぎ、アリシアの肉体を姫様だっこをしてその上にコートを被せる。

［……エッチ？］

「なぜ疑問系なんですか……」

霊体化されているアリシアが俺の正面まで来て、首を傾げてそう聞いてくる。

あれだ……色々な意味でフェイトと異なるな、こいつ

「それじゃあ行きますから付いてきてください」

［アイアイサー］

霊体のアリシアが笑顔でそう言って、広間の入り口の方へ向かっていったので、俺も後を追った。

そのまま俺達二人（？）は戻ってきた道を戻ると、時の庭園の入り口でフェイトとなのはとアルフとユーノが待っていた。

「真夜君その子は……アリシアちゃん……？」

「そうですよ。詳しい話しは後でしますから、戻りましょう」

四人とも、俺の腕の中にいるアリシアの遺体を見て、すごく疑問を浮かべた顔で俺の顔を見つめるが、そろそろジュエルシードの暴走で時間が無いことも分かっているため、とりあえずアースラへと戻っていった。

帰った後、直ぐさまアリシアの遺体をアースラの霊安室に運び込んでから、リンディさんへと事情説明するために艦橋へ行く。

「それでなんでアリシアの遺体を運んできたのかしら？」

「あのままでいるのはあまりにも可哀想ですから」

「そう……」

リンディさんは納得はしていないものの、最もらしい答えを言われ

たため、それ以上聞くことも出来ず、複雑な顔を浮かべている。
「あの……プレシア・テスタロッサはどこに運ばれましたか？」
「彼女は、アースラ内の犯罪者収容用の部屋に入れているわ。まあ牢獄ともいうけどね。それがどうしたのかしら？」
「私は少しだけ彼女と話しをしたいのですがよろしいですか？」
そう聞くと、リンディさんは俺の顔をジーッと見つめて、なにかを探るように見つめている。
……ここで話しできなければ捕まえた意味がないしな……
「まあいいでしょう。彼女は貴方に気絶させられてから起きたみたいだから会いに行くといいわ」
「ありがとうございます」
リンディさんは苦笑いを浮かべてはいたが、快く許可を出してくれる。
俺は頭を下げて、そのままプレシアが入れられている部屋の方へと向かう。
部屋の前まで行くと、頭に包帯を巻いているクロノ執行官がドアの前で立っている。
「クロノ執務官、リンディさんの許可を受けたので、少しプレシアさんと話しをしてもよろしいでしょうか？」

「……確認が取れた。入れ」

クロノ執行官がドアを開いたため、入ってみると、一部ガラスで仕切られており、プレシアさんがこちらをジッと睨みつけている。

そしてドアがまた閉められて、プレシアさんと俺だけがいる空間となった。

一応後ろにアリシアの霊体が付いてきているが、アースラに来てからずっと黙っているため、気にしないことにした。

さて……ここからが勝負だな……

俺がガラスの前に置かれた椅子に座ると、プレシアさんが睨みながらも向かい側に椅子を持ってきて正面に来る。

「なんのようかしら？貴方と話す理由ないのだけど？」

「いやいや、ただの気まぐれですよ」

（「すこし取引をしたいのですが？」）

言い終わりに、念話で本題を申し出ると、少しだけ驚かれたが、一瞬で俺を睨む顔に戻る。

「私は殴って気絶させた相手と話すのは嫌なのだけど？」

（「なにを取引するっというのかしら？」）

プレシアさんも、その二重会話に乗ってくれて、俺を睨みながらも会話を続けてくれる。

……フェイト、すまない。そしてアリシア。恨んでくれてもかまわない……

「そんなことといわないでください。あれは貴方を捕まえるため仕方なかったんです」

（「私が差し出す物は……アリシア・テスタロッサを生き返すことです」）

プレシアさんの顔は驚きと疑惑の色で染め上がり、それから鋭く睨みつけてくる。

それを内心自嘲気味に笑い、色々な物を冒涜することを知りつつも、プレシアさんを正面から見据えて話しを続ける。

それでも……貴方には、やりきってから死んで貰いたいんです……

18話　時の庭園（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます」

真「……はぁ、フェイトを騙したようで後味悪い……」

元「まあ……そもそも結構前の段階からプレシアさんを捕まえるつもりだったでしょ？」

真「……なんとなく嫌な予感してたからな。縮地のやり方を知った瞬間もし原作通りに進んだら捕まえられるように覚えていたしな」

元「まあ真夜がやりたいようにやればいいさ」

真「わかったよ。まあ不器用ながらも進むさ」

元「……そもそも器用に出来るはずないと分かっているがな」

真「否定できねぇ……さて締めの時間だ」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセスやお気に入りが増える度喜んでおり、感想を書かれた日には目をランランと輝かせています」

元「誤字脱字作品への突っ込み、感想あればぜひぜひ書いていただけると嬉しいです」

真「それでは……」

元・真「また次回会えることを楽しみにしております」

１９話　主人公が見た幻想（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
急展開で読みにくく、無理矢理感漂うかも知れませんが、それでも
読んでいただける方は本編に移りたいと思います

19話　主人公が見た幻想

「貴方に何もかもつぶされたから恨む気持ちしかないわね」

（「どういうことなのかしら？」）

睨みつけてくるプレシアさんを見つめながら、脳裏に浮かぶのは時の庭園でプレシアの元へ急ぐため、長い廊下を飛んでいたときに、ラインに対して聞いた死者蘇生についての解答だった。

蘇生条件はまだ一つ揃ってないが、それを揃えてからだとプレシアさんと取引出来ないからな……

まっすぐとプレシアさんの瞳を見つめて、ただこの取引の成功だけに力を注ぐため、話を続ける。

「それは残念です……」

（「私には一つあるスキルがありまして、それを利用すれば蘇生は出来ます」）

プレシアさんが戸惑うような目でこちらの顔を見つめてきて、そこから数十秒間の沈黙が流れた

「もう貴方と話すことはないわね」

（「……こちらの対価言ってみなさい。もしアリシアが生き返ったら乗ってあげるわ」）

プレシアさんが少しだけ疲れたように笑いながらこちらの提示する条件で乗ってくれて、最後に自嘲気味に笑う。

「そうですか……それでは失礼します」

（「プレシアさんがフェイトを強制的に手伝わせたと主張して罪を全て貴方のせいにすることと、

フェイトに対しての嘘は止めていただきたいことですね」）

プレシアさんの表情が一瞬固まり、浮かべた笑いが引きずっている。

本当に……そっくりだよな……よく見ると嘘が少しだけ分かりやすいところとか

俺が椅子から立ち上がると、プレシアさんは誤魔化すために再度笑おうとするがやっぱり笑い切れてない。

（「私は嘘なんて言ってないわよ」）

（「知っていましたか？今プレシアさん嘘付いていることが丸わか

りの顔してますよ？」）

驚いて咄嗟に顔を触り、確認していたが、それが一番の証拠だった。

多少嵌められたことにすぐ気が付いたプレシアさんは、諦めたように軽く微笑む。

（「嵌められたわね……

貴方は私の決意を踏みにじるのね？

……もしアリシアが生き返ったらフェイトとちゃんと向き合うわ」）

（「約束ですよ。それでは私は行きますね」）

そのままドアの方へ行き、疲れたように軽く笑い声を出すプレシアさんを残して、部屋から出て行く。

「もう話し終わったか？」

「えぇ結局取り合ってもらえなかったですよ」

「そうか……」

ドアの前で立っていたクロノ執行官と会話をするがどうやら取引をしていたことには気づかれていない様子で、苦笑いを浮かべながら対応してくれる。

色々な人を騙して……やっぱり俺は最低の野郎なのかも知れないな……

クロノ執務官と別れてから、当てもなくアースラの中を歩いているとそんな考えが浮かんでくる。

まあそれは今更か……

思わず苦笑いが漏れてきて、少しだけ虚しくもなってくる。

［ねぇ……お母さんと何を話してたの？］

人気がない通路に来たときに、ずっと俺の後ろで沈黙を保っていたアリシアが真剣な声で質問をしてくる。

……さすがに、散々プレシアさんの様子見てたんだから、念話で別の話してたのはばれるか……

そして張本人の一人に話さないわけにはいかないか……

後ろを振り向くと、覚悟を決めて聞いているらしく、真剣な顔でこちらの顔を見ている。

内心ため息をつきながらも、こちらも話す覚悟を決める。

……例え貶されても文句が言えない立場だしな

「話しますから付いてきてください」

アリシアが小さく頷いたのを確認して、そのまま話す場所として一番適切な場所へと急ぐ。

「さてここがいいですかね。とりあえず鍵を閉めてっと」

［なんでれいあんしつ？］

「説明するのに一番適切ですからね……プレシアさんと話していたのはアリシアさんを蘇生させる代わりにして貰いたいことがありますっと持ちかけただけですよ」

嘘をつかず、簡潔に説明したので、内容的にアリシアは怒り出すと思ったのだが、ただこちらを見つめているだけで怒っている様子はない。

［どうやってやるのか、教えて貰っていい？］

「利用したと怒り出さないんですね」

［お母さんがあたしを生き返そうと必死だったのも知っているからねなんとなく怒る気もしないよ。ただお母さんの願いが叶うのが嬉しいだけだよ］

自分が利用されることを知りつつも、ただお母さんの願いが叶うことを嬉しそうに笑いながら喜ぶアリシアの姿が少しだけフェイトと重なる。

やっぱりどことなく似ている部分が三人ともあるんだよな……今は教えないとな

「……さて説明しますが、私が使えるスキルの反転の中には状態反転というものがあります

これは他人や動物の肉体状態の一部などを物々交換のようにするのが状態反転なのですが、

状態反転は、注ぎ込む魔力を何倍にもすればリバースという上位の状態反転に変わるのです。

これは他者や他の提供先がいらなく、対象者のみで充分になります

そして肉体状態から事象まで昇華させたものですからやれることが増えます

死んでいるという裏は生きているという事になるため、生き返す事は可能です

ですが、器だけ生きている状態になってもすぐ死んでしまいます。

そのために、魂と、あと自然の摂理を無理矢理ひっくり返すための異常なまでの魔力が必要になります

わかりましたか？」

……確か提供先がないからこそ、魔力の必要量が倍に増えるんだったよな……

だが、誰かのために誰かを殺しても、今回の場合は結局意味ないことだしな……

［全然わからない！！］

アリシアは理解できなかったらしく首を傾げながら笑顔で即答してきた。

まあ考えてみれば……いまの話しは、難しい言い方しているから理解しろってほうが難しいか

深呼吸を少し行い、今の話しを必死にかみ砕いて、アリシアが理解しやすいレベルまで落とす。

「簡単に言えば、オセロのようにひっくり返して、死んでいる状態から生きている状態にしますけど、

アリシアさんの魂がないと意味がないので、

私が生き返そうとし始めたらアリシアさんは体と重なるように転がってくださいってことです」

［うん、なんとなくだけど理解したよ～］

アリシアさんは満面の笑みを浮かべて頷く。

……まあアリシアにした説明はすべてラインからされた説明しているだけだからな……

本当の意味で俺も理解しているかっといわれたら苦しいな……

「アリシアさんここで待っててくださいね」

アリシアさんが頷き、手を振ってくるので俺も振り返し、霊安室を後にする。

そしてリンディさんが居ると思われる艦橋まで急ぎ足で向かった。

「リンディさん大事なお話があります。みんなさんを集めていただけますか？」

「……嫌な予感がするのだけど、今回の不自然な点もきっと説明してくれるんでしょうからいいわよ」

艦橋に着き、こちらの時間もないため、リンディさんに単刀直入に用件を言うと、リンディさんはじーっとこちらの目を見ているのでそらさず、見返すこと数十秒後疲れた様子でため息をつき、みんなを集めてくれる準備をしてくれた

……あとはもらえるかどうかにかかっているな……

数分後放送で集められたメンバーは先ほど次元の藻くずへと消えた時の庭園での決戦に行った主なメンバーと、艦橋に居たリンディさんとエイミィさんを含めた面々が俺の話による呼び出しで集まっていた。

「それでお前はこのメンバーを集めてなんの話しをするというのだ？」

睨むようにこちらを見つめているクロノ執務官の視線が突き刺さり、周りも不思議そうに見ている者と疑うような目で見ている者など様々だった

どうみても怪しい話ししか見えないだろうな……

苦笑いを浮かびそうになるが、それを抑えて正面からクロノ執務官を見返す。

「時間もないので、本題を言います。

残りのジュエルシードを使わせてください」

それでも……フェイトとの違いは数多いし、プレシアさんの取引のためと誤魔化しているが

自己満足押しつけているのは分かっていても……フェイトと似たような顔で悲しい顔されたら手を出したくなるじゃないか

俺の自分勝手な想いって分かっているが、叶えたい願いなんだよ

膝を地面につけ、手も付いて土下座のポーズで頭を下げてその体勢のまま次の言葉を待つ。

その瞬間クロノ執務官以外のメンバーが、俺の名前を驚いた様子で

軽く叫ぶ声が聞こえる

「お前はなにを言っているのか、わかっているのか？

さきほどジュエルシードの暴走で何も感じ取れなかったのか？

ロストギアであり、莫大な魔力を秘めたジュエルシードは大量の人を殺せる力がある

それを使いたいだと？

この場でお前をつかまえ「クロノまちなさい」リンディ艦長！？」

顔を上げると、リンディさんが突き刺さるような眼光で俺を見下ろしており、それを必死に目をそらさず見返す。

「なぜ必要なのかしら？」

きっとここで目をそらしたら、もう二度とチャンスがないと思い、リンディさんの目をみて言葉を紡ぐ。

「救いたい人がいるからです

それを救った後はいくらでも処罰を受けます

私の勝手だと分かっていますが、どうかお願いします」

……きっとこれは、押しつけがましい願いなのだろう。そして、青臭い願いなのだろう

それでもプレシアさんには親としての最後の責任を持って貰い、そしてその代わり夢を見せたかった

アリシアという存在には、最後まで全うする人生を歩んで欲しかった

そして　最後にプレシアさんの口から不器用ながらも愛されていた事をフェイト自身に知って欲しくて、またフェイト・テスタロッサとしての家族の語らいをさせてやりたい

アリシアとプレシアさんの姿を見たときに青臭いながらも、押しつけであろうが、例え恨まれたとしても、最後に本人達が笑えるものになるんじゃないかと幻想してしまった馬鹿な男が願った願いだと思う

目端で、フェイトが真剣な顔で俺の事を見つめていることに気づいたが、今は申し訳なくて、目が合わせられない。

正面にはリンディさんがただ真意を確かめるように俺の顔を見下ろしている。

そこから誰もしゃべらず、しばらくの沈黙が流れる。

「いいでしょう……その代わりなにをするか知らないのだけど最低何人か同行させて貰うわよ」

「母さん！！なぜ許可するんですか。最後の戦いは協力しましたが、

そもそも何度もおそ「クロノ良く思い出して見なさい」はい？」

リンディさんのクロノ執務官を見つめる目は、真剣であり、暖かい物に見えて、顔も微笑みを携えている。

「彼は、ただ一度も彼からの攻撃で危害を加えられた事はないわ」

「え？そんな筈は……最初にあったときにこ「それはクロノの攻撃を跳ね返しただけで攻撃したとはいえないわ」っく」

「……わたしも真夜君に攻撃されたことはないですし、ユーノ君も同じです」

クロノ執務官は、同意したなのはを軽く睨むが、すぐに顔をそらしてから悔しげに俯くが、拳を軽く握りしめている様子が見て取れる。

「結城真夜くんだったかしら？貴方には一度も危害を加えられたことなく、プレシア・テスタロッサを捕まえた功績もあります。

ですので、その功績や恩を全て無にすることで、限定状況下ではありますが認めましょう

こちらに危害を加える物ではないのならば、目を瞑りましょう」

（「貴方の目は意志を強く持ったものだったから信じてあげましょう

それに、クロノの報告からそこのフェイトって子に信用されており、

貴方も大事にしているみたいだからフェイトって子が悲しむことしないだろうからね」）

（「リンディさん……本当にありがとうございます……」）

リンディさんの言葉に、感謝の意を込めてもう一度頭を下げて、立ち上がろうとしたもののふらついてしまい、咄嗟にフェイトが動いて支えてくれる。

フェイトは心配げにこちらを見ており、安心させるために頭を撫でると、嬉しそうにされるがままにされている。

「フェイトありがとな」

「ううん……体が勝手に動いたから」

その様子を恥ずかしそうに眺めているなのはと、暖かい目をして微笑んでるリンディさんと、苦笑いを浮かべているアルフが見える。

……やばいな俺も咄嗟にフェイトの頭撫でる癖がすっかり付いちゃったな……うんやばいな

「えっとそれでは早速行きたいのですが、一つだけお願いが……男性陣だけ待っていただけますか？」

「なぜお「クロノよしなさい」……」

クロノ執務官が異議を唱えようとするが、なにかしら意図を察した

のかリンディさんが制止してくれた。

「近い位置で待機させてもらえるならば許可しましょう」

「わかりました。早速行きましょう」

そうして、話しをしたメンバーを引き連れて霊安室まで来た。

「ここが目的地です」

「霊安室？まさか……」

リンディさんは霊安室が目的地であることに疑問を持ったものの、なにをしようとしているのが分かったらしく少しだけ睨みつけてくる。

他のメンバーはなぜ霊安室にきたのか分からないらしく、疑問を含んだ目で俺を見つめている。

まあ……アリシアの遺体をどこに運んだか知っているのはリンディさんしか知らないしな

「質問などは時間がないので、後で受け付けますから入りましょう」

「分かったわ……」

俺以外の男性陣をドアの前に残し、女性陣を連れて部屋にはいると、アリシアが来たことに気づいたのかこちらにニコニコしながら寄ってくる。

［えっともうスタンバイした方がいい？］

他のみんなには分からないように小さく頷くと、アリシアは自分の肉体の所まで行き、重なるように寝転がる。

そして俺はアリシアの遺体の所まで行き、かけていたバリアジャケットのコートをおもむろに剥いで着直し、近くから布を持ってきてアリシアの体にかける。

「えっと……アリシアちゃんの遺体？」

「……結城？」

フェイトとなのはは俺の両隣で固まったように動きを止め、アリシアの遺体を凝視しており、フェイトに至っては強ばりながら不安な顔を浮かべてみている。

……少なくとも、フェイトはかなり複雑だからな……

後ろをちらっと見ると、アルフが俺に対して殺気を込めた目で睨んでおり、リンディさんは複雑な顔でなのはとフェイトの様子を眺めている。

（「フェイト……なにがあろうが医務室で言ったことは嘘じゃないから信じて欲しい」）

（「……うん、分かった」）

フェイトは俺の念話の言葉で少しだけ、不安が取れたのか、先ほどの強ばったのがとれて、ただ自分と姿形が一緒の少女の亡骸を見て

いる。

さて……準備をするか……

（「ラインブレイクスタンバイモードからビックソードモードへ移行」）

（移行承認。……マスターやっぱりやるんですね）

（「あぁやるよ。そのために時の庭園でやり方聞いたのだからな」）

ラインは、それ以上言っても無駄と判断したのか、言葉が返ってくることはなかった。

「なのはさん……ジュエルシード渡して欲しいです」

「うんわかったの……はい」

なのはは緊張した様子で頷いてから、スタンバイモードになっていたデバイスを起動してから、デバイス内に今ある全てのジュエルシード渡してくれて、俺はそれを受け取り、デバイスの中にしまい込む。

（「……ライン、この先どうやるか教えてくれ」）

（はぁ……一応再度忠告しますが、自分の許容以上の魔力を使いますから、やり終わった後の反動が酷いですよ？）

（「それは覚悟の上だ。頼む」）

（……こんなことならちゃんと答えるんじゃなかった……

ごっほん

これからすることはマスターの技量的に詠唱が必要ですから私に続いて言ってください。

そしてジュエルシードの力を使うため、マジック・アトラクションを使用します）

（「確か、魔力量が絶対的に足りないしな……それしかないよな」）

（その通りです。それでは逝きましょうか）

（「なにか不穏な言い方だったような気もするが……まあいいか」）

両隣に立っているなのはとフェイトの顔を確認するが、なのはは悲しそうな顔を浮かべ、フェイトはただ無表情に亡骸を見つめている。

「それでは……「真夜君はアリシアちゃんを生き返らすつもりなの？」はい……そうです」

俺が小さく頷き、そう答えると、なのはは複雑な顔を浮かべて、それからアリシアの亡骸をジーッと見つめて、なにか言いたそうに口を動かそうとするが、結局なにもいえず口を閉ざしてしまう。

それから俯いて、無理矢理感はあるが笑顔を浮かべて、頑張ってほしいのっと俺しか聞こえない声のおおきさで呟き、そのまま後ろへ

下がってしまった。

「結城……頑張って」

それを横で聞いていたフェイトは、必死に自分の気持ちを抑え込んで、そう言ってくれるが、声に怯えが含んでおり、そして不安げに揺れている目が隠し切れず、顔も必死に笑顔を浮かべようとしているが悲しそうに笑うことしかできていない。

上手く出ていないことに気づいたのか、俺から顔をそらしてそのまま下がろうとしたので、手を取って引き留めた。

「……何があろうが俺にとってはフェイトはフェイトだからな」

怯えた顔でこちらを振り向き、掴まれた手も振り解かず、ただ俺を不安げに揺れる目で見据えており、俺はそれを真剣な顔で目をそらさず見返して思いを乗せる。

見つめ合うこと数十秒のくらいの時が経った頃にフェイトは顔を俯かせ、小さく深呼吸をする。

そしてまた顔を上げたときには、不安げに揺れている目も怯えた顔も無くなっており、ただ少しだけ微笑むばかり。

もう大丈夫だと思い、掴んでいた手を離すと、フェイトは大丈夫だよっと言いたげに小さく頷き、そのままなのは達の元まで行き、なのはと並びながらこちらの様子を見ている。

その様子を確認してから、アリシアの遺体のそばに立ってから徐(おもむろ)に、肩で担いでいたデバイスを、両手でアリシアの真上に横にして持ち、

今から行う事を集中すべく、深呼吸をしてから、静かに目を閉じてまたゆっくりと目を見開く。

ジュエルシードをデバイスから吐き出させて、アリシアの上に浮かべる。

「ビックソードフルロック解除、マジック・アトラクション移行！！」

『ビックソードフルロック解除承認、マジック・アトラクション機構解除承認』

大剣の鍔の両端が開くと、次々とジュエルシードが空いた穴に収まっていき、分解して取り込んでいく。

すべてのジュエルシードを取り込むと、今までで一番強く灰色に光り出して、魔力の準備が完了したことを知らせる。

まあ……まさかだれもジュエルシードレベルの堅さと魔力でも分解できて、完璧に魔力取り込めるデバイスがあるとは思わないしな……

そしてアリシアを現世に戻す魔法を紡ぐため、詠唱を始めた。

ｓｉｄｅ　なのは

「我は、覆す者――――」

……綺麗……

真夜君が、なにかの詠唱を唱え出すと、銀色にキラキラと輝く魔力が込められたもの達が緩やかに回転しながら真夜君を包み込む。

フェイトちゃんは、わたしの横で固唾を呑んで、その様子を見守っている。

「我は、抗う者――――」

横にいるリンディさんとアルフさんは、驚きで目を見開いている。

……わたしでもここに込められた魔力の濃さが分かるの

「我は、理(ことわり)に抗い、事象を覆そうと願う者」

真夜君の周りを回っていたキラキラと輝く魔力が込められたもの達が、今度は集合し始めて、そして髪の長い大人の女性の姿になり、真夜君の後ろで横に腕一杯広げて、まるでそれは真夜をまもっているようだった。

「我は願う

目の前の亡骸に生命の息吹がまた訪れることを

我は抗う

目の前の亡骸に注ぐ息吹を邪魔する自然の摂理に対して

我は、覆す

目の前の亡骸に下された生命の終わりを」

真夜君を守っていた女性は、またキラキラして輝いていたものに戻り、次はアリシアちゃんの上に灰色の見たことない魔法陣が現れる。

「事象の理に抗い続けて、いまここに覆す者が願う

逆転（リバース）！！」

とたんに、風が吹き荒れて、思わず目を瞑って、真夜君の姿が一瞬見えなくなる。

次に目を開けたときは、真夜君が大剣を杖にして立っている姿だった。

その様子をみて、横にいたフェイトちゃんは飛び出して、真夜君の元へ駆け寄っていった。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

「ぜぇぜぇ……アリシアの様子は？……よかった」

先ほどの完璧な亡骸の様子ではなく、頬に赤みがあり、生きていると思わせるものだった。

……なんとか成功させたな……

「結城大丈夫！？」

フェイトが心配そうな顔を浮かべて、俺の元まで来た。

……まあなんとか剣を杖に立っていることがやっとの姿見れば心配になって当たり前か

「だいじょ……ごふ」

「結城！？」

フェイトを心配させまいと、笑顔で答えようとするが、途中で違和感を感じ、咄嗟に口元を片手で押さえるが、指と指の間から血がたらたらと漏れてくる。

あぁ……だいぶ反動がでかかったんだな……

「結城！！結城しっかり！！」

大剣をさっきの勢いで離してしまって支えを失った俺は、一瞬倒れそうになるが、フェイトが支えてくれて倒れることはなかった。

そして涙目になりながら、必死の形相で俺に呼びかけてくるフェイトが霞んでくる目の中に飛び込んでくる。

あぁ……またフェイトに迷惑かけちゃったな……

「はぁはぁ……心配はいらないよ……それよりもアリシアが……起きたら……約束……果たして欲しい……という伝言をプレシアさん

に言って欲しいと……伝えてください……」

伝えたいことをなんとか言い切ることができ、安堵したことで体の力が抜けそうになる。

しかし目に一杯の涙をためて、今にも泣きそうな顔をして必死に頷くフェイトが見えて、何とか踏ん張ろうとするが、やはり力が余り入らない。

そしてフェイトの目からとうとう涙がこぼれ落ちて来てしまう。

苦笑いを浮かべて涙を指で拭こうと腕を上げようとした瞬間、腕の力が抜けて、ぷつんと意識が切れて目の前が真っ暗になった。

19話　主人公が見た幻想（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想ありがとうございます」

真「……一つ聞いてもいいか？」

元「なんでしょうか？」

真「状態反転ってもしかして何かを代償にすれば命が救えたり、瀕死状態から復帰できるのか？」

元「その質問はイエスです。

瀕死でも人身御供のような代償を払えば、瀕死に近い傷でも完璧治ります

まあ使用者に状態反転を発動できる魔力量があることと

片方に傷がないことが条件ですね

ちなみに死んでいる者は肉体しか生きている状態に戻せないため

その肉体に入る魂が存在しないと、数秒も経たず死亡します」

真「もしかしてだから反射以上にチートがあると前から言っていたのか？」

元「……少なくとも状態反転は物々交換で、リバースは状態や事象を裏返したと覚えていただければいいです」

真「まあいいや……締めの時間だな」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度喜んでおり、

感想書かれたときは本当に悶え苦しむように喜んでいます」

元「アクセス数もめでたく2万突破いたしました」

真「それでは……」

元・真「「また次回会えることを楽しみにしております」」

２０話　この想いは……（前書き）

駄作を手にとって頂きありがとうございます。
今回は勢いとやっちゃった感が漂う回となっております。
さてそれでは本編に移りたいと思います

20話　この想いは……

side　フェイト

「結城！？結城！！ゆ「フェイト、坊主は気を失っているだけだよ……」アルフ……？」

いきなり結城から力が抜けて、思わず結城を落としそうになるけどなんとか持ちこたえて、必死に揺らして呼びかけてみるけど返事がなく、結城が死んでしまうんじゃないかと思って、段々と血の気が引く思いになる。

突然アルフが私の肩に手を置いてきて、絞り出すような声でそう言ってくるから、咄嗟に後ろを振り向くとそんなことしても意味がないと言いたげに、首を横に振ってくる。

「少し診てもいいかしら？」

前からそのような声をしたから、振り向くのやめ、前を向くといつのまにかこちらの方に近づいていた、この船の女性艦長が私の顔を真剣な顔で見ていることに気づく。

……結城の容態がなにもわかってない……なのにただ慌てるだけだった私……こんなんじゃ駄目

深呼吸を小さくしてから気持ちを切り替えてから、私はしっかりと頷く。

そうすると女性艦長は、徐にしゃがむと結城の首に指を当てたり、

口元に耳を近づけたりしてなにか確認してまた立ち上がったとき女性艦長の横顔は若干深刻そうな顔をしていた。

「……なのはさん、部屋の外にいるクロノに担架持ってくるようにいってくれるかしら？」

「え？あ……わかったの！！」

後ろで白い魔導師が女性艦長に言われて、慌ただしくドアに向かっていく音が聞こえ、女性艦長はどこかと連絡を取り合っているようだった。

結城をどこかで横にさせて上げたいと思い、霊安室内を見ると、一つのベットが見え、必死の思いで運ぼうとするけど、上手く進めない。

「フェイト……あたしが運ぶよ」

……結城を早く横にさせるためには……お願いするしかないか……

私がアルフの提案を受けて頷くと、アルフは私から結城を受け取り、膝の後ろと背中に腕を回してそのまま持ち上げて霊安室のあるベットまで運んでくれた。

そしてベットで横になっている結城の顔は、血の気があまりなく、唇も青くなっていて、呼吸も弱々しい。

なぜか悔しさで、涙が出てきそうになるけど、ぐっと堪えて横にいるアルフを見ると、結城を睨みつけるように見ているけどどことなく力がない。

「フェイトさん？今から担架で医務室まで運びますからベットの前を開けるかしら？」

どれくらい結城を眺めていたのだろう。

声がして後ろを振り向くと先ほどの女性艦長が、担架を持っている二人の管理局員の制服を着ている男性局員を引き連れてベット近くまで来ており、私達がベットの前から退くと、結城は担架に乗せられてそのまま部屋の出口に向かい運ばれていく。

「え？……」

でも急に結城を乗せた担架が光り出すと、結城のバリアジャケットが解除され、置き去りにされていたデバイスがスタンバイモードになって地面に落ちたので、拾い上げて、無くさないように首に付けると、お礼を言っているように灰色に鈍く光る。

バリアジャケットとデバイスがスタンバイモードになった以外何事もなかったため、すぐに担架を運ぶのが再開され、私もその後ろを付いて行こうとするけど、ある物が目にとまり立ち止まる。

「アルフ……先に行ってて欲しい。私まだやることがあるから」

「……わかったよ」

アルフに先に行ってくれるように頼むとアルフは私が見ていた物に気づいたのか、渋い顔をしたけど、納得してくれて、そのまま運び出されていく結城の後を追っていった。

そして私は、結城からのお願いを果たすため、先ほど目に入った今にも起きようとしている私の元となったアリシア・テスタロッサの元へと進んだ。

「あたし……生き返れたんだ……」

「そう……貴方は結城のおかげで生き返れた」

私がアリシア・テスタロッサが眠るベットまで近づき、ちょうど傍まで来たらアリシア・テスタロッサは目を開けて呆然としたような様子で呟いたから思わず皮肉を込めて答えてしまった。

……本当は怖くて話したくもなかったけど……でも結城のお願い叶えないと……

そしてアリシア・テスタロッサはゆっくりと体を起こし、私の方を興味しげに見つめている。

そのことでなおさら怖くなり、体が強ばって唇も震えそうになる。

「なにかおかしいですか？……」

「ううん～ただおっかなびっくりで見られると悲しいな～ってね」

「そうですか……貴方を生き返らせた人から、貴方からプレシア母さんに約束を果たして欲しいと伝えて欲しいという伝言を頂きました」

おどけた口調で面白そうに笑うアリシア・テスタロッサに、何故か知らないけど苛立ちを覚えてきて、それを隠すため、冷淡に伝言だ

け伝えてから直ぐさまアリシア・テスタロッサに背を向けてドアの方に歩く。

「伝えてくれてありがと～」

そんな明るい声が後ろから聞こえてくるけど、アリシア・テスタロッサがなぜか怖くて、返事をせずその部屋から出て行く。

結城が運び込まれた医務室に着くまでその恐怖が胸の中を占めていく。

「彼は……今のところ命だけは別状ないのだけど……でもかなり衰弱しているからいつ目が覚めるか分からなく、未だに予断を許さないということよ」

結城が運び込まれた医務室までくると、女性艦長がドアにもたれながら立っており、アルフなどと言った結城に霊安室まで連れてこられた人達全員が医務室の前で、暗い雰囲気をして立っている。

嫌な予感がして、ドアの前に立つ女性艦長に結城の容態を聞いてみると、感情を押し殺したような顔しながらそう説明された。

……え？……嘘……だよね？

「ちょっと！？フェイトさん！！」

女性艦長を無理矢理退けて、部屋の中に入ると、いくつかの機械に

囲まれ、色々な管が付けられて呼吸器も付けられてベットで横になっている結城の姿があって頭が真っ白になる。

「フェイト？あたし達ができることはないよ」

アルフらしきの声が後ろから聞こえるけど気にせず、結城の元へ急ごうとするけど、足が上手く動かなくてなかなかたどり着くことが出来ない。

「フェイトちゃん？」

誰かの声が聞こえるけど、そんなことより結城の元へたどり着きたくて、足を進めていく。

そしてやっとたどり着くけど、結城からなにも反応が無く、弱々しく呼吸器で息する音と、ピッピッピと機械から一定のリズムで鳴る音しか聞こえてこない。

試しに結城の手を強く握ってみるけど、握り返してくれない。

「フェイト？……坊主恨むよ」

誰かの声が聞こえるけど、耳に残るのは一定のリズムでピッピッと鳴る音と結城の呼吸の音しか残らない。

……私が今結城にできること……結城がしてくれたように傍にいること……

近くにある椅子をベットの傍まで引き寄せて、そこに座ってから両手で結城の手を握り、そのまま祈るような姿勢で結城が起きるのを

願いながら待つ。

もうどれくらい経ったろう……分からない

俯いた顔を上げて結城を見てみるけど、ただ目を閉じていて起きる気配がない。

結城が起きるのを待っている間、何度か誰かの呼びかける声が聞こえたけど、その声が耳に残らず、ただ刻むように流れてくる機械音と呼吸音しか入ってこない。

「結城……私は結城がくれたみたいな安心感与えられている？」

そう聞いてみるけど、結城は答えくれる筈もないため、ただ結城と私しかいない病室に悲しく響くだけ。

……そういえばなんで私こんなにも……結城が倒れただけで結城のことしか考えられなくなるんだろう

安心感や胸が暖かくなって幸せな気分になれて一緒にいるのがただ純粋に楽しかったのに、いつの間にか結城が怪我をしたり、辛い顔していると胸が凄く痛くなって、結城が傍から居なくなるって考えただけで今まで以上に胸がぎゅっと締め付けられるようになっていた。

でも……今まで以上に幸せな気分にもなれて、痛い時の方が多いのに嫌な気分にならない

ドアが開く音がしたような気がするけど、ドアの方を見る気にもならなくて、ただ結城を見続けた。

でも、見続けられる時間もそうも続かず、少し経ったらなぜか段々まぶたが重くなってくる。

「……私……起きていたいのに……意識が……」

まぶたが重くなるにつれて、意識も段々と遠のいき、ついに意識がぷっつんと切れた。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

「ん……？、ここは白い天井？」

「おはよう～起きた？」

目が覚めて、ぼんやり呟くとしゃべりにくいことに気づき、口元についてきた物を外してみると呼吸器だった。

そして次の瞬間、誰かの声が聞こえてきて、体起こそうとしたら、ふと足の辺りに重みを感じる。

上半身を完全に起こすと、俺の手を握りしめたまま、足を枕に寝ている金髪少女の姿が見える。

そしてその少女が寝ている逆側を見ると、同じ金髪で寝ている少女と同じ見た目の白いワンピースを着た少女が、満面の笑顔を浮かべて、こちらに手を振っている。

「アリシアさん……元気ですね？」

「あれ？一発でアリシアと分かっちゃった？」

「はぁ……どこに間違える要素があるんですか？どうみてもフェイトではないことは確実でしょうに」

こんなにも……違いがあるのにどこをどう見て間違えろっていうんだよ……

立ち上がろうとするが、俺の手を両手で握りしめつつ、足を枕に寝ているフェイトがおり、動くことが出来ない。

そしてアリシアが不思議そうに首を傾げてこちらを見ているが、どことなく嬉しそうな顔を浮かべている。

「でもここまで来るときに、みんなフェイトだと勘違いしてたり、間違えたりしてたよ？」

「少なくとも私は間違えませんよ。フェイトはフェイトですし、アリシアさんはアリシアさんですよ」

「それが凄いと思うんだけどな～」

そう言って嬉しそうに満面の笑顔を浮かべて答えるアリシアは、やはりフェイトと違った雰囲気があり、そしてちゃんと生き返す事が出来たという嬉しさと達成感を感じさせる物だった。

まあ……俺自身がフェイトはフェイトだと言ったんだからな……間違えることだけは絶対しちゃいけないよな

「アリシアさん？私はどれくらい寝ていたのでしょうか？」

「確か一日半だよ～そしてフェイトっていう子は君を片時も離れず、ずっと起きて傍にいたみたいだね」

「は？……本当ですか……？」

笑顔で元気にうんうんと頷くアリシアを見て、フェイトを心配させた事の申し訳なさと、フェイトに対してこんな俺なんかにそんなことしなくてもという呆れも出てくる。

……でもこうやって心配して貰って、傍にいてくれることはむしろ嫌じゃなくありがたいことだよな

感謝を込めて、俺の足を枕にして寝ているフェイトを握られていないもう片方の手で頭を撫でる。

その様子を、優しげな目で見ているアリシアが視界の端に見えるが今は気にせず、暫く撫で続ける。

そうやってフェイトの頭を撫でていると、いきなりフェイトは、ゆっくりとした動きで顔をあげて、寝ぼけ眼のまま、俺の顔をぼんやりとした様子で眺めてくる。

「え？……ゆう……き？」

「フェイトお「結城！！」ぐふ」

暫く経ってから、ようやく頭が動き出したのか、一瞬信じられない

ような物を見るような驚いた顔を浮かべたものの、直ぐさま俺の胸の中に飛び込んできたから、思い切り胸を強打されて思わず咳き込みそうになる。

それでも心配をかけた俺が文句いうのも筋違いと思い、胸の中で俺の名前を連呼するフェイトの頭を優しく撫でて落ち着かせようとする。

その様子をにやにやとした笑みで、見ているアリシアにはもの凄く文句を言いたいが……

「結城……ごめんなさい……それとこれ」

「気にするな……預かっていてくれてありがとな」

暫くなで続けているとやっと落ち着いたフェイトが離れてくれたものの、少しだけ顔を赤くさせて申し訳なさそうに俯いている。

そしてフェイトは自分を落ち着かせるように少し深呼吸してから、首に付けていたスタンバイモードにしたラインを首から外して、渡してくれてたので、俺はそれを受け取り、ラインを首に付けて、石の部分を服の中に入れる。

そういえば……バリアジャケットが解除されているな……まああとからラインに聞けばいいか

「さてアリシアさんなぜ未だににやにやとした笑みで浮かべているのでしょうか？」

「いや？思い出し笑いをちょっとね～」

「……それでアリシアさんは私のお見舞いするため、医務室に来たのですか？」

そう聞くとニヤニヤとした笑みを止めて、少しだけ真面目な顔をして、俺とフェイトをじっと見つめていた。

ちらっとフェイトを見ると、フェイトは若干強ばった顔して手を震わせているので、フェイトの手を取り、握りしめることですこしでもフェイトが落ち着いてくれることを願うように握る

それに気づいたのか、俺をちらっとみたフェイトが幸せそうな笑みを浮かべて握り返してくる。

またアリシアの顔を見直したら、真面目な顔が崩れて見守るような笑みを浮かべていた。

……はぁ、やっぱり根が優しいのは親子三人揃って同じか

「あたしは、お母さんにフェイトって子と話しがあるから連れてきて欲しいって頼まれてね

こんなに遅くなった理由は、君が倒れてフェイトって子が看病してたから落ち着くまで見ようって思ったんだよ～

ちょうどお母さんも同じような考えだったから、今のタイミングで来たんだけど完璧だったみたいだね」

最後ににやっと笑って、俺とフェイトを交互見て、うんうんと何度も頷く。

いきなり強く痛いほど握りしめてきたので、フェイトを見ると、緊張した顔で、アリシアを見つめている。

プレシアさん……約束守ってくれるつもりだと信じていますよ

もしかして、また嘘付くかも知れないという考えは一瞬だけ過ぎるが、どうしてもそう思えず、約束を守ってくれることを心のどこかで信じていた。

「フェイト、プレシアさんが呼んでいるようだけど行くか？」

俺は約束のことをあえてフェイトに言わず、フェイトに委ねるように問いかける。

フェイトは少しだけ考え込むようにしてから、少し経ってから答えが出たのか、小さく決意を込めるように頷いた。

（マスター……二つほど謝りたいことがあります）

（「……言ってみろ」）

その後、俺も付いていくことをお願いして、定期的に俺の様子を見ていた医務室の医者が来るのを待って、様子を見に来た医者の方に軽く診断してもらってから、心電図や点滴を外して貰って、アリシアを先頭にプレシアさんの入れられている部屋へ、申し訳ないと思いつつも、フェイトに支えられながら向かっていた道中に、いきなりラインが念話で話しかけてきた。

……はぁ、確かに体が重くて少しふらつくが、フェイトも心配しす

ぎだと思うんだよな……

（……一つ、マスターが一日半も寝込むほどの状態になったのは私のミスでもあります）

（「……どういうことだ？」）

（血を吐き、倒れるまでは予定調和でした。

ですが……時の庭園での戦闘で使用した反射で魔力を大量に使用したことを考慮に入れていませんでした

それで反動に対しての抵抗力が弱まっており、予想以上に衰弱をしてしまいました）

（「……ライン、それ完璧に俺の自業自得だと思うぞ？……だから気にするな」）

ラインの気にし過ぎに思わず苦笑いが零れてしまい、隣で支えているフェイトに不思議そうな顔をして覗き込まれる。

そろそろ……苦笑いが漏れ出すのを抑えないとな……

（お気遣いありがとうございます……それで二つめは……

実はアリシア・テスタロッサの蘇生成功率はそれほど高くありませんでした」）

（「は？……お前一言もそんなこと言ってなかったぞ？」）

フェイトに気づかれないように顔には出さないようにと押さえ込むが、内心驚きと何故という疑問に包まれていく。

（リバースは、そのまま裏返す事です

ということは、死んでいると言うことは、生きているにしか裏返せませんから

ある程度は結果を伴わせるために治療が行われますが

致命傷を負って死んだ場合、病気で死んだ場合等は生き返っても結局どちらかの理由で死にます

アリシアさんはたまたま頭の打ち所が悪くて死んだ様子だと判断は出来ましたが、絶対的な保証はありませんでした

またマスターの状態では、死んでいることを生きているっていう状態に裏返すだけでぎりぎりでして、

集中力やイメージが重要な反転ですので、失敗する可能性があるっというのを過ぎらせるだけで、成功率が格段と下がると判断しましたし、病気や致命傷で死んでいた場合はどちらにしても無理でした）

（「半分の理由が俺の力不足であることが原因か……ライン気を揉ませてすまない」）

「さあ着いたよ～」

ラインと話している内にいつの間にか、プレシアさんが入れられている部屋の近くまで来ており、先に着いたアリシアが振り向いて、にこにことした笑顔を浮かべて俺達が追いついてくるのを待っている。

（マスター気にしないでください。詳しい話しはまた話しましょう）

ラインの言葉に小さく頷き、フェイトと一緒に歩きながら、プレシアさんが入れられている部屋まで来ると、やっぱり緊張の色が隠せず、すこし動揺した様子でドアを見つめている。

前にプレシアさんに会いに行ったことがある俺は今の状態に若干の違和感を感じ、疑問を思ったことを知っている可能性があるアリシアにぶつけてみる。

「アリシアさんなぜドアの前に誰も立っていないんでしょうか？」

「それは……あることを条件に一時的にドアの近くから離れて貰ったんだよ」

一瞬悲しげに笑うアリシアが見えたが、アリシアはすぐに満面の笑みを浮かべて、ドアを開き、入るように促してくる。

まあ……何を条件で許可して貰ったのはなんとなくは分かるがな……

促されるまま入ると、ガラス越しに置かれた椅子に、目を瞑りながら静かに待っているプレシアさんの姿があった。

「きたのね……アリシア……フェイト」

プレシアさんはドアから入ってくるのを、気づくとゆっくりと目を開き、こちらのほうを優しげな顔をしながら見つめている。

そしてあまりにもの変貌に、俺を支えていたフェイトの驚きに満ちた横顔を浮かべてプレシアさんを見ている。

……確実にこの変貌ぶりは、肩の荷が下りて、少しだけ心に余裕が持てたみたいだな……

「母さん……」

「フェイト、壁があるからもたれかかれるから、支えなくてもいいぞ」

「でも「大丈夫だよ」わかった……」

フェイトは俺を支えているため、前にもなかなか進めずにその場に複雑な顔をして立ち止まっている。

笑いかけてながら言い聞かせると、渋々ながらも頷いて、支えるのを止めてくれた。

そしてフェイトは、ガラス越しではあるが、プレシアさんの正面まで近づいていく。

「フェイト……許されることとは思ってはいないのだけど、本当に今までごめんなさい」

フェイトが自分の正面まで来ると、プレシアさんは頭を深々と下げて、思いを伝えていく。

プレシアさん……今だけは、一人の親としてフェイトと向き合ってください……

フェイトはその様子を呆然とした顔をしてみているのがここからでも見て取れる。

アリシアは俺の近くで、その二人の様子を見守るような目でただ見つめている。

「許されようとは思わないわ。それでも聞いてくれるかしら？」

願わくば、この親子が一時的にも本物の親子のように笑い合える姿がみれることを願いたい……

顔をあげたプレシアさんが、真面目な顔を浮かべて、真っ直ぐとした目でフェイトを見つめながら、どこか辛そうであり、思い出すようにゆっくりと内に秘めた思いをフェイトに対して語りかけていく。

２０話　この想いは……（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「竜華零様、けーくん様、ＡＬＯＮＥ様感想をお書きいただいてありがとうございます

真「なぁ？一つ聞いてもいいか？」

元「なんでしょうか？」

真「俺の魔力だけで死者蘇生って「確実に不可能に近い」そうですよね～」

元「まあそんなことよりも……勢いでやっちゃった、てへ」

真「ぉぃまて、いや今に始まった事じゃないか……」

元「あはは、まあとりあえずどんな評価を下されるかはっきり言って怖いです」

真「作品の主人公としても怖いぞ……さてそろそろしめだな」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者は、アクセス数やお気に入りが増える度喜んでおり、感想書かれた日には悶え苦しむように喜びを表している」

元「それでは……」

真・元「「また次回お会いできることを楽しみにしております」」

２１話　馬鹿な男（無印最終話（修正版（前書き）

今回は急激展開を思い切り行っております……。
こんな駄作ではありますが今後お付き合いしていただけると嬉しいです。
ちなみにＥＤとしてコードギアスというアニメからモザイクカケラ（歌：ＳｕｎＳｅｔ　Ｓｗｉｓｈ）を提供いたします

21話　馬鹿な男（無印最終話（修正版

「私は……フェイト・テスタロッサという少女に嫌悪感を抱いていたわ

アリシアを生き返すために、人造生命の研究を通過点として死者蘇生の可能性を模索して

その過程で出来たのが、フェイト・テスタロッサという少女

すべて同じ物ができるとは思ってはいなかったわ

でもフェイト・テスタロッサという少女はあまりにもアリシアに似なかった

アリシアと同じ姿、同じ顔で中身は別物と言い切れるほど性格も仕草もなにもかも似なかった

だからこそ、その存在に嫌悪感を抱き、そしてその存在がどうなろうがどうでもよかった」

プレシアさんの言葉に、段々とフェイトは、辛そうな顔をして顔を俯かせていく。

しかし、プレシアさんも辛そうでもあり、悲しそうでもあるような表情浮かべながら言葉を紡いでいく。

……プレシアさん、貴女は包み隠さないことを選びましたか……

近くにいるアリシアの方をちらっと見ると、微笑を浮かべながら二人の行く末をただ見守っているようだった。

「それでも駒として利用するため、リニスという使い魔を用意して戦い方を教えさせ、戦う術も与えさせた

そして私は、死者蘇生の秘術が眠っているかも知れないアルハザードを求めたわ

行くには大量の魔力が必要で、海鳴市に降り注いだジュエルシードを欲した

集めるために、フェイト・テスタロッサという少女とその使い魔を送り込んだ」

フェイトは、プレシアさんの俯きながら耐えるように聞き、プレシアさんは、辛そうな顔を浮かべながら、今までのフェイトに話さなかった事実を語りかける。

そして、プレシアさんの「でも」という言葉に、フェイトは俯いた顔を上げて、複雑な横顔を浮かべながらプレシアさんを見つめる。

「でも、2回目の経過報告しにきた時に……幸せそうに少しだけ笑顔を浮かべたフェイトを見て……

私はその時からフェイトを私自身のもう一人の娘しか思えなくな

った……

でも散々今まで傷つけてきたし、親らしいこともしてこなかったわ

そして私はもう後戻りができないほど、道を間違えて取り返しの所まで来ていた

もう病魔に冒されていて長くは生きられないことも最初から分かってもいた

だから、そのままフェイトになにも教えず、最悪の母親として死にたかったんだけど」

プレシアさんは一旦区切ってから、こちらをなにか言いたげな顔して見てきたが、なにを言いたいのか、なんとなく分かった俺は小さく首を横に振る。

そうするとプレシアさんは一瞬だけ苦笑いを、またフェイトに真剣な顔を向ける。

フェイトは、プレシアさんから語られる事実に戸惑いながらも、最後まで聞くと意志を見せるようにただなにも口を挟まず、真剣な顔をして静かにプレシアさんを見つめている。

……プレシアさん、俺はただしたいことをしただけです……ですから俺のことをいう必要はないです

そしてプレシアさんは少し深呼吸してから意を決して話しを続けた。

「私は、ある人にそれを見透かされてしまった
その人にフェイトとしっかり向き合えと諭されたわ
今まで本当に、傷つけることしかしなくてごめんなさい
そして散々フェイトを貶し、暴力振るった私が今更なにを言っているということは自分でも思う
重犯罪者であり、体もボロボロで、いつ死ぬか分からない
それでも私にもう一度だけチャンスがあるのなら、少しの間だけでもフェイトの親にさせてほしい」

プレシアさんは、そう言い終わると、椅子から立ち上がり、一部ガラスで仕切られた所から少し離れてから徐に膝と手を床に着いて、土下座をする。

フェイトは、その様子を少しの時間呆然とした顔で見ていたが、すぐに深呼吸を一度だけしてから緊張した顔を浮かべて、言葉に迷ったように何かを言いかけるということを何度か繰り返した。

まあ……実は、それほど嫌われてなかったということが分かったしな……そりゃあ少しは動揺するか……

そして母さんという言葉をやっとの思いで、フェイトが言うと、プレシアさんは下げていた顔を上げて、姿勢を直し、正座しながら、フェイトの言葉を待つように目を瞑った。

「母さん……

私は、時の庭園で言ったように、母さんの娘です

どんな仕打ちをされようが、私にとってはただ一人の母親です

犯罪者であろうが、もし先が短くてもそれは変わりません」

フェイトは、また時の庭園の時のように決意を決めた顔でプレシアさんに自分なりの想いを伝えていく。

それを聞いて、小さく、そして良く響く声で、泣きながらありがとうと何度も何度も繰り返している。

……プレシアさんはちゃんと向き合ってはくれてよかった……

そう思っていると突然服を軽く何度か引っ張られて、横を見るといつのまにかアリシアが俺の真横まで着ており、俺が気づいたのを確認すると、真剣な顔を浮かべながら小さい声で二人きりにしよっというので、そのまま俺達は部屋から出て行った。

「えっと……そういえば名前教えて貰ってないから教えて！！」

「……結城真夜ですよ」

部屋から出ると、俺を追い抜いて正面に来て、元気な雰囲気でそう聞いてきたので、俺はその勢いに押されて素直に答えてしまった。

……なんだろう……本当にフェイトと違いすぎるな……

「ユウキシンヤ？……シン君でいいや～」

「……そのいいやってなんです「敬語禁止～」……敬語使うのが少し馬鹿らしくなってきた」

アリシアは頬を軽く膨らませながら、少しだけ睨んでくるが、怒っていないのが丸わかりのため、全く怖さがない。

すぐに、腕を後ろで組んで、満面の笑顔を浮かべて嬉しそうにこちらを見てくる。

それにしても……一瞬シン君と呼ばれたときに懐かしいような……なにか不安なような変な気分になったが何だろう……

いま心の中で思ったことはなんとなくアリシアに知られたくないと感じに、必死に笑顔の仮面を被った。

「馬鹿らしいってなんなのかな～？

取りあえずあたしを生き返らせてくれてありがとう

そしてお母さんをぎりぎりのところで救ってくれてありがとう」

一瞬で真剣な顔になり、ぺこりと頭を下げて顔をまたあげると、笑顔を浮かべてから体全体を楽しそうにくるくると回している。

……自分が生き返ったことは取りあえず扱いでいいんかい！？

心の中でそうやって突っ込みながら、こちらも少し楽しくなってきて、自然と笑顔が浮かぶ。

「まあやりたいようにやっただけだしな、気にするな」

「そう？まあそういうなら気にしない～。さてここにいても仕方ないし、あたしに用意して貰った部屋に行こう！！」

アリシアはそう言ったら、回るのを止めると、笑顔を浮かべてこちらを見ていたと思ったら、いきなり拳を上へ振り上げて、笑顔を浮かべて元気よく、自分が用意された部屋へと駆けていったので、俺はそれを急いで追いかけた。

ｓｉｄｅ　プレシア

「フェイト……貴女にとっての結城真夜ってどんな存在？」

あの後自分が落ち着いたときには、アリシアと結城真夜は居なくな

っており、図られたように二人きりになっていた。
きっと……この子の使い魔がいたら二人にさせず、いるかもしれないわね
その様子が、すぐに想像出来て、少しだけ心の中で苦笑いを浮かべてしまう。
フェイトは、私からの問いに少しだけ考え込んでおり、言葉を詰まらせている。
……結城真夜、私にアリシアを生き返らすことを条件に、
フェイトがしたすべての罪を私が無理矢理させたことにすることと、
そしてフェイトとちゃんと向き合うことを提示した男の子……
いやもう男の子というより、大人に近い感じの方の彼という言い方の方が正しいかも知れないわね
そして、それをフェイトに言うのを嫌がった彼は、フェイトにとってどういう存在なのか、知りたくなった
落ち着いてから、私は椅子に座り直し、フェイトからこれまでの色々な話しを聞いてみたら、話しの大半に出てくる登場人物の結城真夜は、フェイトからどう思われているかもかなり興味引かれる物でもあった。
「……私にとって、結城は安らぎと幸せを教えてくれた人です
最近は結城が傷ついたり、辛い顔したりすると、胸が痛くなった

り、私の傍から居なくなってしまうと考えると胸がすごく締め付けられるような思いにはなりますが……」

そういつつも、フェイトは幸せそうに笑顔を浮かべている。

……あぁそうか、フェイトを変えたのは、やっぱり彼だったのね

フェイトが、彼を横に置いて、時の庭園で私の元まで来たときから、微かに予感はしていたものの、やっぱり当たっていて、少しだけ喜びを感じながらも、思わず苦笑いが浮かびそうになる。

……そして、フェイトの心を救ったのも彼だったのね……

そこで思う、それならば、自覚していなくとも好きになってしまうのはある意味当然の結果なのかも知れないと。

確実に……フェイトの話してくれた内容は……恋している以外のなにものでもないわね……

「フェイト……その気持ちを大事にしなさい……とてもそれは大事な物だからね」

……ここで、彼に恋しているっていうのは簡単だけど、自分で気づかないといけない

はいっと幸せそうに頷くフェイトを見て、娘の幸せを願う気持ちが出てくる。

まあ……結城真夜なら、少なくともフェイトは不幸にはしないでしょう……

理由はないものの、なんとなく彼に対して、そう思えてしまう。

フェイトを、救ってくれたお礼ちゃんとしないといけないわね

そして私は、フェイトと話しをしながら、結城真夜に対してお礼を考える。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

「真夜君！？目が覚めたんだね！！
フェイトちゃんやったね！！」

アリシアに追いついた俺は、アリシアと横に並びながら歩きつつ、お互いの話しをいろいろとしていると、前の方からなのはが来て、俺を驚いた様子で見てから喜んだ様子で、アリシアに抱き付いた。

アリシアは、一瞬だけ少しだけ悲しげであり、複雑な様子で見ていたが、すぐに笑顔を浮かべた。

「なのはちゃん？フェイトと違うよ～？アリシアだよ！！」

「え？……ごめんなさい……また間違えちゃったの
それとね……真夜君一日ぐらい目が覚めなくて心配したんだよ？」

なのはは、そう言われてビックリした様子で離れて、申し訳なさそうに謝ってから、俺の方を、心配そうな顔を向けてくる。

……まあ普通に心配するのは当然か……それにしてもまたってことは初めてじゃないのか……

「心配させてしまいましたか……も「真夜君敬語やめてほしいの」でも「やめてほしいの」……わかったよ」

「シン君押しに弱いね〜？」

なのはの笑顔を浮かべての問答無用の押しに、結局折れる感じで、敬語をやめることになったが、横からアリシアがにやにやとした笑みで、それに突っ込んでくる。

……アリシア苛めないでくれるとありがたいな……うん、無理そうだな

俺の一瞬の動揺を感じ取ったのか、楽しそうに笑ってみてくるアリシアに対して、苦笑いを浮かべる。

「それじゃあわたし行くね？」

「あぁまたな」

なのはは、俺達二人に手を振ってから俺の横を通ってどこかへ行ってしまった。

アリシアはその様子を少しだけ悲しそうな顔を浮かべて、見ていた。

「アリシア……フェイトと間違えられること多かったのか？」

「うん……一日半だけで、ほとんど間違えられたよ？一度も間違えてないの、お母さんとシン君だけ」

アリシアの方を見て、聞いてみると、舌をすこしだけ出して、いたずらげに笑うが、やっぱり悲しげな雰囲気は隠し切れてない。

……見た目は同じだしな……だいぶ近くにいないと気づかない人は多いだろうな……

「ねぇ？シン君なんでまちがえるの？俺にとっては、アリシアとフェイトを間違える要素がないってだけだ」そうなんだ……」

フェイトの傍にいることが多かったからなのか、どんなに同じでもなんとなくフェイトとアリシアが見分けられる。

それを聞いて、アリシアは嬉しそうに笑って、立ち止まっていた足をまた進め始めたため、俺もすぐに歩き出して、隣を歩く。

それにしても……アルフさんはフェイトとアリシアを間違えてしま

ったのか……

その後、アリシアと部屋に向かう途中でユーノやリンディなどといった人達と擦れ違うものの、アリシアをフェイトと間違えていたり、フェイトとアリシアの違いが分からず、迷っている様子だった。

そして、アリシアが用意された部屋の前まで来ると、通路の曲がり角からちょうどアルフが出てきた。

俺達を発見したアルフは、俺達二人を苦々しい顔を浮かべて、こちらの方へと近づいてくる。

「坊主と……アリシアだったっけ？」

アリシアが表情を硬くさせながら頷くのを、アルフは睨みながら眺めていた。

……アルフ、そんなにアリシアが気にくわないのか……

「さて坊主と話しがあるから、部外者は引っ込んでくれるかい？」

「わかったよ。アリシア、部屋へ先に入っていてほしい」

アリシアが表情を硬くさせながら小さく頷いて、近くにあった部屋へ入っていくのを確認してから、アルフにまた違う部屋に案内されて、その部屋に入っていった。

「さて坊主……なんの話しか分かっているかい？」

「フェイトが、1日半くらい傍から離れず、看病していたことですか？」

「分かっているじゃないか。あと飲まず食わずだったことを付け足しておこうじゃないか」

はぁ？……フェイト飲まず食わずだったのか！？

驚きで顔が一瞬歪んでしまったらしく、アルフは殺気に満ちた目で睨みつけてくる。

「それは知らなかった様子のようだね？
まあ理不尽だとは百も承知だけど、一発殴らせろ。それで気持ちの抑えがつく」

アルフは、拳を強く握りしめ、今にも飛びかかろうとする気持ちを必死に抑えようとしているようだった。

……間違いなく理不尽だが……フェイトに心配させた罰として受けるか

アルフの言葉を受け入れるように、目を瞑り、身構えて、次に来る衝撃に備える。

そして、次に来る衝撃は、腹を思い切り抉る一撃だった。
言葉も出すことが出来ず、崩れ落ちそうになるのを必死に抑えるだけ精一杯だった。
アルフは俺を一瞥してから、俺の横を通り過ぎて、部屋から出て行く。
俺はと言うと、暫く壁にもたれ掛かって、息を整えてからアリシアが待つ部屋へと向かった。
それからの数日後、なのはがアースラから降り、俺はフェイト達の仲間であるため、降りることが出来ず、そのままアースラに閉じこめられた。
アルフは、宣言通りあの一撃ですべて流してくれて今まで通りに対応してくれて、フェイトとアリシアは、俺が用意された部屋にちょくちょく来て、ゆったりとした時間を送ったり、色々話したりしていくのだが、一緒に来る事は一度もなかった。
そしてなのはが降りてから数日後、アースラは、管理局本部へフェイトとプレシアさんの裁判を行うため海鳴市から旅立っていく。
「リンディさん本当に私はいかなくてよろしいのですか？」
「プレシア・テスタロッサが、結城真夜を無理矢理操り、ジュエルシード回収を手伝わせたと事情聴取の中で発言し、証拠もいくつか提示してきたわ

事実かは不明だけど、本人がそう言っており、貴方は人に対して攻撃行為をしてないことも考慮されて、裁判を受ける必要がないと判断されたわ」

……プレシアさん俺がお願いしたのは、フェイトの罪までですよ……

リンディさんに、管理局本部に行くに当たって、アリシアと一緒に海鳴市に降ろされるといきなり部屋に来て、言われたので理由を聞いてみると、苦笑いを浮かべながらそう聞かされた。

そして、アースラから降りてみると、同じように降ろされたアリシアがいつもの笑顔を浮かべながら、こちらの方へと近づいてきた。

「お！降りてきたね～」

「なぁ？アリシア、なのはの家族からの申し出断ったのは本当か？」

「あはは、ばれちゃった？……うん本当」

そう、リンディさんに転送ポートへと連れられているときに、聞かされたのだが、アリシアは管理局へ行く必要もなく、アリシア自身の意志としても断ったため、海鳴市に一人残された形になるので、なのは自身が家族に相談して、アリシア宛にアリシアを引き取りたいという話しが来たらしいが、それを断ったという話しだった。

手を後ろで組みながら、困ったように少しだけ苦笑いを浮かべていた。

「なぜこ「あたしは、生き返らせてくれて、結局一度もフェイトとあたしを間違えなかったシン君と一緒にいるのもありかなってね」おぃ、間違いなく俺が困るんだが……」

アリシアは満面の笑みを浮かべてはいるが、真剣の目で俺を見つめている。

「でも見捨てないでしょ？」

……はぁ、なにも疑った様子が全く無いように笑って言い切りやがって……

思わず、苦笑いを浮かべたら、アリシアはそれを楽しそうな雰囲気で見ていた。

「……俺なりにやってみるが期待するなよ？」

満面の笑顔を浮かべて、頷くアリシアを見て、思わず頭を掻いて、視線をずらすと、少し先の所にちょうどフェイトとなのはが向き合って、なのはからリボンらしき物を受け取っている姿が見えた。

そしてそれから探すようにちょろちょろと顔を動かしていたフェイトが俺と視線が合うと、そのままこちらの方に小走りで向かってく

る。

「あたしは少し離れるよ」

引き留める間もなく、アリシアはそそくさと俺から離れていく。

……まだ、無理なのか……

アリシアとフェイトが一緒に仲良くしている姿も、一度も話している姿もなく、片方が来ると片方が逃げていくという光景が繰り返されていた。

これも解決していかないとな……とりあえず今はフェイトだな

「結城！！」

フェイト……俺の名前を大声で叫ばれたら恥ずかしいぞ……

フェイトは笑顔を浮かべて、綺麗な金髪を靡かせながら、俺の元まで全力疾走で駆け寄ってきた。

「そんなに慌てなくても俺は逃げないぞ？」

肩で息をしながら、必死に息を整えようとしているフェイトの頭を

撫でながら、苦笑いを浮かべてそう問いかける。

「それでも……時間がないから
結城……お願いがある……」

「なんだ？」

フェイトは息を整えてから、真剣な表情を浮かべて、俺の顔を見つめてくるから、俺もフェイトの頭を撫でるのを止めて、少しだけ身構える。

「私は……今は無理でも、いつか結城に信じて、頼って貰いたい」

「魔法関係おし「私が無理矢理教えさせて貰った」……」

俺の言葉に対して、悲しそうな表情を浮かべて、首を必死に横に振ってから、俺の言葉を遮ってくる。

あぁ……そういえばそうだったな

「私は結城を、疑ってしまった……だから言っても説得力ないかもしれないけど

今度こそ、私は結城を信じるから

なにがあっても、どんなことがあっても！！

私の傍に最後まで居てくれた結城を信じるから」

想いを伝えようと、必死な形相で、言葉を紡いでいく。

あぁ……結局俺はフェイトを不安にさせていたのか……最後まで駄目駄目じゃねぇか……

深呼吸を軽くしてから、フェイトに想いを伝えるために、自分なりの言葉を紡いでいく。

「……ありがとうな

俺は馬鹿だから、間違えることはたくさんある

きっとフェイトにも迷惑をかける

今度のことも俺に力あればっと思うこともたくさんあった」

もしかして……もっと早期に解決できたかも知れない、もっと早くにプレシアさんがフェイトと向き合う機会を与えられたかも知れない……もっと、もっと

そんな意味もない考えが浮かぶことはたくさんあり、そして自分の無力さにいつでも嫌気が差すばかりだった。

それでも馬鹿なりに歩めるのはきっと後悔にまみれて不格好な道し

かないのだろう。
苦笑いを浮かびそうになるが、それを抑えて、言葉を紡いでいく。
「意味のない考えってわかっていてもそんな考えが浮かぶ
それでもな、フェイトがこんな馬鹿な俺を信じてくれたから自分なりにやれたんだ
ただ一度もフェイトに疑られたと思ったこと無いぞ？
でもまあ、もしかして自分一人でなんとかしないといけないって焦っていたのかもな
本当は自分一人じゃ何も出来ないのに、本当馬鹿げているよな」
フェイトは俺の言葉に段々と泣きそうな顔浮かべながら必死に堪えている。
あぁ……俺ってフェイトを泣かせてばかりだよな
情けない自分に負けないように、最後まで言葉を紡いでいく。
「でも俺は馬鹿だから今すぐには、人にはあまり頼れない
だから待っていてくれるか？フェ「もちろん待ってる……シンヤ！！」え？名前？ってフェイト！？」

フェイトは抱き付いてきてから、俺が今までフェイトにしたように優しく髪を撫でてくる。

あぁ……暖かい……

暫くお互いに何も言わずに、時が流れる。

「なのはに……友達になるなら名前を呼ぶんだよって言われて……

でもシンヤは、友達とはなにか別とは思うけど、これがいい機会だと思ったから」

「そうか……」

撫でてくる手を止めて、抱きしめ合いながら耳元にゆっくりと想いを伝えてくるフェイト。

……はぁ、ここまでくると恥ずかしいという感情が微妙に消えそうになるな

「シンヤ……もう一度海鳴市に戻ってきたら、おかえりって言って欲しい……」

「あぁ……その時はおかえりって迎え入れる」

そういうと、フェイトは名残惜しそうに、離れて、少しだけ寂しそうに微笑みながら俺を見ている。

「それじゃあ行くね」

「あぁいってらしゃいフェイト」

「……うん！！いってきます！！」

フェイトは俺が見送りの言葉を言うと、嬉しそうに笑顔を浮かべて、クロノ執務官が待つところまで走っていった。

「ラブラブだね～やけちゃうな～？」

いつの間にかアリシアが、俺の横まで来てニヤニヤしながらそう言ってくる。

その発言に少しため息を吐きながら、苦笑いを浮かべる。

「アリシアは、フェイトを見送ったり、話さなくていいのか？」

「……あたしとちゃんと話しをしてくれるようになるまでまだ時間がかかるみたいだからね……」

アリシアは少しだけ寂しそうに笑いながら、遠くに見えるフェイトを眺めていた。

「さて……どこで生活しようか……」

「そういえば、お母さんから、シン君宛に預かり物を受け取っているよ？」

フェイトの家に居候していた身として、今日の寝床に困っていると、プレシアさんからの預かり物だと、何かの封筒を差し出してくるアリシア。

それを受け取り、中身を見ると、何かの鍵といくつかの紙達とカードが入っており、一通手紙らしき物が入っていた。

それを読んでみて、一瞬だけ頭が真っ白になる。

［フェイトを救ってくれた礼として、フェイト達が過ごしていたマンションの一室は買い取ってあったからそれを上げるわ
そして、フェイト達の軍資金として預けていたお金をどうにかして、そちらの銀行に預けて引き出せるカードを同封したから、節約すれば一年くらいは持つはずよ」

……プレシアさん……こんなことまで頼んでいませんよ？

同封されていた紙も見ると、マンションの一室に関しての書類であり、暫くは住むところに困らないことを意味していた。

「アリシア？もしかして中身知っていたか？」

「あはは……そんなことはないよ？」

……アリシアまず目をちゃんとみてからその発言しような……

アリシアは思い切り顔を逸らしながら、空笑いをしながらそう言ってくるため、中身を知っていたと言うことは丸わかりだった。

ため息をつきながらも、今日の生活に困らないことだけは安堵をしつつも、無印をなんとか乗り切ったことを意味していた。

……もう一人だけ恩を返さないといけないやつがいるからな……

少しだけその子に会うことが怖くも感じたが、進み続けるために、早めに会うことを心の中で誓った。

21話　馬鹿な男（無印最終話（修正版（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、ＡＬＯＮＥ様感想をお書きいただいてありがとうございます」

真「……さて最終回な訳だが……色々解決してないよな……」

元「そして急激展開という批評食らっても仕方ないですね……」

真「もういい……一応無印最終話です」

元「ちなみに今回使用したＥＤの曲はそのまま主人公のテーマソングです」

真「ぉぃ初耳だぞ？」

元「だって今言いましたから」

真「もういや……この作者」

元「まあ……悩みに悩んだ結果がこれですので暖かい目で見てくださると幸いです」

真「それじゃあ締めの時間だ」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度喜んでおり、感想書かれた日には悶えている」

元「感想誤字脱字つっこみがありましたらどしどし書いてくださると嬉しいです」

真「それでは……」

元・真「「またお会いできることを楽しみにしております」」

主人公設定１（無印終了時

名前：　結城真夜（ゆうきしんや）

容姿：黒髪の短髪、一般的な日本人の黒目で１０人中２人くらいは興味を引く顔の良さ

性格

自分の力の無さを嘆き、後悔しながらも、自分なりの道を進み続けられる精力的な強さがあり、
基本的に、人が良く、恩があったり、救える機会があれば、人を助けたりはするが、すべてを救うことができるとは思っておらず、なにかを生かすためなら最終的に別のなにかを切り捨てることも厭わない。
しかし純粋に自分を信じてくれる者には、対応も甘くなる傾向があり、また自分の中の優先順位もしっかりと存在している。
関係ない話しではあるが、大事なこと以外は、押されると、そのまま押し切られてしまうという、押しに弱いのもある意味彼の特徴であろう。

詳細

よく自分のことを馬鹿と称するが、状況判断能力と観察力があり、頭の回転も悪くないため、本人が言うほど馬鹿ではない。
過去になにかがあった様子だが、本人は記憶がリリカルなのは関連以外は曖昧であるため、なにがあったかは覚えていない。
しかし、ほんの一部だが記憶の断片だと思われるものを夢で見たり、突然頭の中で映像として流れたりすることが何度ある。
戦闘としては、フェイトとの魔法講義と模擬戦のおかげで最低レベ

ルの補助魔法と防御魔法が使用できるようになり、空中戦闘もある程度できるようになったものの、空戦では近・中・遠距離を合わせた戦いでは、無印の登場人物内で一番弱い。
しかし、近距離のみは、フェイトとそれなりに戦うことが出来るレベルまで上がっている

最終戦パラメーター
なのは風
魔力量ランク：Ａ
戦闘スタイル：空戦／機動型
攻撃力：Ｃ（遠距離Ｆ／中距離Ｄ／近距離Ｂ＋）
防御力：Ｄ（反射使用時だけＡＡランク相当）
機動力：Ｂ

使用デバイス：ラインブレイク

魔力光：灰色
魔法体系：不明（今のところフェイトに習ったミッドチルダ式が主体）

保有技能

自己再生
大怪我は人より治りが早い程度だが、擦り傷や打撲などの細かい傷はすぐに塞がる。

技能習得向上

努力で習得する技術や技能が人よりも早く収めることができる

上限解除
やろうと思えばあらゆる物が上限無く鍛えられる。だが、それは努力を続けなければ意味のないスキル

剣術（偽）
基本ができてはいるが、我流の側面も強く剣術と呼べる物ではない。高町士郎と長時間打ち合えるが、まだまだ無駄も多く、なんとか打ち合えているのが現状である。

縮地
長距離を少ない歩数で地上駆け抜けることが出来る技術
しかし、距離を縮められるだけで、攻撃速度としては上がらない。

デバイス（心石）：ラインブレイク
デバイスとしては特殊で、念話でのデバイス展開が可能だったり、使用者が意図しないデバイス展開・解除ができ、また付加スキルまで完備している。
防御魔法を発動させてもどんなにやっても強度が高くなることが無く、補助系統等といったものも、ある程度のランクしか使用が出来ないのも特徴といえる。
ラインブレイクが、結城真夜に対して、自分は矛であると称したように攻撃に特化されている。

バリアジャケット：空の軌跡セカンド＜剣帝＞レオンハルトの服

スタンバイモード
灰色の菱形の宝石形で、常時これをペンダントとして持ち歩いているが基本的に服の中に仕舞い込んでいる。

ビックソードモード
デバイス起動すると最初に出現するモードであり、大剣型である。
真夜は、この大きさを生かして、砲撃や魔法から守る盾代わりにするなどしている。
そして、射撃や砲撃など遠距離や中距離の攻撃魔法がまったく使用が出来ず、杖よりも剣という側面がかなり強い。
また、本来のビックソードの機構ではないものの、マジック・アトラクションという、周りから魔力やそれに準じるものを回収し、圧縮して使用することが出来る。
しかし、本来の機構じゃないため、一時的に攻撃魔法などが使用できなくなり、ただでさえランクがそう高くなることがない補助魔法や防御魔法が、最低ランクまでしか使用できなくなる。

マジック・アトラクション
周りから魔力もしくはそれに準じる力を吸収することで自分の保有している魔力以上の魔力を使用することが一時的にできる。
また、ジュエルシードなどの異常まで高められた魔力結晶体であろうが取り込むことは出来るものの、使用するときの反動もそれなりにある。

ツーソードモード

シューティングモード

ソードバスターモード

オリジナル魔法

斬波

●種別：射撃魔法・直射形

剣に魔力を纏わせながら真横からの水平斬りで大型の三日月型の斬撃を飛ばす魔法で、一直線上にしか飛ばないものの、斬撃が横のため、若干当たる範囲が広い。

付加スキル：反転

状態反転

他人や動物の肉体状態の一部などを物々交換のように交換させることができ、この事柄や対象者同士の距離によって魔力という代償を支払う量が変わる。

物体反転

物と物を反転させるが、反転させる物達同士の距離が離れるほど魔力量が多く消費し、物体の大きさによっても支払う魔力量が変わる。

反射

防御魔法と合わせたり等して、魔法やエネルギーなどを跳ね返すことができ、また跳ね返すエネルギーの量によって、使用する魔力量も違う。
また、ある程度使いこなせるようになると、跳ね返すタイミングを調節できるようになる。

リバース
状態反転の上位で、状態反転よりも代償として払う魔力量が増大する代わりに、対象者単体のみの使用が可能となっている。
そして反転できる物が事象まで昇華されたため、一人の少女を条件付きではあるが蘇生を成功させている。
しかし、事柄によって、代償となる魔力が変動することは変わらず、状態反転をするよりも反動は何倍も大きいため、結城真夜の技量的に使いこなすことはまだできていない。

主人公設定１（無印終了時（後書き）

元「ＡＬＯＮＥ様、竜華零様、感想書いていただきありがとうございます」

真「……俺のステータス無茶苦茶ひでぇ……」

元「え？まあ時の庭園で攻撃を受け止めて跳ね返していますから、反射の時だけ防御力が跳ね上がります」

真「それでも酷いような……」

元「フェイトさんに基礎は習いましたが、経験不足と時間不足で弱いですしね」

真「まあ……ほとんど戦ってねぇし、遠距離も中距離もまったくだめだしな」

元「そして押しに弱いという……」

真「大事でもないことで押し問答してもしかたないしな……」

元「まあそう言うことにしておきますね」

真「さて……次回はＡｓ編か？」

元「……少しの間無印とＡｓの間の期間の話しになります」

真「……そのままいかねぇのかよ」

元「まあＡｓ編を期待していた方々には申し訳ないです」

真「さて締めの時間だ」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度、喜んでおり、感想書かれたら悶えながら喜びを表している」

元「それでは……」

真・元「「また次回お会いできることを楽しみにしています」」

22話　友人（前書き）

この作品を見ていただきありがとうございます。
書く度に文字数が増えていってすいません……。
一人でも多くの方が楽しんでいただけることを願いつつ、本編に移ります。

22話　友人

「アリシア少しいいか？」

「なにかな～？」

フェイトが行ったのを確認してから俺達はなのは達の元へ行かず、そのままプレシアさんから貰い受けたマンションの一室へ帰ってきた。

そして帰ってきてすぐに、リビングのソファに座ったアリシアに対して、俺はアリシア座ったソファと向かい側のもう一つのソファに座り、アースラに居たときには聞くに聞けなかったある質問を問いかける。

アリシアも不思議げに俺を見ているものの、身構えるように俺の言葉を待っていた。

……きっとこれを聞くのは偽善だし……自分勝手だろうな……

「……一つだけ聞きたい

フェイトの事がにが「苦手じゃないよ？むしろ好きだよ」そっか」

アリシアは、俺の言葉を途中で遮って、そう答えるものの、若干苦笑いを浮かべていた。

その様子に少しだけ違和感を感じるが、その違和感がなんなのか今の俺では分からない。

「だって……あたしにとっては妹のように思っている子だよ？
苦手だとか、嫌いとか思うわけがない」

内心安堵感に満たされていくが、アリシアは言葉を一旦区切ったと思うと、少しだけ寂しそうに笑いかけてきた。

「でも怖い……フェイトが怖いんじゃない
フェイトに怯えたように、そして怖がられる目で見られるのが怖いかな……

これ以上怖がられるのが怖い

まあフェイトの使い魔のアルフさんにも、あまり好かれてもないからね」

くしゃっと白いワンピースのスカート部分を握りしめて、あははっと自嘲気味で笑うアリシアを見て、やっと先ほど感じた違和感の原因が、分かる気がした。

いつものアリシアは年相応ではあるものの、今のアリシアは見た目年齢とあまりにも離れた雰囲気で笑っているからだ。

もしかして幽霊時期の記憶もしっかりとアリシアに残っているのか？……いやそんなことは今はいいか

「それで、フェイトと話せずにいたわけか……」

「うん、情けない話しだよね？

それにシン君と一緒に住むことを決めたのも間接的にそうかな？

あちらに行くときっとアルフさんと住むことになるから……怖いよ」

「そうか……独善だがなにもで「でもね、シン君と住めるから今はいいや」は？」

結局アースラではなんとなく感じ取りながらも、何もしなかった自分が情けなくなってきて言葉を紡いでいく度、自然と顔が俯いていく。

しかし、突然アリシアが俺の言葉を遮るように発した言葉の内容に驚いて、思わず俯いた顔を上げると、いつの間にか年相応で嬉しそうに笑っているアリシアがいる。

「お母さん以外のみんなにとって、フェイトが友人であり、仲間であり、知り合いだからね

違うって分かっていても……

みんながあたしを通してフェイトを見ているようなそんな感覚になったときにシン君が起きて……

シン君は見間違えなかった……今のままでただ一度も……

ただそれだけかもしれないけど……それがどんなに嬉しいか分かる？」

きっと分からないでしょ？っといいつつ、笑う姿は本当に心からの喜びに満ちているようだった。

「アースラに居たときにどんなにそれが救われたか……

きっといつかはみんなはフェイトとあたしを見分けてくれるだろうけどね

それでも今現在……

あたしをあたしだとちゃんと見てくれるとそう思えたシン君だから一緒に住みたいと思ったんだよ？

フェイトを知っていてなお、そうやってみてくれるシン君となら一緒にいても自然でいられる」

はぁ……やっぱり鈍いのかね？……何度過ちを繰り返してもまた繰り返す自分が情けねぇ……

笑顔を浮かべるアリシアに対して、そんな思いから思わず苦笑いを返してしまう。

「苦笑いとはひっどいな～せめて笑顔で返してほしいな～？」

「おぉすまないな。なぁアリシア、俺でよければ困った時や辛かった時、力になるからな？」

あぁアリシアに関しても俺がやれることしないとな……少なくとも馬鹿な俺を選んでくれたお礼として

「ん？今でも力になってくれて居るんだけどな～？

まああたしもシン君が困ったときは無理矢理でも力になるよ？」

「無理矢理なのか！？」

……せめてアリシアにとって俺以外の誰かと自然に居られるように俺も努力しないとな……

当たり前だよ～っと楽しげに笑いながらいうアリシアを見つつ、そう決意を新たにした。

「さて……アリシア、一緒に来てほしいところあるから付いてきてくれないか？」

「え？付いてきて欲しいところ？それより昼食はまだ～？」

……俺の話より昼食なのか！？

アリシアに多少弄られながらも話しをしていた俺は、いつのまにか昼も近いことをふとみた時計で確認した時に、思いついたあることを実行に移すために、アリシアに誘いを入れた。

それをにやにやとした笑みで、若干切り捨て感じにいうアリシアに、少しだけ引きつった笑みを思わず浮かべてしまうが、アリシアはにやにやとして笑みで笑うばかり。

「はぁ……ＡＴＭに行ってお金降ろして、昼食の材料買ってから寄りたい場所があるんですよ」

「むぅ～わかったよ

外にでたら負けかなっと思ったんだけど大人しく連行されることにするよ～」

……外に出ても勝ち負けがない気がするのは俺の気のせいなのか？

ため息混じりに、立ち上がると、アリシアも同じく立ち上がったので、机に置いた封筒からカードを出し、それを財布に入れてから、アリシアと一緒に玄関へ向かって外へ出かけていった。

「シン君駄目駄目だね？」

「うるせぇ……」

それより……ＡＴＭの暗証番号知っているんなら、早めに教えてくれよ……

意気揚々と、まずは銀行にあるＡＴＭに向かったものの、カードを入れていざお金を引き出そうとした瞬間、機械から暗証番号を入力されるようにいわれて一瞬固まった。

そう、手紙には一つも暗証番号も書いて無く、まったく知らなかったため、どうしようも出来なかったんだが、真横にいたアリシアから手を伸びてきて、迷わない動きで四桁の数字を入力すると、お金が引き出されてきて、思わず横を見ると、アリシアがこちらをいたずらに成功させたような笑みを浮かべて見ていた。

「もう……機械の前で固まるシン君はこちらから見てても爆笑ものだよ？」

「許してくれよ……ちゃんとアリシアの希望通り昼食はハンバーグ

にしたんだからさ……」

面白そうな顔をして、着々と俺を弄り倒してくるアリシアに対して俺は少し涙目になりそうな勢いで、ため息まで漏れだしてくる始末だ。

「まあ教えてなかったこちらも悪いんだけどね～

それより、シン君はそれなりに料理出来るとは知らなかったんだけど大丈夫？」

「一応は、食べられて、尚かつ食材となった動物や野菜達には謝らなくていい程度はできるぞ？」

うん……フェイトとアルフさんくらいしか毎回食べてないが一応はまずいとはいわれたことないしな……

スーパーに着いて、何食べるかを食材の前で聞いたときのアリシアの驚いた顔は少しの間忘れられなかった。

そして次の瞬間、本当に出来るのかと聞いて、不安げな目で見てくるのはスーパーに出て、目的の場所に向かっている今も定期的に続いており、そのたび何度も聞いてきた。

まあ……それでも食べたいものをちゃんと言ってきてくれるのは一応は期待しているってことかね。

今も不安半分、期待半分の顔をしてこちらを見つめている。

「微妙な言い方だね～？
あたしは料理を手伝うことしかしたことないからはっきりとは分からないけど
材料二人分にしては多くないかな？」

「あぁ、それは目的の場所にいる人にも食べて貰うためだ……そう言っている内に着いたな」

ある一戸建ての家の前で俺が立ち止まると、アリシアがこちらを不思議げな顔を浮かべて見つめてくる。

まあいきなり、こんな所に連れてこればこうなるか……

「シン君、あたしに着いてきて欲しい場所ってここ？」

「あぁ目的の場所だ、この買い物袋を持って、少しだけ俺から離れていてくれるか？」

アリシアは戸惑いながらも頷くと、少しだけ俺から離れていく。

そして離れたことを確認して、俺はドアの横に着いているチャイムを押して鳴らした。

ｓｉｄｅ　すずか

「それでな、真夜くん見た目と違っておいしい料理つくるんや……ってまた真夜くんの話ししてもうた」

わたしが座っているソファの向かい側で苦笑いを浮かべているはやてちゃんを見て、思わずくすっと笑ってしまう。

結城君を接点に出逢ったわたしとはやてちゃんは、初対面として会った次の日に、学校帰りに寄った図書館で再会をして、お互いの家を行き来するくらいの友達になったのだけど、時々その結城君の話が自然と出てきて、そのたびにはやてちゃんは申し訳なさそうに笑っている。

……結城君のことは……はやてちゃんの話しで少しだけ知れたけど、それよりも結城君の話をしている最中はとても楽しそうに笑って話すはやてちゃんの方が印象に残る……

「はやてちゃん気にしなくていいんだよ？私ね、はやてちゃんのお話聞くだけで楽しいから」

自分なりに安心させるような笑顔を浮かべてそういうと、はやてちゃんは、ありがとうなっと嬉しそうに笑ってお礼を返してくれた。

……結城君とはやてちゃんと友達になれたら、はやてちゃんはどれ

だけ嬉しそうに笑うのかな？

はやてちゃんは、わたしが家族と話しているときとか、本当に一瞬だけ寂しそうに笑うことが度々あって、もしかしたら結城君が友達になってくれたら、その寂しそうに笑うことがなくなるんじゃないかと、結城君の話を聞く度に思う。

そんな風に思っているときに、ピーンポーンっと、はやてちゃんの家のチャイムの音が鳴り響いた。

「ん？こんな昼時に誰なんやろうか？」

不思議そうに顔を浮かべて、はやてちゃんは、玄関の方へと向かっていく。

これが……結城君っていう男の子だったら……どれだけいいかな？……

はやてちゃんを笑顔にさせられるんじゃないかと考えもかなりあるものの、はやてちゃんが話してくれる結城君という男の子はわたしも少しだけ興味惹かれる物があった。

「今開けるな～こんな時間に誰……や？……」

はやてちゃんの元気のいい声が、ドアの開く音を共にいきなり消えた。

何かあったのかと思って、玄関まで行ってみると、苦笑いを浮かべながら、玄関で固まっているはやてちゃんを開いたドアから見ている結城君の姿があった。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

さて……はやてが出たのはいいものの……なぜ鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしているんだよ……

ちらっとはやてから視線を移し、この家の中にいて、はやての後からきたもう一人の人物の方に視線を向けると、一瞬固まりそうになった。

あれ？……はやてとすずかが仲良くなるのって冬じゃなかったか？……まさか俺が原因か？

しかし固まっていても仕方ないので、俺より先に固まったはやてに視線を戻し、声をかける。

「八神さん大丈夫ですか？」

「は！！し……んやくんや！！真夜くんやで！！」

声をかけたら、固まっている状態から復活したものの、今度はパニック状態になって、俺の名前を興奮気味に叫んでいる。

はやてさん？……大声で叫ばれたら非常に近所で俺の名前が広まるんですが？

「はやてちゃん落ち着いて」

その様子を見て、すずかがはやての元まで来て、両肩をぽんぽんと叩いて落ち着かせようとしている。

「でもな！！でもな！！

前会ったような偶然でなくな！！真夜君がわざわざ家に来てくれたんやで！！」

……今まで答えを出さず、こちらの問題が解決されるまで答えられないから会うの避けてすまない……

はやての興奮気味にすずかにいう内容に対して、罪悪感だけが募っていく。

「今まで答えも出さず、避けて続けてすいませんでした」

その罪悪感から九十度腰を曲げて、頭を下げて、はやての言葉を待つ。

「え？それじゃあ……？」

はやての言葉に、頭を上げると、いつの間にかすずかははやてから少し離れて、こちらを見ており、はやては驚いたように目を見開いてこちらを見ている。

「今更遅いかも知れませんが……友人になっていただけないでしょうか？」

はやてに背中を押されて……前に進めたから……例え断られたとしても勇気を出さないとな

俺がはやてに手を差し出し、また頭を下げて、はやてが手を取るか、断るか、するまで待ち続ける。

「遅くないで、遅いわけないで……一回は無理やろうって思ってたんやけど……

それでもな……なりたいっと願ってたんや……なってくれてありがとな」

そう言って俺の手を取ってくれたから、顔をあげてみると、はやては満面の笑みを浮かべていた。

あぁやっと……俺は、もう一人の恩人のはやてと始められたんだ……

「八神さんこちらこそありがとうご「真夜くん？敬語はもうやめてほしいのや、それとはやてって呼んでや」あぁ改めてありがと、はやて」

うんっとはやてが笑顔で頷いてくれて、心の中が安堵感で満たされる。

「さて……シン君？そろそろ紹介してくれる？」

「わたしも結城君は知っていますが、後ろの方は知らないですしね？」

後ろからアリシアの声がしてきて、はやての横をちらっとみると、いつの間にかすずかが微笑みながらはやての横に立っている。

その声ですぐにはやてと手を離して、後ろを向くと、にやにやとした笑顔で面白げに見ているアリシアの姿があった。

「えっとまず家に入っていいか？」

「……真夜くんが連れている女の子がなぜ買い物袋を持っているのとか聞きたいことがあるのやけど……まああとで聞くな？」

そう聞くと、少しだけジト目で睨んでから、笑顔でそう言ってくれたので、家の中に入っていく。

なぜジト目で睨んだかは……気にしたらきっといけないんだろうな……

その後、はやてに案内されて、リビングの方へと俺達は通されて、リビングに置いてあったソファへとそれぞれ座っていく。

俺達が来るまで色々話していたのだろう、ソファが置いてある中央にテーブルが置いてあり、飲みかけのカップやお菓子とかが乗っている。

「さて……私の横に座っている子は、アリシア・テスタロッサって言いまして、同居人です」

「シン君のご紹介預かったアリシアです！！シン君の……ごしゅ「いやいや違うだろ！」え～やっぱりインパクト狙った方がいいかな～って」

自己紹介ってインパクト狙うことじゃないような……間違ってないよな？うん

少し危ない発言をし出したので、思わずアリシアの頭を軽くこついてつっこみを入れると、てへっと感じで舌を出してから、そんな言い訳を言い出した。

真正面にいるはやてと斜め前のソファに座っているすずかは俺達の様子は楽しそうに見ているからまだいいのだが。

「うん漫才みたいや」

「楽しそうな女の子ですね？それにしても一緒に住んでいらっしゃるんですね？」

すずかは、疑問げに俺とアリシアを見つめており、一瞬だけアリシアを見て、それに気づいたアリシアと視線を交わすと、小さく頷いてくれたため、すずか達の方へ視線を戻した。

「アリシアのお母さんに困っているところを拾って貰っていまして。今はアリシアのお母さん居なくて二人暮らしですがね」

「うんうん、お母さんもあたし一人だと心配だったらしいんだけど、シン君の存在で安心したって感じだよ」

それにしても……アイコンタクトで合わせられるとは……俺もビックリだ

すずかは納得した様子で頷いてくれたものの、はやては若干納得していない様子で疑問を浮かべた顔をしている。

「少し気になる所あるやけど、それは置いておくとして

私らも自己紹介しないな

私は、八神はやてや。それで」

「わたしは、月村すずかです。

よろしくお願いしますね」

はやてとすずかからの笑顔を浮かべた自己紹介に、アリシアもよろしくねっと笑顔を浮かべて元気よく返している。

さて、これで少し予想外なことあったが二つめの目的達成だな……三つ目の目的達成できるといいな……

そう、やって来た目的として、俺ははやてと友人となる返事をしにきたのもあるが、それと別にアリシアをアリシアと認識してもらえる知り合いを一人でも多く作ろうと思い浮かべたのもあった。

「それで、真夜くん達が買い物袋を持ってきたのなんでや？」

「それはだな……前にはやてが料理作ってくれたからな

もし友人になれたら、それのお礼返しとして料理作ろうと思って持ってきたわけだがいいか？」

「おいしい料理が作れるとお聞きしていますから、期待していますね」

はやてに説明していると、こちらに笑顔を向けて、期待の目で見てくるすずかに若干不安を感じた。

「期待通りできるか、わかりま「……やっぱり結城君わたしだけ敬語なのも寂しいですから……すいませんが、止めていただけますか？私も敬語止めますから……」……あぁわかった。一応はやてからも食べられるレベルだと評価貰ったが、そんなに期待されてもような物出来る気がしないぞ？」

「そんなに過小評価しなくても大丈夫や、充分おいしいで？私もまだ昼食べてなかったやから、お願いするな」

すずかからも、「わたしもお願いします」という声が上がり、俺はいそいそと買い物袋を持って、キッチンの方へ向かおうとするが、キッチンに向かう途中で、袖を引っ張られたため、振り向くと、見送ってたはずのはやての姿があった。

「あのな？まかせようと思ったやけど、一緒に作るのも有りやと思ってな？

アリシアちゃんから聞いたやからちゃんと作るもの分かってるで

……いいやろうか？」

……はぁ、一応お礼の筈なんだけどな？……それにアリシアと話してほしいから一人でするつもりだったんだが……

はやては申し訳なさそうな顔をして下から見上げてきているものの、握っている袖は、先ほどより強く握られている。

聞いているのにしたいっていう意志が伝わるように強く握られるとな？断れねぇ……

「そうだな……はやてがそういうなら一緒に作るとするか？」

うんと嬉しそうに頷いてくるので、もうお礼とか気にせず、ただ一緒に料理を作ることを楽しむことにした。

料理を進めていくと、いつしかアリシアとすずかの楽しそうに談笑している声が聞こえてくるものの、俺は真横からも楽しそうに鼻歌交じりで料理するはやてと料理することに神経を注いでいた。

「真夜くん、今やっているの終わったら大根おろしておくな」

「あぁわかったよ」

はやてが、二人で作るならハンバーグ以外もなにかできそうやなと

言い出したのがきっかけで、何品か料理のメニューが追加されて、まだまだ初心者レベルでレシピを思い切れていないのもある俺にとってはなかなか辛いものはあったが、はやてが俺よりも早いスピードで作っていくため、さすがにはやては、すごいなと思いつつ、ハンバーグを焼いていく。

っと……もうそろそろ三十秒経ったな……

三十秒経ったことで、強火から弱火にして、2分という余裕の中で俺も、サラダに使うレタスを手で、ちぎって、大きめのボウルの中に入れていく。

「はやて、サラダ用に使うレタスちぎっておいたからな？」

「ありがとな～真夜くんが来る前から、ご飯は炊いていたから大丈夫やな！」

「……はやての家の米を当てにしてすまんな」

「あはは、それはええで？こうやって人と一緒に料理するのは楽しいやからな」

そして俺は、2分経ったハンバーグを強火してからひっくり返し、三十秒経ってからバターと前もって作っておいた自作ソースを入れて、フライパンに蓋をして、火を消して、2分間蒸し焼きにする。

「それにしてもな……真夜くん、私が友人になるの断ってたら昼食

どうしたんや？」

「……そんなの考えて行くわけ無いだろ？ノープランだったな……」

「……友達になったばかりの人に言うのは嫌やけど……本物の馬鹿や」

サラダを皿に盛る手前まで作り終えたはやてがこちらへ話しかけてくるものの、呆れ顔を浮かべている。

断られた後まで考えず、本当に馬鹿のように突撃していったんだからな……馬鹿で合っているな

馬鹿と言われて、本当に当てはまっているため、笑いがこみ上げてくる。

「あはは、前みたいに、あれこれ考えず、正直にぶつかりに来たんだよ……嫌だったか？」

「真夜くん、初めて会ったときより性格悪くなったな？……嫌なわけないやろ……」

後の方の言葉を小さい声になったため、聞きづらくあったが、俺の耳にもちゃんと聞こえており、嬉しくなってまた笑ってしまうと、顔を少し赤くしたはやてにジト目で睨まれた。

そんな様子を少し楽しげに見ていたが、ふと時計を見ると、蒸し焼

きしてから少し経っているため、急いで蓋を開けて、中火にしてソース達を絡めていく。

ちょうど絡め終わった頃に、近くのレンジからピーという音がし、はやてもそれを取りに行って、俺はハンバーグを各皿に乗せていき、水分を切った大根おろしと青しおを乗せていく。

はやてもレンジから出したスープを、各器によそっていっているため、俺も器を出して、サラダを入れていく。

「さてご飯もよそって、テーブルに並べるか……」

「そうやね～」

料理をよそった器を、キッチン横にあるテーブルに並べると、リビングで談笑していたすずかとアリシアもこちらへとやってきて、座っていく。

「さてこれで、全部やな」

そう言って、はやては、ご飯の入った器をキッチンから持ってきて、俺はその半分を受け取り、並べる。

すべて並べ終えてから、アリシアの横であり、はやての向かい側に当たる席に座る。

「人と料理するの2回目やけど、なかなかいいのできたな～」
「まあもはや俺のお礼というのは忘れ去られた過去だがな」
あははっと苦笑いを浮かべるはやてではあるが、どことなく嬉しそうに笑う。
まあ……はやてと料理するのはなかなか楽しかったからいいのだが……
「シン君、諦めて試合終了にするんだよ！！」
「アリシア？その発言色々とおかしいぞ！？」
肩に手を乗せて、そんなこと言ってくるアリシアに、思わず突っ込んでしまう自分が悲しくなってくるものの、正面にいるはやては、横を向いて、爆笑しており、斜め前にいるすずかも楽しそうに笑っているので、なんとなく悪い気もしなくなってきた。
「そろそろはやてちゃんと結城君が作ってくれた料理食べないともったいないから」
「そうやな……料理は温かいうちが一番やからな」

俺達二人も同意して、頷くと、みんなで手を合わせて、いただきますを合掌してから食べ始めた。

「うんうん、どれもうまいよ～そういえば……え～っと二人はなんて呼んで良いのかな？」

「あはは、アリシアちゃんが呼びやすいのでええで？」

「うん、わたしもそうしてほしいよ」

食卓も進んでおいしそうに料理を食べているアリシアは手を止めて、前にいる二人に、呼び方聞くものの、快い返事だったため、食べるのを止め、少し悩んでいた。

少し経ってから、なにか思いついたのか、アリシアは何度か確認するように頷いてから、満面の笑顔浮かべる。

「はやちゃんとすずちゃん！！」

……アリシア？2文字にするのをこだわりにしているのか？……

そう呼ばれた二人は、食べるのを止めて、二人で顔をしばらく見合わせてたのち、お互いに頷いてから、正面を向き、笑顔を浮かべた。

「はやちゃんか～初めての呼ばれ方やけど、私はその呼ばれ方も好

きやで」

「うん、わたしもすずちゃんは初めてだけど、もちろんいいよ」

「ありがと～すずちゃん、はやちゃん」

満面の笑みでお礼を言っているアリシアをみて、嬉しそうに笑うはやてとすずか。

談笑しつつ、食べることを、食事が終わるまでしていた。

「はやちゃん？人と一緒に作るの2回目って言っていたけど、一回目で誰？」

「ん？それも真夜くんやな、真夜くんが料理を教えて欲しいってことで教える一環としてな」

「結城君、はやてちゃんと仲良かったんだね？」

俺は、結局食事ははやてと作ってしまい、なにかお礼返しとは違った気がしたため、せめて後片付けだけは、させてくれと、お願いして一人で後片付けをさせてもらった。

食器を洗いながら、後ろで3人の食事後の談笑する声が聞こえてくる。

「その時の真夜くん、敬語と八神さん呼びで、寂しかったのやけどね〜」

「シン君駄目駄目だね〜いや……シン君はまさかツンデレ？」

「アリシアちゃん？ツンデレってなにかな？」

……アリシア？どこからツンデレの知識を得たんだよ！？……アリシアと居るとつっこみ癖が付きそうだ……

すずかに、なにか仕込んでしまいそうで怖いが、ちゃんと洗い物をするため、突っ込み訳にもいかず、ただ聞こえてくる会話内容を聞くだけだった。

「えっとね〜いつもはツンツンしているけど、二人きりや時々、甘い雰囲気を出してたりするデレデレになるってことだよ？」

「わたしの友達の……アリサにとても似てるよ？」

「すずかちゃんの友達のアリサちゃんって子とても気になるんやけど……今日で初めて色々と真夜くんと話したのやけど、なにか真夜くんとは違う気がするで？」

間違いなく俺はツンデレ違うぞ……それにしてもこの世界のアリサって子も同じ感じなのか？

食器が洗い終わって、水に漬けてあったフライパンなどの器具類を

洗い始めた。

「え～シン君がツンデレじゃないなら……まさか！！ヤンデ「それだけは絶対違うぞ！！」あ……シン君、ちゃんと聞こえてたんだ～」

あまりにも違うこと言われて、思わず後ろを振り向いて突っ込むと、こちらをニヤニヤとした笑顔で見ているアリシアがいる。

……計画犯か！？……なんかアリシアに良く弄られるな俺……それにしてもなぜアリシアはツンデレとヤンデレ知っているんだよ……

これ以上俺が、洗い物をしていると何言われるか分からないので、丁寧であり、なるべく早めに洗っていくため、神経をそこに全て注いで片付けていく。

数分後片付けが終わり、談笑しているはやて達の元へと行く。

「真夜くんお疲れ様や……」

「シン君お疲れ～」

「結城君お疲れ様」

「まあ俺がお願いしたことだしな」

俺が近寄るとみんなは、笑顔で出迎えてくれて、それぞれ労いの言

葉を言ってくれる。

「真夜くんも来たことやし、アリシアちゃんにお願いがあるのや」

「俺が来るのが丁度いいお願いか？」

アリシアの横に座ると、アリシアは不思議そうな顔をして、はやてを見ているが、すずかは分かっているのか、ただ笑顔を浮かべるだけだった。

「そうや……アリシアちゃん友達にならへんか？」

「わたしも、アリシアちゃんと友達になりたい、それと結城君ともね」

笑顔で二人が言ってきたお願いに、アリシアは一瞬固まったものの、すぐに喜びを全身から出すような満面の笑みを浮かべて、頷いた。

俺も、すずかがちらちらとこちら見ていたので、承諾の頷きをすると、すずかは嬉しそうに笑っていた。

「まあ月村さんをなんてよべ「あの……下の名前のすずかって呼んでくれるかな？私はまだ男の子の名前呼び慣れないけど、早めに下の名前で呼ぶから……」分かったよすずか」

すずかと呼ぶと、嬉しそうに笑っていたが、なぜかはやてが少しだけジト目で睨んでくるものの、俺が気づいていることに気が付くと、誤魔化すように笑顔を浮かべる。

「えっとシン君、おめでとうね！いいたらしに「なるつもりはないからな？」それは残念だね～？」

はぁ……やっぱりアリシアのおかげで突っ込み癖が付き始めているな……

前にいるはやてとすずかは、楽しそうに声を出して笑っていて、俺は苦笑いが漏れるばかりだった。

「そういえば、はやてとすずかの誕生日はいつだ？」

「えっと私は6月4日やな」

「わたしは3月23日かな」

しばらく話しをしているときにふとはやての闇の書発動するときのことを思い出して、聞いてみると、やはり、はやてはもうすぐで誕生日を迎えることになるみたいだ。

はやてもすずかも不思議そうな顔を浮かべつつも、嫌な顔せずに笑

顔で答えてくれたことはありがたくも思えた。

「はやてちゃん誕生日近かったんだね……うんはやてちゃんのお家でお祝いしないとね」

「うんうんはやちゃんの誕生日祝いだね～」

「気を遣わなくてもええのに……そう言ってくれてありがとな……」

笑顔でそう言っている二人を見て、はやては申し訳なさそうではあるが、とても嬉しそうな顔を浮かべてそう答えている。

……確か……そうだな……ちゃんと祝ってやらないといけないな

その様子を見て、あることを思いつき、自分なりに考えていくが、ふとはやてがこちらを不思議そうな顔で見ていることに気が付き、一旦思考を止める。

「真夜くんどうしたんや？」

「少し考え事していたんだよ……ってもういい時間か」

「そうやな……もう3人は帰らんといかん時間やな」

時計を見ると、いつの間にか子供はもう家に帰らないと不味い時間帯ではあった。

はやてはそれに気が付くと、どことなく寂しそうに笑って言う。
……家に一人いるっていうのは寂しいものだからな……やっぱり実行するべきだな……
そんな思考に埋もれながらも、帰り支度を整えていった。

「今日は帰るね？はやてちゃんまたね」
「はやちゃんまた来るね～」
「はやて……必ずまた来るからな？」
「……3人またな……」

はやては玄関まで見送りに来ており、俺達は手を振りながら、別れを告げていく。
やはりはやては寂しそうだが、今はそれをただ見ていることしかできず、そのままはやてに背を向けて歩き出した。
そしてすずかは途中まで一緒だったものの、途中で別れ道があり、すずかとも別れて、アリシアと二人きりで、家へと向かう道進んでいく。
「なぁ？アリシアは誕生日いつだ？」

「えっと……5月29日だね～」

「ん？……今日じゃねぇか！！」

隣を歩くアリシアに、誕生日を聞いていないことを思い出し、ふと聞いてみたら驚くべき答えが返ってきた。

……はぁ……明日でいいかと思っていたがやっぱり今日お願いしに行こう

いきなり立ち止まった俺を、振り向いて不思議そうな顔で見ている。

「アリシア、俺は少し寄るところが出来たから先に家帰っていてくれ

あと少し遅れるが必ず誕生日祝い渡すからな？」

そう言って、アリシアに、二つある家鍵の片方を渡すが、戸惑い気味にアリシアは俺を見てくる。

「え？シン君、あたしもう貰ったからいいよ～？」

「いやいや渡してないから、一応は期待しておき。それじゃあ気をつけて帰るんだぞ？」

アリシアにそう言い残し、俺は明日お願いに行こうとしていた所へ、
アリシアの誕生日プレゼントも用意することになったのもあって、
急遽今日お願いしに行くため、目的地の場所まで走って急ぐ。

ｓｉｄｅ　アリシア

「あぁ～行っちゃった……」

なんであたしの話聞かずに行っちゃうのかな？……もうあたし大事なプレゼント貰ったのに……

それでも、用意してくれると聞いて、少しだけ嬉しくなる自分もいって複雑な気分にもなってくる。

あたしとしては……一緒に住まわせてくれて……そして、今日友達という大事なものをくれて……

何より……あたしにまた生きることが出来るチャンスをくれた……

あたしにとって、それだけで返しきれるか分からないほどのものをくれたのに、誕生日の祝いまでしてくれようとしているため、きっとまたあたしになにかをくれようとしてくれる。

……もうシン君……こんな調子じゃ……あたし一生かかっても返せるか分からないよ……

ため息が、漏れだしてきて、苦笑いを思わず浮かべてしまうが、嫌な気分に一向になれない。

「元々……これからどんな風に生きても、その人生の全てをくれた人なんだから……そもそも返しきれる恩の量じゃないか……」

きっと、そんなことをシン君に言っても、苦笑いされて、恩なんて着せてないとか言われるかも知れないけど……それでもあたしなりに必死に返すよ……例えなにかを捧げたとしても……

シン君が走り去っていった方向を、しばらく眺めてから、あたしは家への道をまた歩き出した。

side　ont

22話　友人（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様感想を書いていただきありがとうございます！！」

真「さて、無印とＡｓの間の幕間始まったわけだが……
　突っ込みどころ満載だし……文字数も多いし駄目じゃん」

元「……え～っと、てへっまたやっちゃった」

真「舌を出して可愛くしても、アリシアのように可愛くないからな？」

元「うぅやっぱりアリシアさんには敵わなかった……
　さて主人公が原因ですずかさんとはやてさんの友人フラグが半年も早く立ったわけですが……」

真「そして、アリシアとフェイトの仲も改善させないとな……」

元「まあ真夜はやることまだ山積みですし、頑張ってください」

真「あぁ……頑張っていくさ……まずは頭下げに行く作業だがな」

元「それは次回頑張ってくださいな」

真「さて締めの時間だな」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数や、お気に入り増える度喜んでおり、感想書かれる度に悶えるように喜んでいます」

元「それでは……」

真・元「「次回またお会いできることを楽しみにしております」」

２３話　思い出（前書き）

この作品を手にとって頂きありがとうございます。
今回もそれなりの文字数となっております。
では一人でも多くの方々に楽しんでいただけることを祈りつつ、本編に移ります。

23話　思い出

アリシアを先に帰らせて、俺が急ぎ向かった所は翠屋だった。

ドアを開けて、入ると閉店の準備をしていた士郎さんと桃子さんがこちらを驚いた顔をして振り向かれた。

「……真夜君かい？閉店準備をしているのだが、ケー……いや、ケーキを買いに来た感じではないね」

士郎さんと桃子さんは入ってきたのが、俺だと分かり、すぐに微笑むが、士郎さんは俺の様子に若干の違和感を感じ取り、不思議そうな顔をして俺を見つめる。

「自分勝手ながらお願いがありまして、そのために伺いました」

「……なんだい？」

士郎さんと桃子さんは、真剣な顔をして、聞く姿勢になってくれたため、自分勝手で我が儘なあるお願いを二人にお願いして、そのまま言い終わったら願いを込めて頭を下げる。

「お二人には何の利もなく、親戚でも実の子供でもない、子供ですがお願いできないでしょうか？」

「……真夜君、理由はなんだい？」

そう問われて、顔をあげ、士郎さんをまっすぐと見返す。

「ただ祝ってあげたいという私の自己満足のためです……」

「そうか……」

……誰もためでもない、自分の自己満足……捻くれた考えかもしれんが、そうとしか考えられない……

士郎さんはそう言って頷いて、目を瞑り、少しだけの沈黙の時間が流れた。

暫く経ったら、士郎さんは目を開け、徐に、隣にいる桃子さんの方をみたが、桃子さんは微笑んで軽く頷く。

それを確認したら、士郎さんは、笑顔を浮かべながら、俺の顔を見つめた。

「君のこと私としては気に入っているからな……お願い聞こうじゃないか

だが、一つだけ質問させてくれないか？。前から感じてはいたが、真夜君は学校通ってないね？」

俺が小さく頷くと、士郎さん少しだけ複雑そうな表情を浮かべ、桃子さんは悲しそうな表情を浮かべてこちらを見てくる。

士郎さんは人が……いや士郎さん達はいい人だからな……この見た目のやつが通ってなければ家庭やなにか事情があって通えないと思うのが当然か……

「そうか……
私が首を突っ込んでいい事ではないみたいだからな……だがなにかあれば相談しなさい」

「子供は、いくらでも大人に頼っていいのだから、遠慮はしないでね」

「ありがとうございます」

士郎さんと桃子さんは、赤の他人の俺に対して笑顔を浮かべながらそう言ってくれた優しさに、先ほどより深く頭を下げて、感謝をする。

本当にいい人達だよな……あぁ本当こんな迷惑なお願い聞いてくれて感謝もしきれない……

「……明日の昼過ぎにまた来てくれるか？来てくれたときに色々してもらうからね」

「気をつけて帰るのよ？」

「はい分かりました」

笑顔を浮かべて、二人は手を振って見送ってくれたので、俺も振り返してから翠屋を後にした。

そして何日か分の食材を買うために、スーパーに寄り、アリシアの待つ家へと足早で向かう。

「ぉ？シン君おかか～」

「……おかかってなんだよ。おかかって

まあただいま」

ドアを開くとすぐにアリシアの出迎える声が、耳に飛び込んできて、なんとなく嬉しさを感じるが、ただいまを言うより先に思わず突っ込んでしまう自分に悲しさを感じつつ、ただいまとテンション低めに言う。

「おかかって新しい挨拶だよ？まあおかえりっていう言葉を一瞬ど忘れしただけだけどね～」

「途中まで思い出せたのなら、最後まで頑張れよ……」

キッチン横のテーブルに、買い物袋を置くと、アリシアが楽しそうな笑顔を浮かべながら、俺の横までやってきて、突っ込みどころがそれなりにあることを言うものだから、買い物袋から食材を出しつつ、呆れ混じりの突っ込みを入れる。

はぁ……駄目だ……

なんかアリシアと居ると突っ込み癖が酷くなる……そして嫌に感じられないという特典付きだな……

ため息をつきそうになるのを抑えて、食材をあらかた出したら使わない食材を冷蔵庫に入れていく。

「アリシア？今から晩飯作るから大人しくまっとけよ？」

「隊長わかりやした～」

キッチンからアリシアの方を向いて、そういうと、笑顔を浮かべて軍人さん的敬礼をしてくるが、言葉が若干変だ。

……それにしても本当にアリシア楽しそうだなぁぃ

「わかりやしたってなんだよ……ここは、わかりましただろ？……」

「古くから戦場にいた軍人さん風味だよ？まあおいしいの期待してるよ！」

……まあ取りあえず食事の準備だな

アリシアの発言に、頭を抱えそうになるが、取りあえず、わかったと返事すると、アリシアはいそいそとリビングの方へ行ったので、晩飯の準備に取りかかった。

暫くして食事が、出来たので、器によそってテーブルに運びに行くものの、なぜか既にアリシアが席に着いていた。

「……席に着くの早いな」

「ん～？調理する音が聞こえなくなったからね～お腹空いた身としては、今か今かと待ちかまえようと」

「待っても、早く出てくるわけでもねぇぞ？」

呆れながらもキッチンにまだ置いてある他の器を取りに行こうとするが、アリシアが席を外し、後ろから付くので、後ろを振り向くと、楽しそうな笑みを浮かべてこちらを見ている。

「なぜ「お手伝いだよ～？ほらほら器渡す！！」はぁ……はいはいわかったからな」

ニコニコしながら、手を差し出して要求してくるものだから、キッ

チンに置いてあった二つの器を渡すと、アリシアは、そのままテーブルの方へ運んでいく。

はぁ……からかったりはしてくるが、アリシアはいい子なんだよな

二つのお椀にご飯を入れて、テーブルの席に着いていると思われるアリシアの元へ行くと案の定楽しそうな笑顔を浮かべて俺を待っている。

お椀をアリシアに渡し、俺もアリシアの正面の席に座る。

「い～た～だ～き～ま～す！！」

「いただきます……ってテンション高いな」

「いやはや～おいしい匂いをさせる食事は気持ちを高ぶらせるものなんだよ？」

……とりあえずそんなに高ぶらなくても……まあ嫌ではないが

楽しそうに笑って言うアリシアに、少しだけ元気もらえた気がして、楽しい雰囲気で食事を食べ始めた。

アリシアは、おいしいよ～っと言いつつ、食べてくれるので、こちらまでおいしく感じること出来て、やはり人と食事をするのはいいと思いながら食事を食べていった。

「アリシア、俺少し外に出るな？……まあすぐ近くだが」

「ん～？わかったよ～。襲われないようにね！」

……こんな餓鬼を襲っても、金目の物はないと思うんだがな？

食事を食べ終わり、食器も片付けてからリビングの方に向かおうとしてたアリシアに声かけると振り返って笑顔でそう言ってくる。

「襲っても意味ないと思うんだがな？」

「いや～色々な趣味趣向の人がいるからね～？もしかしてあるかもよ？」

……なにか俺が思っている意味とアリシアが思っている意味と違う気がするが……やぶ蛇になる可能性が高いからな

にやにやとした笑みで、言ってくるアリシアに若干不安を感じるものの、行ってくるというと満面の笑みを浮かべていってらしゃいとぶんぶんという音がしそうなくらい手を振ってくれるので、俺も手を振り返して家から出て、屋上へと向かった。

屋上のドアを開けると、静かな空間が広がっており、ふとフェイトとの生活を思い出されてくる。

あぁ……そういえば一人でここに来たの、自分の足で初めて来たとき以外なかったな……

……鍛錬したりするときはいつもフェイトが一緒にいて、色々と教えてくれて……付き合ってくれた

屋上の中央の所まで進み、空や周りを見渡してから、徐に目を瞑り、しばらくの間フェイトとの時間に思いを馳せる。

「ほんの一週間か二週間くらいの前のことなのにな……懐かしい……」

『フェイトさんとの生活ですか？』

どれくらい経ったか分からないが、自然と呟いた言葉に、ラインが反応して、聞いてきたので目を開けて、一度だけ深呼吸をする。

目を瞑っている最中にどこかで階段を上る音がして、目を開けた瞬間ドアが微かに開く音が、耳の中に入ってきたが、屋上のドアではないらしく、誰も入ってくる様子はない。

「いきなり話しに入ってくるなよ……ビックリしたぞ？まあそうだなラインの言うとおりフェイトとの生活が懐かしい」

俺の呟きに、反応して話しかけてくるラインに多少苦笑いを浮かべ

るが、ここにはラインと俺しか居ず、まあいいかと思い返す。

『いきなり入ってしまったことはすいません……でもマスターとフェイトさん良くこちらの方へ来ていましたし、フェイトさんのことだと分かりやすくもありましたから』

「はぁ……まあラインも一緒にいたんだから分かるのは当然か」

デバイス相手に居たというのは変かもしれないが……ラインはどことなくデバイスの気がしない……

服の内に隠すように仕舞っていたラインを出すと、ラインは不安げな雰囲気で宝石の部分を弱々しく光っている。

その様子に元々浮かべていた苦笑いに、少しだけ呆れも入りそうになる。

そんなに俺のことを気にしないでもいいだろうに……まあ人っぽいデバイスだし仕方ないか

『マスター……未だに思い悩んでいるのですか？』

「……なにを思い悩めと言うんだ？」

『もう少し良い未来を引き寄せられなかったのかと……』

「ライン、それはきっと頑張っていたフェイトに対しての侮辱だ…

…例え俺の脳裏に浮かんだこととしてもな」

……まあ侮辱と分かっていても、未だに浮かび続けるがな……もしかしたら未だにフェイトがここにいれた未来を作れたんじゃないかと……プレシアさんも救える未来を引き寄せられたんじゃないかとそう思っていると、手に痛みが走り、手元を見えると爪が食い込むほど握りしめていたらしく血がたらたらと出ている。

その事実と未だに答えが出ないＩＦを考え続けている自分が情けなくなって思わず、空を見上げると、微かに光る星空達が広がっている。

『すいません……確かに失言でした……それにしましても、なぜ屋上に？』

「鍛錬もできなかったしな……それに新しいモード確認しないといけないだろ？」

見上げるのを止めて、苦笑い混じりにそう答えると、そうですね……っと少し小さめな声で返事を返してくるライン。

ったく……こういうところがデバイスらしくないんだよな……

機械の筈なのに、呟くような返事は、後悔と申し訳なさといった感情の色を窺わせている。

弱々しく言い聞かせるように何度も点滅するラインを見て、ラインが言葉を発するまで待ち続けることにした。

『……待っていただきありがとうございます……さて、鍛錬と新しいモード確認しましょうか』

「そうだな、ラインブレイク・セットアップ！！」

『はい……ラインブレイク・セットアップ』

「それじゃあ……ツーソードモード起動！！」

セットアップしてすぐに、肩に担いだ大剣型デバイスをツーソードモードに切り替えると、大剣は分離し、片手剣同士の双剣となり、両手に握られている。

……あぁ双剣と言ったら……士郎さんだが、まあ自分なりに独学で頑張るしかねぇな

握られた剣を片方ずつ確認しつつ、いつか使いこなせるようになろうと心の中で誓う。

そのままシューティングモードやソードバスターモードへと切り替えていくが、ツーソードよりも下手したら使いこなすのに時間かかりそうな予感をさせるモードだった。

『マスター？すべて確認したわけですが……どうですか？』

「……まあ今回は確認のためのモード切替だったが、
正直ツーソードモードは、もしかして参考となる物が見られるかも知れないが、シューティングモードとソードバスターモードは手探りだな……」

まあ……名前の通りシューティングモードは遠距離中距離戦闘が可能そうだが、ソードバスターモードは……完璧な近距離型だよな……

このモード切り替えで分かったことは、ラインブレイクというデバイスは、遠距離中距離のモードがあるものの、近距離の色合いがかなり強いものであるということだった。

『……ソードバスターモードはかなりの威力を秘めています
私も微力ながらサポートしていきますから頑張りましょう！』

やる前から諦めちゃいけねぇよな……今回はやれることからしていくか

ラインの励ましにも似た言葉に、気合を入れ直し、とりあえずやれることからやるため、ソードバスターモードから元の大剣型に戻し、しばらくの間ひたすら目を瞑り、士郎さん相手をイメージしながら剣を振り続けた。

「ぜぇぜぇ……ん～体がやっぱり少しなまってたな」

暫く剣をぶっ通しで振り続けたものの、鍛錬をさぼっていた影響か、若干体の動きが鈍く感じられて少しだけ悔しさがにじみ出てくる。

体全身に襲ってくる疲れによる怠さで、デバイスを仕舞い、バリアジャケットだけ展開したまま、息を整えながら屋上で寝っ転がると、時間がそれなりに経っていたらしく屋上に来た直前で見た空よりも多くの星が光り輝いている。

「シン君？そんな事してたら馬鹿でも風邪引くよ？」

急にドアの開く音がしてこちらの方へ歩いてくる足音と共にそんな声が聞こえて、そちらの方へ顔を向けようとした瞬間、頬に冷たい物が押し当てられた。

ビックリして、瞬時に上半身を起こすと、屈んで、ペットボトルを手でプラプラと顔の前で揺らしながら、ニヤニヤした笑みで見ているアリシアの姿があった。

「あはは～シン君ビックリしすぎだよ？」

「はぁ……お前な……」

一瞬ジト目で睨もうと思ったものの、あははっと笑う笑顔をみてそんな気もなくなり、俺に出来たのは、片手で顔を覆い、ただため息

を吐くだけ。

もう……こういう毒気を抜かれるような笑顔を浮かべられるとすごく困るんだよな……

「シン君ほらお水だよ～」

「アリシアこの水どうしたんだよ？」

「ん？あたしがたまたま飲むために用意したんだけど、シン君が汗まみれで青春っぽいのしているからね～」

若いね～っと言いつつ、楽しそうに笑うアリシアだったのだが、どことなく優しい雰囲気を漂わせている。

アリシアに差し出された水の入ったペットボトルを受け取り、蓋を開けて、一口分飲むと、水分を欲していたのが体全体に染み渡っていくようだった。

……とりあえずお前も若いだろうっという突っ込みはしないでおこうかね

「それで、なんでパジャマを着たままここにいるんだ？……」

「どう？パジャマ似合ってる～？」

アリシアは立ち上がり、オレンジ色の長袖のパジャマを良く見せるように、くるっと回り、それから軽くポーズをとって満面の笑顔を浮かべてそう聞いてくる。

回転したことで若干の石けんの匂いが振りまかれて、石けんのいい匂いがこちらにも匂ってくる。

って……風呂から出てきてからあまり時間経たずにきたのかよ……月の光が差し込んだことで、水分を含んだ金色の髪は月の光を受けて若干光っているように見える。

「充分似合っているが……まだ髪が乾ききってないし、そのままじゃアリシアこそ風邪引くぞ？」

「お？シン君に褒められたね～まあ風邪の方は大丈夫だいじょ「取りあえずこれ羽織れ」ん～いいのに……でもありがとう」

見るからにも俺よりも風邪引く要素が高いため、立ち上がり、コートを脱ぎ、無理矢理アリシアに羽織らせると若干アリシアは文句いいつつも嬉しそうに笑顔を浮かべてお礼を言ってくる。

もう……アリシアがここにいる理由とかどうでもいいか……風邪引かさないため、帰らんとな

「アリシア帰るぞ？」

「もう少しだけここに居たいな～？いいかな？」

アリシアの腕を掴んで帰ろうとするものの、アリシアは言葉はおちゃらけているような言い方であり、顔も笑顔を浮かべてはいるが、目だけが少しだけ不安そうに揺れながら、俺の顔を見つめて言ってくる。

……まあそれくらいはいいか……

「はいはい分かった分かった。ならもう少しだけな？」

「シン君、やさしいね～」

俺は腕を放してから、屋上の中央へ行き、座り込むと、アリシアも俺の横に膝を抱えて座り込んだ。

「アリシア、パジャマ汚れるぞ？」

俺が先ほど見せてきたパジャマを気にしてそう言うものの、だね～っと言っているだけで、立ち上がる気配がない。

……アリシアの自由だしな。俺が気にすることでもないか……

「シン君～？あの星なんて言うの？」

「ん？分からん」

「もう少し悩んでほしいんだけどな～？は……それともやる気が出ないのかな？」

横を向いて、アリシアの方を見ると、なにかよからぬ事を思いついたようにニタニタと笑っており、若干嫌な予感が過ぎる。

「よし！やる気出るように膝枕してあげよう！」

そう言うと、正座になって、手でポンと太もも叩いて、どんと来いという感じで待ちかまえている

「アリシア馬鹿か？っというか、突っ込みどころ満載だぞ？」

軽く頭をこつくと、アリシアはてへっという感じで舌を出した後、楽しそうに笑うが、笑うのをすぐに止めて、真剣な顔で空を見上げ始めたので、俺もそれに引きずられるように空を見上げた。

「シン君？星綺麗だね～」

「そうだな……」

「こういうときは、星より君の方が綺麗だよ的な口説き文句を言うのが、モテる男としたの第一歩だよ～？」

「……絶対俺には似合わないセリフだな……
そもそもアリシア、俺がそんな口説き文句いっても気持ち悪いだけだろ？」

見上げるのを止めて、アリシアの方を見ると、楽しそうな笑顔を浮かべてこちらを見ている。

……言っている自分自身を想像しても、あり得ないくらい気持ち悪いな……

「いつか試しに言ってみれば、相手さんが判断してくれるよ～？」

「要するに、一回は当たって砕けろ方式で言ってこいと？」

「散らばった破片はちゃんと拾うから安心だよ！！」

「砕けること前提かよ！？」

その突っ込みにおかしそうに笑うアリシアは、楽しそうであり、どことなくなにかを振り切ろうとしているようだった。

そのまましばらく俺達は、星空を見つつ、色々な話しをしていった。

「さてシン君行こうか～？それと、シン君にお届け物だよ～」

「ん？なんだ？」

存分に話して満足したのか、アリシアが帰ることを提案してきて、俺もそれを頷き、一緒に立ち上がるものの、アリシアは突然パジャマの胸元から小さい封筒を取り出し、俺に手渡してきた。

……なんだ？これは……って、なんでだ？

名前を確認するために、封筒の裏を見ると、そこに書かれた名前は。

……プレシアさんなんで二枚目の封筒を用意する必要があったんですか……

プレシア・テスタロッサという名前だった。

23話　思い出（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、竜華零様、ＡＬＯＮＥ様、
　感想書いていただきありがとうございます」

真「アリシアに弄くりまわされて、勝てない……」

元「……まあそれは仕方ないですね」

真「仕方ないでいいのか？ぉぃ」

元「だって……勝てる要素ないですし」

真「やっぱりか……さて締めの時間だ」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増える度喜んでおり、感想書かれる度にやにやしています」

元「それでは……」

真・元「「次回またお会いできることを楽しみにしております」」

２４話　手紙（前書き）

更新が遅くなり、申し訳ありません。
一人でも多くの方々に楽しんでいただけることを願いつつ、本編に移ります。

24話　手紙

「これをどこで……」

「あたしが出るときに郵便受けに入っていたから持ってきたんだよ～？」

「どうして最初からわ……いやなにもない、ありがとな」

アリシアの言葉に、手紙を確認するのをやめて、疑問に思ったことを聞こうと、顔を上げた瞬間に寂しそうであり、悲しそうにも見て取れる表情をアリシアが浮かべていたのが見えて、すぐに笑顔に変わったものの、その一瞬だけ見えた表情が頭の中でこびり付いて、聞くのが躊躇され、ただお礼をいうことしかできなかった。

この手紙を最初から渡さなかったと言うことは……きっと最初から渡しづらかった何かがあったのかもな

心の中で自分を納得させるためにそう言い聞かせる。

「渡す物も渡したから、お家に帰ろ～？このまま本当に風邪引いちゃうのも駄目だからね～」

アリシアはお礼を言われて嬉しそうな笑顔を浮かべてから、そう言うと、俺の手を取って、引っ張っていこうとするので、服のポケットに手紙を入れてから、そのまま屋上の出口のドアまで引きずられていく。

「引っ張らんでも、ちゃんと一緒に帰るぞ？」

「まあまあ、年頃の女の子に手を取って引っ張られることきっと得な事だよ？やったね！」

アリシアは、俺の言葉に、ドアの目前で来たところで振り向いて、ニヤニヤとした笑みでそう返してくる。

「はぁ……そう言う事いうなら、まずニヤニヤとした笑みをやめてほしいんだが？」

てへっといたずらげに舌を少し出してから、あははと楽しそうに笑った後、満面の笑顔を浮かべて、このまま行こっと言ってくるものだから、断る気さえも起こらずため息混じりで頷くと、嬉しそうな顔を浮かべた。

「まあ俺は引っ張られるのは嫌だから……基本的に横を歩かせて貰うぞ？」

「そういうときは、引っ張られるより引っ張る方がいいとか、いうもんじゃないの～？」

……俺は引っ張るって言える程の勢いがあるわけねぇだろ？……

そう思って、思わず苦笑いを浮かべてしまったことで、アリシアは思っていることを感じ取ったのか、いたずらげな笑みでシン君は仕方ないねと言ってくる。

「ほらいくぞ？」

「うん！風邪引いちゃ駄目だからね～それにしても、シン君はツン

デレさんだね～？」

なんとなく気恥ずかしくて、少しだけ顔を逸らして、いうとアリシアは楽しげな雰囲気で返事を返してくるものの、若干後半辺の俺をからかう発言は、ニヤニヤした笑みを浮かべてながら言っている様子が思いついてならない。

……俺はツンデレ違うわい、そもそもデレてないし

逸らした顔を戻し、アリシアをみると、案の定ニヤニヤとした笑みをして俺を見ているアリシアの姿があった。

「シ――――あり――――う……」

「何か言ったか？」

「ううんなにも言ってないよ～？それよりいこ～」

一瞬アリシアは俯いてなにかを呟いたようだが、あまりにも小さい声だったため、聞こえず、思わず聞き返したが、アリシアはすぐに顔をあげて、満面の笑顔でそう言って誤魔化すだけだった。

はぁ……聞いても無駄そうだからな……

あぁと言ってうなずくと、アリシアは、楽しそうな笑顔を浮かべて、ぎゅっと強く手を握りなおしてから屋上のドアを開けて、目の前の階段を降りていく。

結局手は、大事そうに握りしめられたままであり、手をつないで歩くという恥ずかしくなることを、家に着くまで続けられることとな

った。

家に着くと、アリシアは羽織っていたコートを俺に返してから、おやすみなさいっと言って、フェイト達が使っていた部屋に入っていった。

俺もアリシアと別れた後、部屋に戻り、ポケットから封筒を出してからそこでやっとバリアジャケットを解除する。

「さて……この手紙は一体なんだろうな……」

『……とりあえず開けてみてはいかがですか？』

アリシアから渡された封筒を戸惑いながらも、見つめて、思わずそんなことをつぶやくと、ラインから呆れ混じりで、そう言われる。

……まあラインが言うとおりこのまま見てても何も進まないしな

意を決して、ベットに腰掛けてから、封筒を開けると、三つ折で入れられていた一枚の手紙らしき物が入っており、それをひらいてみると、前にもらった手紙より比べられないほどにびっしりと書かれていて、初めの言葉はごめんなさいで始まっていた。

［ごめんなさいね。突然の私からの手紙で戸惑ったかしら？

まずは、アリシアを生き返らせてくれて、そしてフェイトと親として向き合わせてくれる機会を作ってくれて感謝しているわ

私の娘二人と一緒に一度来てから、それからただ一度も来る事はな

かったため、まずは礼を言うために、手紙を書かせてもらったわ

来なかった理由はきっと、フェイトと管理局にアリシアを蘇生させた本当の理由を悟らせるきっかけを与えないためでしょうけど」

……俺の自分勝手な思いで動いたんだから感謝なんてしなくていいんだけどな……

それにしてもプレシアさんにほとんど行かなかった理由気づかれていたか……まあ俺よりも大人であり、かなり頭の回転いい人だからな……

いろいろな思いが巡り、思わず手紙を読みながら自嘲気味の苦笑いが漏れてくる。

「フェイトを必ず本物の無罪にさせるわ

しかし、その後は親として、悔しいのだけど、見守ってあげることができない

フェイトとアリシアと同じような年齢の貴方に頼むのは親としても大人としても筋違いで、だめかもしれないのだけど、私は二人を同様にお願いできる人は貴方以外に知らない。だから少しでもいいから良ければ見守ってあげてほしい。

そしてきっとアリシアは貴方についていくことを願うでしょうから、アリシアがもしそれを選択して、貴方が受け入れているのならば、心からアリシアのことをお願いするわ

貴方に譲る予定のマンションの一室は、フェイトのお礼半分、そしてこの手紙を届けるためもあったことは最後に謝罪させてもらうわ

親としても、大人としても失格であろう　プレシア・テスタロッサより」

……プレシアさん買いかぶりすぎですよ……あまり話さなかった子供に託しちゃだめだって

読み終わって、思わず天井を見上げてため息を吐いてから、ゆっくりと手紙を三つ折りで閉じて、封筒の中へ入れてベットの隣置いてある小さな棚の引き出しの中でも一番奥に仕舞いこんで、誰の目にも届かないようにする。

まあ……頼まれなくてもフェイトとは約束があるし、アリシアもほっとけないしな

そんなことを思いつつも、仕舞いこんでから、俯いて、フェイトのこと、アリシアのこと、この後のことと、ついつい色々と考えてしまい、沈黙の時間が流れた

でも、俺は……このまま進み続けたら、フェイトをまた裏切ってしまうかもしれないのか……

『マスター……決して一人でなにかを抱えてはだめですからね？』

フェイトを裏切るのかもしれないという考えがよぎった瞬間にラインが沈黙を破って、心配げな様子で聞いてくる。

「……なにもねぇよ……ただ俺みたいな馬鹿野郎でもできることあればしたいだけだ」

抱えていることなどない……情けなく思うことは多々あるが

『なら何も言いません。ですが少なくとも私はマスターとどこまでも共にありますから……だから共にどんなことでも抱える覚悟があり、苦難があるならば、一緒に悩みながらも乗り越える手助けをします』

優しげな雰囲気でそう言ってくるラインに対して思わず苦笑いを浮かびそうになる。

……本当デバイスか疑りたくなる……だが、元々変なデバイスであったか

「デバイスとしてではなく、共に歩む仲間として頼れとそう言っているのか？」

『もちろんです。マスターの矛であり、共に歩む仲間のつもりですよ？』

そう言ってくるラインからは、揺らがない意志が感じ取れて、そう言ってくれたラインに対して心の中で感謝をする。

どうやら難しく考えると碌なことにならないのが俺のようだしな……

「そうか……まあ必要な時は頼むぞ？」

はいっと嬉しそうな声をして答えるラインに、対して思わず苦笑いが漏れたが、すぐに明日士郎さんの所に行くことを思い出し、ラインを首から外して、横の棚の上に置き、そのままベットに転がり、床に就く。

そこから数日間、昼過ぎからは、翠屋に通い、帰ってきてからは晩御飯を作って食べて、そして鈍った体を鍛えなおすため、屋上で自主鍛錬を続けるというサイクルを繰り返した。

どうやらアリシアは、俺がいない時間帯は、はやてのおうちに行っている様子で、食事中の会話はそれの詳細を聞かされて、フェイト達と食事を食べているときと違って若干騒がしさがあった。

また、アリシアはあの日以来鍛錬前後で、屋上に姿を現すことはなく、それでも毎回お盆の上にタオルと水の入ったペットボトルが置かれているため、毎回来ていることだけはわかっているものの、なぜ顔を出さないのか分からずじまいだった。

「それにしても、君も意外な頼み事をするもんだ……小さいケーキの作り方教えるのと作る材料と場所をもらう代わりに雑用でも何でも手伝うからお願いしたいってお願いをしてくるとはね」

「……こんな無茶なお願い聞いていただいてありがとうございます私としても、御迷惑とは分かっていても、労働以外に代価を渡すものがなかったので……
ケーキの作り方を教えてくださった桃子さんと、手伝わせてくださった士郎さんにはいくら感謝の言葉を述べても言い足りないくらいです」

今日のお手伝いが終わり、閉店準備をし終わってから、作る場所と材料を貸してもらって作った一つのケーキを入れた箱を片手に、頭を下げると、士郎さんは苦笑いでそれを見つめていた。

……本当子供の私のお願いを聞いてもらって感謝のしようがないな……

「君は良くやってくれたし、接客のウェイターに至っては、文句のつけようがない仕事ぶりだった」

「そうなの！わたしよりもうまかったの。真夜君はケーキの作り方もすぐに覚えちゃったし、びっくりする事ばかりだよ！」

士郎さんの後ろから飛び出すように出てきたなのはが目を輝かせて、満面の笑顔を浮かべてそう言ってきて、士郎さんは、なのはと俺を楽しげな笑顔を浮かべて、目は優しげな雰囲気で見つめている。

……ウェイターのお手伝いは、なぜか体が勝手に動いてた感じだしな……記憶はないが、体が覚えていたともとれるから、もしかして長い期間でやっていたのかもな

それにしても……初日の時点で手伝いをしているのがばれてしまうとはな……まあなのはの家だからばれて当然といえば当然か

深く考えてしまったらしく、気づいた時には、なのはがじーっとこちらを見つめており、また悪い癖が出たと思い、思わず苦笑いが漏れてしまい、なのはは、その様子を不思議そうに見ている。

「そ、それでは、明日は手伝いをする時間が少なくなり、
もう一度貸していただくのは申し訳なくお「少し待ちなさい」え？」

なのはに見つめられている状況が耐えきれなくなり、明日のお願いとあいさつだけして行こうと思ったものの、突然士郎さんに呼び止められて、びっくりして一瞬動きが止まる。

そして徐に士郎さんは、ポケットから財布らしきものを出し、五千円くらいを財布らしきものから抜き取って、こちらに差し出してくる。

「士郎さん一体それはなんでしょうか？」

「君は良くやってくれたからね。給料みたいなものだ」

「私は、もうお願いしたものを頂いていますし、私のような年齢の子供に渡す額ではないですよ……」

士郎さんは、俺が困った様子にしていたのを楽しげな笑顔を浮かべてみており、なのはは戸惑い気味に俺と士郎さんの顔を交互で見ている。

……そもそも俺はそんなお金を頂けるほどのこともしていないしな……

「これは、給料代わりでもあるのだが、将来この店を君が手伝って

くれるようにするためのものでもあるからね。受け取ってほしいのだが？男の子として、女の子にプレゼントを渡す資金にはなるとおもうだけどね」

士郎さんは、そう言って、片目を瞑り、少しだけ悪戯そうな笑みを浮かべて、お金を差し出してくる。

……ケーキ渡す相手が女の子だと完璧にばれているな……というか士郎さん茶目っ気が結構あるんだな……

「……ありがとうございます」

「引き止めてすまないね、また明日」

「え？ぁ……ま、また明日なの」

士郎さんありがとうございます……それにしてもなのはには会うか微妙なところなんだが……

士郎さんに差し出されたお金を申し訳ない気分でいっぱいになるものの、受け取り、士郎さんはそれを確認すると、そそくさと手を振ってくる。

なのはは、いきなりの急展開についていけずに、かなり戸惑っているものの、なんとか手を振ることだけはできているようだ。

「はいまた明日お願いします」

俺は手を振り返してから、翠屋から出たものの、ケーキを作って渡す以外の祝いを考えてなく、すぐに足が止まる。

ケーキは、傷みやすいしな……なら遠くに行くわけも行かないし、時間をかけすぎるわけにもいかないしな

結局このまま立ち止まるわけにもいかないと思い、とりあえず家のほうへ足を向けて、歩きだして数分たったころにふと、横を見た時に、雑貨屋プルドという文字が書いてある看板が目に入ってきた。

雑貨屋なんてあったんだな……まあ商店街だし、あっても不思議ではないか

偶然だとしても、その偶然を信じるしかなく、俺はその店の中へ入って行った。

２４話　手紙（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、竜華零様、　紅咲様、ＡＬＯＮＥ様、感想書いていただきありがとうございます」

真「それで？なんでこんなに投稿するのに時間かかったんだ？いつもより文字数少ないし、書くのに時間掛かったわけでもねぇだろ？」

元「……言い訳をさせていただきますと……
　使っていたパソコンが御臨終したことが原因です」

真「……まあお前がだめすぎるだけだな」

元「っく……胸に突き刺さります……」

真「今後こんなことがないようにな」

元「はい……」

真「さて締めの時間だな」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者は、お気に入りやアクセス数が増えるたび喜んでおり、感想が書かれた日にはもだえるように喜んでいる」

元「それでは……」

真・元「「また次回会えることを楽しみにしています」」

２５話　不安な気持ち（前書き）

クオリティは作者の実力的に、いつも通り低いですが、一人でも多くの方々に楽しんでいただけることを願いつつ、本編に移ります

25話　不安な気持ち

お店の中に入っていくと、女性向けの雑貨屋だったらしく、アクセサリーや小物、ぬいぐるみなどが並んでいる。

店内を回って色々みるものの、オールゴールは二人の好きそうな曲を知らないため却下し、小物入れなどは、なんとなく手に取る気がしなく却下したりなどを繰り返していた。

そして十分くらい経ったころに、色々な種類の安めのペンダントが並んでいる棚にたどりついた。

そういえばアリシアの方は、原作でつけているはずのリボンさえ付けてなく、こういうをもってなかったな……はやてのほうはもっているかはわからんけど……やっぱりこういうのがいいのかね……

しかし、そういう方面には無頓着で、何がいいのか分からず、一瞬だけラインに駄目もとで聞いてみようかという考えは浮かぶがすぐにそれを却下する。

そもそもケーキにしたのも、祝いくらいなにか手作りか、ちゃんと考えたものを渡したほうがいいという考えからだったしな……人に聞いちゃいけないだろうし……

何分も自分なりに悩んだ後、二つの種類が違うペンダントを選び取って、それをレジに持っていこうとするが、レジ横に置かれた段ボール内に在庫処分として入れられているぬいぐるみの狸と目が合ってしまう。

……まさに捨てだぬき風味だよな……無視すればいいのに無視ができねぇ

ぬいぐるみなのに、ちょこんと段ボールの上のふちに前足を乗せて、じーっと俺を見つめてくるように思える狸、心なしか涙目に見えるのは気のせいだろうか。

しばらく見つめあった後、思わずため息を吐いて頭をかきながら、その狸から視線を外す。

「あぁもう……買ってやるからそんなに見つめてくるな……」

値段は格安であり、なぜここまで安くする必要があったのか、知らないものの、それでも睨み負けた敗北感を味わいながら、狸のぬいぐるみを抱きかかえる。

やばいな……ぬいぐるみに押し負けるとか、俺だめすぎるな

ぬいぐるみの狸を追加して、いざレジに立って、ペンダント二つと狸のぬいぐるみを置くと、レジの男の人が、一瞬だけ嬉しそうに頬を緩ませる様子が見えたのだが、相手は俺にしっかりと見られたことに気がついてないのか、そのままレジとしての業務をしていく。

最後に狸のぬいぐるみを大事そうに入れていく様子が見て取れ、なにか思い入れがあるのか、気になるものの聞くこともできず、ペンダントをプレゼント用の箱にそれぞれ入れてもらってからその店を後にした。

「おか……あれ？今日はどうしたの～？」

「あぁただいま。とりあえず入ってもいいか？」

「え？う、うんもちろんだよ～」

俺は少しだけ戸惑い気味のアリシアの横をすり抜けて、キッチン横のテーブルの上に買ってきたものと、ケーキが入った箱を置く。

まあいきなり、色々荷物もって現れたら動揺するのが普通か……

アリシアが俺の後を追ってくるようにテーブルの所まで来たのは気配で気がついたものの、包丁と皿とフォークを持ってくるために、荷物を置いてすぐにキッチンへ取りに行く。

包丁と皿を持って現れた時、アリシアは立ったまま、不思議そうにこちらを眺めていた。

「食器や包丁持ってきてどうしたの～？」

「まあとりあえず席についてからな」

戸惑いながらもうんと頷き、近くの椅子を引き寄せて座ったので、買ってきた荷物の中から小さな一つの箱を取り出してから席に着いた。

「え～っと？今から何が起こるのかな？……」

アリシアは、きょろきょろと荷物と俺を交互に見ながら、物凄く動揺しており、その姿がいつも俺をからかっている姿と違っていて、思わず笑いがこみあげてきそうになる。

「あぁ～シン君笑うなんてひどいよ～？」

「あぁすまない。さて遅れてしまったが……」

どうやら俺は堪え切れてなかったらしく、アリシアは恥ずかしそうに、顔を真っ赤にさせて、頬を膨らませてジト目で睨んでくるものの、怖さがまったくない。

俺が言葉を一旦区切ったことで、俺の言葉が気になったのか、ジト目でみるのをやめて、首をかしげてこちらを見てくる。

本当に遅れてしまってすまんな……だが一応は有言実行はできたな……

「ほら？誕生日祝いだ」

ケーキの箱を開けて、自作の小さめの二人分のケーキを取り出して、テーブルに置くと、アリシアは、そのケーキを見て一瞬目を見開い

て、びっくりするが、次の瞬間嬉しそうな満面の笑顔を浮かべた。

「誕生日ケーキ！？でもクリームがき「……何分素人だしな」え？シン君が作ったの？」

「やっぱり祝いは手作りがいいかねっと思ってな？まあ出来が悪いのは俺の技量不足だ」

俺が苦笑いを浮かべてそう答えると、アリシアがじーっとそのケーキをしばらくの間凝視してから、先ほどの笑顔と少しだけ違って、本当に幸せそうな笑みを浮かべる。

「シン君……本当にありがとう！！それじゃあ早く食べよう～」

「まてまて、ついでに追加だ。センスは物凄く悪いがあきらめろ」

そう言って、目を輝かせていたアリシアに、買ってきたペンダント入った箱を差し出すと、不思議そうな顔をして受け取ったものの、箱を開いた瞬間、俺の顔を満面の笑顔で見つめてくる。

……アリシア過剰反応しすぎだぞ？

「シン君……この星の形のペンダントは？」

「センスが悪いとは思うが、プレゼントだぞ？諸事情があって、お

金を貸していただいたしな」

アリシアは星型のペンダントを箱から大事そうに取り出すと、早速首にペンダントを付けてから、どうかなっと言いたげな目で満面の笑みを浮かべたまま、こちらに問いかけるように見てくる。

まあ……一応似合っていて良かった……

「似合っているから心配するな。まあ自分でプレゼントしたものに対して言ってもなんかねっとは思うが」

「ううん～嬉しいよ～？……さて、気を取り直して、シン君の作ったケーキ傷んじゃ駄目だから早く食べよ？」

あぁっと返事して、包丁持って切り分けるものの、小さい分あまり時間がかかることないため、すぐに皿に入れて食べ始めることができたものの、思わずアリシアがケーキをフォークで小さく切って、口に運ぶ瞬間、内心緊張が走る。

一応味見で確認はしたが……味覚は人それぞれだしな……

「シン君の作ったケーキおいしい！！きっと血と汗と欲望の結晶なんだね～？」

「なぜ若干熱血系風味でケーキを作らんといけない……そしてなぜ熱血風味なのに、欲望が入る！？」

「シン君突っ込みが甘いよ〜？それに生きていくのに、欲望がなくちゃ、面白くないよ！」

アリシアは、楽しそうに笑いながらそう言ってきてから、徐にケーキを口に運んで行き、美味しそうに食べている。

アリシアの口に合って一応良かったが……突っ込み甘いと言われても、そっち系統目指すつもりないぞ？

俺もアリシアが美味しそうに食べているのを見て、自分自身もケーキを食べ始め、小さなケーキを二人で、色々な話を交えつつ、食べていく。

小さいケーキのため、時間もそれほど掛からず、完食することができ、食べ終わりの飲み物代わりに、オレンジジュースを冷蔵庫から持ってきて、二人で飲みながらゆったりとする。

「オレンジジュースがいつもより酸っぱく感じるよ〜」

「まあケーキ食べた後だしな……」

……うん確かに酸っぱい……しかしジュースはオレンジしかなかったしな

アリシアは、酸っぱそうに顔を歪めながらも、オレンジジュースを少しずつ飲んでいるものの、心なしか楽しげだった。

「ねぇシン君一つだけ聞いていいかな？」

「ん？なんだ？」

アリシアは、飲んでいたコップをテーブルに置いてから、すこしだけ頬笑み、目だけを真剣な目をさせてそう聞いてくるので、思わず俺もコップをテーブルに置き、身構えてしまう。

「そんなに身構えなくてもいいのに～。ただね……なんで星の形なのかな～ってね？」

「あぁ、それはな。何日前に一緒に星眺めていただろ？その時のことが思い出されてな？」

……本当は、明るく、輝くように笑うアリシアが、どことなく儚く感じられて、それがまさに星のイメージだからだが……恥ずかしくそんなことといえないしな

アリシアは、微笑んで、そっか～っと言ったきり、なにも言葉を発することがなく、少しの時間だけ沈黙が流れる。

「さてケーキでお腹いっぱいになっちゃったから！！あたし寝「待って」……あはは～やっぱり無理があったかな～？」

アリシアは、沈黙を破るように勢いよく立ちあがって、明るい声でそう言って部屋に行こうとしたのを、咄嗟に腕を掴んで引き止めると、苦笑いをしながらアリシアは振り向いた。

よほど余裕がないみたいだな……思い切り無理して笑っているのが目に見えて分かるぞ……

「かなり無理はあるぞ？それでいきなりどうしたんだ？」

「……はぁ～シン君強引だな～。きっと、なんでもないって言っても離してくれないんだよね？」

腕を掴んだまま、アリシアと、見つめあってどれくらい経っただろうか、諦めたように溜め息を吐き、苦笑いを浮かべてそう言っていうので、小さく頷いた。

そうしたら、椅子を引き寄せて、また座りなおしたので、腕を離し、俺も近くの椅子を引き寄せて座る。

「あたしね……シン君が屋上で、フェイトとの日々を思い出しているのを見たときから、もしかしてフェイトとシン君の思いの詰まったここを、あたしは穢しているんじゃないかと思えて仕方なくてね？……

屋上の話を、勝手に聞いちゃったことは……本当にごめんなさい……きっと許してくれないかもしれないけど……

それでね……ケーキとプレゼントを今日用意してくれたのとても嬉しかったけど……ふと、そんな穢したあたしなんて受け取っていいのかなって考えちゃってね？」

……俺が屋上で、聞いた物音は、気のせいじゃなく、アリシアだったのかと……

アリシアは、微かに自嘲気味の笑みを浮かべながら、後悔と迷いが混じり合ったような目で俺を見つめていた。

「それはすべてあたしの勝手な思い込みだろうし、勝手な被害妄想だろうっていうの分かっているのにね？

本当あたし馬鹿だよね～？あ、それとシン君？心配しなくても明日になれば元通りだよ～

そもそもあたしの自分勝手な考えなんだから、気にしちゃ駄目駄目だよ？」

そう言ってから、若干空笑い混じりで笑うアリシアに対して、俺はなんとも言えない気分になって、思わず溜息を吐いてしまう。

「シン君～？溜め息一回する事に幸せがにげ「本当……アリシアは馬鹿だよ」そうだよ？ば、ってそんなにガシガシやっちゃだめだよ！？あたしの頭、きっと硝子のように脆いはずなんだから～」

なんとか気持ちを落ち着かせたのか、満面の笑顔を浮かべて、表面上はもういつもの調子で言ってくるアリシアを見て、俺は、思わずアリシアに近づいて、ガシガシと頭を強めに撫でてしまう。

本当……まず気にするなという方が無理だと気付け……っというか硝子のように脆いは、頭を指して言わない気がするが……

最初は、ガシガシ撫でられているのが、不満げの様子だったが、しばらく続けていると、諦めた様子でされるまま、撫でられており、それを確認したら、撫でるのをやめると、アリシアは疑問気な顔を浮かべて、俺を見つめている。

「とりあえず、前も言ったが、アリシアはアリシアで、フェイトはフェイトだ

そして今この時ここにいるのが、アリシア・テスタロッサだろ？ならあんま気にしすぎるな

少なくとも……俺とアリシアの思い出も少しだがこの家で作っただろ？

なら、穢すとかじゃなくて、別の新たな思い出積み重ねただけだ

少なくとも、センスはいいとは思ってないが、その星型のペンダント、アリシアに似合うと思って買ってきているんだから、気にせず、ただ喜んで受け取っておけ」

俺は言い終わってから少し恥ずかしくなって、思わず顔をすこしだけそらしてしまい、アリシアは、その様子をきょとんとした顔で、少しの間じーっと見つめてから、心からの満面の笑顔を浮かべて、席を立ちあがり、俺のすぐ近くまで寄ってきて、ツンツンと俺を頬を突いてきたので、アリシアの顔を正面で見据える。

「シン君〜？最後のセリフ、口説き文句としても、女の子に言うセリフとしてもまったく駄目駄目だよ〜？

最近じゃ亭主関白なんて流行らないよ？

でもね……シン君うれしかったよ、ありがとう……それにしても結局シン君に迷惑かけちゃったな〜」

最後は突くのやめて、真剣な顔でお礼を言ってくたアリシアは、言い終わると幸せそうな笑顔を浮かべる。

一応……馬鹿なりの方法で足掻いたら、なんとかできたな……

「今は迷惑かけられるだけかけとけ。そのうち俺も迷惑かけそうだしな？」

「え〜かけられるのは嫌だな〜」

アリシアは楽しそうに笑いながら、そう答えて、いそいそと席に戻

っていく。

まあ……これが本当の意味のいつもの調子だよな……

そのまましばらく色々と話していたが、結局晩飯を用意するっていう雰囲気でもなくなり、いい時間になった時に屋上へ行くと、アリシアに伝えてから、俺は、鍛錬をするために、屋上へ向かった。

「シン君は将来ゴリマッチョ目指し？」

「……ゴリマッチョはまったく似合わないと思うが」

鍛錬が終わり、地面に座り込んで休憩をしていると、後ろの方からアリシアの声が聞こえてきてので、若干突っ込みを返しながら、振り向くと、アリシアがタオルと水の入ったペットボトルを手に持ってこちらの方に楽しげな笑顔を浮かべて、歩いてきているところだった。

筋肉マッチョの俺を想像しても、似合わなすぎて、駄目だな……

「はい、シン君、タオルと水ね～」

「ありがとな、それにしてもまた風呂上がりのパジャマで来たんかい……」

「今回は、羽織も着てきたから万全だよ～？」

誇らしげに胸を張って言ってはくるが、髪がまだ乾ききっておらず、髪を揺らすたび、心なしか水滴がほんの少しだけ飛んでいるので、俺は先ほど渡された水を少し飲んでから、その様子を見て、思わず溜め息を吐く。

誇らしげに胸を張っても……そもそも風呂上がりでくるなっていうんだよ……

「髪が乾いてないだろ……はぁ～少し待ってろ」

「え？……シン君あたしは大丈夫だよ！！「おとなしくしとけ……」う～／／／」

立ちあがって、アリシアの傍まで寄ってから、徐にアリシアの後ろに立ち、渡されたタオルでアリシアの髪をタオルで挟んで、丁寧に拭いていく。

途中アリシアが、遠慮するようなこと言っていたがお構いなく、あらかた水分がとれるまで、ゆっくりと丁寧に続ける。

「まあこれでいいだろう……まずちゃんと拭いてから来いよな」

「あはは～今日のあたしは駄目駄目だね～そこまで気が回ってなかったよ～」

水分があらかたとれて、拭くのをやめてると、アリシアはトマトのように耳まで真っ赤にさせながら、振り向いて、恥ずかしそうに空笑いしながら言う。

……って俺、今すごく恥ずかしいことしなかったか？

先ほどの自分の行動に対して、思わず苦笑いを浮かべるが、アリシアは頬を少しだけ膨らませて、睨んでくるが、そこでアリシアが風呂上がりで来たのに、星型のペンダントを付けていることに気づいて、少しだけ嬉しくなって、また笑ってしまう

……うんやっぱり似合うな、まあ風呂上がりにつけちゃいけないと思うがな

「シン君～恥ずかしかったんだから笑わないでよ～」

「すまない……なあ？アリシア。
明日のことで、アリシアに提案があってな？」

アリシアは、睨むのやめて、俺の言葉に首をかしげているものの、真剣な目で見つめてくるので、俺は真剣な見つめ返して、ある提案を行った。

本当は、アリシアを巻き込むか悩んだし、巻き込んだ後どうなるか分からないが、今日の事で、このまま一人で居させる方がよほどまずいって感じたしな……

「アリシア？明日はやての家に行こうと思うんだ
それでな、アリシアも連れて行くが、はやてが良いと言ってくれたら泊まりにいくつもりだ」

「え？……うん、誕生日前日を一人で過ごすのはさびしいからね～
シン君のことだからきっとケーキとプレゼント持ってだよね～？」

楽しそうな笑みを浮かべながら、俺にそう言ってくるアリシアに、苦笑いを浮かびそうになる。

……確かに考えていたことは分かりやすかったと思うんだが、すぐに五割方の目的と考えを理解されてもな～話が早くて助かるが

「あぁもちろんだ。まあ明日の待ち合わせの時間は、明日言うが。
それじゃあ風邪引いてもかなわんから家に戻るぞ？」

「そうだね～もどろ～。風邪引いてネギを鼻に刺すようなことになるのも嫌だからね～」

ネギは刺すもんじゃないだろ……どこの世界の風邪の治療法だ！！

そう言って、アリシアは、俺の横を通り過ぎて行って、屋上のドアの方へ楽しそうな笑顔を浮かべながら駆けて行ったので、俺はそのあとを追っていき、アリシアと一緒に家へ帰って行った。

25話　不安な気持ち（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、感想を書いていただきありがとうございます」

真「……なにも成長できていない自分が嫌になるな
　さて気を取り直して……日常パートが多くないか？」

元「あはは……積み重ねた日常あってこその非日常だと思いますし……
　色々といわれることは、覚悟しながらも日常編がしばらく続いていきます」

真「まあ俺も色々解決しないといけないことが盛りだくさんだし、ままならないな……」

元「自分なりに解決していくしかないですね」

真「そうだな……さてそろそろ時間だな」

元「ここまで読んでいただきありがとうございます」

真「作者は、アクセス数やお気に入りが増えるたび、喜んでおり、感想が書かれた日にはもだえるように喜んでいます」

元「それでは……」

真・元「「また次回お会いできることを楽しみにしております」」

26話　当たって砕けて（前書き）

いつも以上にクオリティがひどいかもしれません……
一人でも多くの方々に楽しんで頂ける事を願いつつ、本編に移ります。

26話　当たって砕けて

翌日昼食を食べ終わってから、アリシアと今日の待ち合わせの時間などを確認して、俺は家を出て、翠屋に向かった。そして翠屋に着くと、店に入り、今日が最終日となる手伝いを始めた。

「真夜君お疲れ様」

「うまくケーキ作れたかしら？」

「士郎さん、桃子さんお店の方はよろしいのですか？」

いつもよりは少ない時間ではあるが、何事もなく、手伝いを終えた俺は、厨房の一部を借りて、小さいケーキを作り、箱に入れてから厨房を後にすると、なぜか士郎さんと桃子さんが一旦店を閉めて、笑顔を浮かべながら待ち構えていた。

……店閉めちゃって大丈夫なのか？

「元々お客さんが、あまり来ない時間帯であるんだが、最終日だから見送りくらいはね」

「大人は子供を見守る者でもあるからね？。……わたしは君みたいな男の子が、一生懸命になってもケーキを贈りたい相手って誰なのかしらと気になるところだけどね？」

「……ありがとうございます。桃子さん、送る相手は、秘密にさせていただいていいですか？」

桃子さんは、「残念ね」と言いつつも、悪戯げに笑い、士郎さんも楽しげに笑うので、思わず溜め息をつきそうになる。

はぁ……良い人達なんだが、士郎さんも桃子さんも茶目気があるな……

「君くらいの子供がそんな溜め息はついちゃいかんぞ？まあまたいつでも来なさい」

「そうよ？。また遠慮なく来なさいね。なのはのお友達でもあるから、お客さん以外でもいつでも歓迎するわ」

「はいまたこのご恩は返させてもらいますね」

士郎さんと桃子さんは俺の言葉に苦笑いを浮かべてたものの、すぐに手を振ってくれたので、頭を下げてから翠屋を後にした。

本当にこのご恩は、ちゃんと返せるようになってから必ず返します……

そう心の中で誓いながら、外に出ると、アリシアが、翠屋の近くの通りから、片手に荷物を持って、楽しげな笑顔を浮かべてながらこちらの方に歩いてきて、俺の正面まで来る。

さて……待ち合わせの場所でもないし、待ち合わせに行くために通る道でもないはずなんだがな？

「シン君～お手伝いとケーキ作りお疲れ様～」

「……まず一つ突っ込ませろ……なぜ手伝いしていることを知っているんだ？ケーキをもう一つ作るとも言っていないんだがな？」

「シン君の事だから、あたしの時に作ったのに、はやちゃんの時に作らないとは思わないよ～

お手伝いは……さっきたまたま見かけたんだよ～？」

アリシアは満面な笑顔を浮かべてそう答えた姿にどことなく若干違和感を感じて仕方ないのだが、はっきりとしたものじゃないため、突っ込むに突っ込めずに、心の中で溜め息を吐くだけしかできなかった。

あぁもう……たまにこういう違和感を感じるが、なにに違和感を感じているのかわからんから歯痒いな……

「シン君？そんな暗い顔してどうしたの～？そんなんじゃ幸せがどんどん砕け散っていくよ～？

それにしても、シン君に頼まれて持ってきたけどなんかこのプレゼント大きいね～」

「アリシア袋の中身見なかったのか？」

「見るわけないよ～この中身を最初に見ていいのは、はやちゃんだけだよ？
シン君が、はやちゃんのために考えて買ってきたのをあたしが知ったり見たりすることは、絶対だめなことだよ～」

笑顔を浮かべながら、真剣な目で俺を見つめて、アリシアはそう言ってきたものの、言い終わると若干恥ずかしそうに笑った。

……こういうところがあるからこそ、迷いなくはやてに対してのプレゼントを持ってきてくれるように頼めるんだよな……

そんな考えが過ぎり、思わず苦笑いを浮かべてしまったので、アリシアは頬を軽く膨らませてジト目で見てきた。

「そんな風に笑うなんてひどいな～」

「すまんすまん。それじゃあ持ってきたの受け取るぞ？」

「なんか謝られた気がしないよ～……はいシン君」

アリシアは不満げな表情を浮かべながらも、プレゼントが入っている方の荷物を手渡してくれたので、俺は、アリシアにいくぞっと声をかけてから、はやての家に向かって歩き出すと、アリシアは、すぐに追ってきて、楽しげな笑顔を浮かべながら、俺の横に並んで一緒にはやての家へ向かった。

「さて……なんか緊張する……」

「シン君？当たって砕けちゃえばいいんだよ～？」

「砕けるのだけは勘弁だ……」

はやての家の前まで着いて、俺がはやての家のチャイムのあたりで緊張していると、アリシアから珍しく冷たい突っ込みが入る。

まあ……前来たよりは、よほどましだがな……それなのに何緊張しているのやら

その考えが浮かんだから、なのかは知らないものの、肩の力が抜けていくことを感じられて、チャイムを押した。

「誰や～？お？アリシアちゃん今日は来たんやな～って、真夜くん？」

「おう、はやて、今日は用事があって来たぞ。入れてくれるか？」

「う、うんもちろんや～」

はやては、俺がいることにびっくりはしているものの、嬉しそうに笑ってくれて、俺の言葉に戸惑いながらも頷き、招き入れてくれた。

……しかし、はやての最初にアリシアに向けて言った言葉に……なんか引っ掛かるものがあるな……

ちらっとアリシアを見ると、それに気付いたのか、アリシアは不思議そうに首を傾げてこちらを見てくる。

胸に、引っ掛かるものが残るものの、はやてがいつまでも入ってこない俺達を不思議そうに見ているため、一旦それを考えるのをやめ、はやてに「すまない」と謝ってから俺は、はやての家の中に入ると、アリシアも俺の後に続いて、家の中に入った。

「真夜くんとアリシアちゃんが来てくれるのは嬉しいのやけど、色々荷物抱えての用事ってなんや？」

家の中に入り、リビングまで入ると、はやては振り向いて、疑問気な表情でこちらを見て、そう聞いてくる。

「ほら誕生日祝いのケーキだ」

「え？真夜くん……誕生日明日やで？」

俺が、ケーキの箱を見せるようにはやての目の前まで掲げると、はやては、俺の言葉に驚きの表情を浮かべたが、すぐに不思議そうな顔をして聞いてくる。

まあ普通は、前日には持ってこないよな……

アリシアは、どうやら俺の話が終わるまで口を挟む気がないらしく、俺の横でニコニコ笑顔を浮かべているだけだった。

「そうだが、まあ残念ながら作りたてで、商品でもないからな。今日食わんと傷むだけだからな」

「……真夜くん強引やな～。まあ嫌とは一言もいってないのやけどそれにしても商品じゃないってどういうことや？」

「あぁ、一応下手ながらも、自分の手で作ったケーキだか「すごいやん！！」目を輝かせるな……期待されても困るから。はやての料理には足元にも及ばない料理の腕だしな」

はやては、俺が作ったと聞いて、目を輝かせて満面の笑みを浮かべたので、思わずもしものための言い訳を並べてしまう。

だがなぜか、アリシアがはやての言葉に同意するように頷いてから、「すごいよね～」と言ったので、はやてもその言葉に頷いて、期待するように見つめてきたため、結局ハードルが若干上げられたようだった。

アリシアは、俺の隣からはやての後ろという、はやてから見えない位置に移動したら、ニヤニヤとした笑みを浮かべて、悪戯の成功を楽しんでいる。

……アリシア、俺のケーキ食ったんなら味分かるだろ？

若干やつあたりと分かっていても、恨めしげな目をして、アリシアを見たら、満面の笑顔を浮かべて、親指を立ててサムズアップをして、返してきたので、思わず溜め息を吐きそうになるが瞬前の所で堪える。

「なぁなぁ真夜くん～包丁と皿もってくるからな！早く食べようや～」

はやてが、袖を何度かくいくいと引っ張って、嬉しそうな笑顔で若干興奮気味に言ってくるので、俺は頷く。

「そうだな、傷んで食えなくなったらもったいないしな」

「そうだよ～もったいない星人か虫かがでたら嫌だよ～」

どちらも出てくるわけないだろ……そんな星人なんていたら、食べ持たせて送り返すぞ……

俺の言葉で、はやてはキッチンの方へ行ったので、俺は、アリシアに突っ込みを心の中だけで済ませて、キッチン横にあるテーブルに向かい、荷物をテーブルに置きに行く。

俺が荷物を置いて、席に座ると、アリシアは、「シン君ひどいな～」と頬を軽く膨らませながら、俺の正面に座って、俺に対してそう言ってくるが、本当に怒っている様子はなく、どことなく楽しげだ。

「包丁と皿もってきたで～……そうや、まだその大きい荷物達の中身聞いとらんで～？」

「あぁそうだったな。ほら一日早いが誕生日プレゼントだ」

「え？……真夜くんありがとな……あ、あけてもええか？」

俺が袋の中から、小さな箱を取り出して、はやての方に差し出すと、はやては皿と包丁をテーブルに置いてから、嬉しそうであり、緊張しているような表情を浮かべて、その箱を両手で受け取り、そう聞いてきたので、俺は頷いた。

はやては恐る恐る箱を開けて、箱の中に入っているペンダントを取り出すと、目を見開いてから驚いた顔して、俺を見つめてきた。

アリシアはその様子を優しげな頬笑みを、浮かべながら見ていたが、俺と目が合うと、やったねっと言いたげに楽しそうな笑顔を浮かべた。

「……このペンダント本当ええの？」

「良いも悪いも、はやてに買ってきたんだからな」

「ありがとな……嬉しい……」

はやては、嬉しそうな笑顔を浮かべてそう言ってから、箱から取り

出した翼型のペンダントを、首につけて、嬉しそうであり、恥ずかしそうな笑みを浮かべて、似合うのやろうかっと言って首を傾げて聞いてくるので、俺は大きく頷いた

うん……似合ってるな……まあ俺のセンスがいいんじゃなくて、はやてに似合っているだけだがな

そこでふともう一つ渡すために持ってきた物を思い出して、俺は袋からその物を取り出して、はやての目の前まで持っていって差し出した。

「これは、プレゼントというかついでだが、よければこれも受け取ってくれるか？」

「え？た、たぬき？」

狸のぬいぐるみと、はやては、しばらくの間見つめあったが、はやてが笑いをこらえきれなかったのか少し吹いたが、はやては楽しそうな笑顔を浮かべたまま、そのたぬきを受け取り、膝の上に置いた。

たぬきよ……俺はさすがに男だからな。はやての所で幸せになってくれ……ってぬいぐるみに言うセリフじゃないな

思わず、苦笑いを浮かびそうになるが、はやてがこちらを不思議そうな顔をして見つめていることに気づいて、抑えた。

「真夜くんなんでたぬきのぬいぐるみくれたん？プレゼントじゃな

いって言っとったし」

「そのたぬきには今のはやてのように睨み負けてな？だが、俺が部屋に置くのもどうかと思って、抱き枕代わりにどうかね？っと持ってきたわけだ」

「真夜くん、なんやその理由は……でもな、このペンダントとたぬき大事にするな～大事なプレゼントやしな
ってすっかりアリシアちゃんを除け者にしてしもうた……ごめんなアリシアちゃん」

「あはは～あたしは、傍目から見ていて十分楽しかったよ～はやちゃん気にしすぎだよ？
それよりはやちゃん～ケーキ食べよ～」

アリシアは満面の笑顔でそう言うので、なんとなく溜め息が吐きたくなったものの、我慢してケーキの箱からケーキを取り出すと、はやては、いつの間にか包丁持ってスタンバイしていた。

そのままテーブルの上に置くと、はやてがすぐに切り分けて、小皿に乗せていき、そして俺たちは合掌して、そのケーキを食べ始めた。

26話　当たって砕けて（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、　竜華零様、ＡＬＯＮＥ様、雨季様、　紅咲様、ポワソ様感想書いていただきありがとうございます……」

真「……いつも以上にひどい文章だし、時間かかりすぎ……」

元「更新が遅れた上に、こんなダラダラ展開申し訳ありません……
　最近疲れで、ＰＣの前で座ったまま寝ていたことが多かったのが更新が遅れた原因ですしね……
　私……駄目すぎる」

真「まあ作者が駄目なのは今に始まったことじゃないが……」

元「……そうですよね……うん分かっていますよ。
　さて活動報告でも書きましたが、今必死に就職できるチャンスにへばり付いて仕事していますので……私が不甲斐ないため、更新が今以上に遅れ気味になります」

真「まあ作者は、更新が遅れながらも、黒き刃～リリカルっぽいもの～を最後まで書くつもりだから、馬鹿だなこいつっと思いつつ生温い目で見てやってくれ」

元「それでは最後のご挨拶を……
　ここまでお読み頂きありがとうございます」

真「作者は、アクセス数やお気に入りが増えるたび喜んでおり、感想書かれた日にはニヤニヤしている」

元「それでは……」

真・元「「また次回会えることを楽しみにしております」」

27話　誕生日前夜　前（前書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ありません。
さて今回の回は……少しだけ長かったため、前篇後篇で分解しております。
一人でも多くの方々に楽しめることを願いつつ、本編へ移ります。

27話　誕生日前夜　前

「真夜くんおいしかったで！！」

「うんうんシン君はさすがだね～」

さすがってなんだんだよ……

ケーキを食べている最中ずっと美味しそうに食べていた二人は、食べ終わると満面の純粋な笑顔を浮かべて、そう言ってくる。

俺はその笑顔を見て、悪い気はしないものの、その純粋な笑顔で見られるのが、少しだけ後ろめたくなって思わず顔をそらしてしまい、咄嗟に自分がとった行動を思い返して、苦笑いを浮かんでしまう。

「……シン君？そういえばシン君の誕生日っていつかな～？」

「私も知りたいのや～こうやって誕生日祝ってくれたんやから、真夜くんのも祝いたいんや」

アリシアは、一瞬俺の顔を見て、寂しそうな顔をしたが、すぐに満面の笑顔で誕生日の事を聞いてきて、はやても興味津々の顔で、聞いて来たため、俺は自分の誕生日がいつだったかと思いだそうとしたものの、一向に思い出すことができない。

……まあそもそも、自分が転生する前の親の顔や家族の顔が思い出

せず、曖昧な状態なんだから誕生日だけが思い出せるわけないか

「自分の誕生日は忘れたからな～俺の誕生日なんてどうでもいいことなんだから気にするな
まあ祝いたいって言ってくれた気持ちは嬉しいけどな？」

「どうでもよくないで！。覚えてないのは残念やろうけど……思い出せたら教えてほしいのや、絶対お祝いするのやから！」

はやては、先ほどまで浮かべていた笑顔を引っ込めて、真剣な顔を浮かべてながら、俺を正面から見据えて言ってくる。

若干たぬきの首がはやての両手で絞められているのが気になるものの、俺は、あぁっと言って頷いた。

だが……思い出すことはないと思うがな……まあ俺の誕生日は知らなくても誰も損しないだろうしな

俺が頷いたことで、はやては嬉しそうな表情を浮かべたため、少しだけ罪悪感が出てくるものの、その気持ちを誤魔化すようにできるだけ笑顔で返した。

「さ～てこのまま、色々話もするのも楽しそうだけど～はやちゃんなにかトランプとかないかな？」

「トランプならあるで～」

「よしきた！なら机の上を後片付けしてトランプで遊ぼ～」

はやては、アリシアの提案に楽しそうな顔をして頷いて、二人で片づけを始めたため、俺もその片づけに加わったものの、少しだけ不安要素が頭の中を過ぎった。

……遊び関係の道具などの遊び方俺知らないんだがな……

そう、いくつかの遊びの名前がかすかに浮かぶが、遊び方が全然思い出されることがない。そもそも俺がそういうもので遊んだことがあるのかも怪しくなる状態だった。

もしかして……そういうもので一度も遊んだことないのかもな……

そして俺たち三人は、使った皿を洗ったり、机を拭いたりなどして片づけを行い、十数分後すべての片づけを終わらせた。

「さてシン君トランプやるよ～……シン君なんでそんなに難しそうな顔しているかな～？」

「真夜くんどうしたんや？トランプを見つめたまま固まって」

……トランプってこんな風なものだったのか……名前だけ、微かに覚えていたが……

片づけを終わらせた俺たちは、居間に移動して、俺とアリシアは両側のソファにそれぞれ座り、はやては、居間のある棚から小さな箱を持ってきて、そのまま俺とアリシアの丁度間くらいの所に来た。

そしてはやてが箱のふたを開けて、長方形の紙が何十にも積み重なっている紙の束を取り出して机に置いた。そう、それはたぶん初めて見たであろうトランプであり、俺はそれを見て思わず固まってしまい、アリシアやはやてが、不思議そうな顔でこちらを見ている。

「……すまない、正直に白状するとな……初めてトランプというものを見たんだ」

「え？……真夜くん本当？」

「あぁ本当だよ……だから当然遊び方なんて知らない」

「あはは、ならシン君を手とり足とり教えられる良い機会だね～」

このまま黙っていても、良くないと思い、思い切って正直な今の状態をいうと、はやては驚いた様子で俺を見つめて聞き返してきたので、苦笑いをしながら頷くと、アリシアがニヤニヤとした笑顔を浮かべながらそう言ってきた。

手をにょきにょきさせながら、言ってくるアリシアに色々と突っ込みたいところはあるものの、はやてもその様子をみて、楽しそうな笑顔を浮かべて、そうやなっと頷いているので、あえて突っ込まず、アリシアとはやてに遊び方を教わることにした。

まあ……そもそも教わらないとできないからな～

「さあシン君大富豪お「アリシアちゃんそれはまだ早いちゃうか？」あはは、初めて、はやちゃんに突っ込まれた！！」

「そこ喜ぶこと違うぞ！！大富豪は知らないが、突っ込みとは違うと思うぞ！！」

「さすがシン君キレが違う！」

いやいや嬉しそうにサムズアップしなくていいから！！……なんだろう、大富豪っていうのは分からんが、嫌な予感しかしない……

アリシアは、嬉しそうに笑いながら、サムズアップしており、はやては、たぬきを抱えつつ、大笑いしている。

俺はその様子を苦笑い気味に返しながら、とりあえずアリシアにデコピンを食らわせてると、アリシアはデコを押さえつつ、ジト目で睨んでくる。

「むぅ～シン君ひ～ど～い～」

「真夜くん女の子にデコピンは駄目だと思うで？」

「すまんすまんつい」

「ついってなにかな～？」

アリシアは言葉と裏腹に、満面の笑顔を浮かべており、はやてからは、未だにたびたび楽しそうに笑う声がもれている。

はぁ……それにしてもアリシアがいるといつも突っ込んでいる気がしてならないな……なんというか引きずられる感が漂うな……

そんなことを考えていると、いつものくせでついついぼんやりしていたらしく、気づくと、はやてとアリシアがそれぞれ片方ずつ頬をつんつん突いており、どちらとも楽しそうな笑顔を浮かべている。

「とりあえずなぜ頬を突いている……」

「え？それはもちろんなんとなくに決まっているよ！！」

「あはは、私はアリシアちゃんに誘われてや！それにしても真夜くん頬柔らかいのやな～」

はやては、確かめるようにまた頬を突いてきて、アリシアもはやての言葉にそうだね～っと頷いて、同じように突いてきて、かなり楽しそうに見える。

……もしかしてはやて、アリシアに若干影響受けてないか！？……まあいいか

楽しそうにしているため、なんとなく止める気も、起らず、されるままされることにした。

しばらくたって存分に堪能したのか、二人はホクホク顔を浮かべながら、突くのをやめて、やっと机に置いたトランプをはやてが手に取り、遊び方の説明に入った。

結局説明をされたのは、はやてとアリシアいわく、トランプを使った遊びとして簡単な部類に入るババ抜きというのを説明されて実際にやることとなったのだが……。

「シン君なかなかイケる口だね？」

「イケる口ってなんだよ……ほら早く引いて、ババをとるといいぞ？」

「アリシアちゃん、シン君……ババ抜きはそんなに笑顔でけん制し合うゲームとちゃうで？」

これが初めてだからな、一般的なババ抜きは知らないぞ？……まあ男の子だから一応負けると悔しいしな

ババ抜きを一抜けしたはやては、苦笑い気味に、俺たちの醜い争いに突っ込みを入れてきているものの、俺たちは、何回も俺とアリシアの間を行き来するババを最終的にどちらの手に残っているかという争いを本気でやっており、アリシアは笑顔を浮かべながらも目だけは真剣な目で、俺が持つ二つの手札のどちら取るか、悩んでいた。

「これだ！！」

「ま、負けた……」

「ババ抜きでそんなに盛り上がるの、アリシアちゃんと真夜くんくらいやな……」

きっとどこかにいると思うぞ？……自信はないが……

アリシアは、勝てたことにガッツポーズをして満面な笑顔を浮かべて喜んでいる。

俺は、トランプをテーブルに置き、観戦していたはやての事が気になり、そちらの方を向くと、ちょうどはやてもこちらの方をみたらしく、目が合い、お互いに苦笑いを浮かべてしまう。

「むぅ～苦笑いなんてひどいよ～」

「ひどいって言いつつ、顔が笑っているのだが？」

「そうやで？アリシアちゃん説得力ないで～？」

「あはは～だって楽しいから仕方ないよ～」

満面な笑顔を浮かべて、楽しそうに言うアリシアは、こちらまで楽しくなって、はやても、そうやなっと言ってまた笑顔を浮かべて、俺も思わず笑顔になってしまう。

はぁ……なんか俺までアリシアに影響受けている気がするんだが気のせいだろうか……うん気のせいと思っておこう

その後も、アリシアとはやてに、トランプの遊び方を教えてもらいつつ、夕方くらいまでひたすら遊んだ。

「もうすぐ暗くなってくる時間やな～残念やけどそろそろお開きやな！」

はやては、部屋にかけられた時計を眺めつつ、声を明るめに言っているものの、寂しげな笑顔を浮かべており、膝に乗せられたたぬきを、少しだけ抱きしめていた。

前来た時より寂しそうな顔をうまく隠せていなく、隠せていないことに気づいたのか、すぐに苦笑いを浮かべた。

俺は手に持っていたトランプを、机に置き、はやてを正面から見据えた。

「なぁはやて、ひとつお願いいいか？」

「真夜くんいきなりやな？でも今日は感謝しとるから……ええで」

はやては、苦笑いを浮かべながらそう答え、ただただ俺の目を見つめてきて、俺はそれをできる限りの笑顔を浮かべて見返す。

さてはやて……これを受け入れてくれるなら、今日くらいは夜も静かにはさせないぞ？

「駄目ならいいんだが、このままアリシアと一緒に泊めてくれないか？」

「え？……」

はやては、一瞬呆けた顔を浮かべてから、すぐにアリシアの方を向いた。

アリシアは、はやてが自分の方を見たことに気づくと、笑顔を浮かべて、大きくうなずいている。

それは、アリシアが泊まるという話に同意していることを示していた。

はやてはまた俺の方を向き、じーっと俺の瞳を見つめていた。

「はやて駄目か？」

「……ううん、むしろ私の方こそお願いしたかったことや！」

俺がそう聞くと、はやては苦笑いを浮かべてから、少しだけ経ったらおもむろに小さく頷いて、満面な笑顔を浮かべてそう答えた。

誕生日の前日くらいは一人で過ごさせちゃいけないと思うしな……まあ傲慢だろうし、アリシアを巻き込むんだから俺は、ひどいやつだろうな…

アリシアは、徐に、机に散らばったトランプを纏め出して、笑顔を浮かべてながら、はやての方にトランプの束を差し出すと、はやては少しだけ不思議そうに首をかしげる

「さて！泊まる事になったし～はやちゃん、七並べをもう一回しよ～」

「そうやな～また真夜くんをはめ「それはやめてくれ……」あはは、冗談やで？」

「もうなにも出すことができずに、パスし続けるのはきついぞ……」

アリシアは、満面の笑顔を浮かべてながらそう言い、はやても、アリシアがやりたかったことがわかり、笑顔で頷いたものの、七並べでほとんど出すことができず、負けてしまった俺は多少笑顔が引きずってしまう。

しかし、アリシアは、楽しそうにカードを配っているし、はやても、アリシアに負けないくらい楽しそうな笑顔を浮かべているため、嫌とも言えず、そのまま何回目になる七並べに挑むことにした。

……はぁ、俺は弱いのに……負けても楽しく思えるのはなんかな……

結局なんだかんだと言いつつも、楽しくなってくる自分がおり、心の中で苦笑いをして、配られた手札を取った。

「……なんとか勝てた」

「真夜くん……やっと一勝やな」

「シン君の意外な弱点だね～」

ここまで弱いとは……自分でびっくりだな……でもなんとか勝ててよかった……

そのまま七並べを談笑しながら数時間続けて、どっぷりと暗闇に包まれた頃にようやく俺は一勝を勝ちとることができ、アリシアとはやては苦笑い気味に笑っている。

「さて作り始めるの遅いかもやけど、晩御飯を作りは「はやて俺も手伝うぞ？」気持ちは嬉しいのやけど、今日は、私の料理御馳走したいのや」

「そうか……それじゃあ待ってるな」

「はやちゃん、期待して待ってるね～」

「もちろん美味しいの作ったるから待っててな～」

はやては、そう答えると、持っていたトランプと膝に置いていたたぬきを机に置いて、満面の笑みを浮かべながら、キッチン方へと行ってしまい、俺は、途中まであげた腰をまたソファに下ろした。

アリシアは、「残念だったね～」と言いつつ、にやにやとした笑みを浮かべながら言ってくる。

なにが残念なんだよ……確かに手持無沙汰になったが……

「残念も何も、そういわれる理由ねぇだろ？」

「ん～？だってシン君料理しているとき楽しそうにしているよ？」

「は？そうなのか？」

アリシアは、何度も頷いてから、「気づいてなかったの？」と言いつつ、楽しそうな顔を浮かべながら、首を傾げる。

ふと思い返してみると、アリシアの言葉に思い当たる節が出てきた。

……考えてみれば、フェイトが美味しそうに食べてくれるのが嬉しかったからな……いつの間にか、人が喜んで食べてくれるの嬉しくなっていたのかもな

思わず苦笑いを浮かべてしまったが、アリシアは楽しそうな笑みを浮かべていた。

「もうシン君いつお嫁さんに行っても大丈夫だね！」

「年齢的にいけないからな！、そもそも俺は男だからお嫁に行くっておかしいだろ！！」

「がんばればきっと「そこは頑張りたくないぞ！」ん～残念」

何が残念だよ……そもそもアリシアまったく残念がってないじゃないか

アリシアはニヤニヤとした笑みを浮かべながら、「似合うのに～」といいつつ、何度も頷いている。

面白がってるなこいつ？……まあ最近料理作る機会が多いからいじれても仕方ねぇか

そのままアリシアとはやての料理ができるまで、騒がしく会話をしていた。

27話　誕生日前夜　前（後書き）

戯言タイム

注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、ポワソ様感想書いていただきありがとうございます」

真「……ぼろくそに負けた……」

元「あはは、弱かったですね」

真「うるせい……遊び方知らねぇからやるだけで必死なんだよ」

元「さて今回は前篇ですが、後編はすぐ投稿されます」

真「元々、さすがに少し、くどくて長いだろうと思って分解したしな……」

元「完璧な日常編ですしね……まあ伏線はばらまいていますが」

真「……さて挨拶に移るか」

元「ここまでお読み頂きありがとうございます」

真「作者は、アクセス数やお気に入りが増えるたび喜んでおり、感想書かれると嬉しがっている」

元「それでは……」

真・元「「また次回会えることを楽しみにしています」」

２８話　誕生日前夜　後（前書き）

駄作を手に取っていただきありがとうございます。

それでは一人でも多くの方々に楽しんでいただけることを願いつつ、本編に移ります。

28話　誕生日前夜　後

「おぅ出たのか？」

「アリシアちゃん……お風呂の中でも元気やった……」

「あいつらしいというかなんというか……」

苦笑い気味に笑うと、はやても「そうやな」と言いつつ、同じように苦笑いを浮かべた。

あの後、はやての料理が出来上がると、アリシアと俺は、すぐにキッチンに向かい、料理を運ぶのを手伝ってから、三人で合掌してから談笑しながら晩飯を食べた。

はやての料理はさすがに、俺と比べ物にならないくらい美味しく、箸が進んだ。

そして食べ終わると、食器などを片付けてから、アリシアとはやては一緒に風呂に入るため、お風呂の方へ二人して向かった。

アリシアは、去り際に「覗いちゃ駄目だよ～」っという言葉を残していったため、「覗くか！」と突っ込んでしまったが。

しばらくの間ソファに座り、外を眺めていたが、後ろから物音が聞こえて、振り向くと、微かに濡れた髪を揺らしつつ、湯上りで上気した顔で、こちらの方へと車いすを進めてきていた。

俺の言葉に苦笑いを浮かべていたものの、すぐに喜びを微かに含めた頬笑みを浮かべながら、俺の横の方まで来た。

「でもな……久しぶりに一人じゃなかったんや……」

「そうか……」

「今日の誕生祝いもそうやけど、わざわざこうして居てくれてありがとな？」

「……何のことやら」

俺のあからさまな言葉に、はやてはクスクスと笑っており、俺は少しだけ恥ずかしくなり、はやてから顔をそらす。

まあ顔そらしてしまった時点で、誤魔化しても意味ないか……

「真夜くん、持ってきて来た荷物の中に、着替えやタオルとかもろもろ持ってきていた時点で誤魔化しても無駄やで？」

「それもそうか。やっぱり誕生日前って人がそばにいた方がいいからな……まあ泊まらせてくれるかわからんし、自分勝手ではた迷惑なことだともわかっていたがな？」

「……人によれば、迷惑なことやもしれんけど、私は嬉しかったんやで？……でも、ここまでしてくれるとな、余計なことも望んでしまいそうになるのや」

はやては、机に置かれたたぬきをおもむろに取ってから、窓から見える庭に顔を向けて、苦笑い気味の笑みを浮かべる。

俺も、はやての見ている庭を一緒に眺めると、微かに月光に照らされている。

「……はやてはどうしたいんだ？」

「普通そうやって聞き返さないと思うんやけどな……余計の事やで、真夜くんの迷惑って考えることより何倍も迷惑の事や」

「迷惑は気にするな……もうすでにはやてには、さんざん迷惑かけたしな？」

俺が苦笑いを浮かべてながら、はやての方を向くと、はやてはこちらを悩みに満ちた表情を浮かべてこちらを見ていた。

……本当に俺の周りにいる奴らは気にしすぎなんだよ……まあ俺の言えた義理じゃねぇか

「……私な、もう、一人は寂し過ぎるんや、誰もいない空間で夜を過ごすことが寂しいんや……

だからな……真夜くんとアリシアちゃんがこのまま家に居てくれたらいいのにな……って考えてしまうのや。今日が本当に嬉しくて楽しかったやから余計にな？」

はやては、「ごめんな」と言って、寂しげに笑いながら、膝に置いたたぬきを少しだけ抱きしめた。

あぁもう……いや考えても無駄か、俺はこういうときは考えたら考えただけどつぼに嵌りそうだしな

俺は、なるべく優しげな口調で、名前を呼ぶと、はやては不思議そうにこちらを見ている。

「……俺はいいぞ、このままいるのも悪くない……それに、はやての誕生日前だしな？なら願いをなるべく叶えるものだろ……まあアリシアの方はきい「シン君もちろんあたしはオッケ！！」タイミングいいなぉぃ」

アリシアの声で後ろを振り向くと、アリシアは、いつの間にか真後ろにおり、微かに濡れた髪を揺らしながら、あははっと笑っていた。

はやても、若干びっくりした様子だったので、はやてもアリシアが後ろから近づいていたことに気づいていなかった様子。

「まあアリシアも承諾したしな、家から荷物いくつか運ばんといけないが、これからよろしくな」

「……えぇのか？、嬉しいやけど誕生日だからって無理やり叶えようとしなくてもいいで？」

「自分の意志だから問題ないぞ？そもそもアリシアと二人暮らしだったしな、はやてとも過ごした方が賑やかそうだしな……「そうそう、シン君を弄る人が増えるのはいいことだし～」ぉぃまて、それはどういうことだ？」

アリシアは、「そのままの意味だよ～」っと言いつつ、ニヤニヤとした笑みを浮かべて、後ろから片頬を突いてきて、その瞬間、突然、「あはは」という笑い声が隣から聞こえて、そちらの方を見ると、はやては可笑しそうに笑っている。

しばらくはやての笑い声が響き、そして笑い終えると、嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「真夜くんとアリシアちゃんを見てたら、さっきまで悩んでた私が馬鹿みたいやで……真夜くん、アリシアちゃん、改めてよろしくお願いするで！」

「そう言われると何か釈然としないが……これからよろしくな」

「うん、これからもシン君共々よろしくね～」

アリシアは、満面な笑顔でそう言って、俺の横に座ってから、少しの間、俺たちは楽しげに談笑して過ごした。

しかし、途中からアリシアが少しだけ眠そうに、目を擦っていたので、そろそろ寝ようかという話になったものの、アリシアと俺の寝

る場所がないことに気づく。

「さて、どこに寝るかね……」

「ん～空いている部屋あるやけど……散らかっているやから真夜くんをかせらへんし……」

「まあ俺はここで寝るからだ「でも、それはな、気が引けるのや……」今日だけだろ？なら気にするな」

はやては「うんそうやな」と言いつつも、納得していない表情を浮かべ、どうにかならないかと頭を悩ませている様子だった。

まあ……男だから、ソファで寝るのはなんでもないんだがな……

「……はぁ、それしか方法なさそうやな……アリシアちゃ「あたしは～はやちゃんと一緒に寝ようかな～」……そうやな、それが一番やで」

「はやていいのか？、確かにアリシアをソファとか床に寝かせるわけにはいかないが、せまくなるぞ？」

「久しぶりな～誰かと一緒に寝てみたかったんや！」

「……そうか、はやてがいいなら、俺はそれで構わないがな」

はやては、嬉しそうな笑みで言いきったため、俺はそれ以上何も言えなかったものの、なにか少しだけ引っ掛かるものを感じた。

気になって、アリシアのほうを見ると、ニコニコした笑みを浮かべながら、首を少し傾げてこちらを見ている。

俺は、結局なにか釈然としないもののを感じながらも、はやてが持ってきたタオルケットを受け取り、はやてとアリシア二人が、寝室に入っていく様子を眺めていた。

二人が、寝室に入ったのを確認してから、俺は少しの間だけ、デバイスを使わない鍛錬するために、居間の大きい窓に手を伸ばそうとした瞬間、外の塀の上に、こちらをじーっと見つめている猫の姿がみえた。

その猫は、しばらく、はやての寝室の方を見つめてから、塀から飛び降りてどこかに行ってしまったが、記憶の中から該当するものがでてきた。

もしかして……リーゼ姉妹か？だが、俺が記憶している雰囲気と違う？

猫姿であり、夜でもあるため、確実なものがわからないものの、その猫の目に、監視するような冷たさも睨んでいる様子もない。そう、少しだけ見守っているようで、優しげな雰囲気な目をしているように感じられた。

俺は、もしあれがリーゼ姉妹の片割れならば、いつか話をする日が来るような気がしてならなかった。

ｓｉｄｅ　はやて

「はやちゃんごめんなさい」

「やっぱり、真夜くんに話してないんやな？」

アリシアちゃんは、寝室に入ったから、すまなさそうな顔を浮かべながら、謝ってきて、なにを謝っているのか分かっている私は、アリシアちゃんに問いかけた。

アリシアちゃんは、「うん」と小さく頷いて、少しだけ苦笑いを浮かべる。

それは、いつもニコニコと笑っているアリシアちゃんとあまりにも違っている様子だけど、ある様子を見てしまった私は、意外にも思えなかった。

私の家に来た時に、アリシアちゃんは、たまたま居眠りしていて、うわ言のように、一人こわい、誰か助けてとか呟きながら、手を彷徨わせているのを見て、思わず手を握ると安心したように眠りこんだ。

アリシアちゃんが起きた時に、それを問いかけると、アリシアちゃんは、苦笑い気味に笑いながら、寝るといつも同じような悪夢に魘されていると教えてくれた。

そして、教えてくれる条件として、真夜くんにこの状態を言わないことをアリシアちゃんはお願いしてきた。

「はやちゃん、迷惑かけちゃうけどごめんね」

「友達やからな？気にせんでええよ」

「うん、ありがとう～」

「もう遅いやろうし、早く寝るで？」

アリシアちゃんは、笑顔でうなずき、ベットの中に入ったから、私も膝に乗せていた狸のぬいぐるみを持ちながら、ベットの中に入った。

真夜くん……早めにアリシアちゃんのこの様子に気づいてな……きっとアリシアちゃん言わないと思うやから……

狸を真ん中に挟んで、アリシアちゃんと手を繋ぎながら、部屋を暗くしてから、私は目を閉じた。

すぐに、アリシアちゃんの寝息が聞こえてきて、握られた手からは温もりを感じて、なんとも言えない気分になる。

そういえば……本当に誰かと寝るのは久しぶりやな……誰かと寝るのはこんなにも安心するってことを忘れていたな……

私は、アリシアちゃんの手を握ってない手も使って、アリシアちゃんの手を両手で包み込む。

手を繋いでいるのは、アリシアちゃんのためでもあったものの、気づかないうちに私自身のためにもなっていたことに気づく。

今日は本当に……真夜くんとアリシアちゃんのおかげで幸せな一日やったな……

今年の誕生日前日を一人で過ごすと信じて疑わなかったのに、真夜くんとアリシアちゃんは、その考えを覆してくれたのが、本当に嬉しかった。

真夜くんとアリシアちゃんは……友達になった期間が短いのやけど……大事な大事な友達や……

しかし、ほんの少しだけ、アリシアちゃんと真夜くんの仲が羨ましくもあった。

本当に仲良さそうで、私もアリシアちゃんと同じくらい、真夜くんと仲好くなりたいと、今日の様子を見て、強く思えた。

すずかちゃんも含めて、四人みんな親友みたいに仲好くなれたらええな……いや、なりたいな……

そんなことを思っていると、部屋を暗くしたはずなのに、光が瞑った目に差し込んできて、だんだん意識が遠のいていくのがわかるけど、必死になって、目を開くと、本棚の中にある、一冊の方が光り輝いている。

そして、突然本から数人の男女が飛び出すように出現し、片膝をついて頭を垂れており、まさに騎士たちが王を前にしたような様子だった。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

数人の男女は、頭をあげて、私を見つめているが、私はそこで、意識が遠のくのが、耐えきれなくなって、意識がプツンと切れた。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

デバイスを使わない鍛錬が終了すると、一人お風呂に入り、出てき

た時に、寝室のドアから光が漏れだしていることに気づく。

っということは始まったか……

「ライン？一つ聞きたいんだが、あれは魔法か？」

『分かりませんが、少なくとも高出力の魔力を感じます』

「わかった…」

俺はラインに確認をとってから、急いで寝室のドアを開けると、いきなり赤髪のポニーテールの女性が剣らしきもので、斜めに斬りおとしてきて、首の横、わずか数ミリの所で寸止めされて睨んでくる。

「貴様何者だ！！」

赤髪のポニーテールの女性は、殺気を満ちた目でこちらを睨みつけてきて、今にも首の横で寸止めされている刃で切り掛かられそうだ。

……さて予想済みではあったが、どうするかね？

俺は、心の中で苦笑いを浮かべつつ、自分を睨んでいる赤髪のポニーテール……シグナムを見つめ返しながら、両手をあげて、降参のポーズをとりながら、話しかける。

「抵抗する気もありませんが、とりあえずそこで倒れている主様が起きてくれるまで待って頂けますか？
　起きるまで、私の首の横にある刃をそのままかけていてかまいませんし、もし、害があると判断したらそのままやってしまってもかまわないですから」

「色々不自然であるところが多々あるが、貴様の度胸に免じて良いだろう」

願わくば、はやくはやてが起きてくれることを願いたいところだな……

殺気は同じようにあるものの、少しは抑えてくれたシグナムさんを見つつ、そんなことを思っていた。

28話　誕生日前夜　後（後書き）

私のような実力不足満載の作者の作品を手に取っていただきありがとうございます。

今回は、主人公がシグナム姉さんに拘束されましたので、戯言タイムはお休みです。

……どうだったでしょうか？物語が少しずつ動いていきます。
原作と違う部分も多々あるため、原作と同じような関わり方をしない人もいます。
アリシアさんとすずかさんあたりが、原作とかなり異なる位置関係ですしね。

私はアクセス数やお気に入りを増えるたび嬉しくてしかたなくて、感想書かれたら本当に嬉しく思っております。

読んでいただいている読者の皆様が楽しんで頂けるものを作るように頑張ります。

それでは次回会えることを楽しみにしております。

29話　ヴォルケンリッター達（前書き）

駄作を手に取っていただきありがとうございます。

テンポが非常に悪いですが、本編に移りたいと思います。

29話　ヴォルケンリッター達

その後、俺はシグナムさんに、首に剣を当てられたまま、キッチン横のテーブルまで、闇の書から召喚された騎士達に後ろと両サイドを固められながら、連行された。

真後ろにシグナムさん、両サイドにヴィータさんと、ザフィーラさんがおり、正面にシャマルさんが座っていて、全員それぞれ度合いは違うものの、威圧感を漂わせている。

まあ当然だよな……俺は半人前だとしても、魔導師だしな……

「主が起きるまでにひとつだけ問おう……魔導師である貴様はなぜこの家にいる」

「……今の時点で私が何を申しても本当であるという証拠はありませんが、
　あえて言わせていただけるのならば私は貴方達の主様と友人ですから今この家にいます」

「……ならばそれを信じよう」

いきなり、首の横で威圧感を放っていた剣がなくなり、驚きで思わず振り返ると、真剣な顔で俺を見つめているシグナムさんがいた。

あっさり信じすぎだぞ？……はぁ、信じないと思ったんだがな

俺が戸惑い気味の目で見たのが分かったのか、シグナムさんは少しだけ自嘲気味な笑みを浮かべた。

「不思議か？まあそうだろうな、いきなり斬り掛かってきた者が自分の言葉をあっさりと信じられたら普通はそう思うか

主が起きないのだから、本当のところは分からんが、き……いや、貴様は失礼だな……

名前を知らんからお前ということにしておく、私の殺気を浴びながらも怯えた様子もなく、不審な行動したら斬ればいいっと言い放ったお前が、ここで嘘を吐くとは思えなかったからな……私個人の勘だ、勘が外れていたら私の目が悪かっただけだ

……まだ確証は得られてはいないが、主を守るための咄嗟の判断だったとしても、いきなり斬りかかったのはすまなかった」

頭を下げるシグナムさんの姿に、はやてに家族として迎えられる前でも、やはり真面目であり、不器用であることを感じることができた。

はぁ……敵意を向けられることまで予想はついたのだが、まさかこういう展開になるとはな……

「色々気になるところはあるが、まあシグナムがそういうんなら、とりあえず今のところは信じてやろうじゃないか。

まああたしとしては、個人的な恨みはねぇからな」

「私も異議はない……」

「シグナムがそう判断したなら、それを信じますよ？」

全員から威圧感がなくなり、正面のシャマルさんは、軽く微笑みながら答え、守護騎士たちは、俺の真後ろに居るシグナムさん以外は、テーブルの席についた。

はぁ……なんか俺が知っている守護騎士たちの雰囲気と少し違うな

そこからはやてが現れるまで、誰も言葉を発することがなく、その場は沈黙で包まれた。

「……夢じゃなかったんやな」

「シン君？色々と状況掴めないんだけどな～？」

何時間か経った頃に、突然、ドアが開く音が響き、寝室の方を咄嗟に向くと、丁度パジャマ姿のはやてとアリシアが寝室から出てきて居るところだった。

はやては、出てすぐに、こちらを驚いた様子で見つめながら、思わずこぼれ出したような声でそう言い、アリシアは、苦笑いを浮かべながら少し首を傾げるしぐさをして、俺に問いかけてくる。

若干アリシアが冷静なのはなんなのか、気になるところだが……これでやっと話が進む……

「主、御無事でなによりです」

ヴォルケンリッター達は、はやての姿が見えると、椅子から立ち上がってから、はやての正面まで来て、床に片膝をついて頭を垂れる。

そしてシグナムさんが、頭を垂れながら、畏まった口調で安心したように言う。

はやては、その様子を戸惑った様子で見つめるが、すぐに意を決した表情を浮かべる。

「まずは、色々と話聞かせてほしいんや……ええか？」

「主が問うものでしたら、どのようなことでもお答えします」

シグナムさんが顔をあげて、はやてを見つめ返してそう答える。

俺は、その様子を見て、アリシアの方を向き、視線を送ると、なんとなく俺が言いたいことが分かったのか、ちらっとシグナムさん達を見てから、軽く頷く。

そう、この場は、お互いに黙って、この流れを傍観して居ようという考えを、言葉なしで、通じてくれたように思えて、そのままヴォ

ルケンリッターに意識を向ける。

「……私が気を失う直前に聞こえたヴォルケンリッターと、闇の書っていうのを教えてほしいんや」

「はっ……それでは説明いたします」

シグナムさんは、はやては闇の書の主になり、魔導師になったこと、闇の書というのは、リンカーコアを蒐集して闇の書の６６６ページ全てを埋めることで主であるはやての願いを叶えることができること、ただしリンカーコアをぎりぎりまで蒐集するので蒐集された側はしばらくまともに魔法を使えなくなること、そしてヴォルケンリッターというのは、闇の書の主を守護する騎士達であり、自分の命さえ主を守るためなら犠牲にすることができることなど説明していった。

そして、話が進むごとに、どんどん悲しそうであり、辛そうな表情を浮かべていき、最終的には、すごく複雑そうな顔を浮かべた。

「ですから私たちは主の願いをかなえるためなら命を張る覚悟であり、そして闇の書のページをすべて埋めきれば……主の足をな「……誰かを巻き込んでも、治したいと思ってへん」主……」

はやては首を左右に振りながら、シグナムさんの言葉を遮って、自分の思いを言葉にして行く。

「だから蒐集しなくていいんや、なにより私が主なら、ヴォルケンリッターのみんなは家族や。
私のせいで家族を傷つけるわけにはいかへん……」

はやての言葉に、シグナムさん以外のヴォルケンリッター達も顔をあげて、一様に驚いた表情を浮かべながら、はやてを見つめている。
まあはやてらしくはあるな……俺みたいな最低な奴を気にかけるくらいのお人よしだしな……

「か……ぞく？」

「そうや……主からのお願いや、家族になってほしいんや……」

はやては、微笑みながら、ヴォルケンリッター達に向かって、手を差し伸べる。

ヴォルケンリッター達は、はやての傍まで寄り、差し出された手を重ね合わせるように全員が受け取って、少しの間はやての顔を全員が頭を下げている状態だった。

「さ、さて、かなり遅れてしもうけど、自己紹介や……私は八神はやてや、これからよろしゅうな～」

「はっ……私がシグナムで、こちらの者たちが、ヴィータ、ザフィ

ーラ、シャマルと言います」

「……よろしく頼む」

「はやて、よろしく頼むな！」

「ある……はやてちゃんよろしくお願いしますね～」

……シャマルさん……家族っていう言葉で、呼び方を変えてくれたのか……

ヴォルケンリッター達は立ち上がり、シグナムさんが代表で紹介してから、それぞれ挨拶をして行くものの、それが終わると、俺とアリシアの姿をそれぞれ、一瞥してからはやての方を向く。

「それで主、彼らは？」

「真夜くんとアリシアちゃんやな……二人とも私の友達や。今日から一緒に住むことになったやけどな？」

「結城真夜です。先ほどは色々ありましたが、水に流していただけるとうれしいです

ヴォルケンリッターのみなさん、これで私が友人であり、ここにいる理由の確証得られたでしょうか？」

俺はヴォルケンリッター達の横を通り過ぎて、アリシアの横に立ってから、ヴォルケンリッター達を正面に見据えてながら、そう聞い

た。

シグナムさんは、「あぁ」と少しだけ嬉しそうにうなずき、他のヴォルケンリッター達もシグナムさんをちらっと見てから頷いてくれた。

これでやっと……完璧に友人として認識されたな……一安心だな

「さてさて、はやちゃんから紹介受けた、シン君のかいぬ「なぜ俺がペットにされている！？」シン君突っ込み早いよ～

さて改めて、さきほどはやちゃんから紹介を受けた、はやちゃんの友人兼居候のアリシア・テスタロッサだよ～

シン君共々よろしくお願いしま～す」

アリシアのとても危ない発言に条件反射で突っ込み入れてしまうと、アリシアはニヤニヤとした笑みを浮かべてながら、文句を言い、その様子をヴォルケンリッター達は唖然とした表情で見ており、はやては若干苦笑いだった。

アリシアがニコニコとした笑みを浮かべながら、改めて挨拶すると、ヴォルケンリッター達は、アリシアの勢いに押されたように、それぞれの言い方で、よろしくと返事を返していく。

あれだ……アリシア、空気を読んだ上でボケをかましたな……

「シグナム達の服や日常品用意しないとあか「はやて……一つ忘れ

てないか？」え？なんやろ……？」

「明日いや、もう今日だが、今日ははやての誕生日だろ？ならすずかは祝ってくれるって言っていなかったのか？」

「……あ、そうや、数日前にすずかちゃんが誕生日プレゼント用意して家に来るっていっとったわ」

あぁやはりすずかも誕生日祝う気だったのか、まあ当然だよな

はやては、なんとなく俺が言いたいことが分かったのか、ヴォルケンリッター達と俺の顔を交互で見てから、悩むような表情を浮かべた。

「はやて！ど、どうしたんだよ！？。ユウキ！お前はやての友達なんだろ？どういうことか説明してくれ」

ヴィータさんは、戸惑い気味な様子で俺の肩を掴んで、揺らしながら聞いてくる。

ちらっと横を見ると、アリシアは、ニヤニヤとした笑みで、助ける様子もなく、傍観しており、思わず溜め息を吐きたくなった。

「落ち着いてください……まあただ、今日のうちに、はやてさんのもう一人の友人の方がいらっしゃるので、皆さんの事はどうやって説明しましょうかというお話です」

「そうやな……それも悩んどるけど、真夜君とアリシアちゃんが、なんで普段通りなんやと思ってな

普通はな、あんな話を傍で聞かされたり、不思議な出来事が起こったならな、普段通りで居らへんとおもうんやけど？」

「……私はユウキという少年がなぜ落ち着いているかは、なんとなく分かるが、主のためにちゃんと自分の口で語ってもらおうか？アリシア・テスタロッサも同様にな」

「あたしも、多少は信じたものの、言葉にしてくれねぇとなにかと引っ掛かるしな」

ヴォルケンリッター達とはやては、俺とアリシアを探るような目で見てきて、アリシアに意思確認のため、横に居るアリシアを見るとアリシアは、了承するように頷いてくれた。

まあ……どうせ隠すつもりもなかったしな、得にもならんし

「わ「敬語はいらん」分かった。

まあ俺ははやてと一緒の魔導師ってわけだな、ちなみにアリシアは、魔導師じゃないが関係者だ

俺の慌てなかった理由としては……魔導師であるのもあるけど、はやての友人だしな。

どんな話を聞かされたとしても、どんな立場になったとしても、

友人であるのは変わらんしな」

「あたしはシン君の言うとおり関係者ではあるけど、闇の書とか魔導師とかなにかを犠牲にすればなにかを叶えられる本とかは、どうでもいいかな～

シン君と同じで、はやちゃんが友達なのは変わらないし、なによりあたしの大事な友達が自分なりの答えだしたんだから、変わる必要ないとおもうんだけどな～？」

「真夜君、アリシアちゃん……ありがと」

「……そこまで言われたらちゃんと信じるしかなさそうだな。

裏切るんじゃねぇぞ？」

ヴィータは、少しだけ顔をそらしながら、そういうものだから、アリシアは楽しそうな笑顔を浮かべながらその様子をみていた。

他のヴォルケンリッター達は、口を閉ざしたまま、納得した表情を浮かべて、静かに頷いていた。

まあ……一応は、納得してもらえた様子だな……

「……なぁ？真夜君、アリシアちゃん……私な、すずかちゃんにヴォルケンリッター達の事や、魔導師になったことを正直に言うべきか悩んどる……どうやろか？」

「どんな反応されるかもわからないし、知らなければいいことはたくさんあるしな……

本来なら言わない方がいいとは思うが……俺は言っても大丈夫だと思うぞ？」

「知らなければよかったことはあると思うけど、逆に知っていればよかったってこともあるからね～
あたしの意見としては……自分だけ知らなかったっていう事が分かった時にすずちゃんが悲しい思いをしそうだから、そこを含めて考えてほしいな～ってね？」

はやては、しばらくの間、俺とアリシアの顔をジーッと見つめていたものの、「そうやな……」と小さく呟いて、頷いた。

「私は……正直に話しをしてみることにする……どうなるかわからへんけど、きっとすずかちゃんが受け入れてくれそうな気がするんや……自分勝手やけどね……ヴォルケンリッターのみんなええかな？」

「私は何も異議はございません」

「あたしも、はやてがそう決めたんなら、反対しねぇ」

「私も、はやてちゃんが決めたことならそれでいいと思いますよ？
なにかあればフォローすればいいだけの話ですし」

ザフィーラさんも同意するように頷き、ヴォルケンリッター全員が、はやての言葉に同意した。

……さてはて、原作とかなりずれることになるがどうなるかね……
まあ俺とアリシアがここに居る時点でかなり狂ってはいるが

それからはやてとアリシア、ヴォルケンリッターの女性達は、とりあえず、今日のところははやての寝室に入っていき、俺とザフィーラさんは、リビングのソファを使って、睡眠をとった。

「はやてちゃんたんじょ……その方々はいったい……」

「すずかちゃん待ってたで、今から説明するな？」

翌日俺たちは、すずかが来るのを全員で家の中で待っていて、すずかが来ると、はやてが玄関まで出迎えに行き、シグナムさんとヴィータさんが後を追っていった。

俺も三人の後を追うと、すずかがはやての背後にいるシグナムさんとヴィータさんを驚いた顔で見つめているところだった。

そのまま、すずかは、はやてに案内されるまま、リビングまで連れていかれて、既にソファに座っている
アリシアの横に座り、机にプレゼントとケーキらしきものを置き、俺は反対側のソファに座り、横に居るはやてを見つめた。

シグナムさんとヴィータさんは、はやての後ろに立ち、シャマルさんは俺の真後ろで立っており、ザフィーラさんは、犬の姿ではやての真横にいた。

「それじゃあな……説明するな？」

すずかが、少し動揺気味に頷くと、はやては、闇の書という物の主になって、自分が魔導師という魔法を使える者になったこと、俺たち以外の四人は、その闇の書から召喚された守護騎士であること、しかし、自分はその守護騎士達を家族として迎え入れたことを一つ一つ説明していた。

「……っというわけや。すずかちゃんなにか聞きたいことあるやろか？」

「はやてちゃん？四人って言っていたけど、もう一人何処かな？」

「そうやね、今は人の姿してへんかったな……ザフィーラ頼むで」

ザフィーラは頷くと、犬の姿から人の姿になり、その様子をすずかは驚いた様子で眺めており、何回か目を擦ってから、それが現実であると認識したらしく、小さく言い聞かせるように頷いた。

「さっき見てもらった通り、魔法って本当にあってな？私はそれの関係者になったんや
本当はな……隠しておくのが一番ええとは思うやけど、どうしてもな？私の初めての友達には知ってほしかったんや……ごめんな？もしかして嫌やったかもしれんのに……」

「……ううん、正直教えてくれて嬉しいんだよ？わたしを信じてくれるってことだから……
　魔法が本当にあったのはびっくりだけど……魔法が使えても、闇の書っていう物の主になってもはやてちゃんははやてちゃんだよ？はやてちゃんの家族さん、わたしは、はやてちゃんのお友達で月村すずかといいます。よろしくお願いします」

すずかが、そう言って、笑顔を浮かべながら、頭を下げると、ヴォルケンリッター達は、どことなく嬉しい雰囲気で一様に頭を下げていた。

……これで本当の意味で変わってしまったな……すずかが魔法の存在を知るのは１２月下旬だしな……

そんなことを考えていると、すずかがこちらの方を見つめていることに気づく。

「すずか？どうしたんだ？」

「……結城君はすでに聞かされていたんだね？」

「あぁそうだよ」

「そうなんだ……落ち着いていたから不思議に思いましてね？」

「ひとつすずかに言っておかないといけないことがあるんだ」

すずかは納得したように何度もうなずいていたが、俺の言葉に不思議そうに首を傾げて、こちらを見てくる。

アリシアも、なぜか興味津々な表情を浮かべて、俺を見つめてくる。

……アリシア、報告なんだからそんな目をして楽しみにすることじゃねぇぞ？

「俺とアリシアは……今日からはやての家に住むこ「本当ですか！？」……本当だよ、だからはやての家に来ればおまけで俺たちとも遭遇することになる」

「二人だけの生活も寂しいものだからね……それにしても、結城君とアリシアちゃんに会いやすくなるのはうれしいよ」

「はやちゃん、すずちゃんこれからもよろしくね～」

アリシアの言葉に、はやてとすずかが、嬉しそうな顔を浮かべて頷くと、アリシアは本当に嬉しそうな顔をして「ありがとう～」と言って、二人の手を掴んでぶんぶん振っていた。

その後、シャマルさんが誕生日会の開始を提案すると、俺とアリシアとすずか、そして、未だにシャマルさん以外に上手くこの時代に馴染めていないものの、ヴォルケンリッター達も参加していき、食事は、俺が音頭をとり、すずかとアリシアに料理を手伝わせて用意をしていった。

そして二回目の誕生日会は、一回目より多い人数で開始することになり、はやてはとても嬉しそうであり、楽しそうで、ヴォルケンリッター達は、戸惑いながらも祝い、アリシアとすずかも含めて盛り上がりながらはやての誕生日を全員で過ごした。

29話　ヴォルケンリッター達（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、竜華零、ポワソ様感想書いていただきありがとうございます」

真「……原作と異なるところが増えていくな……」

元「そもそも大筋が同じでも、違う点が多くありますしね……
まあキャラ達の性格が微妙に違いますけどね……」

真「シグナムさんとはどことなく合いそうだがな」

元「どうなんでしょうね～？」

真「……それじゃあ挨拶に移るか」

元「ここまでお読み頂きありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増えるたび喜んでおり、感想書かれた日には悶えています」

元「それでは……」

真・元「「次回またお会いできることを楽しみにしています」」

３０話　人として（前書き）

この駄作を手に取っていただきありがとうございます……

まず一か月も更新しないままで申し訳ありません。

不定期更新ではありますがこの後もお付き合いしていただけると嬉しいです

30話　人として

「わたしそろそろ帰りますね？」

「もう帰らへん時間やな……き「すまない……すずか少しだけ玄関先で待ってくれるか？」真夜くんどういうことや？」

誕生日会も終わり、シグナムさん達含めた守護騎士は、後片付けは自分たちがすると言って早々に片づけをはじめてしまったため、しばらくの間、はやて、俺、すずか、アリシアで雑談をしていたが、すずかは部屋に立てかけてある時計をちらっと見てから、帰り支度をして帰ろうとするが、俺はそれを引き止めるために、声をかけた。

俺の言葉に不思議そうな顔をしながらもすずかは頷き、居間を出て行った。

はやては俺の顔を何か言いたげにジーッと見つめており、アリシアは、ニコニコとした笑顔を浮かべつつ俺たちの様子を傍観している。

「魔法に関して秘密にしてもらうように頼もうと思ってな？」

「……そうやな、すずかちゃんを信じてへんみたいで心苦しいやけど……」

「心苦しいけど、念のためにしておかないといけないからな」

はやては、俺の言葉に頷いたものの、複雑そうな表情を浮かべている。

……言いふらすことを疑っているようなものだしな……はやてはやさしいな……そして俺は最低野郎だ

自分勝手にしか動けない自分に対して思わず自嘲気味の笑みが漏れてしまい、はやてに疑問げな表情を浮かべつつ、見上げられてしまった。

少しだけ居たたまれない気分になり、俺は玄関へ続く居間のドアを開けて、居間を出ると、はやても後ろからついてきてくれた。

そして玄関先に着くと、すずかが笑顔を浮かべながら待っており、俺たちが来たのに気付き、その笑顔をこちらに向けてくれる。

「待たせてすまない……さてすずかに待ってもらった理由言う前に……俺ははやてと同じ魔導師っていうものなんだということを言っておくな？」

「気にしなくてもいいのに……でもそっか、やっぱりそうなんだね？」

「気づかれていたのか……」

「ふふふ、結城君？はやてちゃんが話してた時、落ち着きすぎだからね

前もって話聞いておいた以外の理由あるのかなって思ったんだよ？」

そう言って、すずかは、してやったりと言いたげに悪戯げな笑みを浮かべて、俺を見つめてきた。

その笑みに思わず、色々と抜けていた自分の馬鹿さ加減に対して、苦笑いが浮かんでしまう。

……俺は隠し事出来ないのかね……まあそれはどうでもいいか

「さて俺が魔導師って教えた理由はな？すずかにはやてと俺が魔導師であることを秘密にしてもらえるようにお願いしたいからなんだよ俺もすずかとは友人だから、こういうこと秘密にしたくないのもあるけどな」

「私からも、お願いしたいんや。すごく自分勝手やなのは分かっているんやけどな？」

「結城君？はやてちゃん？、大丈夫ですよ……わたしを信じて、教えてくれたことは分かっていますし、そのお願いも、きっと念のためなんでしょうね……はやてちゃん今辛そうな顔をしてることで分かるからね？」

はやては、すずかに言われるまで自分が無意識に辛そうな表情を浮かべていたことに気づいていなかったのか、耳を赤く染めて、誤魔化そうと空笑い気味に笑っている。

さて……ここからが本題だな……はやて、すずかすまない

「……すずか、俺たちのことを学校の友人たちに話したことあるか？」

「まだなのはちゃん達に言ってないけど、どうしてですか？」

「かなり自分勝手なんだが、そのまま話さないでおいてくれるか？」

「真夜くん……なんでや？」

すずかは、ジーッと俺の顔を見つめてきて、俺の表情からなにかを読み取ろうとしているのか、真剣そのものであり、それは途中でそらすことも許さないくらいの力を感じるものだった。

そのため、はやてが、狼狽し、戸惑いに満ちた声音で問いかけてくる言葉に答えることができず、しばらくの間お互いの目を見つめ合っていると、すずかは満足したのか、俺の瞳を見つめるのをやめて、微笑を浮かべて、俺の横に居るはやてに視線を移した。

「結城君わかったよ。出来る限り秘密にしておきますね？
はやてちゃん？わたしより結城君のこと分かると思うから聞きますけど……結城君って人の事を考えない人かな？」

「……私も、友達になったのは短いやけど、真夜くんは、人の事を考えないってことだけはあらへん……
すずかちゃんごめんな？」

はやての謝罪に、すずかは、首を横に振ってから、笑顔を浮かべて、はやてと俺を交互に見る。

「ふふふ、はやてちゃん気にしちゃダメですよ？
結城君？なぜ学校のお友達に隠さないといけないのは、いつかちゃんと説明してくれますよね？」

「……言える状況になったら必ず説明する」

すずかは、俺の言葉に満足したのか、ニコっと笑ってから小さく手を振りながら「それではまたね」っと言って玄関のドアを開けて帰って行った。

すずかが居なくなり、用事もなくなったため、居間に戻ろうとしたら、「私にもいつか説明してな」という声が後ろから聞こえて、俺はその声の主であるはやての方を振り返らず、「あぁもちろんだ」と立ち止まって返事してから、居間に入った。

「シグナムさん？ザフィーラさん少しよろしいですか？」

「ん？結城か、さっきはすまなかったな……さて私達に何の用だ？」

あの後、すずかを見送って、居間に入ると片づけが終わったのかシグナムさん達がソファに座っており、ザフィーラさんも人の姿でソ

ファに座っている。

守護騎士達は俺たちが居間に入ったことに気づくと、一気にこっちを向いて、はやての姿を確認したのか、シグナムさん達は安堵の表情を浮かべた。

一気に見られたため、こちらも驚き、場に沈黙が流れたものの、すぐにアリシアが「はやちゃん！お風呂入ろ～」と、沈黙を断ち切るようにはやてを誘い、はやても、嬉しそうな笑みを浮かべて頷き、ヴィータさんも誘って、お風呂に入って行った。

はやてたちがお風呂に行ったことを見送ってから、シグナムさんとザフィーラさんに声をかけると、シグナムさんは一瞬苦笑いを軽く浮かべてから、すぐに顔を引きしめてこちらを向いた。

シャマルさんは、その様子を見て、俺の方に軽く一礼してからその場を去り、はやての部屋に入って行ったので、俺はシグナムさんの正面に座って、向かい合う。

「かなり自分勝手なお願いですが、鍛錬としての模擬戦に、毎日付き合っていただきたいんです……」

「それは、捉え方によれば指導してもらいたいともとれるが……そう捉えてもよいのか？」

「そう捉えていただいても間違いはないです。
自分勝手なお願いですが、受けていただけないでしょうか？」

シグナムさんは、渋めな顔をして、俺を突き刺さるほどの視線で見つめながら、考え込んでいる様子で、ザフィーラさんは、話の行方をただただ黙って見守っているようで、話に反応する様子がなく、シグナムさんの隣で腕を組みながら目を瞑っている。

「……私は、お前の事を信用したが、お前自身の事はまだよくわからんから、判断する材料が少ない。
だから一つだけ聞かせてくれないか？なぜ力をつけたい？」

そう問われて、俺は一旦深呼吸を行い、自分は今までの胸にあった想いを自分なりの言葉にして行くため、目を瞑り、少しの間黙考する。

……自分には力がない。経験も足りない……今の状態じゃ何一つできずに手から色々なものがすり抜ける……ただ守りたいと自分勝手に決めた人達くらい足掻いて少しでも守れる力を得たい

俺は自分なりの答えの形を見つけて、ゆっくりと目を開けると、俺はもう一度深呼吸をしてから、シグナムさんが出した問いを答えていくため、一つ一つ自分の言葉噛みしめながら答えていった。

「……私は、少し前に、結局自分の手では何も守ることができず、人任せにしてどうにか私を信じてくれた人を、ギリギリのところで守れました。守れたとも言えないかもしれないですが……
今度は自分の手で少しは守れる力が欲しいんです。
自分ひとりでなんでも守りたいという自分よがりで思いやがりは抱

かないですが……それでも必要な時に想いを貫けて、守りたいと思う人を守る力が欲しいんです」

「ふぅ……色々と気になるところはあるものの、いいだろう、主を守護する騎士であるため、それが優先になり、毎日は無理かもしれんが時間があれば模擬戦に付き合う。
さてザフィーラはどうする？」

「私はかまわない……」

シグナムさんの言葉にザフィーラさんは、腕を組むのをやめて、目を開けて、こちらを見据えながらそう答えてくれて、シグナムさんもその言葉を聞いて、真面目な顔を浮かべながら「だそうだ」と俺を見つめて言ってくる。

……本当は迷惑なんだろうな……はぁ自分勝手に巻き込んで申し訳ないな……でも

「シグナムさん、ザフィーラさん、未熟者ですがよろしくお願いします！」

「あぁ言ったことは反故にはしない。出来る限りは付き合おう。
……絶対今語った想いを見失わずにいるんだ……これは忠告から覚えておくといい」

「先ほど語った想いを抱き続けている限りは……模擬戦に付き合う……」

俺は、感謝の意を込めて、座った状態で深く頭を下げると、シグナムさんは多少苦笑いを浮かべている。

……でも矛盾してるよな……だってきっとその得るであろう力の刃の先にはこんな俺を信じてくれた子にも向けられるんだから

そんな考えが過ぎり、思わず苦笑いをしてしまうと、シグナムさんは疑問気な目をしてこちらを見つめてから、ソファから立ち上がり、

ｓｉｄｅ　アリシア

「自分ひとりでなんでも守りたいという自分よがりで思いやがりは抱かないですが……それでも必要な時に想いを貫けて、守りたいと思う人を守る力が欲しいんです」

はやちゃんをお風呂に誘ったのに、誘った本人が着替えやタオルをはやちゃんの部屋の中に忘れるという失態を犯してしまい、取りに行く途中に、ふとシン君の声が居間から聞こえてきた。

真剣であり、決意が滲み出ている声音に、あたしは、悪いと思いながらも、思わず少しだけ居間のドアを開けてみるとシン君の言葉が耳の中に入ってきた。

シン君……やっぱり前に進み続けるんだね……そしてあたしは……なにができるんだろう

それでもこれ以上聞くのはさすがにいけないと思い、気づかれないように静かにドアを閉めて、はやちゃんの部屋に置いてあるかばんの中からタオル等を取り出したものの、先ほどの事が気になり、頭の中を離れず、タオルやパジャマを握りしめたまま、そこから動けない。

結局デバイスもない、あったとしてもお母さんから魔導師としての才能を継がなかったあたしに、なにができるんだろう……はやちゃんが羨ま……ううんそんなこと思っちゃいけないよね

シン君から多くの大切なものを貰い、多くの恩を受けながらも、あたし自身はどうすればそれを返すことになるのか分からずにいる。

ふと、かばんの中に入っている細い箱状の物が目に止まり、なるべく慎重に取り出した。

そう、シン君が、はやちゃんの家に行く前夜に渡してくれた大切な大切なペンダントが仕舞われている箱。

「……シン君？あたしがなにをすればシン君喜んでくれるのかな？シン君に貰ったたくさんの恩返せるのかな？」

ペンダントの入った箱に、問いかけてみるものの、返事をしてくれるわけもなく、あたしは、それをただただ優しく握りしめるだけ。

……あたしなにしてるんだろう……はやちゃんやヴィータちゃんが待っているのに……そもそもシン君はきっとこの想い自体気にしな

くていいのにと苦笑いを浮かべるんだろうから喜んでくれるわけではないか……

そう思っていても、心はさきほどのシン君の言葉に囚われたままで体は動いてくれず、あたしは何気なしに顔をあげると、はやちゃんの部屋に置かれた本棚に目が留まった。

……今のあたしでもできること……本を読んで知識をつけること？ううん今できるけどそれだけじゃまだ足りない……もっともっと……ぁ……これかな？

そしてあたしは、本棚の中に、ノートらしきものを発見して、漠然とだけどやれそうな事を思いつく。

それは最善かもわからないものの、それでもできることが数少ない自分にとってはその思いつきに実行しようと決意を固める。

なら本も色々と読まないと……きっとシン君喜ばないだろうな……それでも恩を返したい……

あたしは、ペンダントが入った箱をかばんの中に仕舞いこみ、タオル等を持って、お風呂へ向かうために、部屋を出た。

はやちゃんとヴィータちゃんでお風呂を入るためであり、そしてはやちゃんにあるお願いをするために……。

side　ont

30話　人として（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「けーくん様、竜華零、ポワソ様感想書いていただきありがとうございます」

真「さて……俺も人の事は言えないが、ここまで遅れたことに対しての申し開きはあるか？」

元「それに対しては、ただただ土下座をするしかないですね……」

真「……その話をここまでにしておこう……それにしても俺、人に頼りっぱなしだな」

元「まあ、真夜は弱いですからね……」

真「そうだな……俺は弱いし、最低な馬鹿だしな」

元「そこまで言っていないですよ……頑張れとしか言いようがないですね」

真「必死に頑張るさ……さて締めの時間だ」

元「ここまでお読みいただきありがとうございます」

真「作者はアクセス数やお気に入りが増えるたび、悶えるように喜

んでいます」

元「それでは……」

真・元「「次回またお会いできることを楽しみにしております」」

31話　人の心（前書き）

はい久しぶりです。
約四カ月ばかり更新せず、申し訳ありませんでした……。
感想を書いていただいた方や、楽しみに待ってくださった人には本当に申し訳なく思っております。

31話　人の心

あれからシグナムさん達とは、会話をせず、沈黙が包まれた状況で、はやてたちがお風呂から出てくるのを待っていると、居間のドアが開き、最初に満面の笑みを浮かべているアリシアとはやてが横並びになりながら入ってくると、そのすぐ後になにやらどっと疲れた表情を浮かべているヴィータさんが居間に入ってきた。

「アリシアが元気過ぎて……本当疲れた……」

「あはは……やっぱりアリシアちゃんにはかなわへん。でもな、アリシアちゃんと入るのは楽しいんやけどな……ヴィータとも一緒やったしな？」

「やっぱり人と一緒に入るお風呂は格別だね～うんうん」

「……とりあえずヴィータさんお疲れ様です」

ヴィータさんは、「ユウキありがとな」と溜め息混じりで返事を返してから、疲れを癒すようにソファへ、深く座り込んだので、その疲れ切った様子に思わず苦笑いしてしまう。

シグナムさんも、その様子を見て苦笑いしたが、すぐにはやての楽しそうな笑顔を浮かべているのに気づくと、まるで幸せを噛みしめているように、少しだけ嬉しそうな笑みを浮かべている。

きっとシグナムさんにとっては喜ばしくあり、貴重な光景なんだろ

う。

「そういえば、はやちゃん！昨日持ってきたお泊りセットだけじゃ着替えとかもろもろ足りないと思うんだ～だからね、はやちゃんのお家に、色々荷物運んできてもいいかな？シン君もどうかな？」

アリシアは、はやての肩をぽんぽんと叩いてから、はやての正面に来ると、屈託ない笑みを浮かべてそう提案してきた。

……確かに、最初は泊るだけのつもりで来たしな……

「ふむ……はやてが良いと言えば、持ってくるべきだな」

「そうやな、一緒に住むんやから、そうしたほうがええな……でもな？真夜君とアリシアちゃんには明日買い物に付き合ってもらいたいんやから、覚えておいてな？」

はやては、俺の傍まで寄ると、少しだけ悪戯げな笑みを浮かべて、楽しげ雰囲気でそう言ってきて、アリシアは、すぐに明るい声で「は～い」と返事をしたので、俺も釣られるように、「あぁ」っと頷くと、はやては、「よろしくな？」っと屈託ない笑顔を浮かべた。

「さて……明日の事は置いといてな！決めなあかんことがあるんや」

「はやてちゃん。それはなんですか～？」

はやてがそう言ったときに、ちょうどシャマルさんが部屋に入ってきたらしく、ドアの開く音がしてすぐに、はやてに不思議そうに聞く、シャマルさんの声が聞こえてきた。

シャマルさんに聞かれたはやては、シャマルさんの方を振り向き、困ったように少しだけ苦笑いを浮かべている。

俺にはその困っている原因が分かるため、少し申し訳なさを感じるが、それよりきっと今から俺が提案しようとすることのほうがはやてにとっては嫌なんだろうなっと思い、軽く深呼吸してから話を区切るように切り出す。

「みんなの寝場所やな……さすがにし「はやて、俺はこのまま居間のソファでいいぞ？」……それは駄目やろ」

はやては、俺の傍まで寄ってきて、ジトとした目で睨んでくるものの、怖さがなく、少し微笑ましい気分になってくる。

「……真夜君、笑うなんてひどいやと思うで？……さすがにな、真夜君だけソファに寝かせるわけにはいかへん」

「はやちゃんの言うとおり、シン君、ちゃんとしたところで寝ないと駄目なんだよ？」

「だが、部屋の数は全員に用意できるほどは、ないんじゃないか？」

はやては俺の言葉に、「あ……悔しいのやけどその通りやな」とため息交じりの声で呟き、苦笑いを浮かべる。

はやての言葉を聞き、アリシアは何か言いたげな表情を浮かべて、こちらを見つめ、守護騎士達は、話の行く末を傍観するつもりか、何も言わずに、俺たちの様子を眺めている。

「はぁ……そういうのは女性優先だろ？俺はどこでも寝られるから気にしなくても大丈夫だぞ」

「でもな……や「はやて……頼む。俺の我儘聞いてくれ」……頭まで下げられたら、もう……ごめんな、真夜くん」

下げた頭をあげると、はやては、少しだけ申し訳そうな顔を浮かべながら俺を見つめており、その後ろで、アリシアが、溜め息をついて、仕方ないなっと言いたげに、苦笑いを浮かべている。

……そんなに気にしなくてもいいとは思うんだがな……

結局はやてのこの言葉により、俺はこれから先、夜は居間のソファで寝ることが決まり、次に守護騎士達の寝室の部屋割と、移って行った。

守護騎士達の希望により、護衛としてヴィータさんがはやてと一緒に寝ることになったのはいいとして、妙なことにアリシアもはやての部屋で一緒に寝ることに決まったのが、どことなく引っ掛かりを

覚えたが。

翌日、朝早くはやての家に住む上で、必要な荷物を持ち出すために、アリシアと共にマンションへ向かった。

持ち出すと言っても、身の回りの最低限必要なものと、着替えを追加で持って帰るだけで、買い足さなくてはいけないものも数多いが、それでもその荷物を持ち、はやての家に戻ることにしたが。

「シン君遅いよ～」

「こけても知らんぞ？」

なぜかアリシアは、さっきから纏めた荷物が入っている鞄を両手で持ちながら、鼻歌交じりに少し先を歩いており、時折、ステップを踏むように回ったりしていて、無駄に楽しそうにしている。

俺の言葉にも、はーいとか返事しているものの、本当に分かっているのか定かではない。

……こうしてはしゃぐ姿を見る限りは、本当に普通の女の子だな

しかし、アリシアを普通の女の子とするには、あまりにも所々大人びている点があるため、そう評価することはできない。

まあ、そもそも普通の女の子が俺の出会った子の中にいるかは不明だが……

フェイトしかり。なのはしかり。皆が皆、普通の女の子とするにはおかしいように思えてならなく、その事実に呆れて、思わず苦笑いが漏れてくる。

「シン君？どうしたの～？」

俺が、なにも反応を返さないことに疑問を感じたのか、アリシアは、いつの間にか俺のすぐ傍まで来て、笑顔浮かべているものの、どことなく不安げな様子で横合いから俺の顔色を窺っているようだった。

「すまないな。少し考え事していた……」

「そっか～それならよかったよ！」

アリシアは安心したらしく、安堵の声を漏らしてから、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべたが、どうやらさっきの事が気になるのか、先ほどのように前を歩くことをせず、そのまま横に並んで歩いており、時折俺の顔を探るように見つめていた。

俺は、心配させてしまった罰かなと思い、そんな様子をあえて気づいていないふりをしながら、はやての家までの帰路を歩き続けた。

途中ＡＴＭに立ち寄り、入っているお金をいくらか下ろしていった

ことに対して、アリシアは、苦笑いを浮かべるばかりだった。
はやての家の前まで来ると、ドアの前になぜかザフィーラさん以外の全員がおり、はやては何かをまっているようにチョロチョロと。俺たちに気づくと、はやては車いすを進めて、俺たちの傍まで近づいてきた。

「おかえりな！。早速で悪いんやけど荷物を家の中に置いて貰ったら行きたいんやけどいいやろか？」

「それはいいんだが……シグナムさん達が着ている服いいのか？」

「シグナム達は家族やからな？それにな、こうして使った方が喜んでくれる気がするんや」

はやては、そう言って少しだけ寂しげな頬笑みを浮かべてから、空を見上げる。

もう一度シグナムさん達に視線を向けると、やはりいつもの守護騎士としての戦闘服ではなく、一般的な日常服を着ており、ヴィータさんは、はやての服のサイズで間に合うものの、ほかの二人は、はやてが持っているはずがない大人用サイズであった。用意する時間もなかったはずのため、ある一つの要因を除いて用意できるはずがなかった。そう、はやての両親の服を出してくる以外ありえなかった。

きっとそれは……はやてなりの意思の表れなんだろうな

そんなことを考えていると、いきなり横合いから腕を掴まれたため、内心掴んだ相手の心当たりがあったものの、確認する意味合いも込めて掴まれた腕の側を見ると、アリシアがこちらを何時ものような屈託な笑みを浮かべながら見つめている。

口に言うのもなんだが面倒くさくなり、目でなんだという思いを訴えるように見つめると、アリシアは、それに気付き、荷物置きに行こう！ともうこれでもかというほど元気いっぱいの様子で答えてきたので、これ以上なにかを言うのが憚られて、俺は小さく頷いた。

そして俺たちは、まだ空を眺めているはやてに声をかけてから横を通り過ぎ、シグナムさん達に挨拶して荷物を家の中に置きに行った。

荷物を玄関先に置いてから、外に出ると、もう気がすんだのか空を見上げるのをやめたはやてが出迎えてくれた。

「ねぇねぇはやちゃんそういえばどこに行くの？」

どこに行くか聞いていなかったことを思い出し、それを聞こうと口を開こうとしたものの、俺が質問するより先に横に居たアリシアが、小首をかしげながら楽しげな様子で疑問を口にした。

聞かれたことで、はやては、口角をあげて、いかにもその質問を待っていましたと言いたげに得意げな顔を浮かべた。

「……デパートや！」

片手の親指を立てて、テンション高い様子で言うはやてに対して、聞いた側のアリシアもそのノリに乗っかって、おぉとかオーバーリアクション気味に合いの手を入れている。

俺個人の意見として、溜めたに関わらず、回答としてそれほど驚くことでもなく、予想の範疇内ではあったので、残念としか言いようがないが。

あの後テンション高めの二人は、すぐに二人並んでデパートへの道を歩き始めたため、シグナムさん達と少し苦笑い気味に顔を見合わせてからはやてたちの後を追った。

ちなみに一人だけいないザフィーラさんはどうやら自分から留守番申し出たらしく、そのまま家に残っていた。

歩いている最中何度かはやてに何を買いに行くんだ？と聞いたものの、後のお楽しみやと言って、悪戯をしているようなかなり楽しそうに笑うだけで結局質問に答えることはなかった。

そして全員ひと固まりでしばらく移動した後、目的の大型スーパーに着くと、なぜか衣服が並んでいる階に直行したことで、はやてがここに来た目的が把握をすることができた。

「ほら、シン君シン君、これなんてかわいいと思わない！」

すぐにある店の奥に入って行ったはやてたちの事を追おうとしたものの、アリシアに突如横合いから腕を引っ張られてしまう。

一旦諦めて、引っ張ったであろうアリシアを見ようとしたが、アリシアは、俺の真正面に来て、子どもサイズのシンプルな青のワンピースを自分の体に押し当てながら、今にも飛び跳ねそうなくらいな様子で俺に聞いてきた。俺はどう答えていいのか悩み、一瞬言葉に詰まる。

どうせどれ着ても似合うだからセンスない俺に聞いても意味ないだろ……

「……俺に聞くな」

「ちぇ、シン君いけず～」

ため息交じりで、顔をそらしながら答えると、アリシアは頬を軽く膨らませて不満満載な目で見つめてくる。しばらく俺をジト目で見ていたものの、仕方ないなっと言いたげに口元を緩ませて、苦笑い気味に微笑む。

「すまんな……」

「ううん～シン君らしいしいいよ～」

アリシアが浮かべる微笑みで、少しだけ逃げた自分が、なんだか情けなくなり謝ると、楽しそうな笑顔を浮かべながら許してくれる。

「さて！はやちゃんの所いこ～？」

ワンピースを元の場所に戻したアリシアは、俺の手を取り、小首を傾げて楽しげに聞いてくるため、俺も、出来るだけ笑みで頷く。

そして俺たちは揃って店の奥に進むと、シグナムさんが、丁度試着コーナーのカーテンを開き、試着した服を戸惑いながらもはやてに見せているところだった。

シグナムさんは、かなり戸惑った様子で、はやての視線を受けており、ヴィータさんやシャマルさんは助ける気ないのか、シグナムさんの顔を赤くして慌てている姿をはやての後ろから楽しそうな笑みを浮かべながら、面白がっている様子だった。

「ぉ真夜君～これシグナムに似合っとると思わへんか？」

「あ、主！？」

シグナムさんが身に纏っている服は、シンプルな赤いワンピースではあるものの、服合わせるように髪を下ろした姿と合わさって、思わず一瞬ドキッとしてしまいそうになる。

……やはり美人ではあるよな。まあそれは他の人にも言えるが

はやての質問に答えないまま、近くに立っているシャマルさん達の方に視線を送ると、それに気付いたのか、シャマルさんは不思議そうに頬笑みをたたえながら小首を傾げ、ヴィータさんは、なんだよっと言いたげに訝しげの様子でこちらを睨んできた。

「それで真夜君どうなんや？」

はやての声に気づき、はやてに視線を戻すと、先ほどの質問に答えないことで若干拗ねたらしく、心なしか俺を見るが冷たく感じられた。

その様子に思わず苦笑いを浮かべてしまうと、どうなんやといいたげの目で見つめてくる。

「あぁすまない。そうだな……シグナムさんとてもお似合いだと思いますよ？」

「うんうん、シグナムさん本当綺麗だよね～」

俺達の答えに気を良くしたのか、はやては嬉しそうにそうやろそうやろと頻りに頷いて若干得意げな様子で自分のことのように喜んでいる。

はぁ……なに自分のことのように喜んでい……いや家族だからか

思わず苦笑いを漏らしてしまいそうになる自分をはやてに見られて、気にされることが嫌で、いつの間にかはやての後ろに立っているシグナムさんへ視線を向ける。

視線を向けたことで、恥ずかしげに耳を真っ赤にしながらも心なしか困ったような表情を浮かべて、俺の横あたりに視線を向けていることに気づく。

それが気になり、視線を向けられているほうを見ると、眩しそうであり、そして羨ましそうな表情を浮かべて、シグナムさんを見つめるアリシアの姿があった。

俺達二人の視線に気づくと、アリシアは、「あはは……」と気恥ずかしそうに苦し紛れの笑い顔をしながら頬をかき、まるでいけないものを見られてしまったような様子だった。

まあアリシアも女の子だしな、こういうのに憧れたりするのは当然か……なら叶えてやらんとな

俺は視線をはやてに戻して、おもむろに一歩二歩とはやてに歩み寄り、ズボンのポケットから二つ折りされた封筒を取り出し、はやてにそれを差し出すと、はやては戸惑い気味なものの、それを受け取ってくれた。

はやては、受け取った封筒を戸惑いが残っているものの、興味げにしばらく見ていたが、見ていても仕方ないと判断したのか、顔をあげて、俺の顔を疑問げな様子で小首をかしげて見つめてくる。

「真夜君……いったいこの封筒はなんや？」

「まあとりあえず話は中身を見てからな」

はやては、俺が質問に答えなかったことに若干不満げな表情を浮かべているものの、俺の言葉に促されるように、封筒から中身を取り出して、中に入っていたものがなんであるか分かった瞬間、目を見張るが、すぐに困惑と疑問に満ちた表情を浮かべ、訴えかけるような目で俺を見つめてくる。

「これはどういうことや？」

「見ての通りだぞ……まあはやての聞きたいことは違うだろうけどな」

俺が半笑い気味でそう答えたものの、はやては俺の様子を気にすることなく、お札を握りしめたまま、大きく頷いて、どういうことなのかと目で問いかけてくる。

ふむ……やはり戸惑いのほうが上回っているか～さすがに多かったかな？いやそんなことはないはずだ

そう、はやてに渡した封筒の中身は、それなりの額といえるのお金であった。

「……俺とアリシアは、はやてのお家に住まわせてもらうだけだからな。なら数カ月分の食費は最低限払わんと駄目だろ……

それに、アリシアも女の子だしな、なら新しい服を用意する分のお金もはやてに渡して置きたくてな。

きっとアリシアは受け取らないだろうからな」

「そんなのいらへんし……それに服なら真夜君も一緒やと思うで？」

「渡されたらいくらなんでも受け取るよ～……でもはやてちゃんと同じで新しい服を買うならシン君も一緒だよ？」

そう言ってアリシアは、二歩、三歩、前に進み、俺の横からはやての真横に移動してからこちらのほうを振り向くと、俺を少しだけ悲しげな笑みを浮かべながら、それでもどうにかならないかと目で訴えかけてくる。はやても嫌そうな表情を浮かべながら、口では出さないものの、絶対に嫌だといいたげだった。

はぁ～大人しく受け取ってくれる俺的にうれしいんだが……まあはやての性格上それは無理か

この状況に思わず、頭が？きたくなるものの、自分としても受け取ってくれないと色々困るために、押し切るつもりで口を開いた。

「俺とアリシアは、はやてのお家に友人として転がりこんでいるしな。少なくとも最低限食費を入れるのは当然だろ？。

それにそのお金、アリシアの母親にもらったんだが……元々アリシ

ア個人が好きに使っていいお金のはずだからな、俺自身のために食費以外で使っちゃ駄目だろ」

「気にせんで「はやては、家族四人増えてお金もいっぱい使うんだしな。素直にな？」でもな……食費はええとしてもな、服はべ「それじゃあ、俺は邪魔になるだろうから行くからな！」え、真夜君！」

はやての性格上、これ以上は平行線になると思い、強引に話を終わらせてから、俺ははやての呼びとめる声も無視して、店の出口へ駆け足で向かった

ｓｉｄｅ　シグナム

「あ、もう真夜くん強引やな……私としてはそんなに気にせんでもええと思うんやけどな」

「あはは……本当そうだよね……」

主達二人は、ユウキが走り去っていた方向を呆れた様子で眺めており、シャマルたちも唖然とした様子だが、私自身としては、ただただユウキが去っていた方向を見ながら、色々な思いが渦巻いてしまう。

……ふむ、やはりユウキという男は分からん

私は、ユウキという男が内に秘めている思いを少しだけ聞いた今で

も、心根が捉えきれずにいる。

主と同じような年齢であり、見た目も年相応にかかわらず、年相応の考え方や心をしていないという相反する姿がどういうにも傍目でも歪のように見えても正しいように思えるそんな考えが浮かんで、正直内心でも戸惑いにも近い思いを抱えていた。

「でもよ、はやてあいつに受け取ったそれどうするんだ？」

「どないしよ……でも、それよりも真夜君をあのままにするんのもあかんしな……追いか、いやそれやとシグナム達を……」

主はヴィータの質問に、自分でもどうしたいのかはっきりと決めることができないのか、俯き、独り言のようにぶつぶつと呟きながら思い悩んでいる。

私自身もこういうときはどうすればよいのか、思いつくほど器用ではないため、自身の未熟さを恥じながら口を閉じて、状況が好転することを願っていることしかできなかった。

「はやてちゃん……私たちのことを気にせず、ユウキくんっていう男の子を追ってもいいのよ？」

「うんうんそうだよ！シン君押しに弱いし、気になることとかあるんなら追いかけて聞くのが一番だよ～？」

シャマルが主の様子に見るに見かねてか、主に優しげな雰囲気で提案し、テスタロッサという少女もそれに便乗するかのように明るい口調で、シャマルの提案に同意している。

二人の言葉に主は、悩ましげに小さく唸っており、どうも踏ん切りがつかない様子だった。

「はやて、あたし達のことは大丈夫だって！な？シグナム」

ヴィータは主の前に立ち、主の背中を押そうと必死な様子で手振り身振りしながら言葉を紡いでいき、私にも同意を求めてきた。

……私も、ヴィータのように、シャマルのようにありたいものだが、所詮私には無理な話か、しかし今はそんなこと関係ない

主は私の顔を見上げ、静かに私の言葉を待つように見つめている。

その目は、迷いで揺れているものの、私の目をしっかりと見つめていた。

「……主、私たちのことはお気になさらずとも問題ないですよ？。私は何分主がなにについて悩んでいるか察しられるほど器用ではないですが、少なくとも主は家族っと言ってくださったんですからその家族を信用してくださらないでしょうか？」

「……そうやな、シグナムの言うとおりや、私は当たり前のことを忘れとった……家族やのに気に過ぎて信用してへんみたいにしてた

な……ごめんな？」

主は私の言葉で、なにか自分の中で答えを決めたのか謝りながらもどことなくうれしさが感じ取れるような雰囲気で、はにかんだような笑顔を浮かべていた。

主の役に立てたことを認識できて、胸の中がうれしさでいっぱいになるものの、それでも謝られるのは気が引けて主に悪いところないと否定したものの、「それでもな？」っと言って聞かない主。

「なぁアリシアちゃんも一緒に行かへんか？」

「あはは、あたしははやちゃんの代わりにここにいるよ～。あたしがいるよりはやちゃんだけのほうがきっとシン君話しやすいと思うしね！」

主は、結局私の主張を聞き入れることなく、テスタロッサに視線を移すと、横から見てもよくわかるほどの機嫌よさそうな満面の笑みを浮かべて、テスタロッサを誘うものの、テスタロッサはそれを意外にも断り、私は表情には出さなかったのだが、内心少しだけ驚いてしまったため、テスタロッサに思わず視線を向けてしまう。

どうやら主も意外にも思ったのか、一瞬だけ驚いた表情を浮かべたがすぐにそれは苦笑いに変わる。

テスタロッサははにかんだ笑みは浮かべているものの、どことなく寂しさがにじみ出ている笑みだった。

「そんなことはあらへんと思うんやけど……でもな、行かないって言う人を誘ってもあかんしな、私だけで行くな？……あ……シャマルここにきてすぐに買ったん渡してほしいんやけどええやろか？」

「え、あ、はやてちゃん……これですか？」

そういえばあれは……なんだろう……

シャマルは、私が主から渡された服を試着する前には持っていなかった袋を、小首を傾げながら渡すと、主は満足げな笑みでうんうんと頷きながら、大事そうな様子で受け取り、胸に抱きかかえた。

大事そうに受け取る主の姿に、その中身について疑問が浮かび、主に視線を戻すと、主は私の視線に気づいたのか、こちらに視線を向けて小首をかしげて、不思議そうな様子だった。

「主それはいったい？」

「ん～？あぁ～そういえばシグナムが着替えている最中に買った物やから知らんかったんやな……
でもまあ後で教えたるから今は秘密でいいやろか？」

そういって、主は右手の人差し指を唇につけながら、まるでなにやら悪戯をしかけたような楽しそうな笑みを浮かべてられて、私はその様子を見て、その疑問を再度聞き返すのは野暮に思え、その疑問を自分の内の中に仕舞うことして、小さく頷くと、主は満足げな笑

みを浮かべた。

「そんじゃ改めて……みんな行ってくるな！」

「うん、はやちゃん！シン君のことお願いね！」

「アリシアちゃんまかせといて～」

主は、テスタロッサの言葉に満面な笑顔を向けながら答えると、私たちにも小さく手を振りながら、「いってくるな～」っと再度言っていただけて、ヴィータやシャマルは、主のその行為に答えて手を振っていたが、それを私はただただ頭を軽く下げて答えることしかできなかった。

そうして主が私に見送られながらユウキが去って行った方向へ行ったが、テスタロッサは主が見えなくなってもその方向をいつまでも見つめていたままで、私も不審に思い、テスタロッサに視線を向けると、ヴィータも気になったのか、アリシアの前に立つが、反応がない。

「なぁ？アリシア大丈夫かよ？……やっぱりはやてに付いていったほうがよかったんじゃねぇか？」

「……え、あ、あはは……もぅヴィータちゃんは心配性だな～。気にしなくても大丈夫！それに……」

「ん？アリシアどうしたんだよ？」

「ううんなんにもな～い」

声を掛けられて、ようやくヴィータのことを気づき、空笑いをする姿はなにやら誤魔化そうとしているように見えて、案の定言葉にもはぐらかす気満々の色があった。

しかし、ヴィータは、満面の笑顔を浮かべるテスタロッサを追及できないのか、少しだけ不満げな表情を浮かべている。

しかし、私はテスタロッサが言いかけようとして、唇だけ動かした言葉が、なぜか私には読みとれてしまい、その言葉の内容に疑問が浮かぶ。

……私は追う資格がないからか……しかし私にとっては疑問に思っても、知る気もないし知る必要もないこと

そう思いつつも、どうやら私も人間味があったらしく、しばらくの間読みとれてしまった言葉が気になって頭の中から離れることがなかった。

ｓｉｄｅ　ｏｎｔ

「はぁ……やっぱり無理やりすぎたかね……」

先ほど無理やり話を終わらした自分に対して、あまりにも子供染みたやり方と思えて、思わず俯きながら溜息を洩らしてしまう。

もっとやり方があったはずなのに……それをうまくできない自分の不甲斐無さが嫌になる……

そんな思いにとらわれて、休憩コーナーのベンチに座っているはずなのに、心なしか体がずっしり重く感じてならない。

「真夜君！！やっと見つけたで……」

「は、はやて？どうしたんだよいったい」

はやての声が聞こえて顔をあげると、いつの間にか正面にいたはやてと顔が合い、二重の意味で驚き、言葉がどもってしまう。

なんでここにいるんだよ……はやてのことだからシグナムさん達をほっとけないはずなのに……

はやては、ただただその様子を少しだけ不機嫌そうな表情を浮かべながら見つめており、言葉にしなくても、俺が無理やり話を終わらせて逃げたことを怒っていることが感じ取られる。

「あんなされたらな、普通探すやろ！」

「すまない……」

無理だったのは確かに悪いものの、それでも俺は、はやてに渡した

封筒の件は、どうしても譲れないものの一つだった。

そう思っても、やはりはやてが嫌がることが重々承知だったため、ついつい俯いてはやてから目をそらしてしまう。

それでも俺は……はやてやアリシアに苦労させたく「まっそれはもうえぇんやけどな」え？

その言葉に驚き、顔をあげるとはやては、仕方ないなっと言いたげに、少しだけ困ったような笑みを浮かべながら、俺は優しく目で見ている。

しかしよほど俺が間抜けな表情を浮かべていたのか、すぐに可笑しそうに口元を抑えながら、あははと小さく笑いだした。

数十秒ほど、はやてはそんな風に笑っていたが、それも落ち着くと、はにかんだ笑みを浮かべながら俺の瞳をじーっと見つめている。

「笑ったんはごめんな？でもな本当にもうえぇんや。きっと私が何度言っても無理やろしな？」

「あぁ申し訳ないけど譲れないな……」

そういうと、はやては「そうやろな」っと言いながら確かめるように何度か小さくから、少し苦笑ぎみな笑みを浮かべている。

むぅ……そんな表情されると見通されているような気分になって、情けなくなってきて仕方ないんだが

そう思い、ついついまた溜息をついてしまい、はやての苦笑いの具合を深めてしまった。

そしてそこで、ようやくヴォルケンリッターやなにより一番いそうなアリシアさえおらず、正面にいるはやて以外には、自分の見える範囲内に人がいないことに気づく。

「なぁ？はやてシグナムさん達やアリシアどうしたんだ？」

「シグナム達は、服の件とかあるやろし、残ってもらったで？アリシアちゃんはシグナム達と一緒に残ってって言っとたやから私だけで来たんや……やっぱりアリシアちゃんが一緒のほうがよかったやろか？」

「はやて、そんなことないからな……ただはやてだけだから気になったんだよ」

「……本当それなら良かったで！」

そういうとはやては、本当に嬉しそうな笑みを浮かべ、それはこちらが少し照れてしまうなほどだった。

だが、それでも俺は心どこかでは冷めているか、見惚れることなくはやての表情を見れている自分もいる。

それは、きっとアリシアが来ないのはもしかして、アリシアに母親の件で少しだけ恨まれているからじゃないかっという自意識過剰ともとれる考えがいくら自分の中で否定してもこびり付いて、消える

ことがないからだろう。

「あのな？……。真夜君これを受け取ってほしいんや」

「ん？。これはいったい……」

はやては、俺の様子をあえて無視したのか、もしくは表情にでてなかったため気づかなかったのかは定かではないが、俺が真正面から目を逸らさず見つめていたことを気にしたようもなく、膝に乗せていた小さな袋を少しだけ緊張した面持ちでこちらに差し出してきた。

差し出されたものを受け取ってみると、小さな箱がその袋の中に入っていることが手に取った感覚で分かるものの、それが一体なにかまではわからなかった。

はやてに聞いてみたものの、はやてはなにやらびっくりさせようとすることが丸わかりな悪戯げな笑みを浮かべているだけで一向に教えてくれそうもない。

見つめあっても埒が明かないため、袋から箱を取り出し、中身を確認すると、それは黒い石が中心にあしらわれたシンプルなペンダントだった。

「その黒い石はな？ヘマタイトっていう名前で、戦いの守り神でな。真夜君お守り代わりに受け取ってくれへん？……」

「いや……こんなの受け取れないぞ？少なくとも受け「受け取って

ほしいんや……」……はぁ～わかったわかった」

はやては、真面目な表情を浮かべながら真剣な目で俺の目を見つめ、数秒間見つめ合ったものの、結局俺が折れて、大人しく受け取ることにした。

俺が大人しく受け取ると、はやては安心したように息を吐いてから、それを誤魔化す様に照れ笑いを浮かべて、少しだけ目を逸らした。

それで、改めてこれをちゃんと身につけないといけないということが再確認ができてしまい、思わず溜息を漏らしてしまうが、はやてが目を逸らしている間だったのではやてに気づかれることはなかった。

「これ高かっただろ？家族が増えたことで、その分お金使うのに普通買う余裕なんてないだろ……」

「それでもな～？真夜君と友達になれた時からあげようと決めていたんや。

本とか読んで、この石のこと知っとったから……なにかある真夜君に絶対必要やからってな？」

「はぁ……まっ嬉しくはあるがな」

そう、嫌ではなかった。あぁだこうとだと言いつつも、俺もまだまだ立派という言葉からは遠いらしく、文句を言いつつも、内心は嬉しかった。

しかしそれでもシグナムさん達にこのペンダントでお金を使った分苦労をかけるかもしれないと思って、素直に喜ぶこともできなかった。

それでも今はただ、子供らしく、この好意と心配をしてくれたことに感謝し、俺の言葉に本当に心から喜んで、嬉しそうに満面の笑みを浮かべるはやてに免じて、難しく考えることをしばらくの間だけ止めにすることにした。

その後はやてと少しの間シグナムさんの服のことやほかのみんなの似合う服とかを話してから、また一度みんなの元へ戻るため、はやてと一緒に休憩場所を後にした。

31話　人の心（後書き）

戯言タイム
注意：この後書きは性格は崩壊している可能性が高いので、暖かい目で見てあげてください

元「ここまでお読みいただきありがとうございます。けーくん様感想をお書きいただきありがとうございました」

真「更新遅いぞ？……」

元「あはは……家庭の事情でごたごたがあったり、小説をかける時間がとれなかったりしましたからね……」

真「まあそのまま失踪しなかっただけましか……」

元「どれくらい時間かけても必ず完結させますよ……」

真「それだけを信じるとするか、まあこの馬鹿の更新は遅いだろうが、気長に付き合ってほしい」

元「私からもよろしくお願いします……それでは次回またお会いいたしましょう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9520n/

黒き刃〜リリカルっぽいもの〜

2011年12月7日23時50分発行